富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第９集

五社遺跡発掘調査報告

――能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ――

第一分冊

1998年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

正　誤　表

分冊	ページ・行	誤	正
1	P4	調査区	調査区区割り図
	P8　25行	小矢部市右岸	小矢部川右岸
	P66　第38図	SP3438	SK3438
	P95　第４表	復元値	現存値
	P104　第10表挿図番号94の座標	Ⅵｄ	Ⅵｅ
	P134　38行	SD475	SD3475
	P139　37行	11世前半	11世紀前半
	P161　８行	土師器出土している。	土師器が出土している。
	P255　第145図ｇ－ｇ′の注記	ⅢｂＲ１	Ⅲｂ層
	P321　14行		（山本正敏）
	P330　第22表SK114の備考	古代上	古代後期
	P330　第22表SK121の備考	古代上	古代後期
	P362　17行	遺構である。	遺構がある。
	P368　25行	SP5264	SP5246
	P368　26行	SK5254	SK5245
	P391　34行	竪穴住居	竪穴建物
	P393　16行	座舎倉	雑舎倉
	P393　30行	10棟り，	10棟あり，
	P398　７行	古代Ｂ・Ｃ両群	古代Ｂ群
	P398　８行	古代Ｄ群	古代Ｃ群
	P398　８行	古代Ｅ群	古代Ｄ群
	P398　９行	古代Ｆ・Ｇ群	古代Ｅ・Ｆ群
	P401　29行	Ｃ２地区	Ｃ２群
	P405　28行	７群	６群
2	目次　図版69	SP7137	SP6137
	目次　図版223	SD200	SD2001
	P1　２行	行われてた。	行われた。
	図版86	SXX5003	SX5003
	図版191	（中世）	（古代～中世）

遺跡遠景（南から）

A地区　掘立柱建物（南東から）

C3地区　掘立柱建物（北から）

C3地区　掘立柱建物（東から）

8058号井戸（西から）

545号土坑出土遺物（古墳時代）

2020号溝出土遺物（古代後期）

五社遺跡発掘調査報告

――能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅰ――

第一分冊

1998年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

富山県西部を走る高規格幹線道路として、東海北陸自動車道を、北陸自動車道と交差する小矢部ＪＣからさらに北方へ延ばして、福岡町、高岡市、氷見市を通って石川県輪島市に至るルートが計画されました。この能越自動車道及び関連アクセス道の建設に伴い、富山県文化振興財団はその計画路線内の多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は平成４年度から６年度の三ヶ年間調査した、小矢部市五社遺跡の発掘調査報告書です。

この五社遺跡は、古墳時代から近世にかけての集落遺跡で、古墳時代では北陸最古の竈をもつ竪穴建物、古代では９世紀後半と10世後半から11世紀の溝に区画された小規模な村落形態、中世では12世紀後半から14世紀までの集落形態が明らかになりました。

また、洪水や地震などの災害により、たびたび集落が消失してしまったこともわかりました。さらにその自然災害から復興した集落の様相もたどることができ、貴重な資料といえます。この発掘調査の成果が、文献にはあらわれない民衆生活を繙く一助となり、今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめるにあたって、関係機関や団体また諸氏のご指導をいただき厚く感謝いたします。

平成10年３月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　桃野真晃

例　　言

1　本書は富山県小矢部市五社地内に所在する五社遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は建設省北陸地方建設局からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

　調査期間　　平成４（1992）年７月20日～平成６（1994）年10月25日

　整理期間　　平成８（1996）年４月１日～平成10（1998）年３月31日

4　本書の編集・執筆は，山本正敏，岡本淳一郎，中川道子，三島道子が担当し，執筆分担は文末に記した。

5　遺物の写真撮影は，写房楠華堂（代表　楠本真紀子）及び㈱シン技術コンサルに委託した。

6　自然科学的な分析は，以下の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

　植物珪酸体分析　　㈱パリノ・サーヴェイ

　骨　　同　　定　　㈱パリノ・サーヴェイ

　トイレ遺構分析　　㈱古環境研究所

　土器胎土分析　　土器胎土研究会（代表　三辻利一）

　木製品樹種同定　　財団法人　元興寺文化財研究所

　漆塗膜分析　　漆器文化財科学研究所（代表　四柳嘉章）

7　発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

伊藤隆三，池野正男，宇野隆夫，窪野隆弘，佐藤聖子，寒川　旭，田嶋明人，塚田一成，出越茂和，利波匡裕，林　浩明，藤田富士夫，本郷真紹，前川　要，水野正好，宮田進一，山口辰一，山本信夫，山森伸正，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター，小矢部市教育委員会，北陸古代土器研究会

凡　　例

1　本書は２分冊からなる。第一分冊には本文，挿図及び表，第二分冊には自然科学的分析と遺構全体図，写真図版を掲載する。

2　時期別に検出した主な遺構・出土遺物の内容については，各節末に掲載している。

3　時代区分は，古墳時代，古代前期，古代後期，中世，近世以降に分けた。古代の時期区分については便宜上，古代前期を９世紀後半，古代後期を10世紀後半～11世紀としており，一般的な古代の時期区分とは示す時代が一致していない。

4　遺構全体図は１/200で示し，北から１頁に収まる範囲に分割して時代毎に掲載する。

5　本書で示す方位は全て真北である。

6　挿図の縮尺は次の率を基本とし，各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。

遺構　竪穴建物：１/80，掘立柱建物：１/100，溝：１/40～１/80，井戸：１/40，土坑：１/20～１/40

遺物　土器･陶磁器：１/３～１/６，木製品：１/３～１/12，石製品：２/３～１/12，金属製品：２/３～１/６

7　遺構の略号は以下のとおりである。

SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SF：道路，SI：竪穴建物，SK：土坑，SP：柱穴，SX：その他（集石遺構）

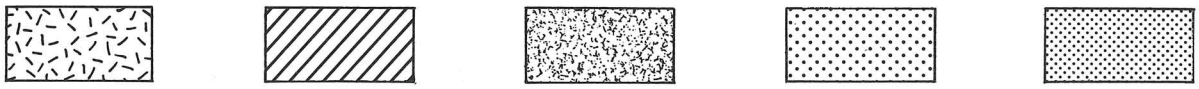
8　遺構番号は，調査時に地区毎に付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は遺構の種類に関わらず連番号とするが，建物・柵・道路には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は次の通りである。但し複数の地区にわたる遺構は，若い遺構番号で示す。

Ａ：加算せず，Ｂ１：1000，Ｂ２：2000，Ｂ２Ｅ：3000，Ｂ３：4000，Ｃ１：5000，Ｃ２：6000
Ｃ３：7000，Ｄ１：8000，Ｄ２：9000

9　遺物は連番を付す。第一分冊の遺物番号は出土状況を示した遺構実測図，遺物観察表及び第二分冊の写真図版中の遺物番号と一致する。

10　施釉陶器等の釉の掛かる範囲は１点破線で示した。２種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

11　遺物の煤付着部分及び漆器の赤色漆の部分は，スクリーントーンで示す。また遺構図中のスクリーントーンは，それぞれの図・文を参照されたい。



炭化物　　地　山　　ス　ス　　圧　痕　　漆

○ 赤彩　　● 内黒

12　遺跡の略号は09Ｇ-地区名で，遺物の注記には略号を用いた。

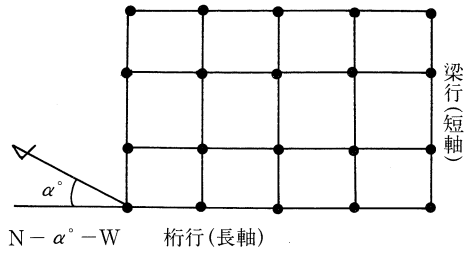
13　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語・数値等は以下のとおりとする。

掘立柱建物：用語は「平城宮発掘調査報告Ⅶ」を参考とし，以下のように定義付ける。

①柱間や棟方向に関わらず建物の平面図の長軸を「桁行」，建物の短軸を「梁行」とし，桁行(間)×

梁行（間）の順に表記する。

②建物の棟方位は，真北から建物の長軸の方位を測る。その角度から建物を「東西棟」「南北棟」に分ける。



③建物の面積は長軸に短軸をかけた数値である。

④「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称とする。

⑤「柱掘形」とは，掘立柱を据え付けるための穴のことで，「掘形埋土」とは柱根を固定するために柱掘形に入れた土のことである。

⑥「柱根」とは，遺存している柱自体の下部のことであり，「柱痕跡」とは柱掘形の中の柱根が立ったまま腐り消えて空洞になり，そこに土が流れ込んだもので，ここでは柱根が抜き取られたものも含む。

⑦柱穴の規模は，遺構確認面から測った数値である。

井戸：井戸の部分名称及び型式分類については，宇野隆夫氏の「井戸の分類」[注1]を援用している。

①各部の名称は，地上の施設を「井桁」，地下壁面の施設を「井戸側」，底の施設を「水溜」とする。

②型式分類は井戸側の部位の構造で分類する。

③井戸の断ち割図面において，地山の変化がわかるものは，スクリーントーンで示した。

遺構一覧・遺物一覧：観察表の凡例は以下のとおりである。

①遺構の覆土に切り合い関係がある場合は，備考欄に新＞古のように記号で示す。

②法量はcm単位で示す。

③重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

④胎土・色調・釉調は農林省農林水産技術会議事務局監修（財）財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」・日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用し，釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお，陶磁器の内複数の色が見られる場合は，最も多く使用されている色を記し，その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

⑤特記事項：陶磁器については窯名・窯詰め技術・墨書・刻印・ヘラ記号等を，珠洲・瓦器・土師質土器は胎土中の含有物を記す。木製品のうち漆器椀は漆の色を記すが，記載がない場合は黒色漆であることを示す。

注１　宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林第65巻第５号』

目　　次

第Ⅰ章　調査経緯 …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査経過 …… 3
A　調査方法 …… 3
B　調査の経過 …… 3
C　調査体制 …… 5
D　現地説明会 …… 6
E　整理の経過 …… 7
F　整理体制 …… 7

第Ⅱ章　立地と歴史的環境 …… 8
1　立　　地 …… 8
2　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要 …… 13
1　遺跡の概要 …… 13
A　概　　要 …… 13
B　土　　層 …… 14

第Ⅳ章　遺構・遺物 …… 16
1　古墳時代 …… 16
A　竪穴建物 …… 16
B　土　　坑 …… 27
C　　溝 …… 34
D　包含層出土の遺物 …… 54
2　古代前期 …… 60
A　掘立柱建物 …… 60
B　土　　坑 …… 74
C　　溝 …… 77
D　道路状遺構 …… 82
E　集石遺構 …… 82
F　包含層出土の遺物 …… 82
3　古代後期 …… 105
A　掘立柱建物 …… 105
B　　溝 …… 132
C　　畠 …… 155

D　土　　坑 ……156
E　包含層出土の遺物 ……170
4　中世及び近世以降 ……193
A　掘立柱建物 ……193
B　　柵 ……235
C　　溝 ……239
D　井　　戸 ……280
E　土　　坑 ……285
F　包含層出土の遺物 ……308

第Ⅴ章　考　　察 ……349
1　五社遺跡出土の古墳時代土器について ……349
2　富山県における出現期のカマドについて ……357
3　五社遺跡古代後期の土師器の編年について ……367
4　五社遺跡古代後期の集落構造について ……387
5　五社遺跡中世集落の構造 ……397

第Ⅵ章　結　　語 ……405

巻首図版目次

巻首図版１　遺跡遠景
巻首図版２　Ａ地区掘立柱建物　C3地区掘立柱建物
巻首図版３　C3地区掘立柱建物　8058号井戸
巻首図版４　545号土坑出土遺物
巻首図版５　2020号溝出土遺物

挿 図 目 次

第１図　調査位置図 …… 1
第２図　調査区区割り図 …… 4
第３図　五社遺跡周辺の主要遺跡位置図 ……10
第４図　基本層序模式図 ……15
第５図　遺物出土状況図（古墳時代）SI546 ……17
第６図　遺構実測図（古墳時代）SI546 ……19
第７図　遺物実測図（古墳時代）SI546 ……20
第８図　遺構実測図（古墳時代）SI547 ……22
第９図　遺物出土状況図（古墳時代）SI547 ……23
第10図　遺物実測図（古墳時代）SI547 ……25
第11図　遺構実測図（古墳時代）SI574 ……26
第12図　遺構実測図（古墳時代）SD573　SI644 ……28
第13図　遺物出土状況図（古墳時代）SI644・SX645 ……29
第14図　遺物実測図（古墳時代）SD573　SI574　SI644　SX645 ……30
第15図　遺構実測図（古墳時代）SK545 ……31
第16図　遺物実測図（古墳時代）SK545 ……32
第17図　遺構実測図（古墳時代）SK593　SK599 ……35
第18図　遺構実測図（古墳時代）SK511　SK691 ……36
第19図　遺構実測図（古墳時代）SK649　SD650 ……37
第20図　遺物実測図（古墳時代）SK599　SK649　SK691 ……39
第21図　遺構実測図（古墳時代）SD500　SD572　SD650 ……42
第22図　遺物実測図（古墳時代）SD650 ……43
第23図　遺物実測図（古墳時代）SD572 ……44
第24図　遺構実測図（古墳時代）SD552　SD553　SD555　SD800 ……45
第25図　遺構全体図（古墳時代） ……47
第26図　遺物出土状況図（古墳時代）SD552(SD800) ……48
第27図　遺物出土状況図（古墳時代）SD552 ……49

第28図　遺物実測図（古墳時代）SD501　SD552　SD553　SD555 ……50
第29図　遺物実測図（古墳時代）SD552 ……51
第30図　遺物実測図（古墳時代）SD552 ……52
第31図　推定復元図（古墳時代）SD552 ……53
第32図　遺物実測図（古墳時代）包含層 ……57
第33図　遺物実測図（古墳時代）包含層 ……58
第34図　遺物実測図（古墳時代）包含層 ……59
第35図　遺構実測図（古代前期）SB1　SD512～SD515　SD520　SD521　SF523　SD646
SD647 ……61
第36図　遺構実測図（古代前期）SB2　SB3 ……64
第37図　遺物実測図（古代前期）SB2　SB3 ……65
第38図　遺構実測図（古代前期）SB4～SB6 ……66
第39図　遺構実測図（古代前期）SB4　SB5 ……67
第40図　遺構実測図（古代前期）SB6～SB8　SA1 ……69
第41図　遺構実測図（古代前期）SB8～SB12　SA1 ……71
第42図　遺構実測図（古代前期）SB9　SB10 ……72
第43図　遺構実測図（古代前期）SB11　SB12 ……73
第44図　遺構実測図（古代前期）SK503　SK519　SK528　SK529　SK567　SK568　SK677
SK679　SK690 ……78
第45図　遺構実測図（古代前期）SK3421　SK3427　SK3429　SK3431　SK4280　SK4281
SK4332　SK4352　SK4358 ……79
第46図　遺構実測図（古代前期）SX4204　SX4206　SX4425　SK4431　SK4432　SK4433 ……83
第47図　遺物実測図（古代前期）SD513　SD514　SK558　SK603　SX4204　SK4225
SK4248　SK4313　SX4425 ……84
第48図　遺構実測図（古代前期）SD501　SD502　SD505 ……85
第49図　遺構実測図（古代前期）SD566　SD3476　SD3478　SD4203　SD4235～SD4237
SD4259　SD4284　SD4286　SD4354　SD4371
SD4403　SD4407　SD4408 ……86
第50図　遺物実測図（古代前期）SD502　SD600　SD3475　SD4203 ……87
第51図　遺物実測図（古代前期）包含層 ……90
第52図　遺物実測図（古代前期）包含層 ……91
第53図　遺物実測図（古代前期）包含層 ……92
第54図　遺物実測図（古代前期）包含層 ……93
第55図　遺物実測図（古代前期）包含層 ……94
第56図　遺構実測図（古代後期）SB13　SB14 ……106
第57図　遺構実測図（古代後期）SB13～SB15　SA3　SA4 ……107
第58図　遺構実測図（古代後期）SB15～SB17　SA2～SA4 ……109
第59図　遺構実測図（古代後期）SB18～SB20 ……111
第60図　遺構実測図（古代後期）SB18～SB20 ……113

第61図　遺構実測図（古代後期）SB22　SB23　SA5 ……115
第62図　遺構実測図（古代後期）SB21～SB24　SA5 ……116
第63図　遺構実測図（古代後期）SB24～SB27　SA6 ……119
第64図　遺構実測図（古代後期）SB25～SB27　SA6 ……120
第65図　遺構実測図（古代後期）SB30　SB33 ……122
第66図　遺構実測図（古代後期）SB28～SB32　SA7 ……123
第67図　遺構実測図（古代後期）SB28　SB30　SB32　SA7 ……125
第68図　遺構実測図（古代後期）SB29　SB31　SB33　SB34 ……126
第69図　遺構実測図（古代後期）SB34～SB36 ……128
第70図　遺構実測図（古代後期）SB35～SB37 ……129
第71図　遺物実測図（古代後期）SB18　SB22　SB25　SB26　SB28　SA4 ……130
第72図　遺物実測図（古代後期）SB34　SB37 ……131
第73図　遺構実測図（古代後期）SD202　SD301　SD303　SD322 ……135
第74図　遺構実測図（古代後期）SD323～SD325　SD1200　SD2021　SD2023　SD3202～SD3204
SD3215　SD3236　SD3240　SD3277　SD3292 ……137
第75図　遺構実測図（古代後期）SD2020 ……141
第76図　遺構実測図（古代後期）SD2001　SD2007　SD2020　SD3475 ……143
第77図　遺構実測図（古代後期）SD4102　SD4103　SD5200～SD5202　SD5233　SD6101
SD6103　SD6207　SD6208 ……147
第78図　遺構実測図（古代後期）SD7300～SD7304　SD8203　SD8205　SK8210　SD8219 ……148
第79図　遺構実測図（古代後期）SD3207～SD3214　SD3225～SD3234　SD3237～SD3239 ……149
第80図　遺物実測図（古代後期）SD202　SD301　SD322　SD324　SD325　SD2020 ……151
第81図　遺物実測図（古代後期）SD2020 ……152
第82図　遺物実測図（古代後期）SD2020 ……153
第83図　遺物実測図（古代後期）SD3213　SD4101　SD4102　SD5203 ……154
第84図　遺物実測図（古代後期）SD4102　SD6207　SD7301　SD8201 ……155
第85図　遺構実測図（古代後期）SD301　SK302　SK304　SK305 ……157
第86図　遺構実測図（古代後期）SK3205　SP3243　SK3275　SP3276　SK3282　SK3284
SK3285　SK3293 ……159
第87図　遺構実測図（古代後期）SK3235　SP3266 ……160
第88図　遺構実測図（古代後期）SX5001　SX5002　SX5004 ……163
第89図　遺構実測図（古代後期）SX5003 ……164
第90図　遺構実測図（古代後期）SK5206　SK5218　SK5245　SP5257　SK5340 ……166
第91図　遺構実測図（古代後期）SK5219　SK5225　SK5228　SK5232　SK5244　SK5338
SK5357　SK6165　SK6402　SK8210 ……167
第92図　遺物実測図（古代後期）SK306　SK361　SK2022　SK3205　SK3235　SK3293
SK5206　SK5218　SK5219　SK5232　SK5245　SK5257
SK5330　SK5338　SK5340　SK6165 ……168
第93図　遺物実測図（古代後期）SX5002　SX5003　SX5005　SX6406 ……169

第 94 図　遺物実測図（古代後期）包含層……174
第 95 図　遺物実測図（古代後期）包含層……175
第 96 図　遺物実測図（古代後期）包含層……176
第 97 図　遺物実測図（古代後期）包含層……177
第 98 図　遺物実測図（古代後期）包含層……178
第 99 図　遺物実測図（古代後期）包含層……179
第100図　遺構実測図（中世）SB38　SB39 ……194
第101図　遺構実測図（中世）SB40　SB41　SA8 ……195
第102図　遺構実測図（中世）SB42～SB44 ……196
第103図　遺構実測図（中世）SB45　SB46 ……198
第104図　遺構実測図（中世）SB45 ……199
第105図　遺構実測図（中世）SB47　SB48 ……200
第106図　遺構実測図（中世）SB49 ……202
第107図　遺構実測図（中世）SB49　SB50 ……203
第108図　遺構実測図（中世）SB51　SB52　SA11 ……204
第109図　遺構実測図（中世）SB53～SB55　SA12 ……206
第110図　遺構実測図（中世）SB56　SB57 ……207
第111図　遺構実測図（中世）SB58～SB62 ……209
第112図　遺構実測図（中世）SB58 ……210
第113図　遺構実測図（中世）SB59 ……211
第114図　遺構実測図（中世）SB60～SB62 ……212
第115図　遺構実測図（中世）SB63　SB64　SA13 ……214
第116図　遺構実測図（中世）SB65～SB67 ……215
第117図　遺構実測図（中世）SB65 ……216
第118図　遺構実測図（中世）SB66　SA14　SA15 ……217
第119図　遺構実測図（中世）SB67 ……219
第120図　遺構実測図（中世）SB68～SB70 ……220
第121図　遺構実測図（中世）SB68 ……221
第122図　遺構実測図（中世）SB69 ……222
第123図　遺構実測図（中世）SB70　SB71 ……223
第124図　遺構実測図（中世）SB72　SB73 ……225
第125図　遺構実測図（中世）SB73～SB78 ……226
第126図　遺構実測図（中世）SB74　SB75 ……227
第127図　遺構実測図（中世）SB76～SB78 ……229
第128図　遺構実測図（中世）SB79～SB81 ……230
第129図　遺構実測図（中世）SB79～SB81 ……231
第130図　遺構実測図（中世）SB82　SB83 ……233
第131図　遺構実測図（中世）SB84　SB85 ……234
第132図　遺物実測図（中世）SB45　SB49　SB55　SB58～SB60　SB65　SB66　SB68 ……236

第133図　遺物実測図（中世）SB69　SB77～SB79　SB81～SB83 ……237
第134図　遺物実測図（中世）SB83　SB84　SP25　SK1012　SP4008　SP5007　SP7084
SK7198　SK7210　SK7241　SK8011　SK8080　SK8100
SK9025　SK9151　SK9182　SP9248 ……238
第135図　遺構実測図（中世）SD42　SD46 ……240
第136図　遺構実測図（中世）SD45　SD1070　SD1220　SD1222 ……241
第137図　遺物実測図（中世）SD42　SD45　SD46 ……242
第138図　遺物実測図（中世）SD46 ……243
第139図　遺物実測図（中世）SD46　SD223　SD2001　SD2007 ……244
第140図　遺物実測図（中世）SD2001　SD2007 ……246
第141図　遺構実測図（中世）SD3007～SD3009　SD3012　SD3028　SD3029　SD3035
SD3036　SD3103　SD3104　SD3107　SD3111　SD3112
SD3116 ……249
第142図　遺構実測図（中世）SD3087　SD3089　SD4001　SD4015～SD4017　SD4019 ……250
第143図　遺物実測図（中世）SD4001　SD7001　SD7010　SD8001　SD8056 ……251
第144図　遺構実測図（中世）SD5066　SD5099　SD7001　SD7003　SD7009　SD7010　SD7018
SD7019　SD7035 ……253
第145図　遺構実測図（中世）SD8043　谷部 ……255
第146図　遺物実測図（中世）SD8043 ……257
第147図　遺物実測図（中世）SD8043 ……258
第148図　遺物実測図（中世）谷部 ……260
第149図　遺物実測図（中世）谷部 ……261
第150図　遺物実測図（中世）谷部 ……262
第151図　遺物実測図（中世）谷部 ……264
第152図　遺物実測図（中世）谷部 ……265
第153図　遺物実測図（中世）谷部 ……266
第154図　遺物実測図（中世）谷部 ……267
第155図　遺物実測図（中世）谷部 ……268
第156図　遺物実測図（中世）谷部 ……269
第157図　遺物実測図（中世）谷部 ……270
第158図　遺構実測図（中世）SD8056　SD8057　SD8117　SD8122　SD8123　SK9035
SD9039　SD9051　SD9052　SK9053　SK9082　SD9084 ……272
第159図　遺構実測図（中世）SD9001　SD9005～SD9007　SD9092　SD9154 ……273
第160図　遺構実測図（中世）SD9091　SD9104　SD9126～SD9128　SD9140　SD9141
SD9144　SD9148　SD9184 ……275
第161図　遺構実測図（近世・現代）SD44　SD100　SD187　SD188　SD6023 ……277
第162図　遺物実測図（中世～現代）SD44　SD100　SD187　SD188　SD3087　SD9007
SD9104　SD9128　SD9148 ……279
第163図　遺構実測図（中世）SE5067　SE5068　SE7020 ……281

第164図　遺構実測図（中世）SE8058　SK8119　SE8119 ……282
第165図　遺物実測図（中世・近世以降）SE5067　SE5068　SE7020　SE8042　SE8058 ……284
第166図　遺構実測図（中世）SK114　SK121　SK122　SK203　SK3057 ……286
第167図　遺構実測図（中世）SK3013　SK5096　SK5097　SK5117　SK5118　SK7200 ……288
第168図　遺物実測図（中世）SK67　SK114　SK121　SK3013　SK3057 ……289
第169図　遺物実測図（中世）SK3057　SK5096　SK6024　SK7030 ……290
第170図　遺物実測図（中世）SK7030　SK7070　SK7239　SK7240　SK8050　SK8093　SE8119
SK9002　SK9055 ……291
第171図　遺構実測図（中世）SK7030　SK7060　SK8050 ……293
第172図　遺構実測図（中世）SK8059　SK8060　SK8061 ……294
第173図　遺構実測図（中世）SK8075　SK8076　SK8093　SK8118　SK8120　SK9002 ……296
第174図　遺構実測図（中世）SK9003　SK9035　SK9036　SP9037　SD9039　SK9125
SK9134　SK9138 ……297
第175図　遺物実測図（中世）SP17　SK7070　SK9134　SK9135　SK9145　SK9146
SK9150　SK9172 ……299
第176図　遺構実測図（近世・近代）SK7005　SK7070　SK7225　SK8028　SK8029　SK8030 …300
第177図　遺物実測図（近世以降）SK8029 ……303
第178図　遺物実測図（近世以降）SK8029　SK8030 ……304
第179図　遺物実測図（近世以降）SK8030 ……305
第180図　遺物実測図（近世以降）SK8030 ……306
第181図　遺物実測図（近世以降）SK8030 ……307
第182図　遺物実測図（古代・中世）包含層 ……309
第183図　遺物実測図（中世）包含層 ……310
第184図　遺物実測図（中世）包含層 ……312
第185図　遺物実測図（中世）包含層 ……313
第186図　遺物実測図（中世）包含層 ……314
第187図　遺物実測図（近世以降）包含層 ……315
第188図　遺物実測図（近世以降）包含層 ……316
第189図　遺物実測図（近世以降）包含層 ……318
第190図　遺物実測図（近世以降）包含層 ……319
第191図　遺物実測図（中世～近世以降）包含層 ……320
第192図　遺物実測図（中世～近世以降）包含層 ……322
第193図　甕形土器１「く」字状口縁 ……350
第194図　甕形土器２ ……351
第195図　壺形土器 ……353
第196図　高杯形土器 ……354
第197図　五社遺跡のカマドと土器使用痕 ……358
第198図　出現期のカマド　５世紀代のカマド，出現期のカマド ……360
第199図　北陸地方のカマド ……361

第200図　遺跡位置図 ……362
第201図　富山県のカマドの変遷 ……363
第202図　主要遺構出土遺物１ ……369
第203図　土器法量散布図１ ……370
第204図　土器法量散布図２ ……371
第205図　主要遺構出土遺物２ ……373
第206図　ＳＤ2020土器法量散布図 ……373
第207図　包含層遺物集中地点 ……374
第208図　包含層出土遺物１ ……376
第209図　土器法量散布図３ ……377
第210図　包含層出土遺物２ ……378
第211図　土器法量散布図４ ……379
第212図　黒色土器の高台内面の分類 ……380
第213図　五社遺跡古代後期土器編年案 ……384
第214図　古代後期遺構配置図 ……387
第215図　古代後期遺構の主軸方位 ……389
第216図　古代後期面の遺構の変遷 ……390
第217図　古代後半期の集落 ……392
第218図　中世初頭の集落 ……394
第219図　古代後半・中世初頭集落の建物面積 ……395
第220図　掘立柱建物群の分布 ……398
第221図　掘立柱建物の規模分布 ……399
第222図　掘立柱建物の主軸方位の分布 ……399
第223図　西南日本における地磁気の永年変化曲線 ……400
第224図　Ｅ群掘立柱建物変遷図 ……402
第225図　Ｆ群掘立柱建物変遷図 ……402
第226図　掘立柱建物群の存続年代 ……403

表　目　次

第１表　試掘調査結果一覧……2
第２表　調査一覧……5
第３表　遺跡地名一覧……11
第４表　竪穴建物一覧（古墳時代）……95
第５表　掘立柱建物一覧（古代前期）……95
第６表　柱穴一覧（古代前期）……95
第７表　溝一覧（古墳時代・古代前期）……96
第８表　土坑一覧（古墳時代・古代前期）……97
第９表　土器一覧(1)～(6)（古墳時代・古代前期）……98
第10表　木製品一覧（古墳時代・古代前期）……104
第11表　石製品一覧（古墳時代・古代前期）……104
第12表　金属製品一覧（古墳時代・古代前期）……104
第13表　掘立柱建物一覧（古代後期）……180
第14表　柱穴一覧（古代後期）……181
第15表　溝一覧（古代後期）……182
第16表　土坑一覧(1)・(2)（古代後期）……183
第17表　土器一覧(1)～(7)（古代後期）……185
第18表　木製品一覧（古代後期）……192
第19表　掘立柱建物(1)・(2)（中世）……323
第20表　柱穴一覧(1)・(2)（中世）……325
第21表　溝一覧(1)～(3)（中世以降）……327
第22表　土坑一覧(1)～(5)（中世以降）……330
第23表　井戸一覧（中世以降）……334
第24表　土器・陶磁器一覧(1)～(9)（中世以降）……335
第25表　木製品一覧(1)～(4)（中世以降）……344
第26表　石製品一覧（中世以降）……348
第27表　金属製品一覧（中世以降）……348
第28表　土器組成表……355
第29表　５世紀代のカマド数一覧……360
第30表　県内のカマド確認遺跡一覧……362
第31表　五社遺跡土器編年案……383
第32表　古代後期遺構の主軸方位と時期……388

第Ⅰ章　調査経緯

1　調査に至る経緯

A　調査の契機

能越自動車道は，昭和62年６月に策定された高規格幹線道路網計画の一環として計画された，一般国道の自動車専用道路である。この道路は，富山県西部と能登半島地域を結び，さらに北陸自動車道や東海北陸自動車道と接続することにより，東京・大阪・名古屋を中心とする大都市圏との人・物・情報の動きを活発にし，産業の振興や豊富な観光資源の活用をはかることを目的としている。道路総延長約100kmのうち富山県内は，小矢部砺波JCT（ジャンクション）を起点に約45kmあり，小矢部東・福岡・高岡・高岡北・氷見の各IC（インターチェンジ）が計画されている。

平成２年４月に建設省から富山県教育委員会に道路計画が示され，同月13日に関係する建設省北陸地方建設局・富山県教育委員会・小矢部市教育委員会の三者で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われた。その結果，埋蔵文化財の分布状況を把握するため，富山県教育委員会が主体となり，小矢部市域について，できるだけ早期に分布調査を実施することになった。

B　分布調査

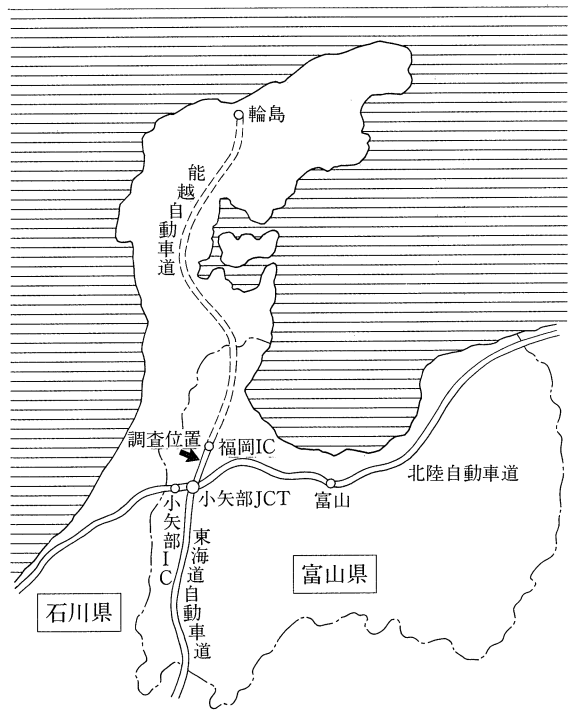
分布調査は，小矢部市教育委員会の協力を得て，富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が主体となり，平成２年４月17・18日の２日間実施した。本線敷地内（小矢部砺波JCT～福岡IC間）及び国道８号線からのアクセス道路敷地内（芹川交差点～福岡IC間）のうち小矢部市域を対象として，埋蔵文化財の分布状況を表面踏査により推定するもので，調査の結果，新たに６箇所で遺跡推定地を発見した。これらは便宜上，本線内では小矢部砺波JCT側から，NEJ-01・02・03・04，アクセス道路内では芹沢交差点側から，NEJ-A-01・02と仮称することにした。

C　試掘調査

分布調査の結果については，平成２年５月24日に建設省・富山県道路課・同企画用地課・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の七者による協議の場で報告され，その取り扱いについて検討が行われた。その結果，６箇所の遺跡推定地について，早急に試掘調査を実施し，より正確な範囲・性格等を把握する必要があるとされた。

試掘調査は建設省からの委託を受けて，小矢部市教育委員会が，平成２年11月１日から同年12月22日まで実施した。試掘調査の方法は，路線内の遺跡推定範囲面積の約１割を発掘することとし，幅約１ｍの溝（トレンチ）を水田畦畔の方向に合わせて約10ｍ間隔で設定して掘り下げた。

試掘溝はバックホーで遺構・遺物を確認しながら



第１図　調査位置図

順次掘削し，終了箇所については，人力により壁面と平面の精査を行い，遺構及び地層の堆積状況を記録した。その結果，第1表に示すようにNEJ-04・NEJ-A-01・NEJ-A-02の3箇所で遺構・遺物が発見され，合計約54,000m²が本調査の必要な範囲と確認され，他の3箇所については若干の陶磁器が出土したのみで，遺構の発見がなかったことから，本調査の必要はなしと判断された[注1]。

試掘調査の結果は平成3年2月26日に行われた建設省・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の五者協議で報告され，NEJ-04・NEJ-A-01・NEJ-A-02はそれぞれ五社遺跡，石名田遺跡[注2]，地崎遺跡と命名された。

D　本　調　査

以上のような事前の調査を経て，平成3年4月には建設省・富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）・富山県文化振興財団の三者協議が行われ，席上建設省側から福岡IC～福岡PA（パーキングエリア）間の分布・試掘調査と，確定している五社・石名田・地崎の各遺跡の本調査実施について要望がなされた。これを受けて，富山県教育委員会及び財団法人富山県文化振興財団は，東海北陸自動車道関連の現地調査の終了する翌年の平成4年度から，同財団埋蔵文化財調査事務所が能越自動車道関連の発掘調査を受託することを決め，調査体制の整備等の準備を進めた。

第一年目の平成4年度は，本調査として五社遺跡の発掘調査を建設省より受託し，能越自動車道関連の発掘調査がスタートした。なお五社遺跡の発掘調査は，一部土地買収の遅れや下層遺構の新たな発見等により平成6年度まで実施した。　（山本正敏）

注1　小矢部市教育委員会1991『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告－五社遺跡・石名田遺跡・地崎遺跡』

注2　石名田遺跡はその後引き続いて行われた試掘調査の結果，さらに東側の福岡町木舟地内に広範囲に広がることが確認されたため，合わせて石名田木舟遺跡と呼称することになった。

遺跡名	所在地	面積（m²）	調査期間	遺物・遺構等	時代	遺跡面積（m²）
NEJ-01	水島地内	分布面積　5,600m² 調査面積　271m²	11/1～11/2	遺物　珠洲焼・陶磁器 遺構　なし	中世 近世	
NEJ-02	水島地内	分布面積　8,000m² 調査面積　237m²	11/1～11/5	遺物　陶磁器 遺構　なし	近世	
NEJ-03	道明地内	分布面積　16,800m² 調査面積　1,184m²	11/2～11/8	遺物　陶磁器 遺構　なし	近世	
NEJ-04 （五社遺跡）	五社地内	分布面積　67,000m² 調査面積　2,977m²	11/6～12/5	遺物　須恵器・土師器・製塩土器・珠洲焼・土師皿・輸入陶磁器 遺構　掘立柱建物・柱穴・土坑等・溝状遺構 その他　地震痕跡	◎平安時代後半（9～11世紀） ◎中世（12～16世紀） 近世	32,000m²
NEJ-A-01 （石名田遺跡）	石名田地内	分布面積　25,200m² 調査面積　1,462m²	11/27～12/13	遺物　須恵器・土師器・珠洲焼・土師皿・輸入陶磁器・木製品（下駄・漆器・箸・加工材） 遺構　柱穴・土坑等・溝状遺構 その他　地震痕跡	◎奈良・平安時代（8世紀中葉～9世紀） ◎中世（12～16世紀） 近世	21,000m²
NEJ-A-02 （地崎遺跡）	地崎地内	分布面積　19,800m² 調査面積　1,049m²	11/30～12/21	遺物　陶磁器・木製品（下駄・加工材） 遺構　掘立柱建物・穴 その他　地震痕跡	◎近世	1,000m²
合計		分布面積 142,400m² 調査面積　7,180m²				54,000m²

第1表　試掘調査結果一覧

2　調査経過

A　調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い，＋－をＸ０Ｙ０とし，南北方向をＸ軸，東西方向をＹ軸とした。グリッドは２ｍ方眼とし，各グリッド名は右上のＸ軸とＹ軸の座標とした。発掘範囲はＸ23～Ｘ257まで，Ｙ24～Ｙ136までとなっている。調査区は農道や用水，畦畔などで北からＡ，Ｂ１，Ｂ２，Ｂ２Ｅ，Ｂ３，Ｃ１，Ｃ２，Ｃ３，Ｄ１，Ｄ２に分けている。

調査は表土・耕作土・無遺物層の除去，包含層の発掘，遺構確認面の精査・遺構の検出，遺構の発掘，遺構の記録，写真撮影，空中写真測量，補足作業の順で行った。

表土・耕作土・無遺物層の除去　人力掘削による調査の事前準備として，調査員立ち会いのもと，試掘調査の結果をふまえ，基本層序を確認しながら，事業者側がバックホウにより行った。場所によっては無遺物層の除去も行った。

包含層の発掘　スコップ等を用い，人力で掘削した。排土はベルトコンベヤーを使用し，路線敷内の調査区隣接地に集積し，ダンプによる調査区外への搬出は事業者側が行った。

遺構確認面の精査・遺構の検出　遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し，検出した遺構はスプレーペンキ等でマーキングを行い，遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが，各地区毎に遺構の種類に関わらず通し番号とした。また概略図には遺構上面の覆土色を記入し，検討の材料とした。

遺構の発掘　柱穴・井戸・小さい土坑は長軸に沿って半截，大きい土坑は十字，またはそれ以上に，溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し，移植ごてで発掘した。井戸の人力による完掘は最小限にとどめ，重機により完掘した。

遺構の記録　断面図を20分の１で実測し，遺構によっては10分の１の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面は35㎜カメラで，出土状況図や個別の完掘写真・ブロック写真はブローニー判もあわせて撮影した。調査区の全景写真は４×５インチ判カメラで２方向以上から撮影している。フィルムは，35㎜はカラーネガと白黒，ブローニー判・４×５インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し，面積によってクレーンとヘリコプターを使い分けた。人力で完掘できなかった井戸はバックホウで断ち割り，下層の層位，最終レベルの確認，遺物の採集を行った。また，空中写真測量のために残した畦などをはずし，遺構の完掘を確認した。

B　調査の経過

調査は平成４年度から平成６年度にかけて行った。平成４年度は建設省との協議のうえ，本線敷内で県道戸出・小矢部線以北を対象に，調査員２名１班の体制で，県道のボックス・橋梁工事にかかる箇所から調査を行った。遺構は中世面と古代面に分かれており，各地区とも中世面の調査終了後，順次古代面の調査に入った。また調査中に古代面の下に遺構面を一面発見したため，各調査区で下層確認トレンチを入れ，Ａ地区～Ｂ３地区にかけて古代下層面の範囲を確定した。調査期間は７月20日～12月27日まで，調査総面積は38,100㎡である。平成５年度は五社遺跡・開蛇大滝遺跡・地崎遺跡・石名田木舟遺跡の調査を行った。五社遺跡は前年度に引き続きＡ・Ｂ１地区の古代下層面，Ｂ３地区の古代上層・下層面の調査を行った。調査期間は４月19日～12月８日，調査総面積は6,209㎡である。平成６年度は五社遺跡・石名田木舟遺跡の調査を行った。五社遺跡は住宅移転完了後Ｂ２Ｅ地区の中世面～古代下層面までの調査を行った。調査期間は５月18日～10月25日，調査総面積は6,990㎡である。

第２図　調査区（１：2,000）

0　100m

地区		調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
A	中世面	平成4年7月20日～10月22日	95日間	4,260m²	河西健二　中川道子	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	土師器，白磁，青磁，珠洲，瀬戸美濃，唐津，伊万里，近世陶磁器，羽口，古銭，木製品
	古代上層面	平成4年11月12日～12月26日	45日間	4,260m²	河西健二　中川道子	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	土師器，須恵器，木製品
A・B1	古代下層面	平成5年4月19日～6月30日	73日間	3,970m²	河西健二　柴口真澄　三島道子	川跡，畠跡，溝，土坑，道状遺構，柱穴	土師器，須恵器，炉壁，石製品，金属製品，木製品
B1	中世面	平成4年7月22日～10月5日	76日間	2,200m²	佐藤聖子　越前慎子	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	土師器，白磁，青磁，輸入陶磁器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，越中瀬戸，唐津，伊万里，瓦質陶器，石製品，木製品
	古代上層面	平成4年10月16日～11月19日	35日間	2,200m²	河西健二　中川道子	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器，灰釉陶器，木製品
B2	中世面	平成4年11月2日～12月3日	32日間	420m²	河西健二　中川道子	溝，土坑，柱穴	須恵器，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，越中瀬戸，唐津，伊万里，近世陶磁器，古銭
	古代上層面	平成4年12月17日～12月22日	6日間	420m²	池野正男　谷杉廷子	溝，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器，黒色土器，灰釉陶器
B2E	中世面	平成6年5月18日～7月6日	50日間	2,330m²	岡本淳一郎　森本英津子	柵，掘立柱建物，川跡，畠跡，溝，柱穴	土師器，白磁，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，瓦質陶器，石製品，金属製品，木製品
	古代上層面	平成6年7月13日～9月7日	57日間	2,330m²	岡本淳一郎　森本英津子	掘立柱建物，溝，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器，緑釉陶器，白磁，土錘，木製品
	古代下層面	平成6年9月13日～10月25日	43日間	2,330m²	岡本淳一郎　森本英津子	掘立柱建物，溝，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器
B3	中世面	平成4年7月20日～9月18日	61日間	1,830m²	池野正男　谷杉廷子	掘立柱建物，溝，柱穴	土師器，白磁，中世土師器，珠洲，木製品，骨
	古代上層面	平成5年8月31日～10月7日	38日間	1,789m²	関　清　山元祐人	柵，川跡，溝，土坑，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器，木製品
	古代下層面	平成5年11月5日～12月8日	34日間	450m²	谷杉廷子　山元祐人	掘立柱建物，溝，集石遺構，柱穴	土師器，須恵器，石製品
C1	中世面	平成4年9月16日～10月22日	37日間	1,290m²	池野正男　谷杉廷子	掘立柱建物，溝，井戸，土坑，柱穴	白磁，中世土師器，珠洲，木製品
	古代上層面	平成4年10月28日～11月14日	18日間	1,290m²	池野正男　谷杉廷子	柵，掘立柱建物，溝，土坑，集石遺構，柱穴	土師器，須恵器，製塩土器，黒色土器，緑釉陶器，石製品，木製品
C2	中世面	平成4年9月28日～11月4日	38日間	2,590m²	池野正男　谷杉廷子	掘立柱建物，川跡，溝，柱穴	中世土師器，陶磁器，珠洲
	古代上層面	平成4年11月6日～12月25日	50日間	2,590m²	池野正男　谷杉廷子	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	土師器，須恵器，黒色土器，木製品
C3	中世面	平成4年9月24日～11月6日	44日間	1,930m²	佐藤聖子　越前慎子	掘立柱建物，溝，井戸，土坑，柱穴	土師器，白磁，青磁，輸入陶磁器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，唐津，伊万里，土製品，金属製品，木製品
	古代上層面	平成4年12月3日～12月23日	21日間	1,930m²	池野正男　谷杉廷子	掘立柱建物，溝，柱穴	土師器，木製品
D1	中世面	平成4年7月20日～11月25日	129日間	3,150m²	神保孝造　横山和美	掘立柱建物，溝，井戸，土坑，柱穴	土師器，須恵器，灰釉陶器，青磁，中世土師器，珠洲，木製品，骨
	古代上層面	平成4年11月13日～12月21日	39日間	2,400m²	関　清	溝，土坑	土師器，須恵器
D2	中世面	平成4年10月5日～12月27日	84日間	5,340m²	神保孝造　横山和美　越前慎子	掘立柱建物，溝，井戸，土坑，柱穴	土師器，須恵器，灰釉陶器，青磁，中世土師器，珠洲，木製品，骨

第2表　調査一覧

C　調査体制

平成4年度（1992年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　関　　清　埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務　大房　友明　埋蔵文化財調査事務所主事
　　中川　靖夫　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一係長
調 査 員　神保　孝造　埋蔵文化財調査事務所主任
　　河西　健二　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　佐藤　聖子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　佐賀　和美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　田中　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　山本　慎子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　谷杉　廷子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成5年度（1993年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　関　　清　埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務　大房　友明　埋蔵文化財調査事務所主事
　　中川　靖夫　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一係長

調 査 員　神保　孝造　埋蔵文化財調査事務所主任
　　河西　健二　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　佐賀　和美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　越前　慎子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　谷杉　廷子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　三島　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　山元　祐人　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　森本英津子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　柴口　真澄　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成６年度（1994年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　関　　清　埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務　大房　友明　埋蔵文化財調査事務所主事
　　岩崎　証意　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一係長
調 査 員　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所主任
　　岡本淳一郎　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　島田美佐子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　中川　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　三島　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　山元　祐人　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　武田健次郎　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　森本英津子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　柴口　真澄　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

D　現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために，年に１回，調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。

平成４（1992）年

11月４日　新聞記者発表・開催案内

11月７日　各紙に掲載

11月８日　時折小雨が混じるあいにくの天気ではあったが，約220名が現場を訪れた。資料に基づき概要を説明した後，全調査区を巡回した。会場各所には説明看板と調査員を配置して見学者の質問に答えたり，解説した。また写真パネル・出土遺物も展示した。

平成４年度　現地説明会風景

平成５（1993）年

９月27日　新聞記者発表・開催案内

９月30日　各紙に掲載　北陸中日新聞「県内最古のカマド跡」新聞発表のみで，説明会は石名田木舟遺跡が対象となった。

E　整理の経過

出土遺物は各年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品については，メモ写真を撮影して整理台帳を作成した。木製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。年度毎の調査概要については『埋蔵文化財年報』(4)・(5)・(6)として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は，平成8年4月に開始した。平成8年度は遺構の挿図作成・遺物の実測が中心で，平成9年度は遺物の挿図作成・図版作成・写真撮影・原稿執筆・編集・印刷を行った。

遺物の実測は土器・陶磁器の大部分を調査員及び整理作業員が行った。木製品・石製品・金属製品・土器・陶磁器の一部については，業者委託による写真実測で行った。実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれの台帳を作成して整理し，遺構カードとともにパーソナルコンピュータを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物については，観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し，整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は業者委託し，4×5インチ判及び5×7インチ判を基本として，白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼付または引き伸ばしたものを使用した。遺構写真・遺物写真のうち重要なものはプロフォトCD化して保存した。

自然科学的分析は平成5年度から平成9年度にかけて専門機関等に委託し，その結果報告を第二分冊に掲載した。

木製品・金属製品のうち重要なものは，平成8年度から平成9年度にかけて元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

F　整理体制

平成8（1996）年度

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井　保夫	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	宮成　真幸	埋蔵文化財調査事務所主事
	岩崎　証意	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	山本　正敏	埋蔵文化財調査事務所調査第一課長
担　　当	中川　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成9（1997）年度

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井　保夫	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	宮成　真幸	埋蔵文化財調査事務所主任
	蒲田　和志	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	山本　正敏	埋蔵文化財調査事務所調査第一課長
担　　当	中川　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

（中川道子）

第II章　立地と歴史的環境

1　立　　地

五社遺跡は，富山県小矢部市五社地内に所在する。小矢部市は富山県の西部に位置し，三方を丘陵性山地に囲まれている。小矢部市北部の丘陵は稲葉山（347m）を最高点とし，北東に進むにつれ高さを減じて，福岡町西部の宝達丘陵に連なり，高岡市へ通じている。西側は石動断層線と天田峠を通る国道8号線とに限られた地域で，きわめて侵食されやすい砂山砂岩で構成されており，侵食谷が発達している。南部は医王山の北側を占める蟹谷丘陵地域である。これらの丘陵は石川県との境となっており，倶利伽羅峠や砂子坂峠などの侵食谷の源流部に形成された峠は，古来より越中と加賀の交通の要所とされてきた。東側は広大な砺波平野が広がっている。

砺波平野は，小矢部川と庄川とによって形成された複合扇状地として知られ，「散居村」地域としても著名である。小矢部川は庄川扇状地の発達によって，流路は西側の山地へ押しやられており，丘陵裾を蛇行しながら北流している。一帯は古くから，沖積活動により幾度となく流路を変えた小矢部川・庄川の洪水や氾濫の被害を受けてきたことが知られている。標高20～30mの扇端部一帯は湧水地帯として知られ，また，標高10～15mの末端部は一様でなく，網目状流路をとる大小河川の侵食によって複雑な微地形が発達している。能越自動車道は小矢部川右岸の扇状地を標高44～22mまで縦断しており，五社遺跡は標高22～25mを測り，小矢部川とその支流である岸渡川に挟まれた河岸段丘上に立地している。

2　歴史的環境

五社遺跡の周辺では縄文時代から近世まで各時代の遺跡が認められるが，ここでは時代を追って主な遺跡について紹介していく。

縄文時代には小矢部市右岸では簑島遺跡(5)・高田新茅道遺跡(13)・駒方遺跡(14)などがある。3遺跡とも標高10～20mの庄川扇状地端部に位置し，縄文晩期の遺跡として知られているが，遺構は自然流路・溝・穴で遺跡（集落）の実態については不明である。

小矢部川左岸では桜町遺跡がある。桜町遺跡(47)は小矢部川と子撫川の合流地点から丘陵地帯の河岸段丘上に広がる約60万m²の大規模な遺跡である。1997年までの調査で，縄文時代から現在に至るまで連綿と営まれた複合遺跡であることが確認されている。縄文時代については，草創期から晩期まで縄文時代全期間の遺物が出土している。1988年の調査では，縄文中期の層から，高床建物の柱材が出土し，これによって高床建物は弥生時代になって現れると考えられていた定説が覆された。1997年の調査でも88年と同じ縄文中期の層から，「渡腮仕口」などの高度な技術で加工した建築部材や壁材，多量の木の実やコゴミなどの食物が出土し，注目された。

弥生時代では小矢部川右岸に下老子笹川遺跡(7)・石塚遺跡がある。下老子笹川遺跡は福岡町から高岡市にまたがる遺跡で縄文時代から近世まで3面の遺構面が確認されている。能越自動車道の路線上に位置しており，1995年より調査が行われている。1996年の調査では，中層面で造営開始時期が弥生時代後期まで遡ると考えられる古墳時代中期の水田跡が検出されている。下層面では弥生時代終末期の周溝を持つ建物・平地建物・掘立柱建物・柵・穴・溝などが検出された。1997年の調査は96年の調

査地区の隣接地で行われ，周溝を持つ建物が20棟以上確認され，弥生時代後期の大規模な集落であったことが判明している。

石塚遺跡は北陸本線の高岡駅と西高岡駅のほぼ中間に位置し，弥生時代から中世にかけての各時代の遺構・遺物が確認されている。中でも弥生時代中期の拠点的集落として著名であり，出土土器には畿内的櫛描文土器や西日本系遠賀川式土器，東日本系の土器など多様なものがある。

古墳時代は小矢部川左岸の丘陵裾沿いの山腹斜面に，馬場古墳群(22)・加茂神社古墳群(23)・下向田古墳群(28)・加茂横穴墓群(25)・桜町横穴墓群(44)などの古墳や横穴墓が目立っている。集落遺跡については実態が明らかでない。

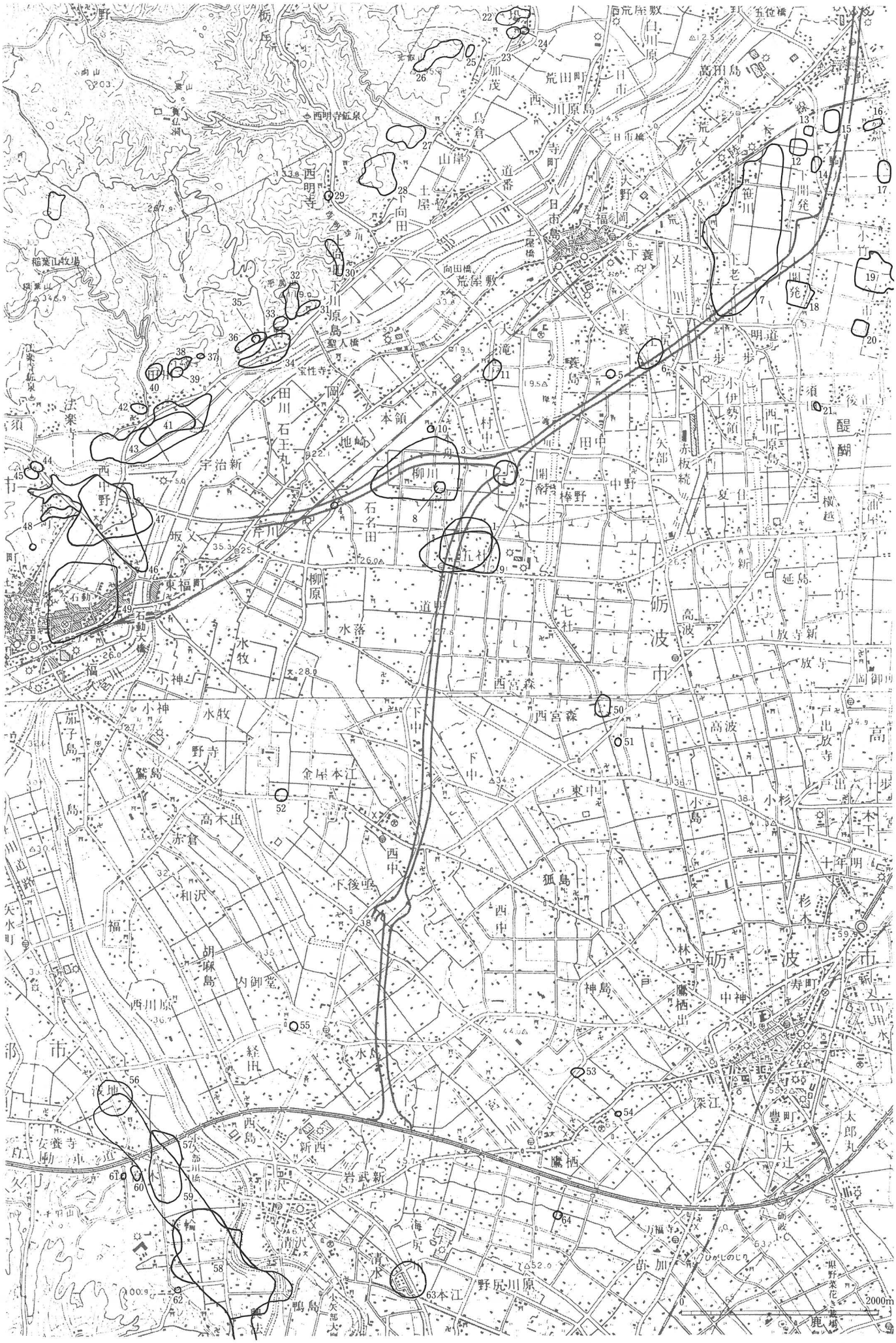
古代では石名田木舟遺跡(3)・桜町遺跡(47)がある。石名田木舟遺跡は小矢部川右岸の平野部に位置し，縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。能越自動車道のアクセス道路建設に伴い，遺跡中央部分を横断するように調査が行われている。古代については7世紀後半～9世紀後半の遺構が確認されており，8～9世紀を主体とする集落遺跡と考えられている。7世紀後半～8世紀初めのものと考えられる瓦塔や阿弥陀三尊像などの仏具関連の遺物が出土している。

桜町遺跡では，1985年の調査で6世紀末～8世紀前半の40棟を越える建物が確認されている。遺物では須恵器・土師器とともに円面硯や和同開珎などが出土している。1993年の調査では古代北陸道の遺構も検出され，律令期の中心が桜町遺跡周辺にあるものと推定された。

小矢部市域には五社条里遺跡(9)・田川条里遺跡(43)・桜町条里遺跡(46)・石動条里遺跡(49)・蓑輪条里遺跡(59)などの条里型地割が多く残っており，五社条里遺跡を除く条里型地割の分布は，小矢部川左岸にまとまってみられる。五社条里遺跡では，五社遺跡の所在する小矢部川右岸の五社地内に，西に約6度偏する条里型地割の分布と「大坪」の小字名が存在することが指摘されている。また，五社遺跡南端には糸岡神社が所在しており，この一帯は，『和名抄』にみられる砺波郡十二郷中の「長岡郷」の推定地，中世においては後白河天皇の皇女室町院の御領「糸岡庄」の所在の中心地と考えられている。古代から中世にかけて砺波平野には荘園が増大していき，小矢部市域では埴生庄・松永庄・糸岡庄など多くの荘園が成立していった。

中世では倶利伽羅峠などの交通の要所が砺波山合戦の舞台となるなど，古代以来の荘園支配を背景に交通・戦略の要所として山城・城館が築造された。五社遺跡の周辺では北東400mに位置する木舟城跡(8)と，その城下集落と考えられる石名田木舟遺跡・開蓙大滝遺跡(2)が挙げられる。木舟城は寿永三年（1184年）に石黒氏が築城したものといわれ，その後上杉氏・佐々氏・前田氏の居城となり，天正十三年（1585年）の白山大地震により崩壊したと伝えられている城である。その周辺には城下町が発達したとされ，石名田木舟遺跡や開蓙大滝遺跡では15世紀末～16世紀後半にかけての遺構・遺物が確認されている。開蓙大滝遺跡では，2本の道路跡と短冊型地割に整然と並ぶ建物や炉関連遺構・井戸などが検出されており，『貴船城古今誌』に記載されている位置図と比較すると，鉄砲町・鍛冶屋町付近に相当することからも木舟城の城下集落と考えられている。

近世以降には砺波平野一帯は加賀藩の支配下に入り，潅漑用水の充実などの開拓政策によって開発が進み，米の生産量は加賀百万石を支える要因ともなった。木舟城の崩壊後に町民が移り住んだ今石動は町奉行が置かれ，北陸道の宿場町としても，年貢米の集散地としても重要な町となっていった。一方，小矢部川右岸の五社遺跡周辺は，地崎遺跡(4)・江尻遺跡(6)では建物跡が確認されているが，耕作地となっていき，現在では豊かな水田地帯となっている。　（三島道子）



第３図　五社遺跡周辺の主要遺跡位置図（１：50,000）

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　類	時　代	文　献
1	五社遺跡	小矢部市五社	集落・荘園	平安・中世	17，25
2	開薐大滝遺跡	福岡町開薐	散布地	中世～近世	17
3	石名田木舟遺跡	小矢部市石名田，福岡町木舟	散布地	弥生・奈良・平安・鎌倉・室町	13, 14, 17, 19, 25
4	地崎遺跡	小矢部市地崎	集落・荘園	江戸	17，25
5	蓑島遺跡	福岡町簑島	集落	縄文・近世	17
6	江尻遺跡	福岡町江尻	集落	古墳・中世～近世	17
7	下老子笹川遺跡	福岡町下老子，高岡市笹川	集落	弥生～近世	17
8	木舟城跡	福岡町木舟字西堀	城館	中世・近世	20
9	五社条里遺跡	小矢部市五社	条里	古代・中世	
10	木舟北遺跡	福岡町木舟	散布地	古代	15
11	大滝遺跡	福岡町大滝	散布地	中世・近世	
12	高田新西後遺跡	高岡市高田新字西後	散布地	縄文（晩）・奈良～中世	18
13	高田新茅道遺跡	高岡市高田新字茅道	散布地	縄文（晩期）	18
14	駒方遺跡	高岡市駒方	散布地	縄文（晩）・古代・中世	18
15	立野地頭田遺跡	高岡市立野字地頭田	散布地	縄文（晩）・奈良・平安	
16	中保Ｄ遺跡	高岡市中保	散布地	古墳～中世	
17	小竹Ｃ遺跡	高岡市小竹	散布地	古墳～中世	
18	上開発遺跡	高岡市上開発	散布地	奈良～中世	
19	今市遺跡	高岡市今市	散布地	弥生～近世	
20	三ヶ遺跡	高岡市三ヶ	散布地	古墳～中世	
21	油屋寺田遺跡	高岡市戸出字油屋	散布地	古墳～平安？	
22	馬場古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	20
23	加茂神社古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	
24	馬場東城跡	福岡町馬場	山城	中世	
25	加茂横穴墓群	福岡町加茂字大松平	横穴	古墳	20
26	鴨城跡	福岡町加茂・島倉	山城	中世	20
27	土屋古墳群	福岡町土屋	古墳	古墳	
28	下向田古墳群	福岡町下向田	古墳	古墳	21
29	西明寺遺跡	福岡町里口	寺院？	中世	20
30	上向田古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
31	上五位神社古墳群	福岡町上向田・上野？	古墳	古墳	
32	平尻山古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
33	上野古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	11，20
34	上野Ａ遺跡	福岡町上野字岡山	集落	縄文（前期・中期）・古墳	12
35	上向田経塚	福岡町上向田	経塚	中世	20
36	上向田上野古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
37	オオノントウ古墳	小矢部市田川	古墳	古墳	
38	田川城跡	小矢部市田川	山城	中世～室町？	
39	田川城ヶ峰横穴墓群	小矢部市田川	横穴	古墳	
40	田川白土山横穴墓群	小矢部市田川	横穴	古墳（後期）	
41	田川遺跡	小矢部市田川	散布地	不明	
42	田川三角山横穴墓群	小矢部市田川字三角山	横穴	古墳（後期）	
43	田川条里遺跡	小矢部市田川	条里	古代・中世	
44	桜町横穴墓群	小矢部市桜町字深沢	横穴	古墳（後期）	11
45	桜町西古墳	小矢部市桜町	古墳	古墳	
46	桜町条里遺跡	小矢部市桜町・西福町	条里	古代・中世	
47	桜町遺跡	小矢部市桜町字産田・中出・舟岡・西中野字小三昧前・坂東	集落・荘園	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉	1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 10, 16, 22, 23, 24
48	天狗山古墳群	小矢部市桜町字地山	古墳	古墳	7
49	石動条里遺跡	小矢部市小矢部町・畠中町	条里	古代・中世	
50	御館山館跡	砺波市東宮森・西宮森・東中	城館	室町？	
51	東中遺跡	砺波市東中	城館？	室町	
52	金屋本江遺跡	小矢部市金屋本江	散布地	奈良・中世	
53	小倉の土居跡	砺波市鷹栖	城館？	室町	
54	鷹栖四谷遺跡	砺波市鷹栖	墓	室町	
55	内御堂遺跡	小矢部市内御堂	散布地	中世	
56	浅地遺跡	小矢部市浅地	散布地	奈良・中世	9
57	高木遺跡	小矢部市高木字野田島	散布地	縄文・奈良・中世	9
58	蓑輪遺跡	小矢部市蓑輪	散布地	縄文・古墳・奈良・室町	9
59	蓑輪条里遺跡	小矢部市安養寺・高木・蓑輪・興法寺	条里	古代・中世	
60	ズンデ山遺跡	小矢部市浅地字ズンデ山	古墳	古墳	9
61	浅地神明社遺跡	小矢部市安養寺	散布地	弥生（終末）・古墳	9
62	興法寺古墓	小矢部市興法寺？	墓？	古代（白鳳）？	9，11
63	清水遺跡	小矢部市清水，福野町本江・若竹町	散布地	古墳・平安・近世	
64	小倉殿館跡	砺波市鷹栖	城館	室町	

第３表　遺跡地名一覧

文　献

1　安念幹倫・高木場万里　1985　『富山県小矢部市　桜町遺跡　産田地区発掘調査概報』小矢部市教育委員会

2　伊藤隆三　1980　『富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査概報』小矢部市教育委員会

3　伊藤隆三・安念幹倫　1982　『富山県小矢部市　桜町遺跡(古苗代・鷲場地区)』小矢部市教育委員会

4　伊藤隆三・高木場万里　1984　『富山県小矢部市　桜町遺跡　城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査』小矢部市教育委員会

5　伊藤隆三　1994　『平成5年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会

6　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1980　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』小矢部市教育委員会

7　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1981　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報II』小矢部市教育委員会

8　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1982　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報III』小矢部市教育委員会

9　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1983　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報IV』小矢部市教育委員会

10　小矢部市教育委員会　1983　『富山県小矢部市　桜町遺跡（坂東地区)』

11　小矢部市　1971　『小矢部市史』(上巻)

12　久々忠義　1992　『富山県福岡町　上野Ａ遺跡発掘調査概要』福岡町教育委員会

13　栗山雅夫・越前慶祐　1997　『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書－県指定史跡　木舟城跡隣接地における発掘調査－』福岡町教育委員会

14　斉藤隆・橋本正春　1995　『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター

15　神保孝造　1997　『民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要　木舟北遺跡』福岡町教育委員会

16　高木場万里　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（個人住宅の建築に伴う中出地区の調査)』小矢部市教育委員会

17　財団法人富山県文化振興財団　1995　『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－ＮＥＪ08遺跡－』

18　富山県立高岡工芸高校地理歴史クラブ・ＯＢ会　『富山県高岡市高田新・駒方遺跡調査報告書』

19　橋本正春　1996　『富山県福岡町石名田木舟遺跡第3次発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター

20　福岡町　1969　『福岡町史』

21　宮田進一　1985　『富山県福岡町下向田古墳群試掘調査概報』福岡町教育委員会

22　山森伸正・林浩明　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う雀谷地区の調査)』小矢部市教育委員会

23　山森伸正・岡本淳一郎　1989　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う深沢地区の調査)』小矢部市教育委員会

24　山森伸正・島田修一　1990　『富山県小矢部市　桜町遺跡（船岡地区の重要遺跡確認緊急調査)』小矢部市教育委員会

25　山森伸正・塚田一成　1991　『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』小矢部市教育委員会

第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の概要

A　概　　要

五社遺跡の時期は，古墳時代，古代，中世，近世以降に大きく分かれる。さらに，古代は前期（9世紀後半）と後期（10世紀後半～11世紀）の二時期に分かれる。古墳時代と古代前期の遺構は散発的で，遺跡の北側でみられるだけで，短期滞在的な集落であろう。古代後期及び中世では，掘立柱建物と区画溝による集落が認められた。古墳時代から古代，中世と時代を追っていくごとに，遺跡の中心が北から南へ移って行った状況がわかる。

古墳時代　遺構は竪穴建物4棟，土坑8基，溝4条，自然河川1条である。遺跡北側の自然河川の東側で，自然堤防状の微高地を中心に遺構・遺物が認められており，遺跡自体はさらに北側へ広がっていると考えられる。竪穴建物は3棟でカマドが確認され，県内における最も古い例となる。時期は田嶋編年の古墳時代3様式Ⅰ期（5世紀中～後半）に相当し，遺物は，ほぼ一時期のものがまとまって出土している。

西側を北流する自然河川は，堆積の上面から古代前期の遺物が出土するが，埋土中からは古墳時代中期の遺物は出土せず，中位から中間的な時期（6～7世紀）の遺物が出土している。

古代前期　掘立柱建物12棟，柵1条，土坑，溝，畠跡，道路跡，集石遺構がある。遺構検出面は古墳時代の面とほぼ同じである。B2E地区においては，古代後期の面との間にもう一面遺構検出面があるが，時期的には古代前期との間に大きな差はないものと考えられている。掘立柱建物には総柱建物と側柱建物とがあり，雨落ち状の浅い溝が二方ないし三方を巡るものがあるなど特異な在り方をしている。これらの建物は自然河川の両岸で，3～5棟づつがまとまって検出されている。道路跡は，小さな穴が列をなして並んでおり，これは道路を造る際の基礎工事に起因するものと思われる。遺物は量的に少ないが，8世紀～10世紀初め頃までの若干の時期差を持つものがあり，主体は9世紀後半～10世紀初めにあると考えられる。

古代後期　古代後期の遺構には掘立柱建物25棟，柵6条，土坑，溝，畠跡がある。掘立柱建物には総柱建物9棟，側柱建物13棟がみられ，規模は1間×2間から4間×4間まである。総柱も側柱も柱穴は小さく，柱間の不規則なもの，平面形が菱形に歪むものなどもみられる。これらの建物は，自然河川や溝によって約半町単位（約50m前後）に7群に区切られている。建物群はほぼ北方向を向くものが多く，区画の方位と一致しないなどの疑問点はあるが，古代条里との関連が考えられている。遺物は局所的に集中して出土する傾向があり，量的には少ない。上下の洪水層によってパックされたような状態にあり，10世紀末～11世紀の年代が与えられている。また，コロバシなどの木製農耕具も出土している。

中世・近世以降　検出された遺構には掘立柱建物48棟，柵7条，井戸9基，土坑，溝，自然河川があり，この中には古代から近世以降まで連綿と存続する遺構もみられる。掘立柱建物は総柱建物36棟，側柱建物9棟で，総柱のものが多く，規模は1間×1間から6間×4間のものまである。古代後期と比較して柱穴は大きくなり，柱位置は整然と並ぶようになる。さらに，桁側に庇の伴うものがみられるようになるなど，規模・構造ともに総柱化が進む。建物の分布はやや散漫であるが，数カ所のブロ

ックを形成しており，建物群を分割するような区画溝もみられる。井戸は古代以前では検出されておらず，中世以降になってみられるようになる。素掘りの井戸が殆どで，中には曲物を積み上げた井戸や，上総掘りによって掘られた近世以降の井戸もある。土坑には方形の木組みを持つものや，建物に付随すると思われるものもある。

当地域では文献上で1586年と1858年に大地震の記録があり，五社遺跡でも噴砂や断層などの地震痕跡が確認されている。噴砂は中世遺構検出面で確認され，さらに，中世の遺構を切っているものがあることから，中世面の時期（12世紀後半～14世紀）よりも後の所産であると考えられる。断層には縦方向の断層と，横方向の断層があり，後者によって，ずれたり傾いたりした建物や柱穴，井戸，溝などが確認されている。

B　土　　層

基本層序　Ⅰ層；黒褐色土で，表土・耕作土・盛土である。厚さは平均して20cmほどであるが，C2地区以南の地区では，盛土がなされており20～60cmある。Ⅱ層；暗灰黄色砂質シルト・青灰色シルトで，圃場整備の削平を受けており，依存状況は悪く５～10cmほどであるが，中世の遺物包含層である。遺跡南側のＤ１・Ｄ２地区ではⅡａ層；灰褐色シルトとⅡｂ層；暗灰褐色シルトに細分され，Ⅱｂ層が中世の遺物包含層にあたる。Ⅲ層；黄褐色砂質シルト・青灰白色砂で，中世の地山にあたる。厚さは５～30cmと地区によりばらつきがあるが，全地区を通してⅢ層上面で中世の遺構が確認されている。Ⅳ層；黒色砂質シルト～粘質土で，10～20cmと均一に堆積しており，古代後期の遺物包含層である。Ⅳ層土は黒色で有機質を多く含んでおり，洪水堆積が一時的に安定し，黒色土形成が活発に行われたことを示している。Ⅴ層；黄褐色砂質土・オリーブ褐色砂・黄灰色粘質土で，古代後期の地山である。厚さは10～40cmと地区によりばらつきが認められるが，遺構は全地区を通してⅤ層上面で確認されている。遺跡北側ではⅤａ層；灰色砂質シルト，Ⅴｂ層；灰白色粘土質シルト，Ⅴｃ層；オリーブ灰色粘土質シルトに細分されている。Ⅵ層；黄灰色砂質シルト～粘土質シルトで，古代前期及び，古墳時代の遺物包含層にあたる。Ｂ２Ｅ地区では，Ⅵ層上面で遺構が確認されている。このⅥ層上面の遺構は遺物包含層が伴わず，時期的には古代前期の遺構と大きな差はないものと思われている。Ⅵ層はＡ・Ｂ１地区ではⅥａ層；黄灰色砂質シルト，部分的にⅥｂ層；黒褐色シルトに細分される。古代前期の遺物はⅥａ層下部に含まれ，古墳時代の遺物はⅥｂ層からⅦａ層上面に食い込むような状態で確認される。Ⅶ層；オリーブ灰色砂質シルト～粘土質シルトで，古代前期及び古墳時代の地山である。厚さは５～20cmで，遺跡北端のＡ・Ｂ１地区では残りが良くⅦａ層；オリーブ灰色砂質シルト，Ⅶｂ層；オリーブ灰色砂質土に細分されている。古墳時代の遺構はⅦ層上面から若干掘り下げた面で確認されており，Ⅶｂ層上面に相当する。Ⅷ層；砂礫層である。

五社遺跡の調査では，地震，洪水などの自然災害の痕跡がみられた。第４図は，これらの災害の痕跡を基本層序に模式的に示したものである。

地震痕跡　噴砂・断層があり，断層には縦方向のものと横方向のものがみられる。噴砂はⅢ層上面（中世遺構面）で確認され，更に中世遺構を切るものがあることから，中世以降の時期のものであることがわかる。噴砂は礫層から始まっており，礫が途中まで噴出しているものもみられる。また，Ｂ１地区Ⅴ層上面（古代後期面）では，直径１ｍほどの範囲で礫層が隆起している個所が確認されており，本来の礫層（Ⅷ層）はこの下方40cmにあたる。

縦方向の断層は数カ所でみられ，Ｂ１地区で確認されたもの（断層Ｃ）は，規模としては小さいが，ほぼ垂直方向に約2.5cmずれており，約２ｍにわたって続き末端は噴砂状になって終わっている。

横方向の断層は２枚あり，IV層（断層Ａ）とＶ層（断層Ｂ）で確認されている。断層ＡはIV層上面から５～10cmの面で水平方向にずれており，ずれた面には黄褐色砂が薄く堆積している。この断層Ａの影響を受けた遺構には，中世面で調査した柱穴や土坑がある。これらの遺構はIV層の途中で掘り込みが突然終わってしまい，古代後期面の調査時に極めて浅いが中世の埋土を持つ遺構として確認されたもので，位置は異なるがずらすと合致するというものである。これらの移動変位は東側ほど大きく最大150cm，西側で最小70cmを測る。また，変位方向は北西側ほど西に振れ，南東で西に16度，北西で西に37度である。断層のずれは一定でなく，南西を中心として同心円を描いているかのようである。

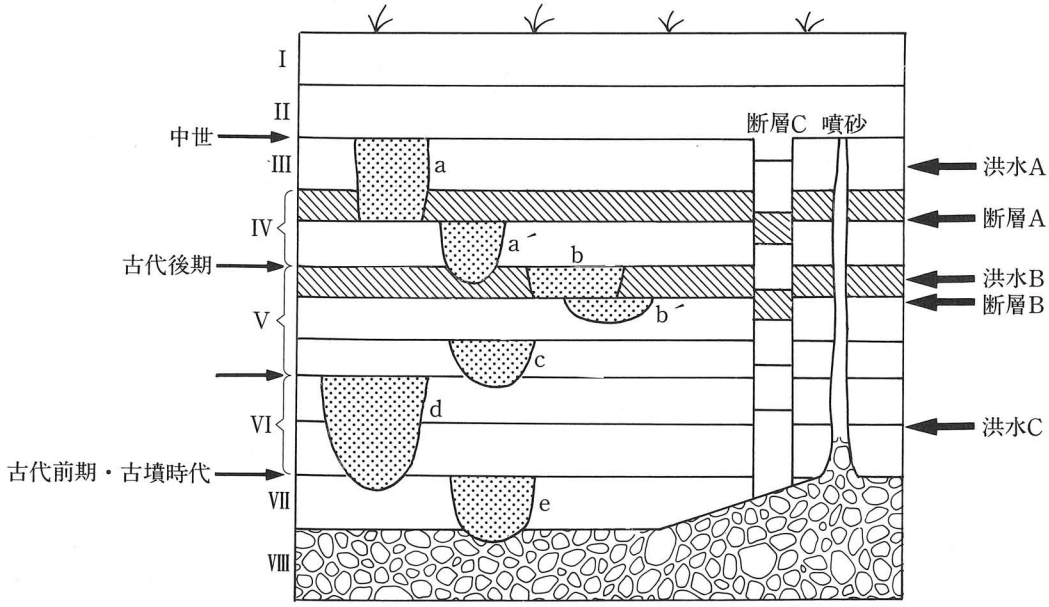
断層ＢはＶ層上面から10～20cmの面で水平方向にずれている。やはり，ずれ面には青灰色砂が薄く堆積している。断層Ｂの影響を受けた遺構には，古代後期に肩が最大１ｍずれた溝や，柱穴が北側へ斜めに傾いた建物などがある。移動変位は西側で小さく数cmで，変位方向は北向きである。断層Ａと同様に場所によって変位に差が認められる。

洪水　五社遺跡の一帯は，古くから小矢部川・庄川の氾濫の被害を受けてきたことが知られている。調査により，第４図のように三回の洪水堆積物を分離することができる。洪水ＡはIII層で，黄褐色の砂質シルトと砂が互層を成しており，最下部はIV層をパックするように粘質土が薄く堆積している。堆積期間は11世紀～12世紀末頃と推定され，この堆積によってほぼ平坦な地形ができあがったと思われる。

洪水ＢはＶ層で黄褐色及び青灰色の砂質土から成り，互層を成している。細かくは薄い粘質土と砂の層が繰り返し堆積したもので，場所によってその差が大きい。堆積期間は９世紀後半～10世紀頃と推定される。

洪水ＣはVI層・VII層で灰褐色の粘土質シルトと青灰色砂質土から構成されている。VI層は古代前期・古墳時代の遺物を含んでおり，緩やかな堆積であったと思われる。VII層は礫層の高低を埋めるような形で存在しており，VI層中に古墳時代の遺物が含まれていることからそれ以前の所産と考えられる。

（三島道子）



第４図　基本層序模式図

第Ⅳ章　遺構・遺物

1　古墳時代

古墳時代の遺構は，遺跡北端のＡ・Ｂ１地区でのみ確認されており，竪穴建物４棟，土坑８基，溝４条，自然河川１条である。遺構には切り合い関係があり，若干の時期差があると思われるがそれほど大きな差ではなく，ほぼ一時期に営まれたものと考えられる。遺物は竪穴建物，土坑などからまとまって出土している。遺物には土師器椀，須恵器がみられず，古墳時代中期，５世紀中葉～後半に属すと考えられる。

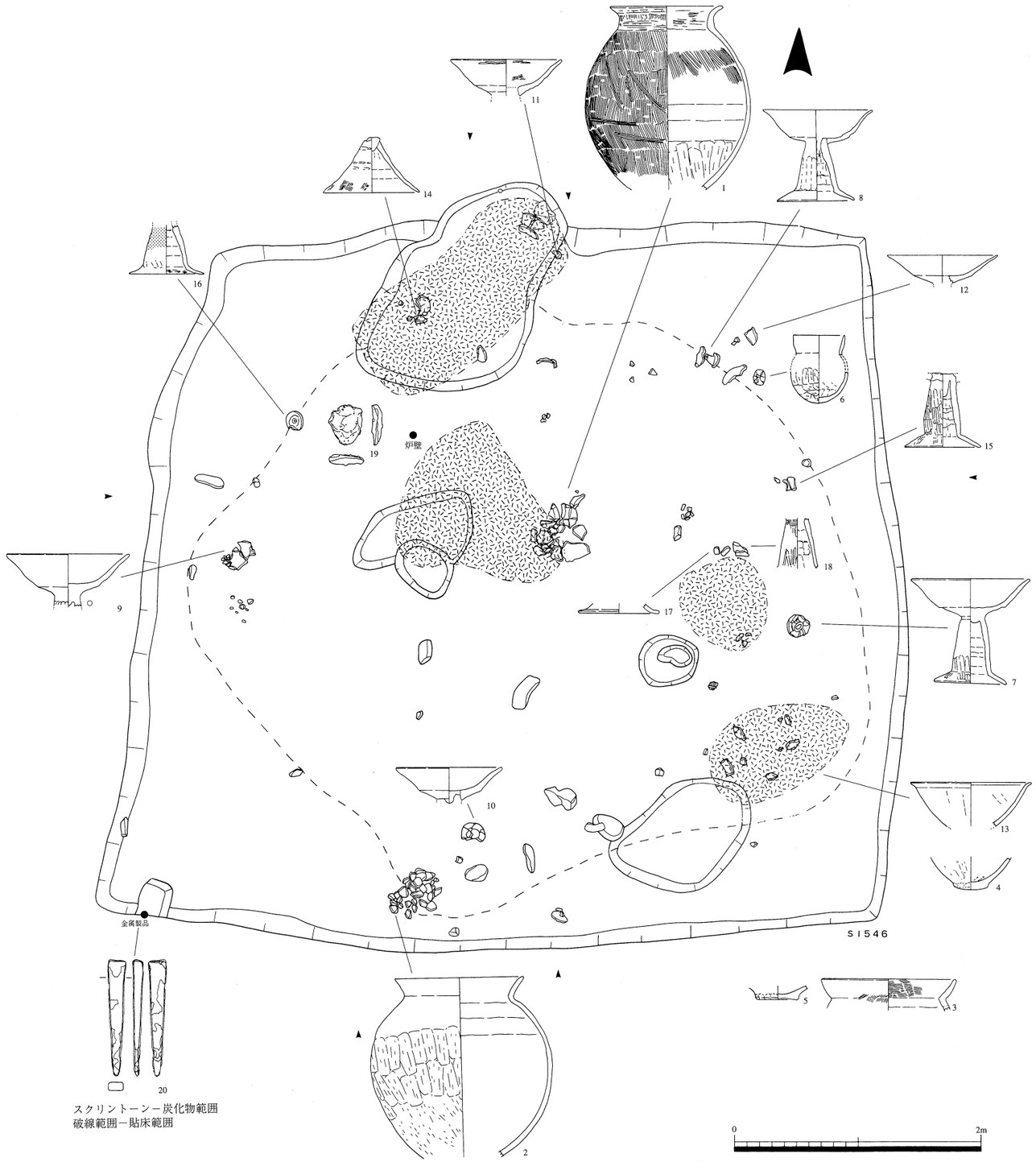
Ａ　竪穴建物

546号竪穴建物（ＳＩ546，第５～７図，図版11・12・19～21）

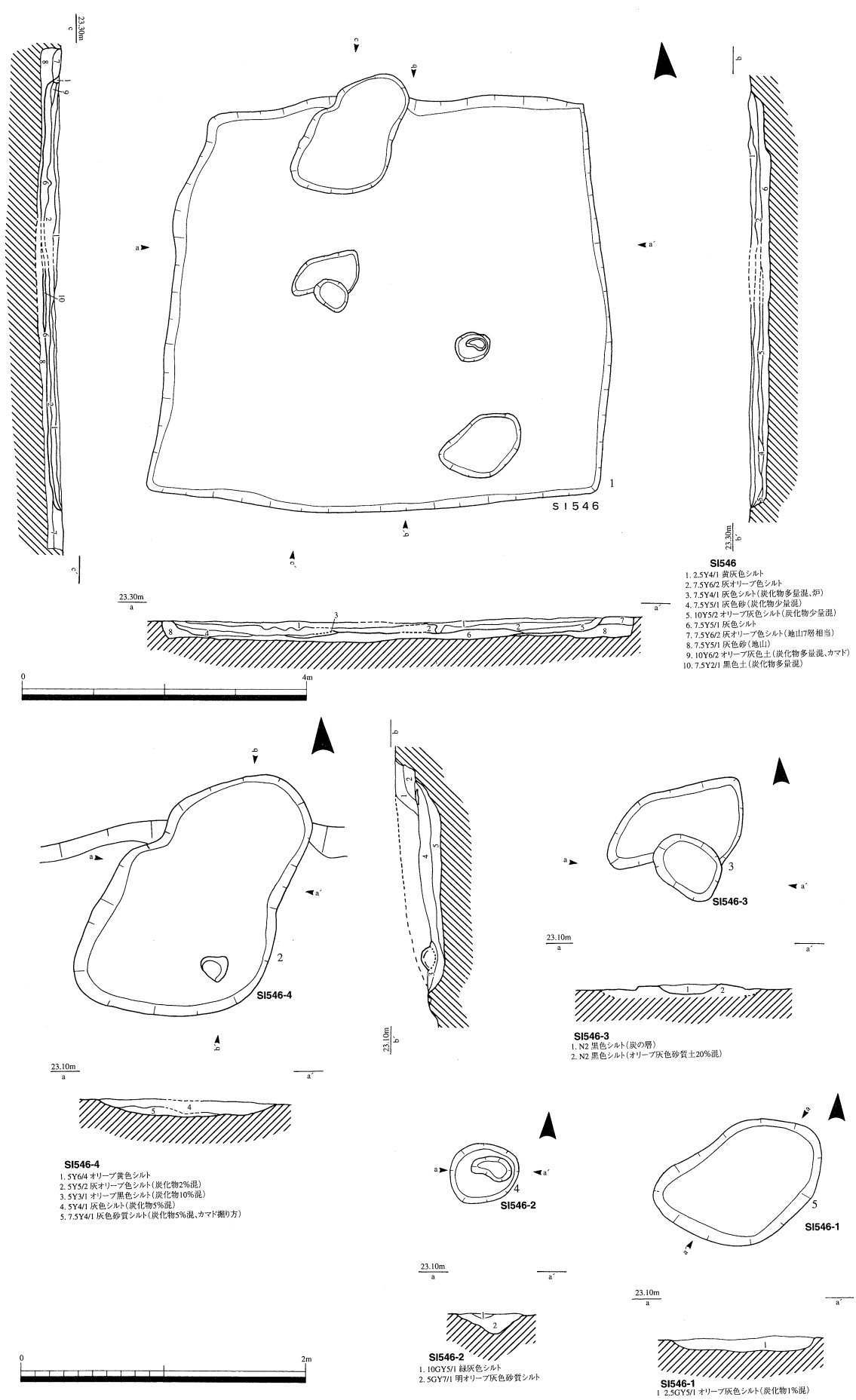
Ｘ245Ｙ115に位置する。自然河川（ＳＤ552）の東側で，自然堤防状の微高地上に位置している。6.2ｍ×5.8ｍの方形で，床面積は約36㎡である。覆土は４層に分かれ，地山のⅦ層と類似した灰色シルトが主体で，わずかに炭が混じる。深さは24cmを測る。北壁中央に炭化物の集積（SI546-4），中央西よりに地床炉（SI546-3）がある。炭化物の集積は北壁を25cm掘り込み，縦160cm，横120cmで浅い掘形に炭化物が堆積している。これらの点から天井・袖等は確認されていないがカマドである可能性が高いと考えている。地床炉は炭化物の集積の前面80cmに位置し，中央に円形に炭が堆積し，それを取り巻くように表面が堅く締まったオリーブ灰色砂質土混じりの黒色シルトが堆積している。床面検出時に確認された炭化物の範囲は，地床炉の掘形よりも北東に広がっており，甕１が潰れたような状態で出土している。床面中央部に堅く締まった面がみられ貼床と考えられる。貼床を剝がした面で穴（SI546-2）と土坑（SI546-1）を検出しているが，柱穴と考えられるようなしっかりした掘形を持つものではない。

遺物は床面直上ないし10cmほど浮いた状態で出土した。一個体がそのまま潰れたような状態のものが多く，破片が広範囲には散らばることはない。貼床範囲の内側に位置するものがほとんどであり，使用時又は，竪穴建物廃棄時の位置を保っていると思われる。９・10・14・16の高杯は立位，７は逆位，８・15・18は横位の状態である。11・14の高杯は炭化物の集積内から出土しているが，煤の付着，被熱等は認められない。土師器の甕・壺・高杯・鉢，炉壁，釘状の金属製品がある。

１～３は甕で，１は外反する口縁を持ち，調整は外面ハケメ，内面上部ハケメ，下部ケズリが施されている。２は「く」字状に外反する口縁で，体部は丸みを帯びヘラケズリで仕上げられている。１・２ともに肩部からやや下にかけて帯状に煤が付着する。６の小型壺は，口縁がやや内湾気味に立ち上がり球形の体部で，調整は外面ヘラケズリ，内面ヘラ状工具による粗いナデである。７～12は口径18cm前後の高杯杯部で，稜のはっきりしたものはない。８は杯部内面に僅かにハケメが残る。９は内外面赤彩で，内面はさらに黒色処理が施されている。13は鉢状の土器で，脚が付くのか不明である。14～18は高杯脚部で，脚裾部が強く屈曲外反するものと「ハ」字状に開くものがあり，脚部が長く，内面に粘土接合痕が残るものが多い。14は「ハ」字状に開く脚部で，「東海系」の影響を受けていると考えられ，やや古い様相を持つ。16は割れ口が被熱還元しており（スクリントーンで図示），フイゴの羽口に転用されたものか，またはカマドの支脚として使われたものと考えられる。19の炉壁は表面にガラス質が付着している。20の鉄製品は竪穴建物南西角の肩部からの出土で，本来はＳＩ546に伴う遺物ではない可能性がある。本遺構には土師器椀・器台及び須恵器は伴っていない。遺物に時期差は認められ

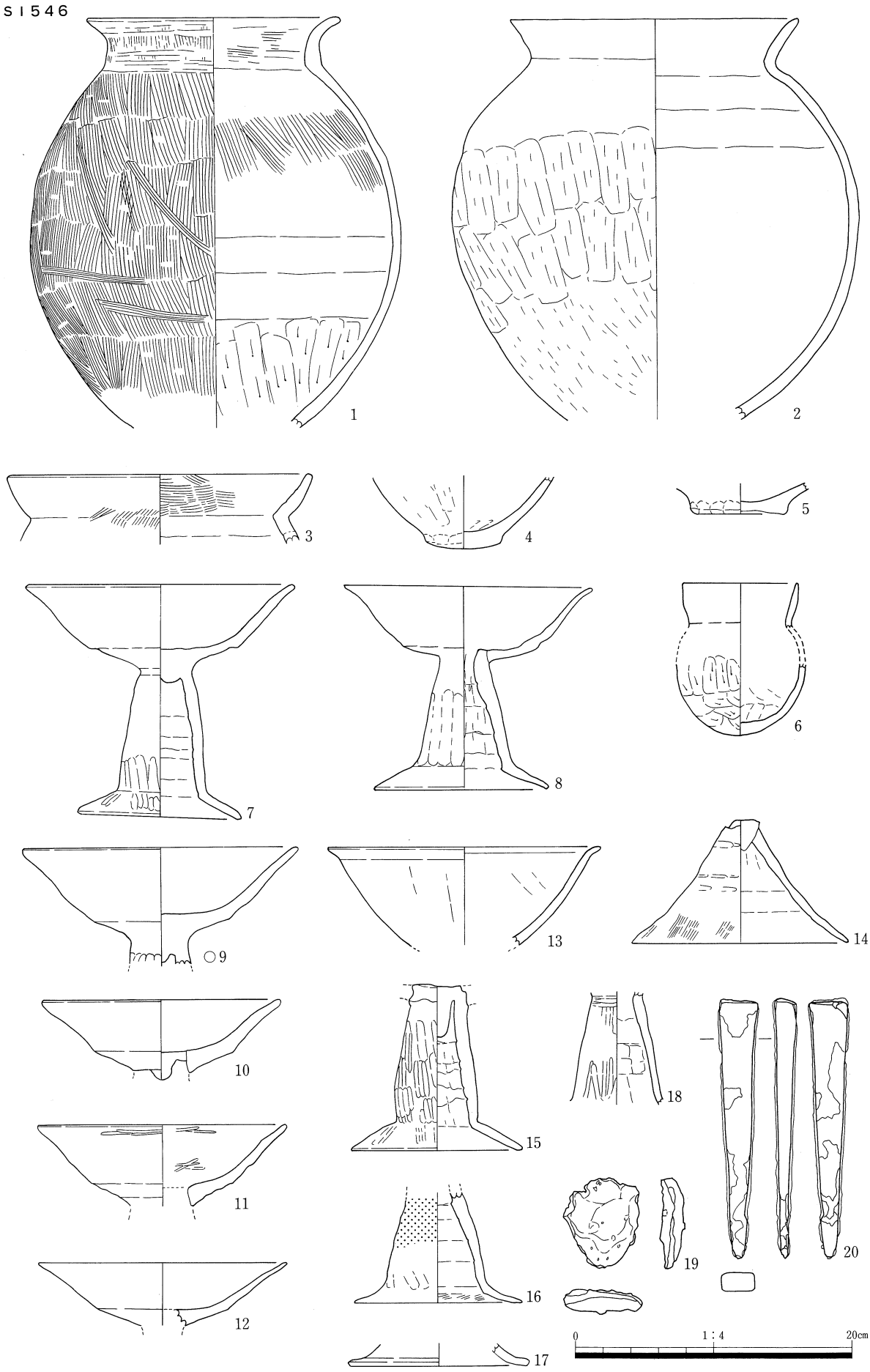


第 5 図　遺物出土状況図
SI546



第 6 図　遺構実測図

1.SI546　2.SI546-4（カマド）　3.SI546-3（炉）　4.SI546-2　5.SI546-1



第7図　遺物実測図　(1/4)
SI546（1～20）

ず，古墳時代中期と推定される。

547号竪穴建物（ＳＩ547，第８～10図，図版11・13・14・22・23・44）

Ｘ241Ｙ116でＳＩ546の南方２ｍに位置する。5.5ｍ×5.8ｍの北西角がやや歪んだ方形を呈し，床面積は31.9㎡を測る。深さは28㎝を測るが，壁の立ち上がりは緩やかである。北壁東よりにカマド（SI547-1），中央に地床炉（SI547-2）がある。カマドは縦122㎝，横100㎝で北壁を20㎝掘り込み，やや西に振れている。天井部は崩れており遺存していないが，袖部は比較的残りが良く，よく締まった灰色シルト（第４層）が袖構成土にあたる。第６層は袖構成土で，第４層の下部にあたり，燃焼部[注1]側は良く焼けている。焚口は奥壁から手前100㎝の辺りにあり，奥壁から60㎝の位置に支脚石と考えられる被熱した花崗岩があることから，この石が使用時の位置を保つと仮定すると，奥壁手前60㎝の辺りに掛け口が位置すると推測される。焚出口・燃焼部は浅く掘り込まれている。奥壁はやや斜めに傾いているが，煙道は不明である。地床炉は160㎝×120㎝の楕円形に炭化物が盛り上がったもので，８㎝ほどの浅い掘り込みを持つ。地床炉を挟んで２つの柱穴（SI547-4,SI547-5）が検出されている。また，南壁中央に土坑（SI547-3）があり，この土坑の南端の一段深く掘り込まれた部分は柱穴の可能性がある。南西角を除く三辺には幅約70㎝，高さ８㎝のベッド状の段差が巡っている。また，北壁を除く三辺には細長い不整形の土坑があり，これらは一続きの溝状の遺構と考えられ，周溝にあたると思われる。ベッド状の段差を除く部分では，掘形の上に炭混じりの灰オリーブ色砂質シルトを貼って貼床としている。

遺物はベッド状遺構の途切れた南壁下，西側のベッド状遺構の上，カマドの中からまとまって出土している。ＳＩ546と同様に破片が散らばるものは少なく，一個体が潰れたような状態で床面直上から検出されたものが多い。21・22の甕は一個体が潰れたような状態で出土したもので，22は地床炉に接している。23・24やベッド状遺構から床面にかけての遺物はやや浮いた状態で検出され，肩部から転げ落ちたような状態である。地床炉の周辺から砥石が１点出土している。

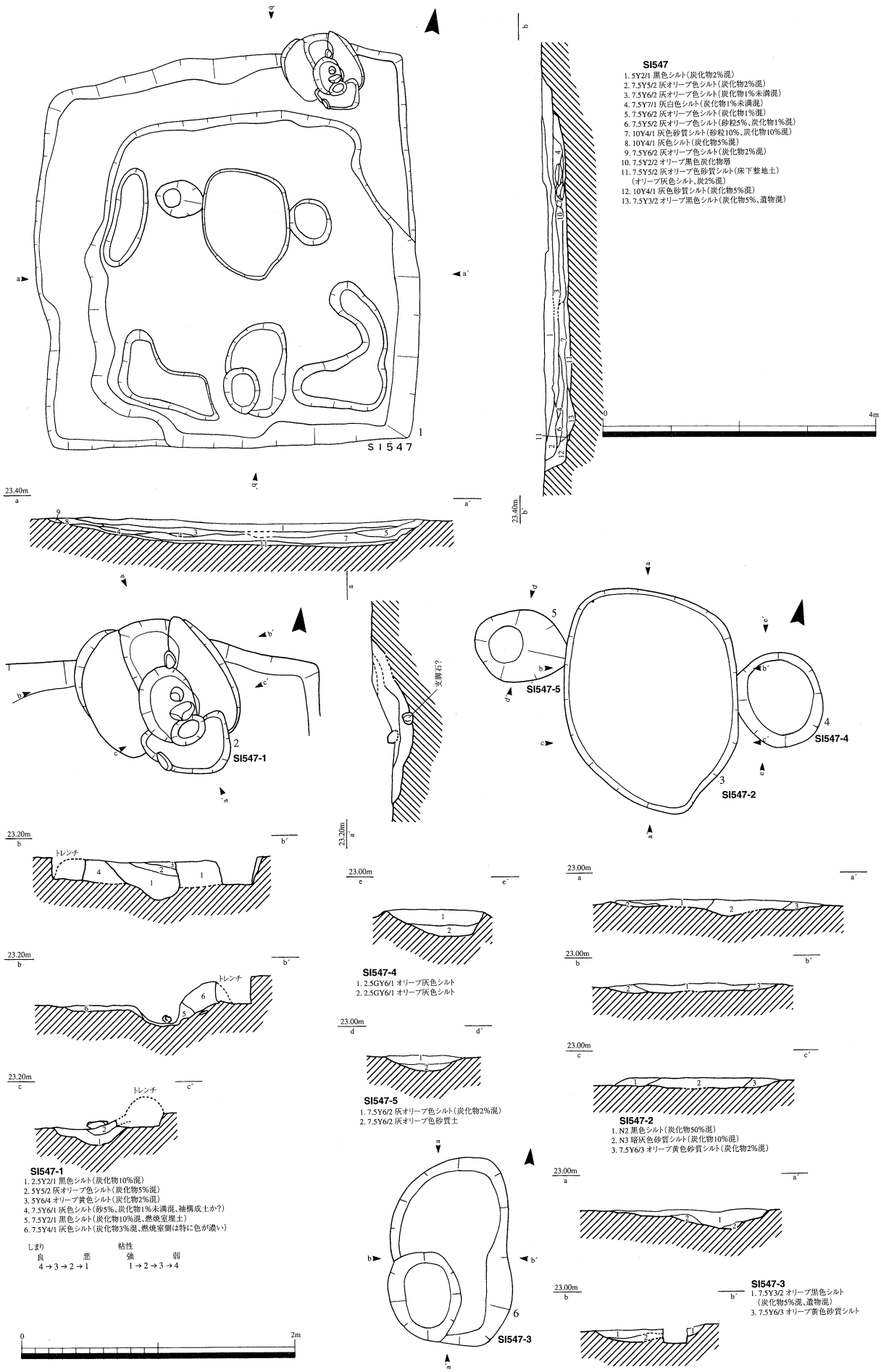
21はやや長めの「く」字状口縁を持ち，底部に小さい平坦面を持つ。調整は内外面ともに上部はハケメ，下部はケズリが施されているが，調整が粗く内面に粘土接合痕を残す。22～24は内外面ケズリで，口縁部に指頭圧痕，体部に粘土接合痕が残る。甕はいずれも肩部以下に帯状に煤が付着する。26は口縁が楕円形に歪んだ直口壺である。27～30は高杯杯部で，口径18㎝前後のものと，24㎝の大型品の二種がある。27は後者で，土坑（SI547-3）出土である。杯口縁部と底部の境に明瞭な稜を持っており，調整は杯底部外面にハケメが残るが，内面は丁寧にナデが施されている。28はカマド袖土内出土で，内外面に赤彩が残っている。28～31・33の高杯はいずれもカマド内出土であるが，被熱しているものは認められず，カマド使用に伴う土器ではないと考えられる。

本遺構の遺物は土師器甕・壺・高杯，砥石で，ＳＩ546と同様に土師器椀，須恵器は伴わない。肩部から転げ落ちたと思われる遺物もあるが，遺物間に時期差は認められず，ＳＩ546の遺物と同時期と考えられ，古墳時代中期と推定される。

574号竪穴建物（ＳＩ574，第11・14図，図版14）

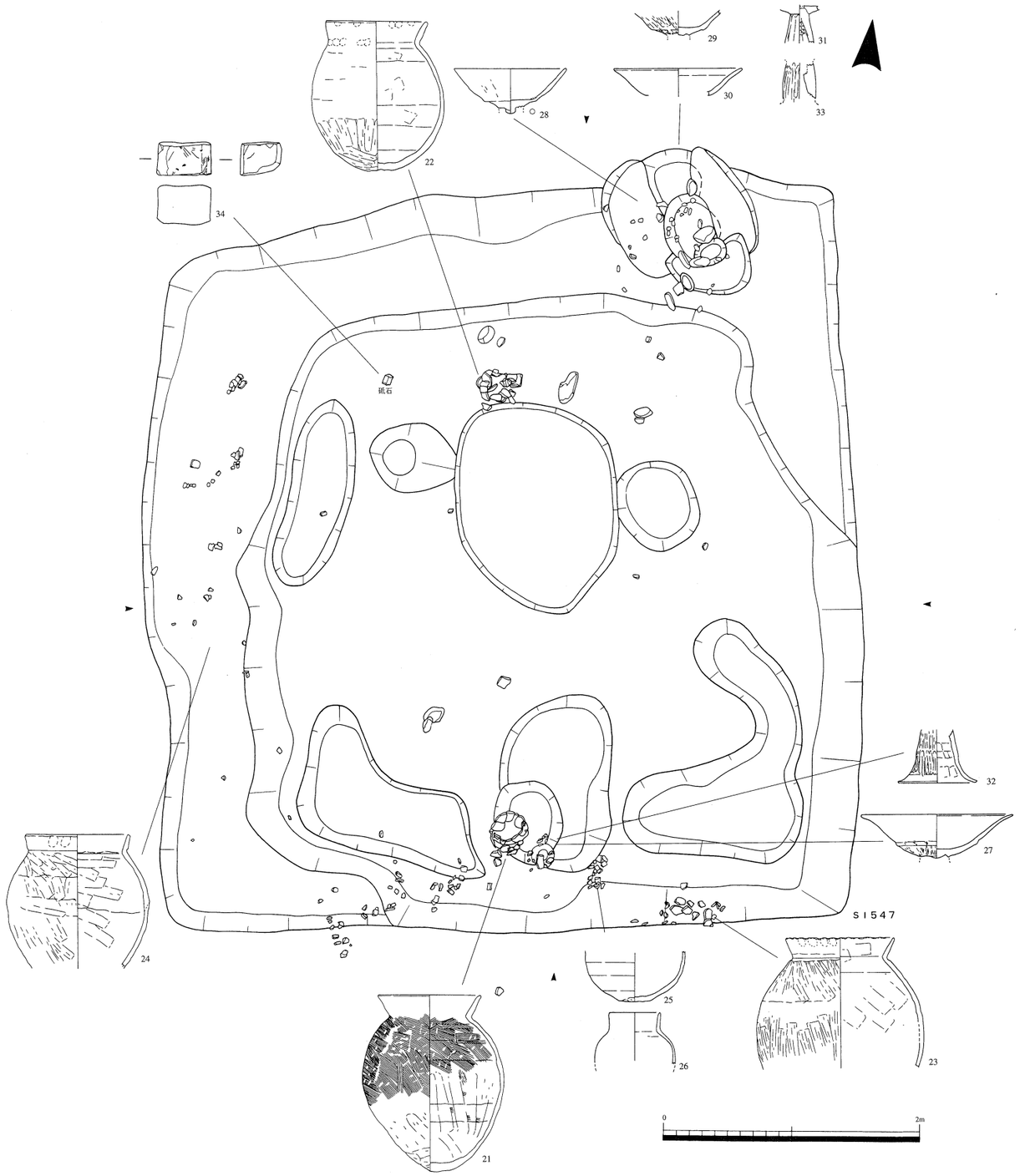
Ｘ247Ｙ126に位置する。ＳＩ546・547とはＳＤ572・573を挟んだ対岸にあたる。3.9ｍ×4.6ｍで床面積は約18㎡となり，ＳＩ546・547のほぼ二分の一の規模である。深さは12㎝で，覆土はオリーブ黒色シルトと，炭混じりのオリーブ灰色砂質シルトの２層から成る。遺物は第２層に含まれ，床面直上からの出土が多い。床面中央北よりに，126㎝×62㎝の地床炉がある。床面は湧水のため不明瞭で，貼床，柱穴等の確認はされていない。

遺物は南西角付近からの出土が多いが，ＳＩ546・547と比べて細片が多く，かつ散らばっている。

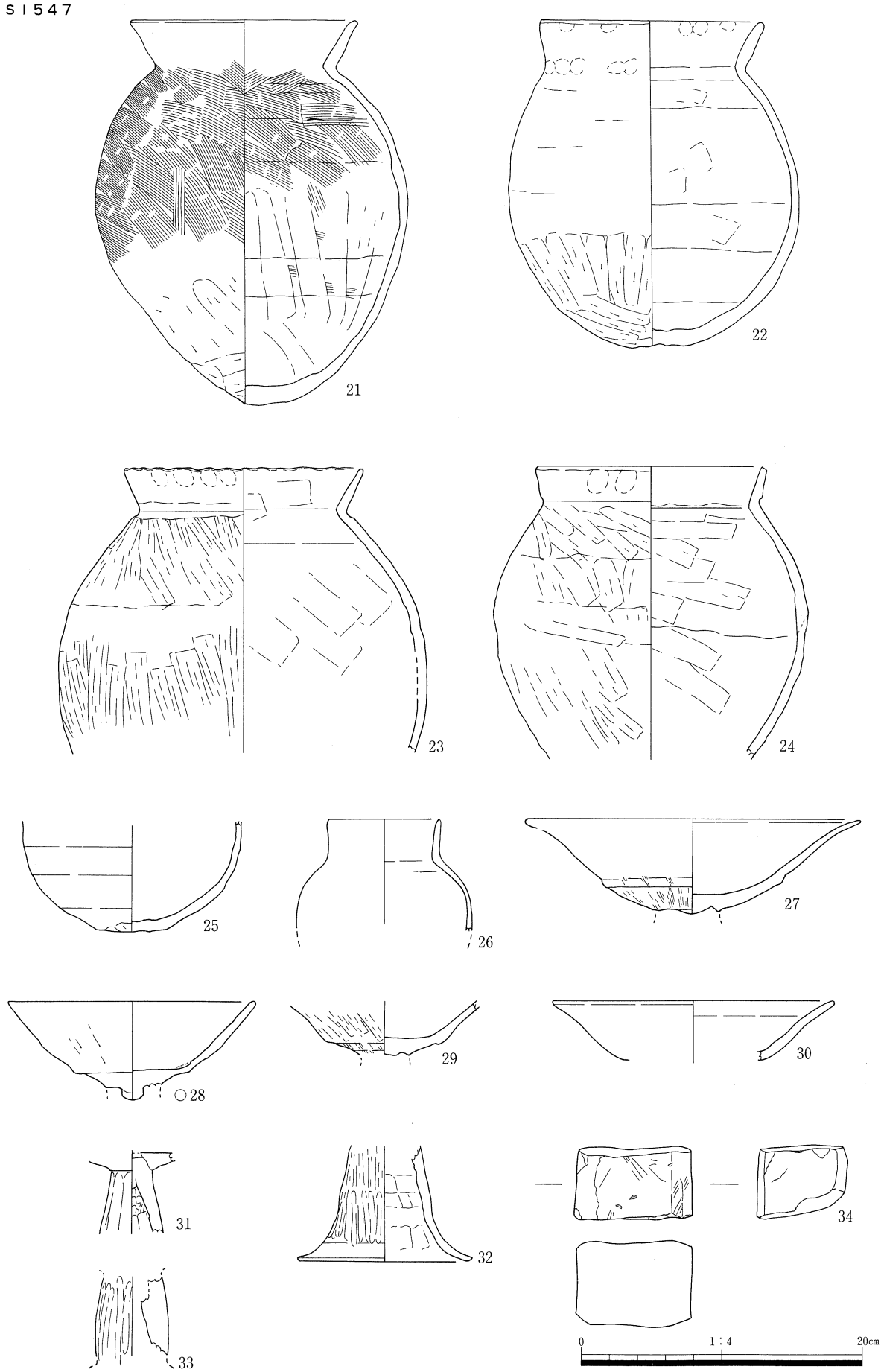


第 8 図　遺構実測図

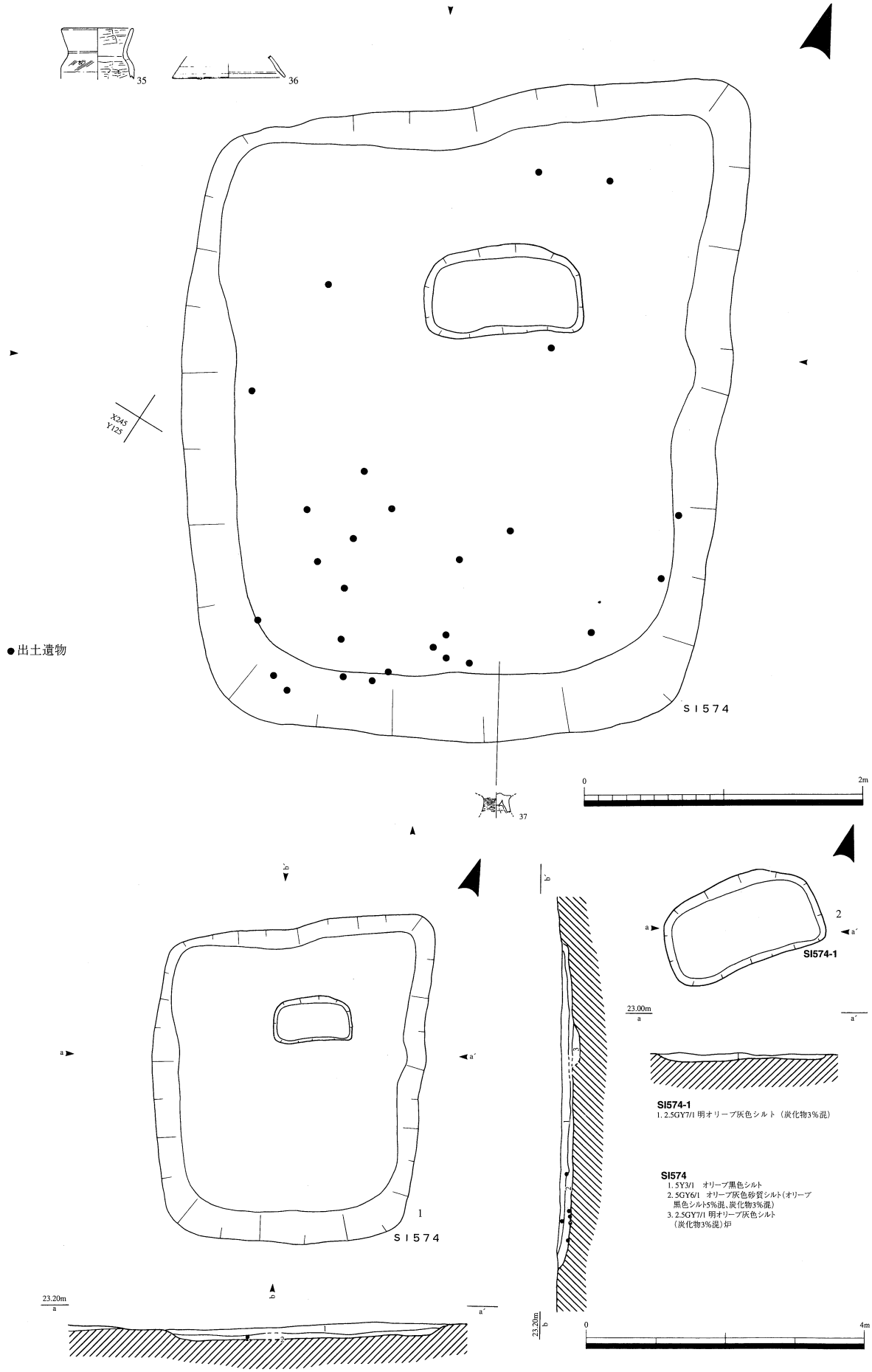
1. SI547　2. SI547-1（カマド）　3. SI547-2（炉）　4. SI547-4　5. SI547-5　6. SI547-3



第 9 図　遺物出土状況図
SI547



第10図　遺物実測図　(1/4)
SI547（21～34）



第11図　遺構実測図

1. SI574　2. SI574-1（炉）

35はやや直立気味に外反する口縁を持つ小型壺で，調整は体部外面が粗いケズリ，内面が雑なナデである。36は「ハ」字状に開く高杯脚部である。時期は古墳時代中期と推定される。

644号竪穴建物（ＳＩ644，第12～14図，図版14・24）

Ｘ249Ｙ122付近で，ＳＩ574の北西６ｍに位置する。南北4.7ｍ，東西3.4ｍ以上で，方形を呈すると思われる。深さは16cmを測る。切り合い関係ではＳＸ645を切り，ＳＤ573に切られている。南東角にカマドと考えられる炭化物の集積（SI644-1），北東角付近に地床炉がある。カマドは88cm×52cmでやや東に振れており，南壁に接している。南壁から40cmの辺りから手前は一段深く掘り込まれており，焚出口と考えられる。天井・袖ともに残存していないが，第２層のオリーブ黒色砂質シルトは締まりのある土で，袖構成土と考えられる。カマドと壁が接する位置に，直径20cm，深さ26cmの粘土の穴が検出されているが，性格は不明である。地床炉は直径120cmの炭化物の集積で，掘形は持たない。覆土は３層に分かれ，第３層の上面が床面にあたり，炭化物の集積はこの面で確認されている。カマドは第２層の上面から検出されている。

遺物は床面直上に集中し，肩部では第２層中に浮いた状態で出土している。比較的大きな破片で散らばっており，切り合い関係のあるＳＸ645，ＳＤ573との間で接合する。38はやや厚めの「く」字状口縁で，底部に小さな平坦面を持つ甕である。調整は内外面ともにハケメを施した後に肩部･胴下半･内面上半を削っている。39は長胴の甕で，内外面に粘土接合痕を残すもので，やや新しい様相を持つ。41は胴の張る平底の甕で，器壁は薄い。38～41のいずれの甕も，肩部以下に帯状に煤が付着しており，38・41は特に肩部の煤が密である。時期は古墳時代中期に属すと考えられる。

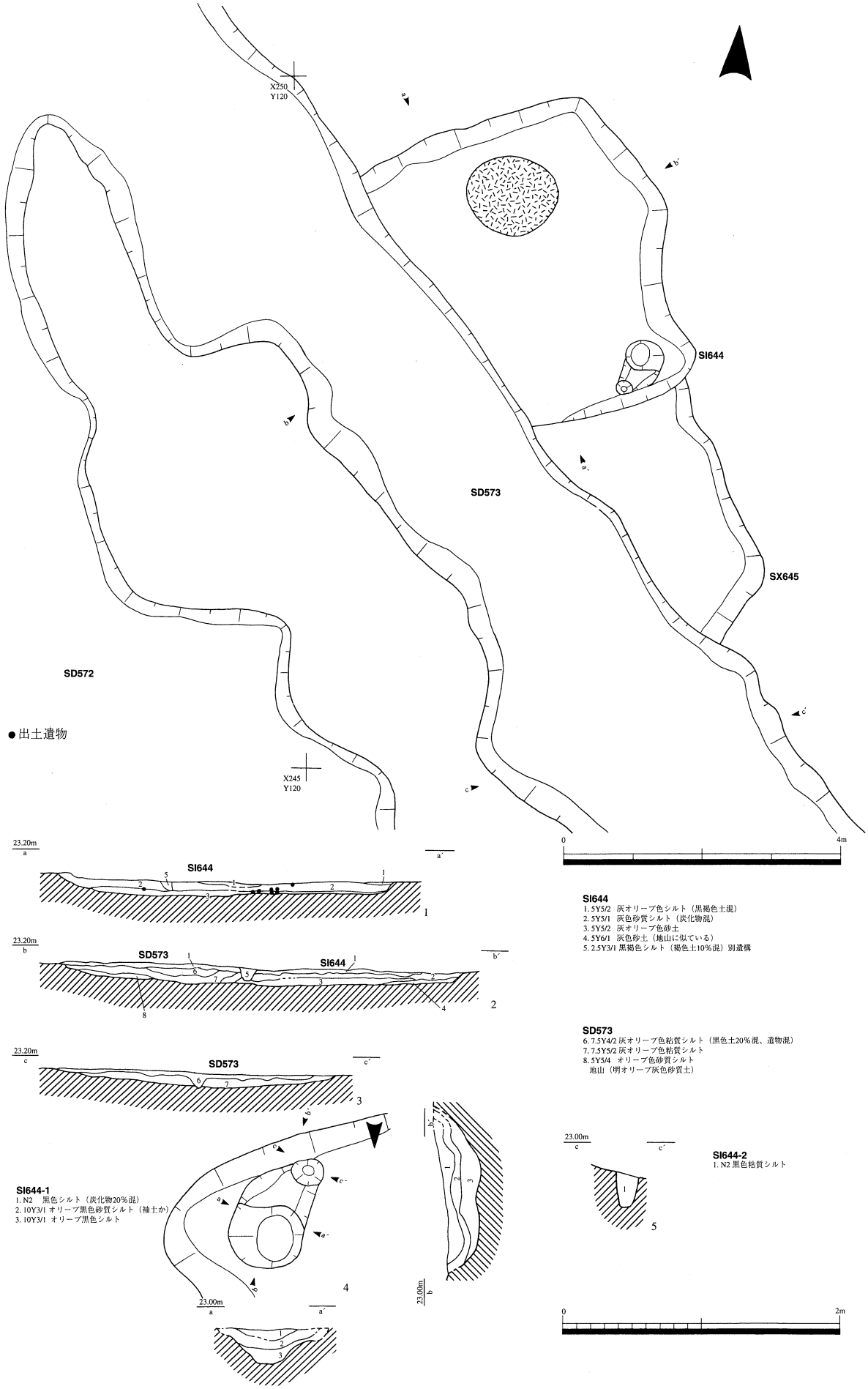
Ｂ　土　　坑

545号土坑（ＳＫ545，第15・16図，図版14・24・25）

Ｘ247Ｙ118付近に位置する。4.0ｍ×2.7ｍを測る範囲で，方形の浅い掘り込みを確認しているが，ＳＤ572に切られている。炭化物の集積箇所の周辺と，南東1.6ｍ離れた箇所の二箇所に遺物が集中する箇所がある。方形の掘り込みを持つ点や，炭化物の集積箇所がある点等から竪穴建物の可能性があるが，平面プランはＳＤ572の張り出し部として僅かに西側で方形のラインを検出できるのみである。ＳＤ572の張り出し部を竪穴建物の西辺，ＳＤ572の東肩の出っ張りを北東角と仮定すると，掘り込みとして確認された一点破線の範囲よりも一回り大きく3.6ｍ×4.4ｍとなり，床面積は15.8㎡となる。覆土はⅦ層に似たオリーブ灰色シルトが主体で，僅かに炭を含んでいる。炭化物の集積は60cm×40cmの楕円形で，掘り込みは持たない。

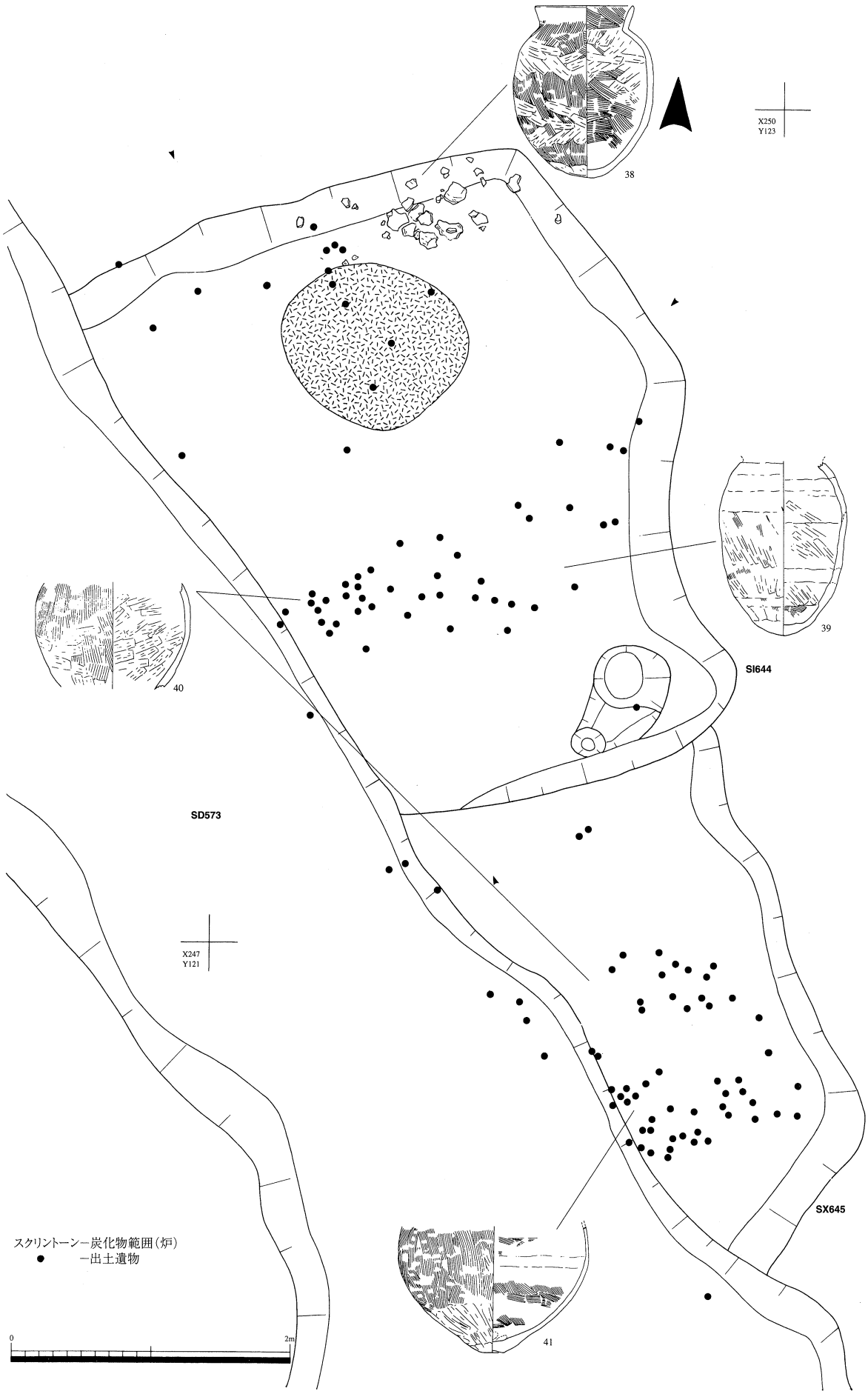
遺物は第３層の下部から第４層に含まれており，破片はあまり散らばらず，潰れたような状態で出土している。46・47・50は立位，49・53は逆向きに伏せた状態，44・51・52は横に寝た状態で出土し，52の高杯は横位の脚部と45の甕の脇の杯部とが接合している。遺物集中箇所の南東ブロックでは破線で図示した（第15図）範囲で，42・43の甕の破片と48の高杯脚部の破片がまとまって出土している。遺物集中箇所の北西ブロックの方では，炭化物の集積を囲むようにほぼ完形に接合できる遺物が出土しており，意図的に置かれたと思われる[注2]。

42の甕は外反する短い「く」字状口縁で底部は小さな平坦面を持つ。内外面ハケメで，外面下半にケズリを施す。43は内湾気味に立ち上がる有段口縁状の口縁に平底が付く甕で，内外面ともにハケメで内面に粘土接合痕が残る。42・43ともに外面肩部以下に帯状に煤が付着し，42は内面下半に焦げの付着がみられる。44は外反する長い口縁に算盤玉に近い形の体部の小型壺で，外面はハケメ・ヘラケズリで調整され，口縁部から頸部にかけてヨコナデを施す。46～53は高杯で，杯部の口径が20cm以上

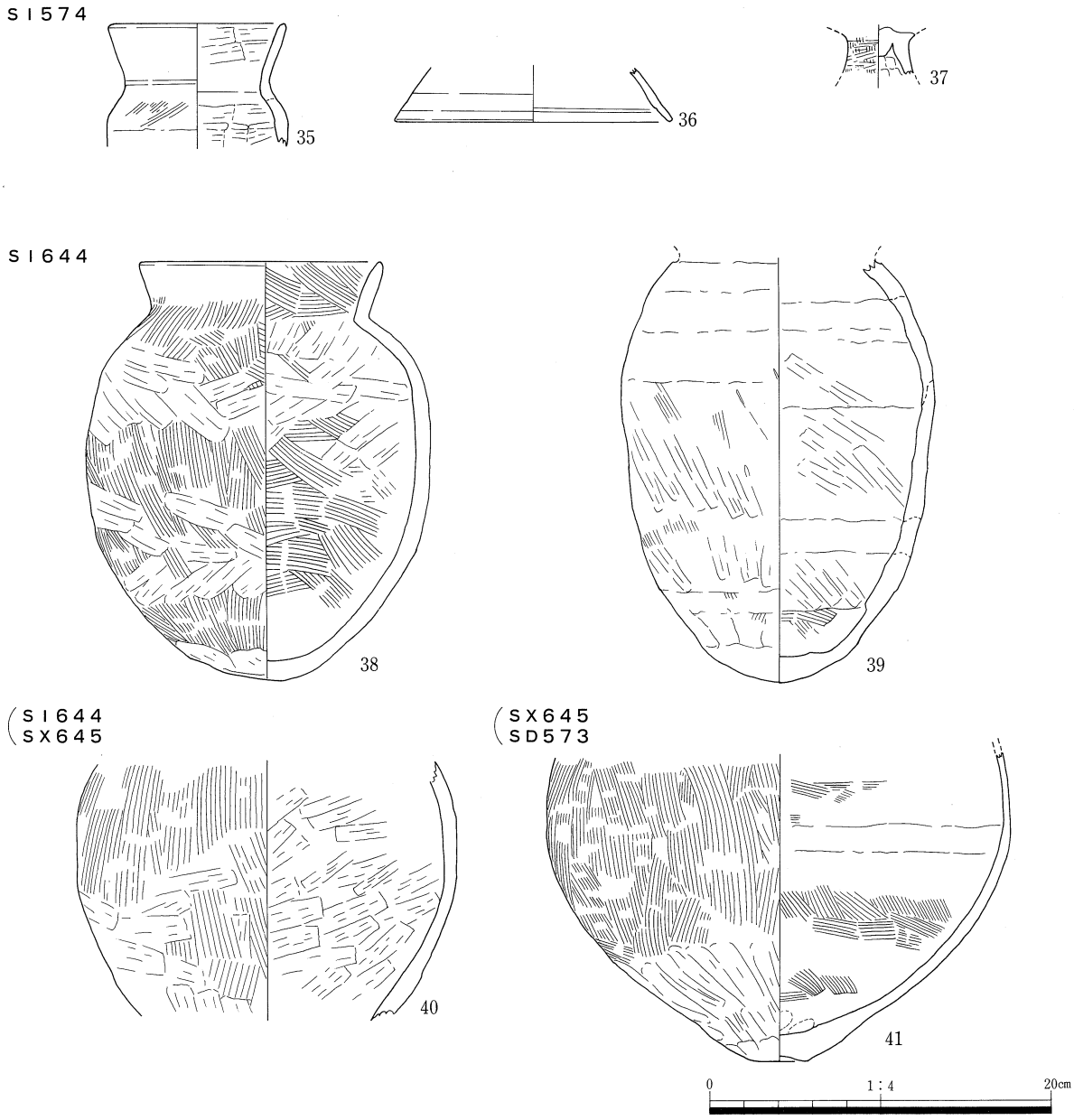


第12図　遺構実測図

1.SI644　2.SI644・SD573　3.SD573　4.SI644-1（カマド）　5.SI644-2

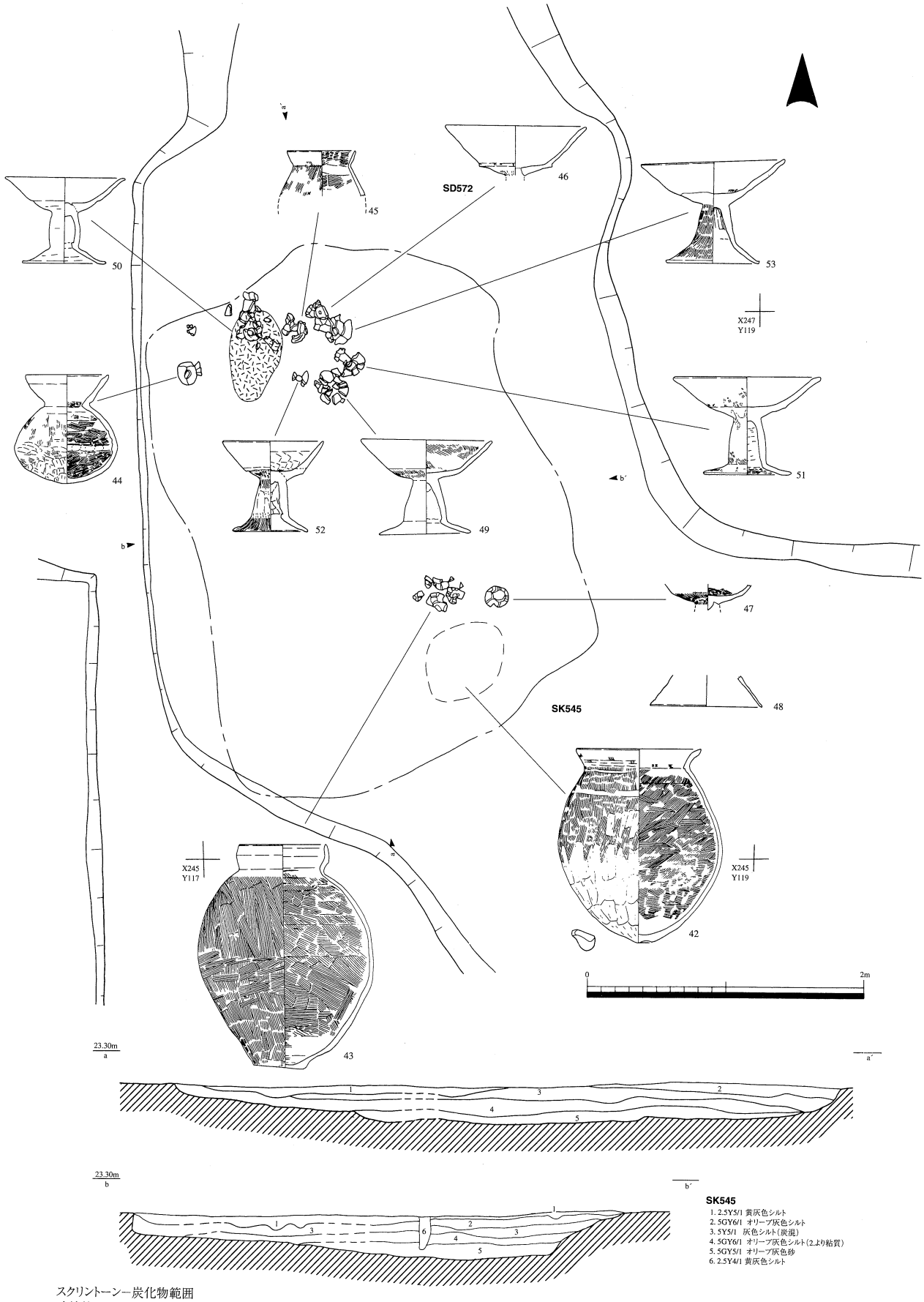


第13図　遺物出土状況図
SI644・SX645



第14図　遺物実測図　(1/4)

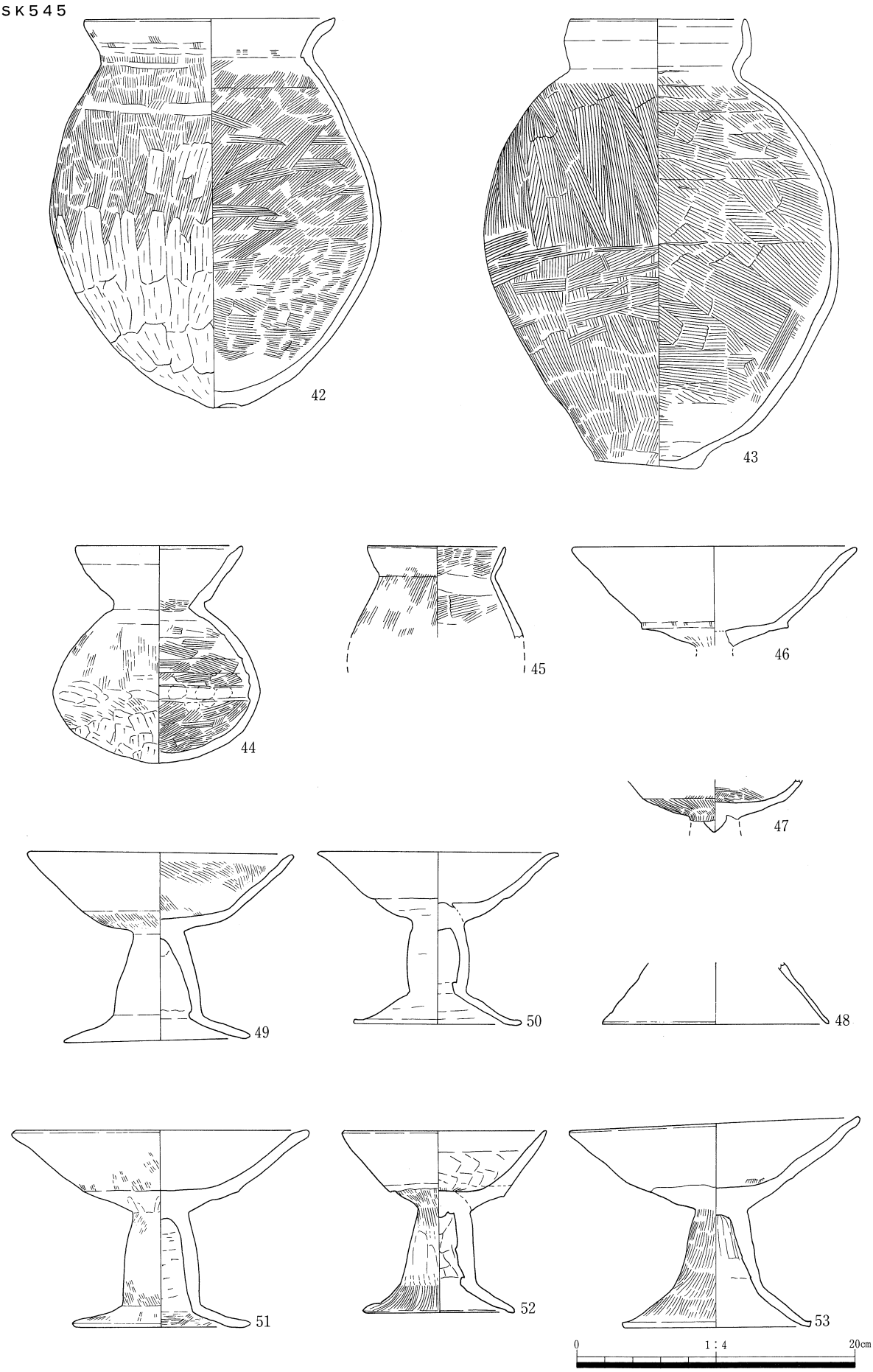
SI574（35～37）　SI644（38・39）　SI644・SX645（40）　SX645・SD573（41）



スクリントーン―炭化物範囲
破線範囲―遺物集中箇所

第15図　遺構実測図
SK545

SK545



第16図　遺物実測図　(1/4)
SK545 (42～53)

の大型品と，15cm～18cmのやや小ぶりなものの二種がある。46は口径20.5cmの大型品で，杯口縁部と底部の間に明瞭な稜を持つ。49は杯部内外面にハケメが施されている。52は逆台形状の小さな杯部で，杯部下位に明瞭な段を持つ。脚部は「ハ」字状に開くものと裾部が強く屈曲外反するものの中間的な形態である。脚部は裾部が強く屈曲外反するものと，「ハ」字状に開くものの二種があるが，ＳＩ546の高杯に比べ相対的に短くずんぐりしている。ほかに炭化した木片が出土している。時期は古墳時代中期と推定される。

511号土坑（ＳＫ511，第18図）

Ｘ223Ｙ123付近に位置する。南北5.7ｍ，東西2.7ｍ以上で東側は調査区外に伸びる。方形の掘り込みを持ち，南側が一段深くなる。覆土は２層に分かれ，上層は黒色シルト（Ⅵｂ層相当），下層は炭混じりの明緑灰色粘質シルトである。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，覆土にⅥｂ層相当の土が堆積していることから古墳時代に属すと考えられる。

593号土坑（ＳＫ593，第17図）

Ｘ232Ｙ122に位置する4.2ｍ×3.8ｍのやや歪んだ方形の土坑である。覆土は３層に分かれ，上層が黒褐色砂質シルト，中層･下層が黄灰色砂質土である。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，方形の土坑であること，遺物が出土していないこと等，ＳＫ511と似ており，同時期の遺構と考えられる。

599号土坑（ＳＫ599，第17・20図，図版14・26）

Ｘ250～251Ｙ125に位置し，北側は調査区外に伸びる。東西2.2ｍ，南北2.2ｍ以上のやや歪んだ方形の土坑である。覆土は３層に分かれ，上層は灰色シルト，中層はオリーブ灰色シルト，下層はオリーブ灰色粘土質シルトで，中層・下層は炭を含む。遺物は中層下部から下層にかけて多く含まれる。遺物は破片が多く，投げ込まれたような状態で出土することからゴミ捨て穴と考えられる。

54は「く」字状口縁の甕で，内外面ともにケズリが施され，内面には粘土接合痕が残る。外面肩部以下に帯状に煤が付着し，内面下部には焦げが環状に付着している。55は丸底の甕底部で，54と接合はしないが，同一個体と考えられる。56は口縁部が１/４ほどしか残っていないが，長い口縁が直線的に伸びる小型壺と思われる。高杯は杯部口径が20cmのものと，15cmのものの二種がある。57は口径20.7cmの大型品で，杯部下部に下方に伸びる凸帯を持つ。調整は外面ハケメ，内面ミガキである。59・60は「ハ」字状に開く高杯脚部である。高杯の杯部と脚部はそれぞれ別の個体で接合はせず，全体の形が解るものはない。時期は古墳時代中期と推定される。

645号土坑（ＳＸ645，第12～14図，図版14・24）

Ｘ247Ｙ123付近で検出されており，ＳＩ644・ＳＤ573に切られている。方形の浅い掘形を持ち，竪穴建物の可能性も考えられる。ＳＩ644に切られていることから，一段古い遺構と考えられるが，遺物はＳＩ644・ＳＤ573との間で接合関係があり，大きな時期差は認められない。時期は古墳時代中期と推定される。

649号土坑（ＳＫ649，第19・20図，図版27・28）

Ｘ221～222Ｙ116付近に位置し，ＳＤ650に切られている。南北4.4ｍ，東西3.8ｍ以上を測り，西側に張り出した部分は付くが，ほぼ方形の掘形を持つ。竪穴建物の可能性もある。中央部分が幅約１ｍの溝状に深くなっている。覆土はオリーブ灰色シルトの単層である。遺物は南東角と北東角付近の二箇所からまとまって出土しているが，どちらも細片である。

61は「く」字状口縁の甕で，口縁部に指頭圧痕が残り，口縁端部全周に煤が付着する。体部の方は

外面肩部以下に帯状に煤が付着するものと思われる。62は口縁部を欠く長胴の体部の甕で，底部に小さな平坦面を持つ。調整は外面ハケメ，内面ナデで内底面に指頭圧痕がみられる。外面肩部に帯状に煤が付着しており，内面下半にも環状に焦げが付着する。時期は古墳時代中期と推定される。

691号土坑（ＳＫ691，第18・20図）

Ｘ239Ｙ115付近に位置し，2.5ｍ×1.7ｍの不整形の土坑である。覆土は，暗灰黄色砂質シルトと黄灰色砂質シルトの２層に分かれ，レンズ状の堆積をしている。遺物は63の甕で，覆土中に破片で含まれていたものである。63は頸部で緩く屈曲し直立気味に外反して伸びる口縁部を持ち，頸部～肩部にかけての内面には粘土接合痕と指頭圧痕が残る。胴部外面は肩部から下に煤が付着している。図示した遺物のほかに，外面ハケメ，内面ナデで器壁の厚い大型の甕または壺と考えられる破片があり，これはＳＩ547の破片と接合する。また，ＳＩ547と近接した位置（ＳＩ547の南西角から40cm南）にあることから，ＳＩ547と関連した施設と考えられ，時期は古墳時代中期と推定される。

692号土坑（ＳＫ692）

Ｘ238Ｙ116に位置する。直径30cmの円形の土坑で，深さは10cmを測る。覆土は黒褐色砂質シルトである。壺と考えられる土師器小片が出土している。時期は古墳時代に属すと考えられる。

Ｃ　溝

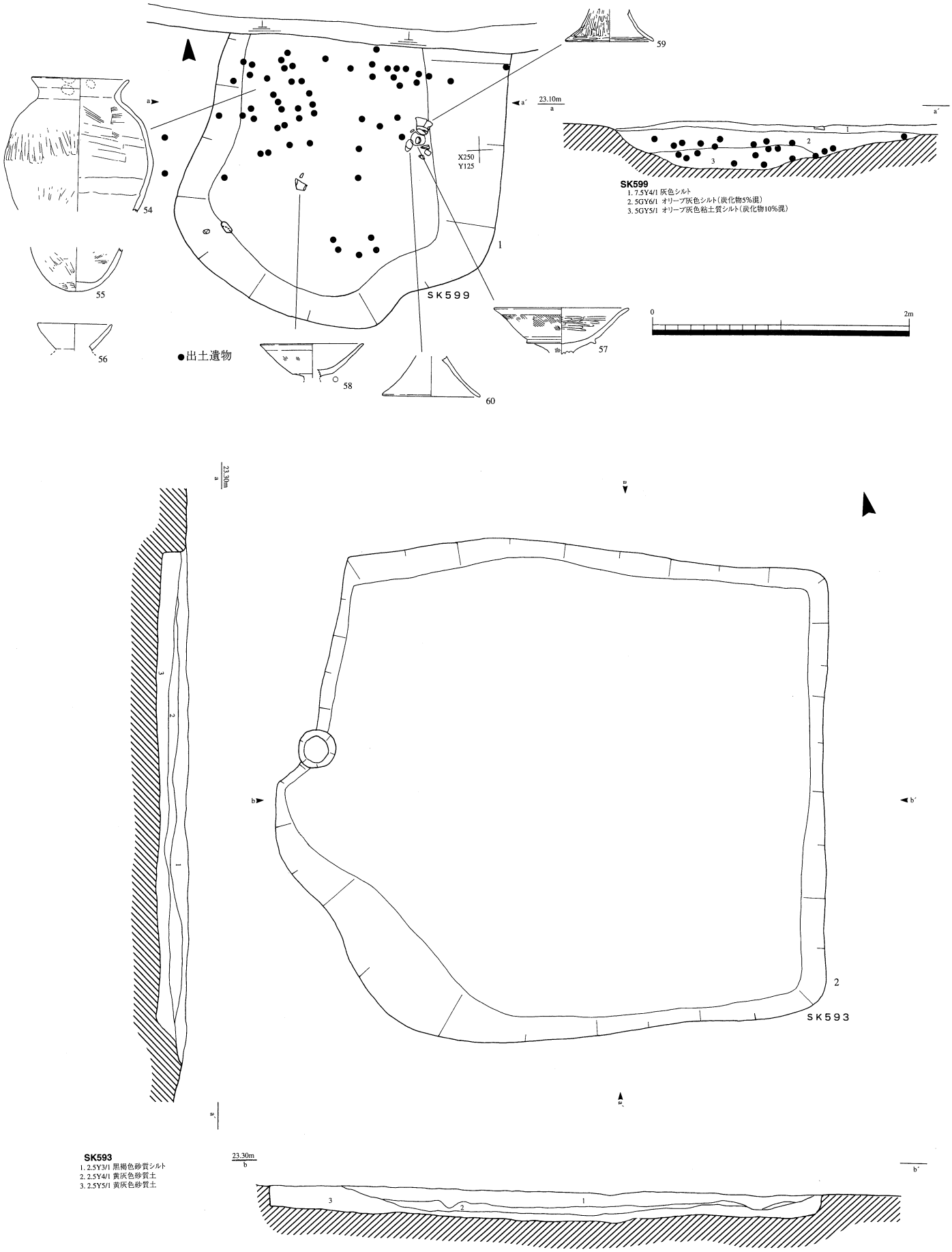
500号溝（ＳＤ500，第21・25図）

Ｘ240Ｙ113付近から調査区北西端へ向かって北流する溝である。Ｘ240Ｙ113付近で西へ曲がりＳＤ650に切られている。Ｘ250Ｙ110付近で分岐する。幅約３ｍ，深さ平均30cmを測る。覆土は褐灰色粘質シルト，灰色砂質シルトが主体である。遺物は内外面ハケメの甕胴部破片など小片が散発的に出土している。時期は古墳時代中期と推定される。

552号溝（ＳＤ552，第24～31図，図版15・30・43・44）

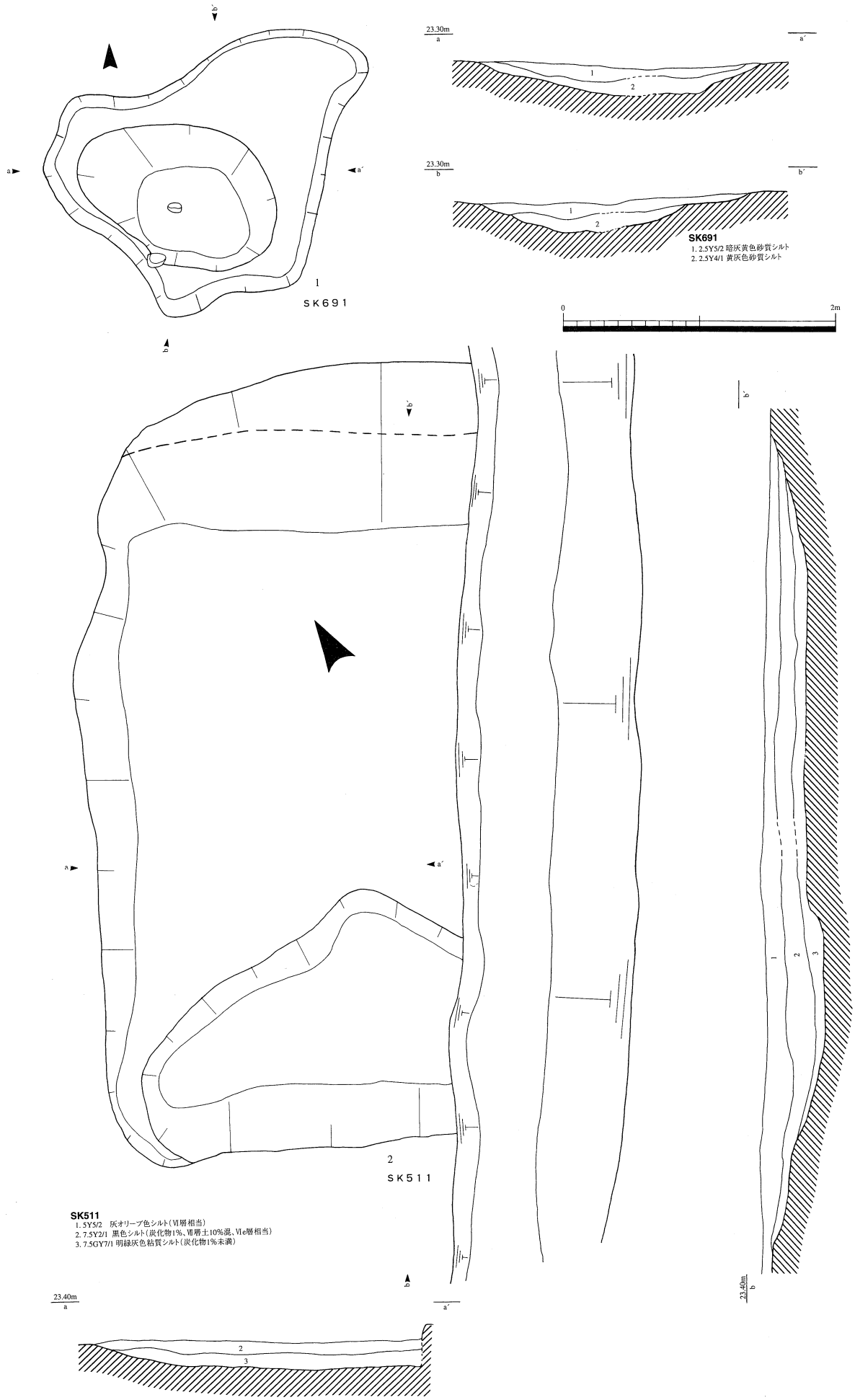
Ａ・Ｂ１地区の西側を南から北へ流れる自然河川で，幅約15ｍ，深さ50cm～80cmほどである。Ｘ211Ｙ110からＸ230Ｙ105にかけて中洲状に流れの浅くなる箇所を境に，西側をＳＤ553としているがＳＤ552の一部である。同様に，ＳＤ555・800はＳＤ552の堆積途中で有機質を含んだ黒褐色粘質土が淀み状に溜まった箇所と考えられ，ＳＤ552に含まれる。堆積は緩やかであったと推測され，ＳＤ552内ではⅥ層土はⅥｃ層；暗灰黄色粘質シルト（第４層），Ⅵｄ層；黄灰色粘質シルト（第５層），Ⅵｅ層；灰黄色粘質土（第６層）の３層に細分される。覆土の中からは古墳時代中期に属す遺物は出土しておらず，覆土の上面から古代前期の遺物が出土する。覆土中位の第４層・第５層に中間的な時期の遺物が散発的に含まれている。遺物の出土状況からＳＤ552は古墳時代中期以降の自然河川で，９世紀後半の段階にはほぼ埋まっていたものと推定される。

ＳＤ552出土の遺物は比較的少ない。88は内面黒色処理された土師器椀で，途中で屈曲し外方へ伸びる長めの口縁部を持つ。89は須恵器で杯Ｇとして図化したが，強いロクロ目がみられ杯Ｈ蓋の可能性がある。90は「く」字状口縁の甕で，器壁は厚く内外面ともにケズリが施されている。91は内面赤彩，外面黒色の椀である。92は第４層中から一個体が潰れたような状態で出土した須恵器大甕で，口縁部は短く，端部は丸みを帯びている。外面平行タタキ，内面同心円の当て具痕で，体部外面をタタキの後ハケ状工具で横方向に削っている。これらの遺物の時期は，６～７世紀初め頃と推定される。93はＳＤ555としている有機質を含んだ黒褐色粘質土中からの出土で，四つ歯の下駄である。左側側面が欠けているが長さ25.8cm，推定幅約12.6cmで，ケヤキ材である。94は長さ120cm，幅9.5cmの板材で，ほぞ孔と思われる孔が二ヶ所あいており，建築部材と考えられる。表面は平らであるが，裏面は凹凸が



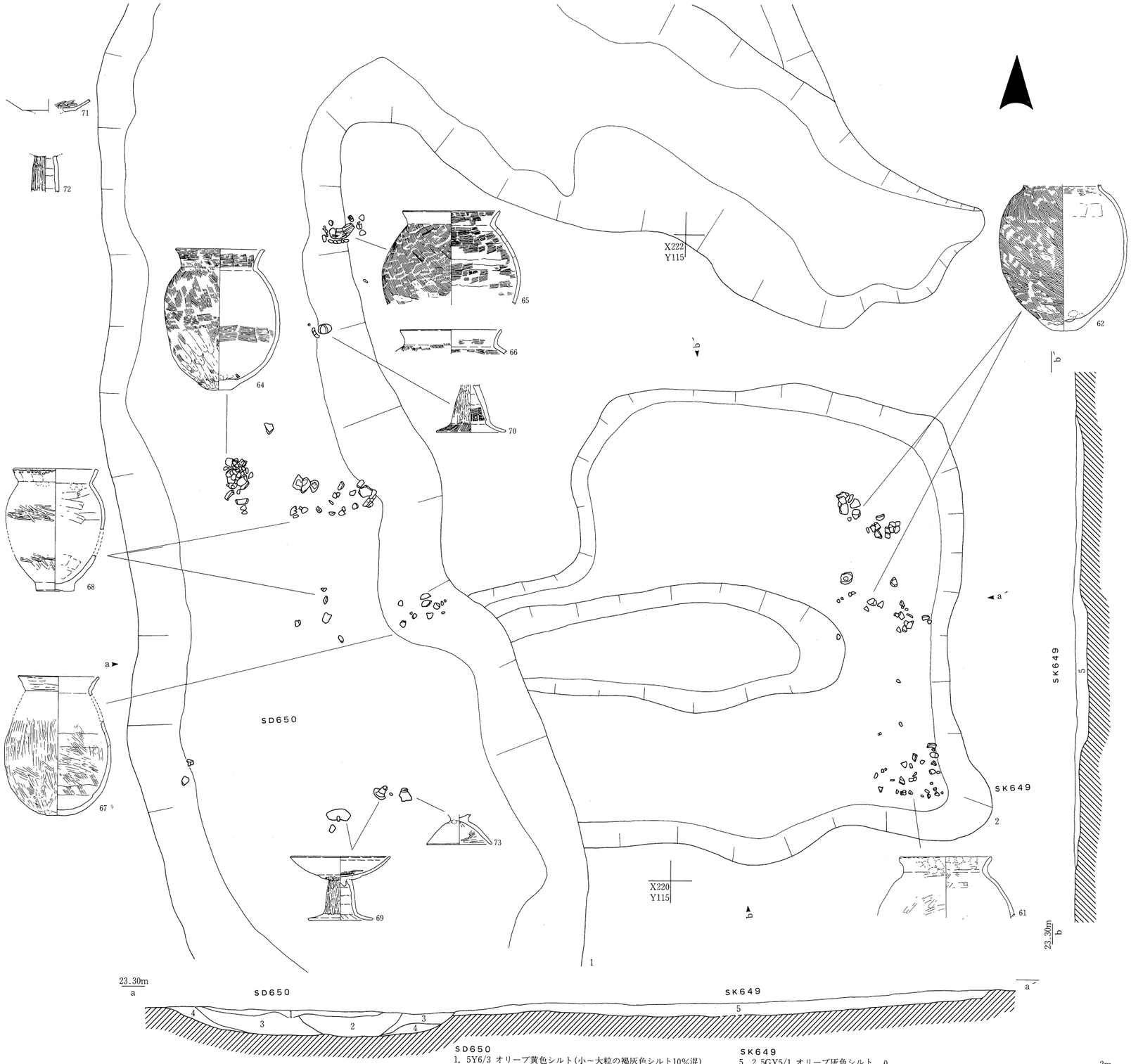
第17図　遺構実測図

1.SK599　2.SK593



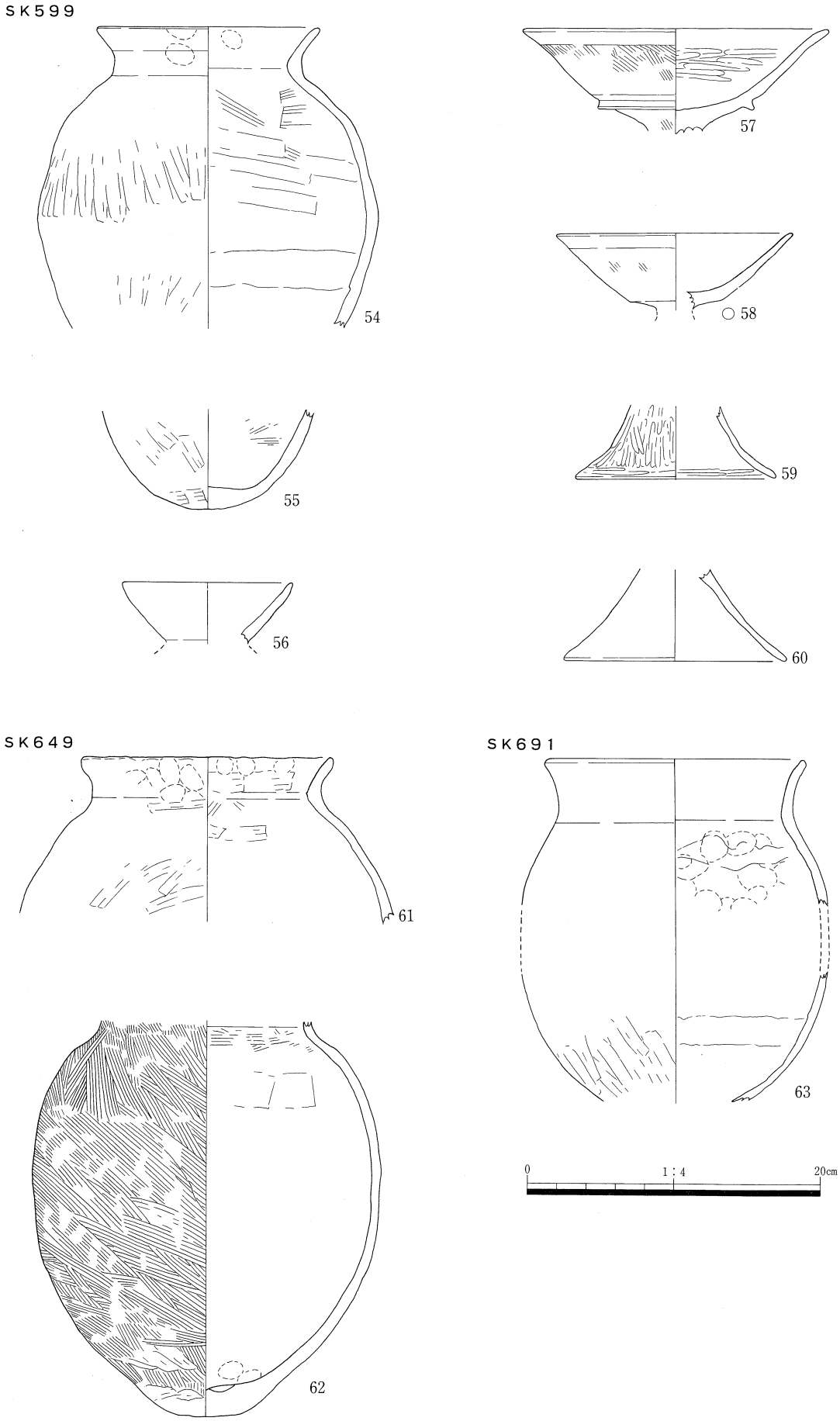
第18図　遺構実測図

1.SK691　2.SK511



第19図　遺構実測図

1.SD650　2.SK649



第20図　遺物実測図　(1/4)

SK599 (54～60)　SK649 (61・62)　SK691 (63)

ある。この凹凸については，腐食によるものであるのか，人為的に加工したものか不明である。93・94の木製品は土師器椀や須恵器大甕とほぼ同レベルからの出土である。

95～107の加工材は，「方形枠付き」田下駄[注3]いわゆる大足と思われる部材である。第５層上面にあたるＳＤ800とした黒褐色粘質土上で１ｍ×２ｍの範囲内からまとまって出土しており，東西二つのブロックに分かれる。95～103は横木にあたる部材で，95～99の棒状のものと，100～103の板状のものの二種がある。前者は先端が丸みを帯びた長ほぞを持ち，ほぞ付け根付近に圧痕がみられる。ほぞ中央部には木釘が打ち込まれており，孔から抜けない構造になっている。後者のうち101・102は両端を削りだしておりほぞと考えられ，中央には足板を載せるための抉りがみられる。また，101は片面に墨書がみられ，転用材[注4]と思われる。墨書は七文字と思われ，一文字目は「庄」かと考えられるが，以下は判読できない。104は縦枠の枠木と考えられる部材で，6.5cm～12cmの間隔をおいて長方形の７つの孔が穿たれている。先端部に一番近い孔の上方には外側面から内側面にかけて圧痕がある。105～107は足板で両端部と中央部の三ヶ所に圧痕がみられる。すべての部材について樹種鑑定を行っていないが，96・102～104・106・107はスギ材，105の足板はヒノキ科である。図示していない部材を含めると，棒状の横木が７本，板状の横木が４枚，足板が２枚，横木か足板か不明のものが１枚，枠木は104のほかに10片ほどの破片があり，これらの部材が一個体とすると全長約1.6ｍに推定復元される[注5]（第31図）。足板が２枚あり，それぞれ東西両ブロックに分かれて出土していることから，二個体の可能性も考えられるが，現時点では一個体か二個体か不明である。大足は弥生～平安時代の遺跡にみられ，古墳時代中期～後期に出土数が増加するとともに，九州から東北地方に至る各地域でみられるようになり，その様相は平安時代まで維持されるという[注6]。本例は92の須恵器大甕と同レベルからの出土であることから，７世紀初め頃のものと推定される。時間幅があるとしても，９世紀を下らないものと考える。

553号溝（ＳＤ553，第24・28図，図版43）

Ｘ211Ｙ110付近でＳＤ552から分岐し，Ｘ230Ｙ105付近で再びＳＤ552に合流する。ＳＤ552の一部である。

555号溝（ＳＤ555，第24・28図，図版44）

Ｘ210Ｙ107からＸ217Ｙ103付近にかけての淀み状の堆積で，幅1.6ｍ，深さ20cm弱を測る。堆積土は有機質を多量に含む黒褐色粘質土からなる。ＳＤ552の一部である。

572号溝（ＳＤ572，第21・23図，図版29）

Ｘ230Ｙ125付近からＸ250Ｙ117付近へ北流する溝で，Ｘ250Ｙ117の辺りでＳＤ573と合流する。深さ20cmほどの浅い流れで，自然流路と考えられる。ＳＫ545を切っている。覆土はオリーブ灰色シルトからなり，遺物は覆土上面にみられ，特にＸ245Ｙ120付近の竪穴建物周辺に集中する。

78・79は「く」字状口縁の甕で，78は内外面ともに粘土接合痕が残る。80・81は甕底部で，80は丸底，81は小さな平坦面を持ち，内外面ともにハケメで仕上げられている。80はＳＤ573出土の破片と接合する。82は「く」字状口縁に長胴の体部の小ぶりの甕で，口縁部に指頭圧痕が残り，体部は内外面ともケズリである。口縁端部ほぼ全周と，外面肩部に帯状に煤が付着する。84はやや潰れた球形の体部の小型壺で，口縁部は欠けているが，直線的に外方に伸びる口縁が付くと思われる。調整は体部外面は格子状にハケメ，頸部は横方向のナデ，内面はナデである。85～87は高杯杯部で，85は明瞭な段を持つ。87は鉢状の杯部で，脚が付くのか不明である。ＳＫ545を切っているが，大きな時期差は認められず，時期は古墳時代中期と推定される。

573号溝（ＳＤ573，第12～14図，図版24）

Ｘ236Ｙ130付近からＸ250Ｙ117付近へ北流する自然流路で，ＳＤ572と合流する。ＳＩ644・ＳＸ645を切っている。幅約3.8ｍ，深さ30cm弱を測り，覆土は灰オリーブ色粘質シルトである。遺物は覆土上位に含まれており，ＳＩ644・ＳＸ645周辺に集中する。破片が多く，ＳＩ644・ＳＸ645・ＳＤ572出土の破片と接合する。図示はしていないが，「く」字状口縁の甕口縁部が５個体，高杯脚部１個体，高杯杯部１個体などがある。時期は古墳時代中期と推定される。

650号溝（ＳＤ650，第19・21・22図，図版27・28）

Ｘ206Ｙ115付近からＸ242Ｙ111付近へ北流する溝である。自然河川ＳＤ552の東を流れる溝で，幅約５ｍ，深さ30cm～40cmで肩が比較的しっかりしており，人為的に掘られた溝の可能性がある。ＳＫ649・ＳＤ500を切り，ＳＤ502・ＳＢ２・ＳＢ３に切られている。覆土は３層に分かれ，上層はオリーブ黄色シルト，中層・下層はオリーブ灰色粘土質シルトで中層は僅かに炭が混じる。遺物はＳＫ649周辺に多く，溝肩から底にわたって出土するが，ＳＫ649の遺物との間に接合関係はみられない。　64～68は「く」字状口縁の甕で，64の外面は不規則なハケメで胴部下位はケズリで仕上げられ，頸部に指頭圧痕が残る。内面は口縁部と胴部中位にハケメが施され，下位はヘラナデである。外面は口縁から胴部中位まで煤が付着し，内面胴部中位以下に環状に焦げが付着している。65は内外面ともにハケメで，内面には粘土接合痕が残る。67は比較的硬質の土器で，底部を直径４cmほどの円形に削りだしている。内底面にはタール状の焦げが付着している。68は口縁端部と頸部に指頭圧痕がみられ，口縁端部は平縁状に面取りされている。平底の底部が付き，底部内面には焦げが付着する。69の高杯は浅い皿状の杯部に，ずんぐりとした脚裾部で強く屈曲外反する脚部を持つ。杯部下位にはヨコナデされた不明瞭な段を持つ。71は高杯杯部で，杯部下位に稜を持ち，内面は丁寧にミガキが施されており，赤彩されていた可能性のある精製品である。73は直径12cmで，内湾して伸びる体部を持つ蓋形土器である。つまみの付け根に指頭圧痕がみられる。内面にはタール状の物質が付着している。時期は古墳時代中期と推定される。

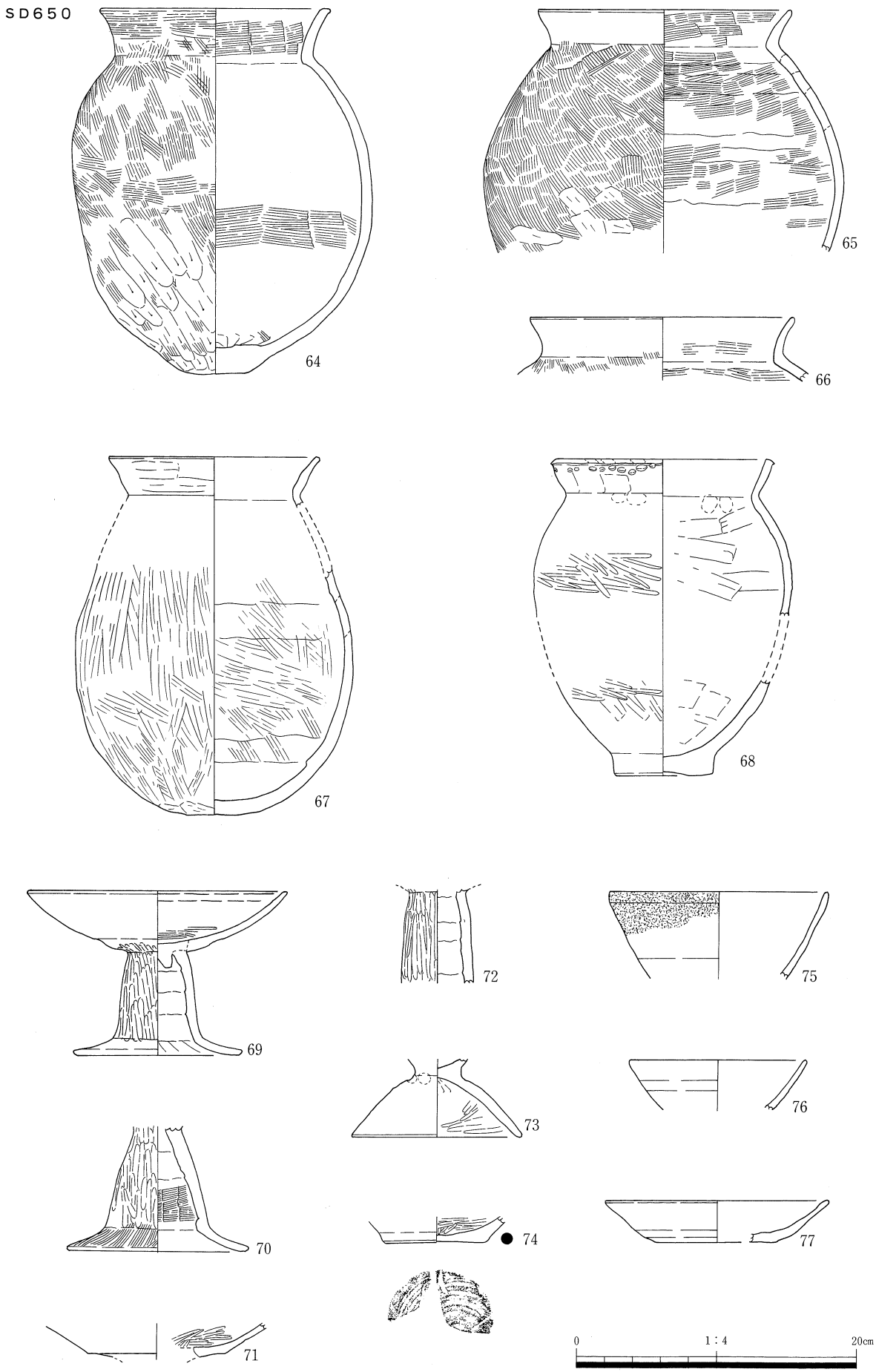
74～77の遺物はＸ218Ｙ115のＳＢ２付近からの出土で，後世の流入品と考えられ，本来はＳＢ２に伴う遺物と考えられる。74は糸切り調整が施されたもので，内面は黒色処理されている。75は直線的に外方に伸びる大型の椀で，９世紀後半～10世紀初頭頃の遺物と考えられる。内外面には煤が付着しており，外面口縁部は密にタール状の物質が付着している（スクリーントーンで図示）。図示はしていないが，このほかに須恵器杯や，土師器鍋などＸ215以南から古代前期の遺物が出土しており，いずれも後世の流入と考えられる。

800号溝（ＳＤ800，第24～26・29～31図，図版43・44）

Ｘ239Ｙ102から調査区外へ伸びる淀み状の堆積で，ＳＤ552の一部である。幅2.2ｍ，深さ約50cmを測る。覆土は黒褐色粘質土・褐灰色砂質土・灰色砂質土・暗灰黄色粘質シルトに分かれ，黒褐色粘質土の上面から大足が出土している。

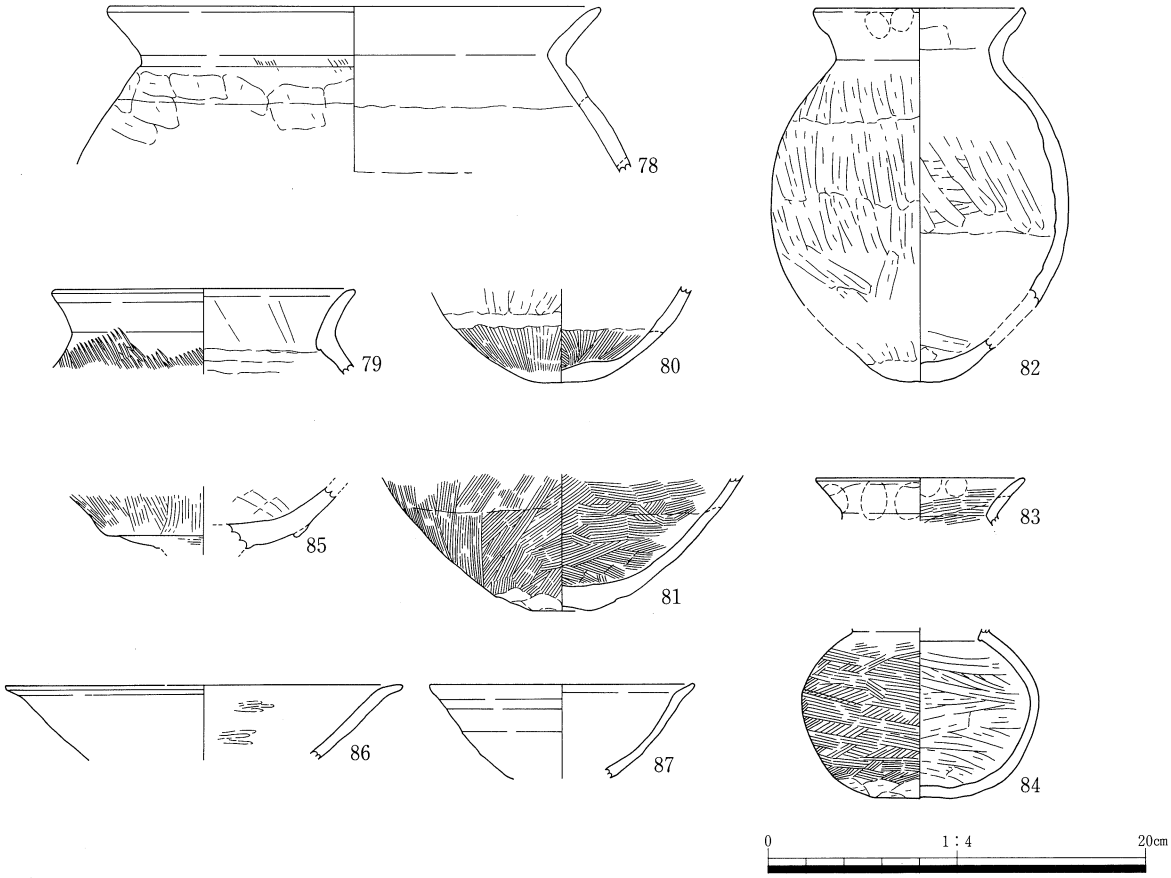
第21図　遺構実測図

1～3.SD500　4・5.SD572　6～8.SD650

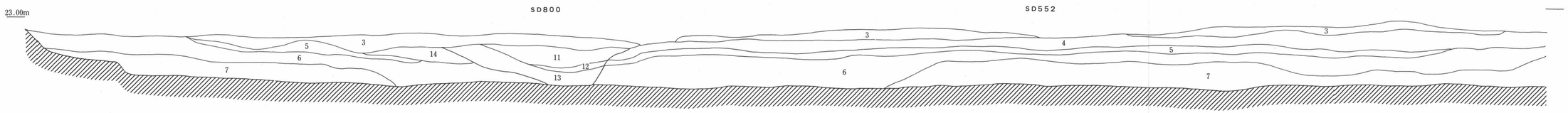


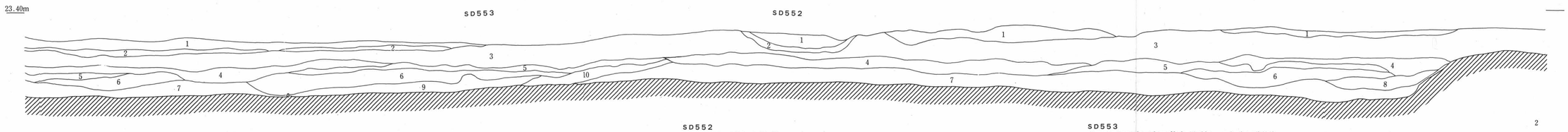
第22図　遺物実測図　(1/4)
SD650（64～77）

SD572



第23図　遺物実測図　(1/4)
SD572 (78～87)





SD552

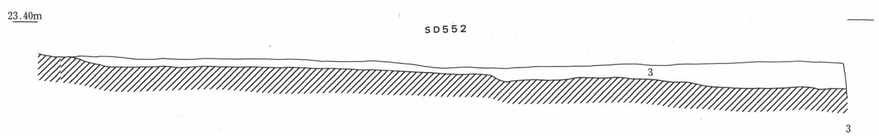
1. 5Y7/1 灰白色粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト(植物遺体混、Vc層)
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(炭化物・砂利混、VIa層)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト(青灰色土が帯状に混、炭化物・植物遺体混、VIc層)
5. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト(白色土が帯状に堆積、VId層)
6. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土(白色土・黄褐色土粒状に混、炭化物ブロック状に混、VIe層)
7. 5GY6/1 オリーブ灰色砂質土(VII層)
8. 2.5Y2/1 黒色粘質シルト(灰オリーブ色土がブロック状に混)

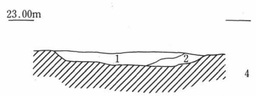
SD553

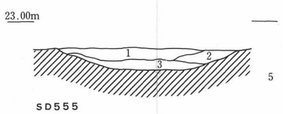
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト(小礫混)
10. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト

SD800

11. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土(炭化物混、白色土粒状に混)
12. 10YR5/1 褐灰色砂質土
13. 5Y4/1 灰色砂質土(黄褐色の砂が部分的に帯状に堆積、炭化物混)
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト(青灰色土が帯状に混)







SD555

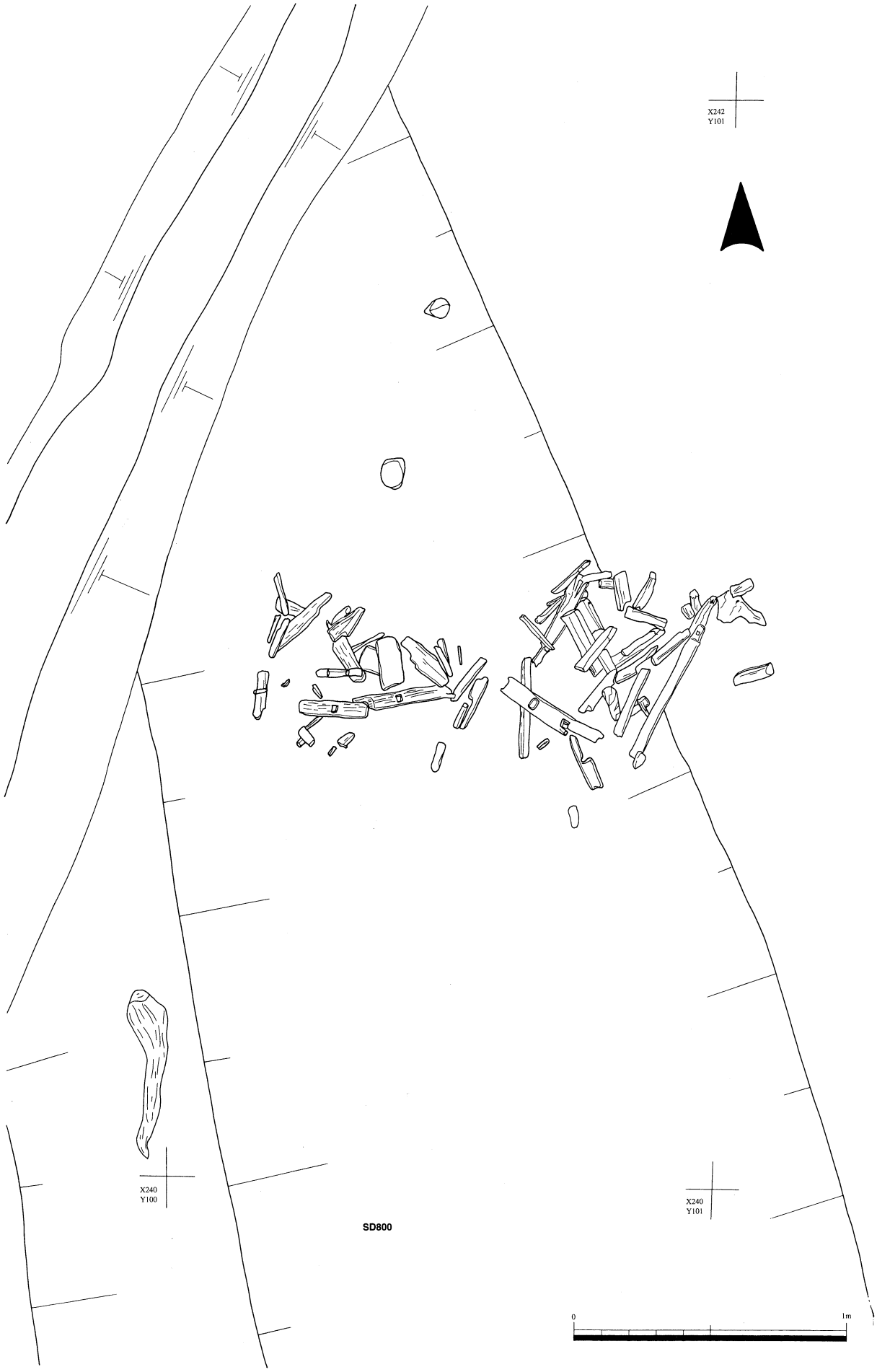
1. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト(植物遺体混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト(1より植物遺体多く混)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土(植物遺体、粗砂混)

第24図　遺構実測図

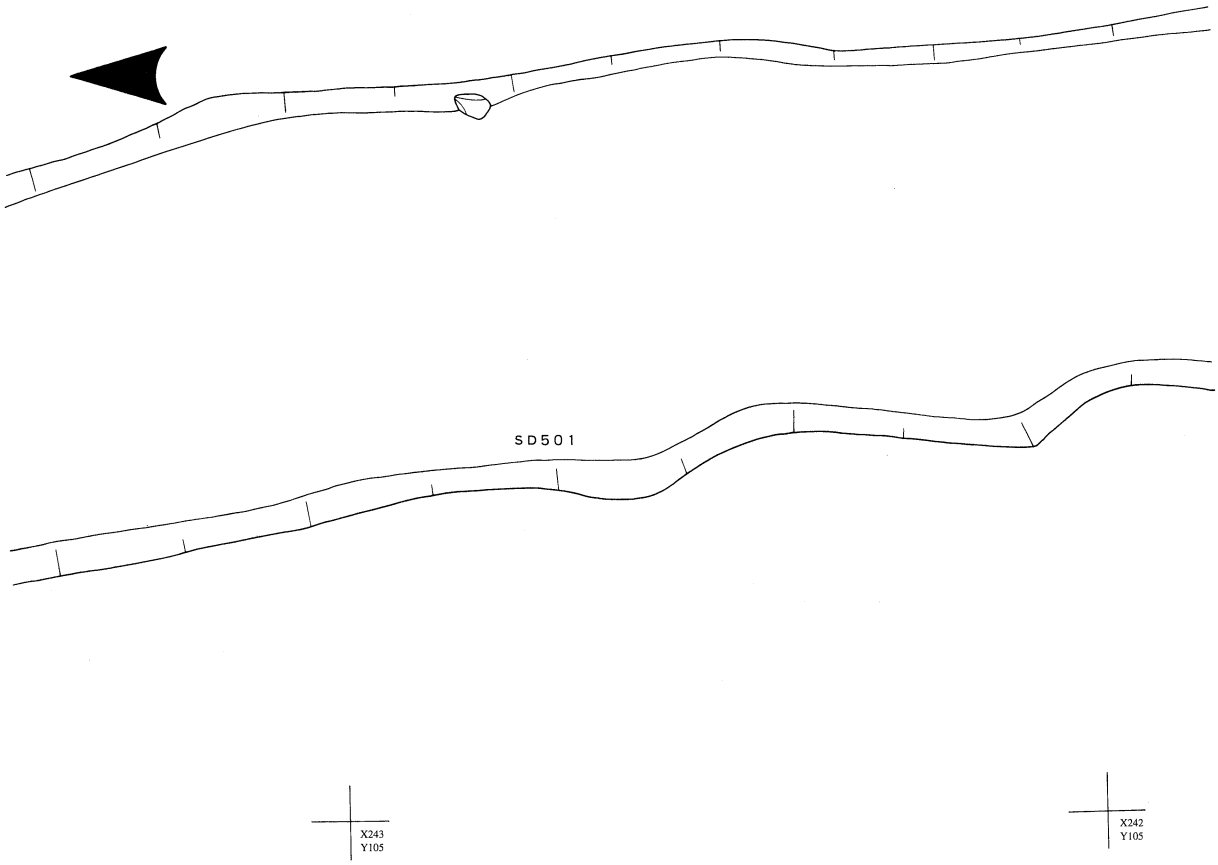
1.SD552・SD800　2.SD552・SD553　3.SD552　4・5.SD555

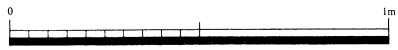
X250
Y105
X250
Y110
SD500
X245
Y105
X245
Y110
SD505
SD500
SD501
SD502
X240
Y105
X240
Y110
X240
Y100
SD800
SD650
X235
Y110
SD
502
SD552
X230
Y105
X230
Y110
0
10m

第25図　遺構全体図

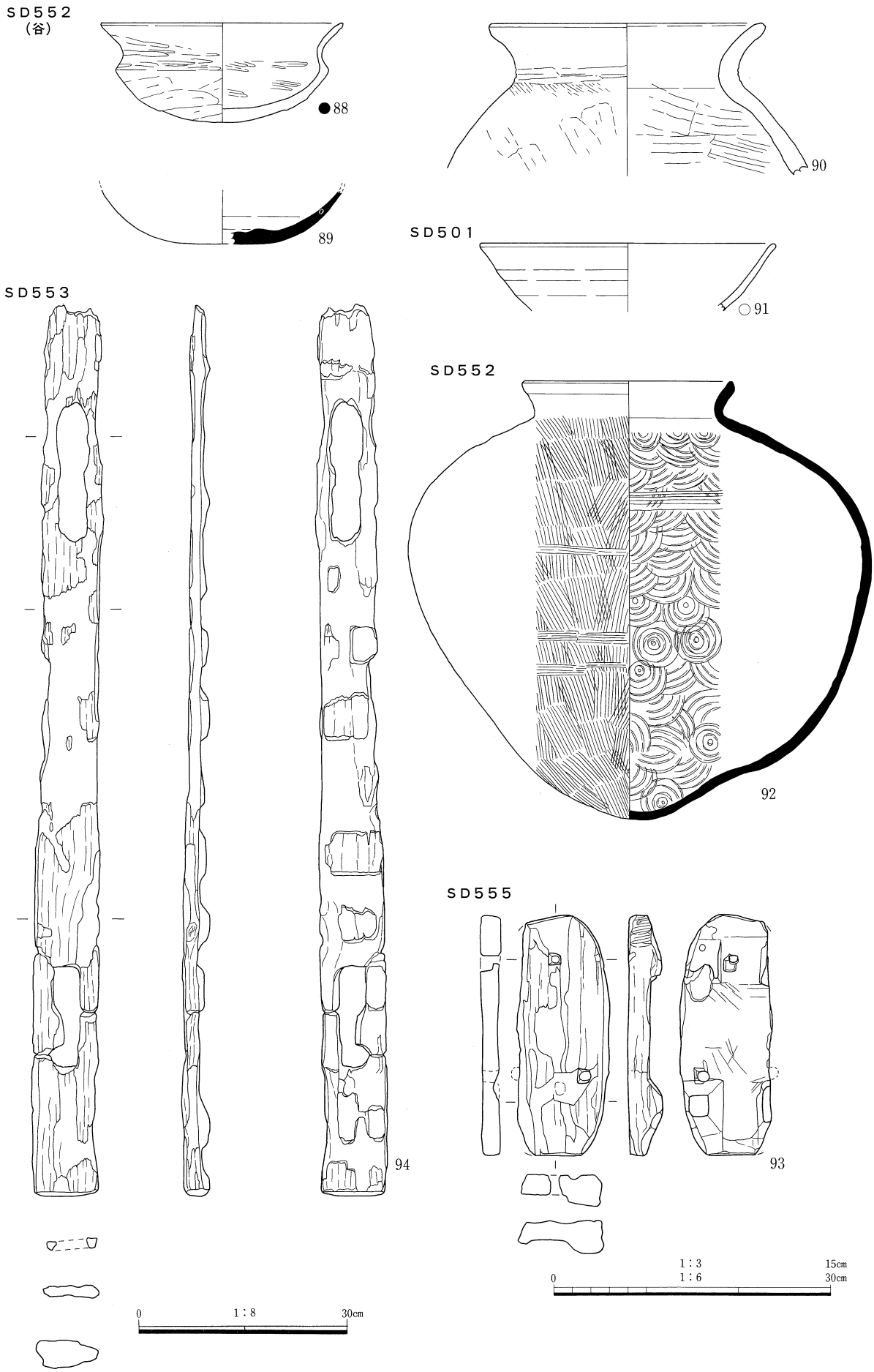


第26図　遺物出土状況図
SD552（SD800）

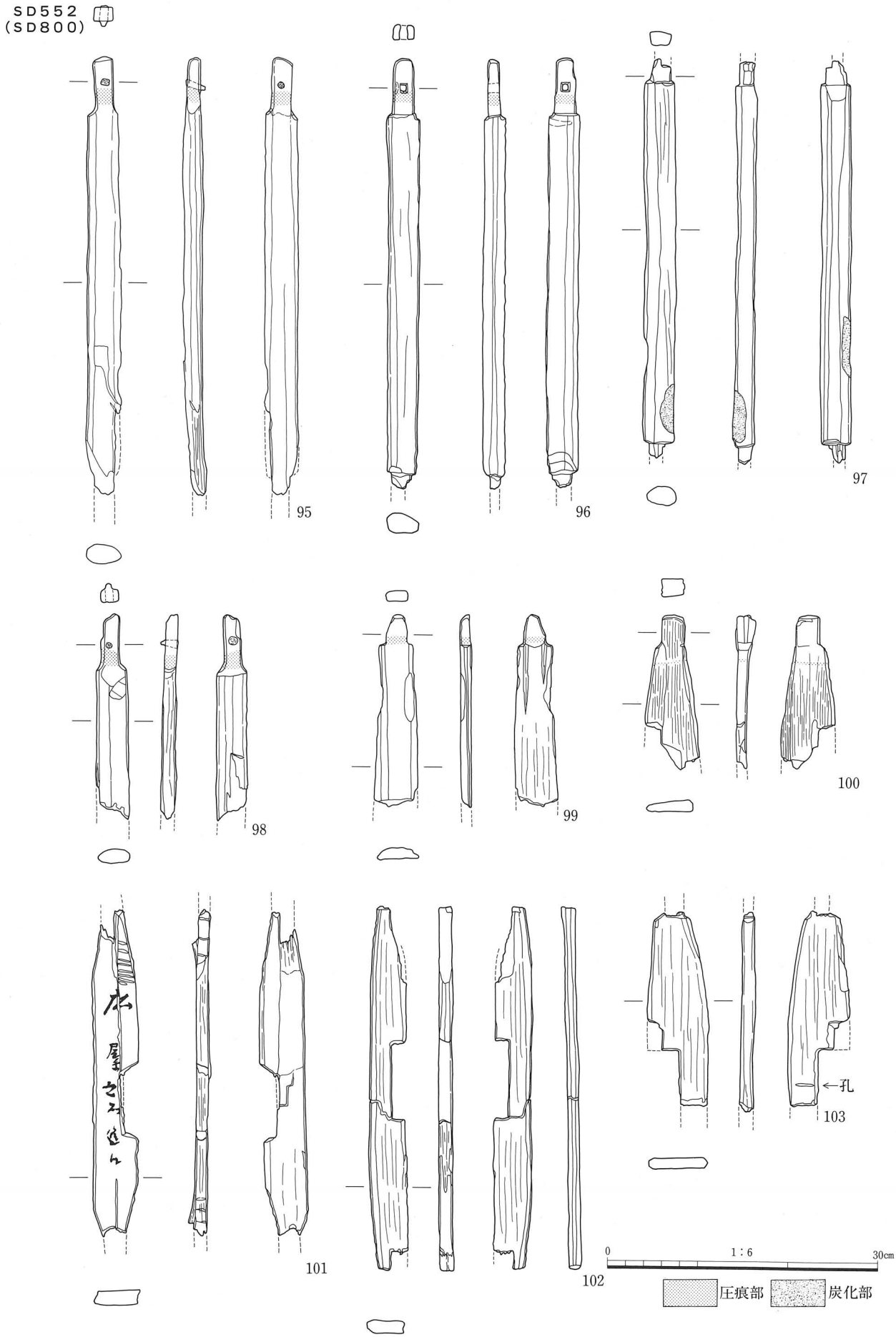




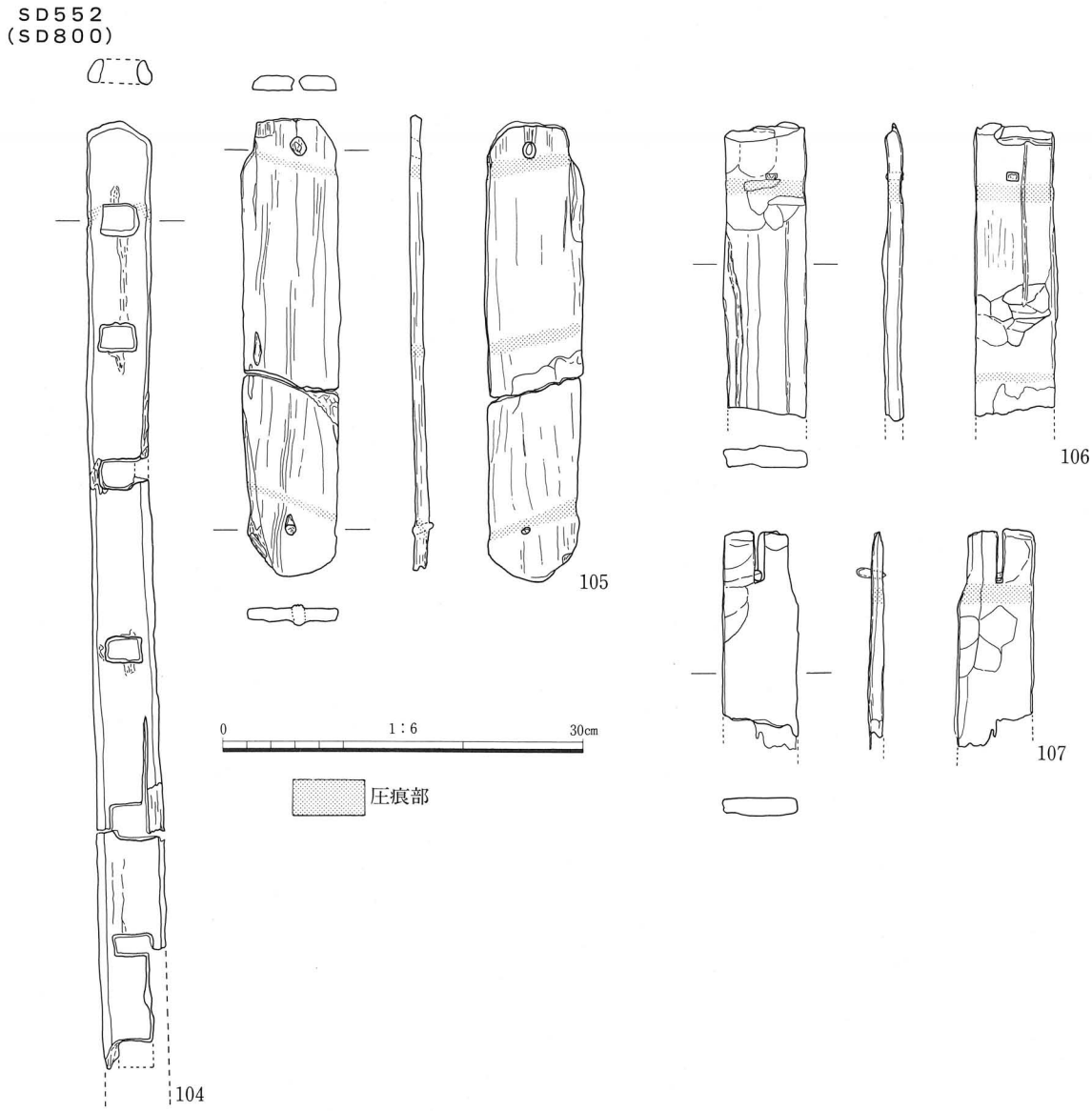
第27図　遺物出土状況図
SD552



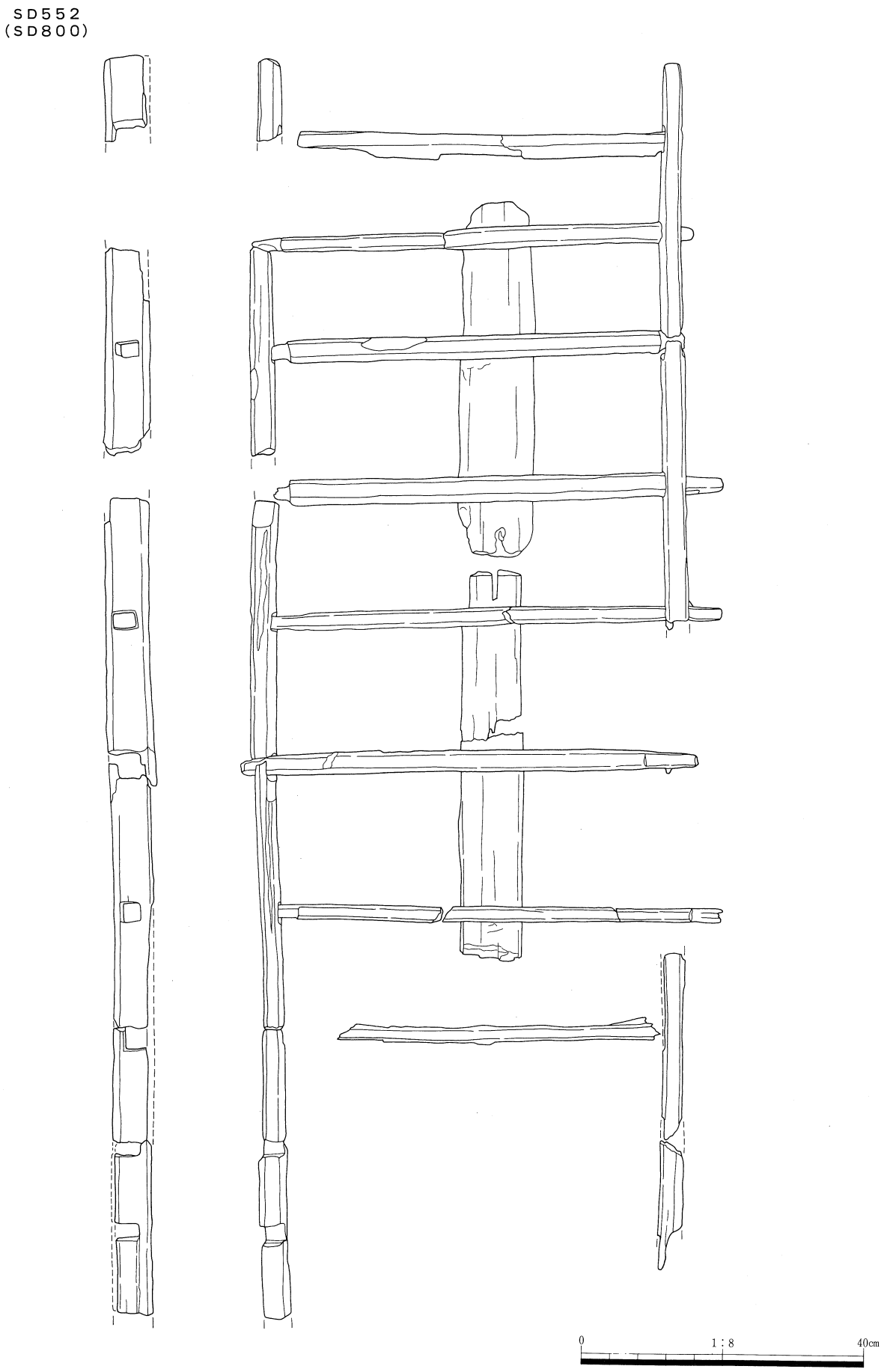
第28図　遺物実測図　(88～91　1/3, 92・93　1/6, 94　1/8)
SD552 (88～90・92)　SD501 (91)　SD555 (93)　SD553 (94)



第29図　遺物実測図　(1/6)
SD552（95～103）



第30図　遺物実測図　(1/6)
SD552（104～107）



第31図　推定復元図　(1/8)
SD552（SD800）

D　包含層出土の遺物

甕形土器（第32図，図版30・31）

VIb層及びVII層出土の甕形土器である。108～115の口縁はいずれも「く」字状口縁であるが，形態は多様である。108は直立気味に伸びて端部が外反する短い口縁で，僅かな段を持つ。体部は下膨れ気味の長胴で，外面と内面下位に細かいハケメを施しており，外面肩部以下に帯状に煤が付着する。内面に粘土接合痕が顕著に残る。109は器壁が厚く，調整も雑で口縁端部は不規則なケズリが施されている。底部破片は口縁部破片と同一地点からの出土であるが，体部破片が少なく，全体のプロポーションは推定である。111はやや長めの口縁で，端部を薄く引き伸ばしている。調整は外面ハケメで頸部を横方向にナデており，内面はナデで粘土接合痕を残す。112は頸部内面に鋭い稜を持ち，端部に指頭圧痕の残る口縁で，端部をつまみ上げ面取りしている。内外面ケズリ調整の体部が付く。113は端部を平縁状に面取りしており，頸部内面に粘土接合痕を残す。114は直立気味に立ち上がり，端部が外反する口縁で，口縁全周に煤が付着している。115は直線的に伸びる口縁で，口縁外面に不規則なケズリを施し，端部を平縁状に面取りしている。口縁部全周と外面肩部以下に帯状に煤が付着しており，胴部中位は密である。116は内外面ともにケズリで仕上げられた甕で，底部は直径4㎝ほどを削った平坦面を持つ。体部外面中位以下に帯状に煤が付着する。

壺形土器（第33図，図版31・32）

包含層出土の壺形土器である。119･120は外反する「く」字状口縁に球胴の体部の壺である。119は口縁部全周及び外面肩部以下に帯状に煤が付着し，内面下位に焦げが付く。内面の焦げの付着ラインは，外面の煤付着ラインの下端と一致している。121～123は口縁部下端を突出させる有段口縁の壺で，「山陰系」の影響を受けたものと考えられる。121は器壁が厚く，外面ケズリ内面ナデで，内面肩部に粘土接合痕を残す。126は直立する口縁の端部を薄くつまんでおり，口縁中ほどに段を持つ。127～130は底部片のみで，全体の器形の解るものはない。128は平底で，外面ナデ，内面ミガキで丁寧に仕上げられている。129は底部に糸切り痕がみられ，9～10世紀頃の小甕底部と思われ，後世の流入品である。131～137は丸底・球胴の体部に長い口縁部が直線的に伸びる中・小型壺である。131はやや内湾気味に伸びる口縁で，頸部内面に段を持つ。調整は外面は不鮮明であるが，内面にはハケメが施され，内底面に指頭圧痕がみられる。外面体部中位に煤が付着し，内面下位に環状に焦げが付着する。132はやや短めの口縁に，潰れた球形の体部を持ち，内外面ともにケズリで仕上げられている。133は内湾気味に立ち上がる口縁に潰れた球形の体部で，外面下半は横方向のハケメが施されている。内面は胴部中位以下に指頭圧痕がみられる。134は薄く伸びる口縁で，頸部内面に鋭い稜を持つ。調整は外面頸部から胴部最大径まではミガキで，下半は粗いケズリである。136・137は直線的に伸びる長い口縁で，端部は薄く仕上げられており，頸部内面に鋭い稜を持つ。136と137の胎土は類似しており，同じ産地のものと思われる。

高杯形土器（第34図，図版32・33）

包含層出土の高杯形土器である。全体の器形が解るものは138のみである。138は途中で屈曲して広がる椀型の杯部に，裾部が屈曲外反する脚部を持つ高杯で，杯部下半に小さな段を持つ。脚部内面には粘土接合痕が顕著に残る。139～144は杯部のみである。139は口径19㎝と推定される杯部で，形態は138と類似する。141は逆台形状の小さな杯部で，杯部下位に下方へ伸びる凸帯状の段を持つ。ＳＫ545出土の高杯52と同様の脚部が付くものと考えられる。142は口縁端部が強く外反する。144は杯部下位に断面三角形状の凸帯が付く。145～152は脚部のみで，裾部で強く屈曲外反するものと，「ハ」字状

に開いて裾部が屈曲するものの二種がみられる。調整は外面ミガキで，裾部にハケメが残るものもある。内面はナデで，粘土接合痕が顕著にみられるものが多い。

ま　と　め

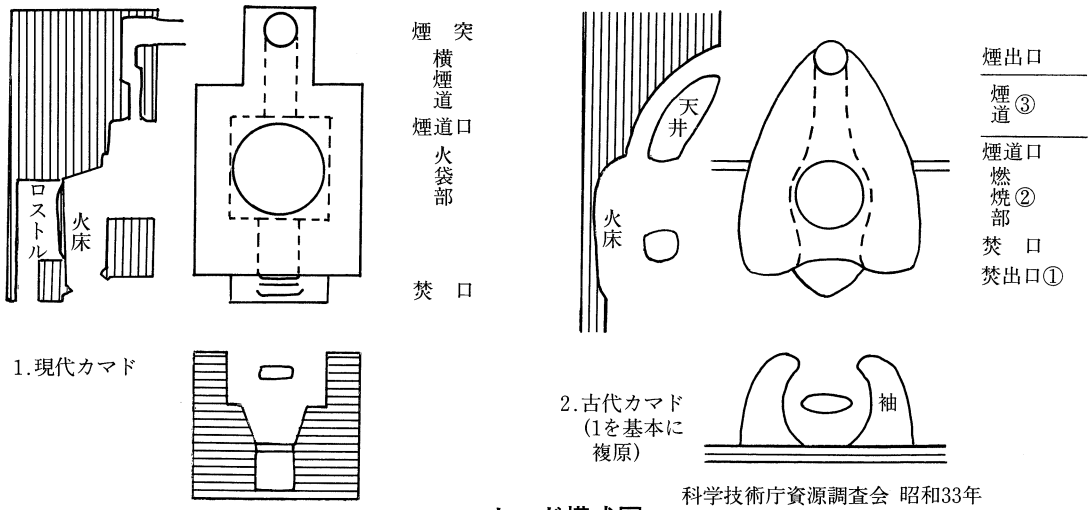
包含層出土の遺物は以上であるが，その出土位置は５つのブロックに分かれる。北から第１ブロックはX250Y117のＳＤ572・573の合流部付近，第２ブロックはX250～245Y125付近でＳＩ574・644・ＳX645・ＳK599に囲まれた区域である。第３ブロックはX245Y117～120のＳＤ572の西側肩で，ＳK545の南，ＳＩ546の東に近接した区域，第４ブロックはX237Y116～117のＳＩ547の南側一帯である。第５ブロックはX218～214Y117のＳＤ650東側肩付近である。これらのブロックは，いずれも隣接した位置に竪穴建物あるいは土坑がある。遺構出土の遺物との間で接合関係はみられないが，一括性の高い土器群として捉えることができる。

包含層出土の遺物も含めて一括土器群として扱うことを前提とすると，当土器群の器種構成は次のようになる。須恵器は出土しておらず，土師器のみによって構成される土器群である。甕と壺については識別が困難なものが多く，甕とした中に本来は壺に含まれるべきものがあると思われるが，ここでは甕として扱っている。器種構成は，破片数では甕が多数を占めているが，個体識別では甕36%，壺11%，小型壺９%，高杯43%，蓋約１%となる。高杯は遺構出土品に限ってみると47%となり，高杯の占有率の高さは当土器群の特徴といえる。２つ目の特徴としては，壺における小型壺の比率が高率であることを挙げることができる。また，当土器群には椀・手づくね土器がみられないことも特徴の１つである。

以上の様相から当土器群は，当該時期を扱った田嶋明人氏の編年[注7]によると，古墳時代３様式Ⅰ期に該当するものといえる。該当する項目を列挙すると，椀の定型前段階，小型壺の主体的存在，手づくね土器及び須恵器の未共伴等である。また，「布留系」甕がみられず，杯部に鋭い稜ないしは凸帯を持つ高杯，「ハ」字状に開く脚部を持つ高杯が一定量みられる点については，当該期の能登・越中の特徴として挙げられた点と一致するものである。実年代では，５世紀中葉～後半に位置づけられるものと考えている。

（三島道子）

注１　カマドの各部分の名称については，現代カマドを基本に復原された以下の図に従う。
科学技術庁資源調査会　1958『かまど改良に関する調査報告』



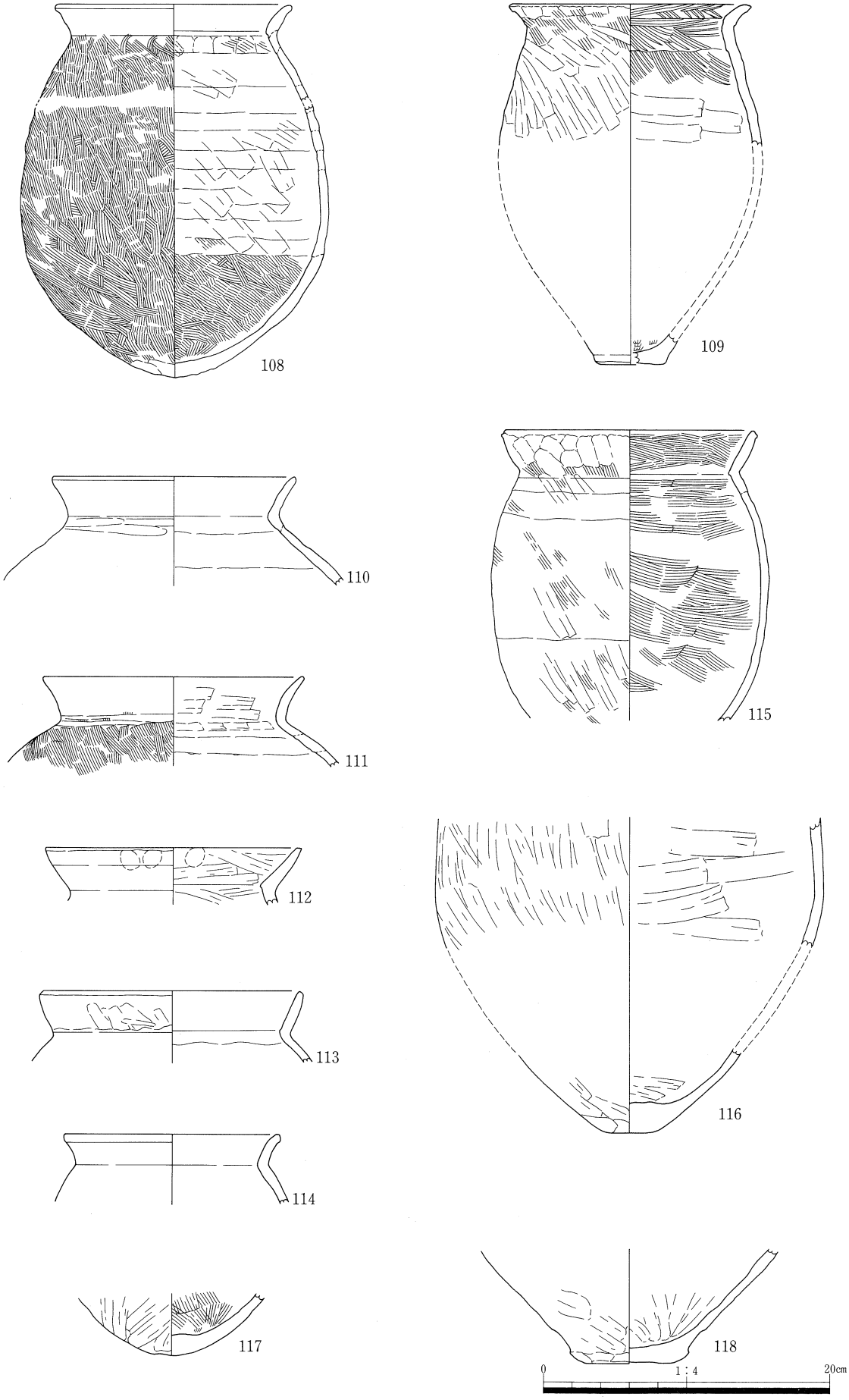
カマド模式図　科学技術庁資源調査会 昭和33年「かまど改良に関する調査研究」より

注2　明らかに意図的に置かれたと思われる出土状況を示すもので，「放置」とは意識の差が想定できる場合。何らかの祭祀行為の痕跡と捉えられている。高杯や小型壺が完形・準完形で弧状に出土したものであることから，何らかの意図があると思われる。
桐生直彦　1987「遺物出土状態の分析に関する覚書－カマド出現前の住居址を中心として」『貝塚』38号
注3　秋山浩三　1993「「大足」の再検討」『考古学研究』第40巻第3号
注4　文字の位置は抉り部分を除けてやや左寄りに書かれており，大足として作られた後に墨書されたものと推測されている。
横山和美　1996「五社遺跡」『木簡研究』第18号
注5　佐賀和美　1994「五社遺跡出土の大足」『埋蔵文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団
注6　秋山浩三　1993「「大足」の再検討」『考古学研究』第40巻第3号
黒崎　直　1996「古代の農具」『日本の美術』357　至文堂
注7　南加賀地域を主体とした編年で，小松市漆町遺跡で報告した漆町編年（田嶋1986）を基本とし，翌年永町ガマノマガリ遺跡の報告で修正したもの。
田嶋明人　1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　1987「遺構・遺物の検討」『永町ガマノマガリ遺跡』石川県埋蔵文化財センター

引用・参考文献

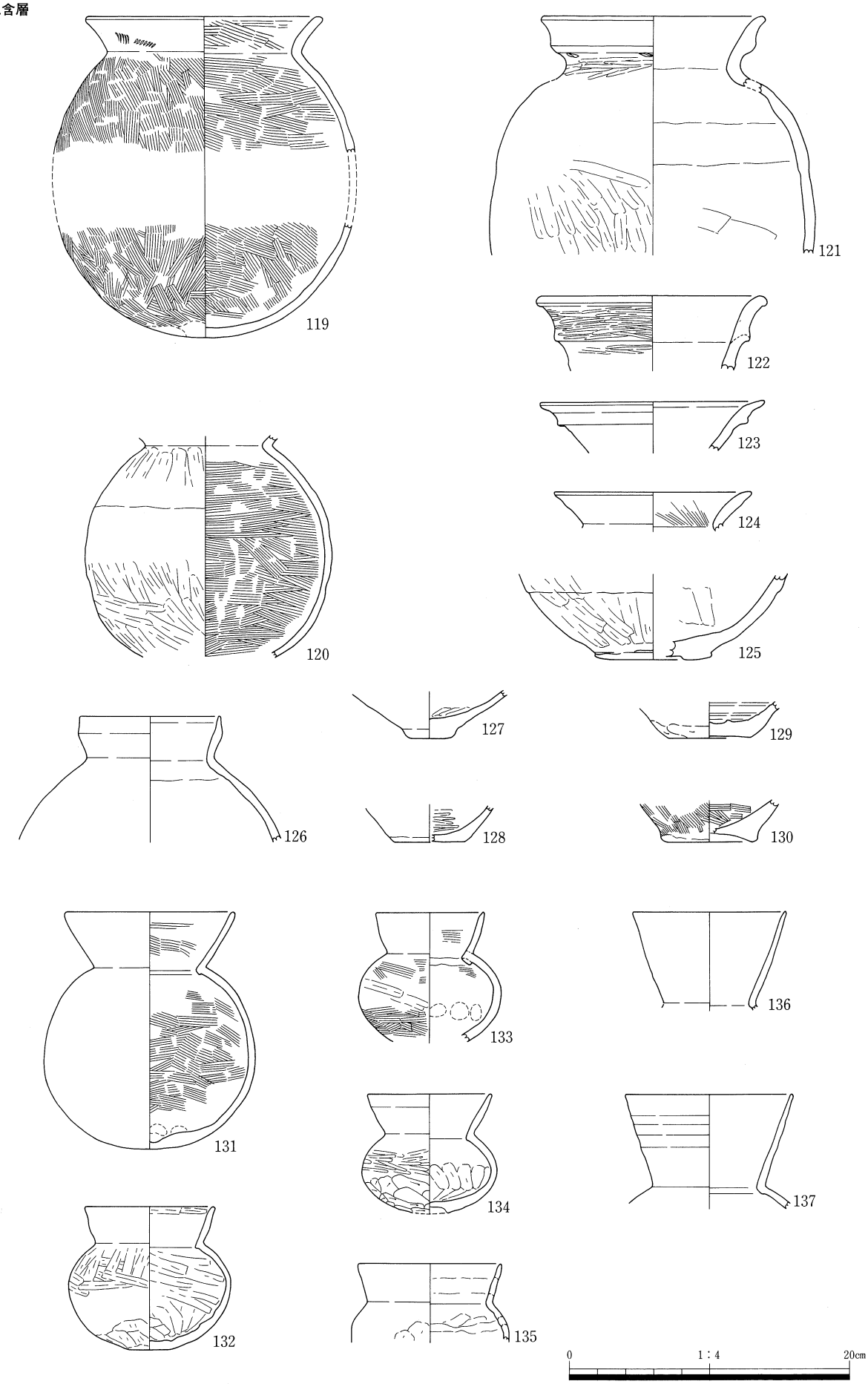
河西健二　1994「五社遺跡」『埋蔵文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団
樫田　誠　1994『念仏林南遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
酒井重洋・島田修一　1987『北野遺跡・椎土遺跡緊急発掘調査概要』小杉町教育委員会
出越茂和　1995『上荒屋遺跡Ⅰ　第2分冊古墳時代編』金沢市教育委員会
藤田富士夫他　1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫他　1983『古沢A遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
望月精司　1995『念仏林南遺跡Ⅱ』小松市教育委員会

包含層



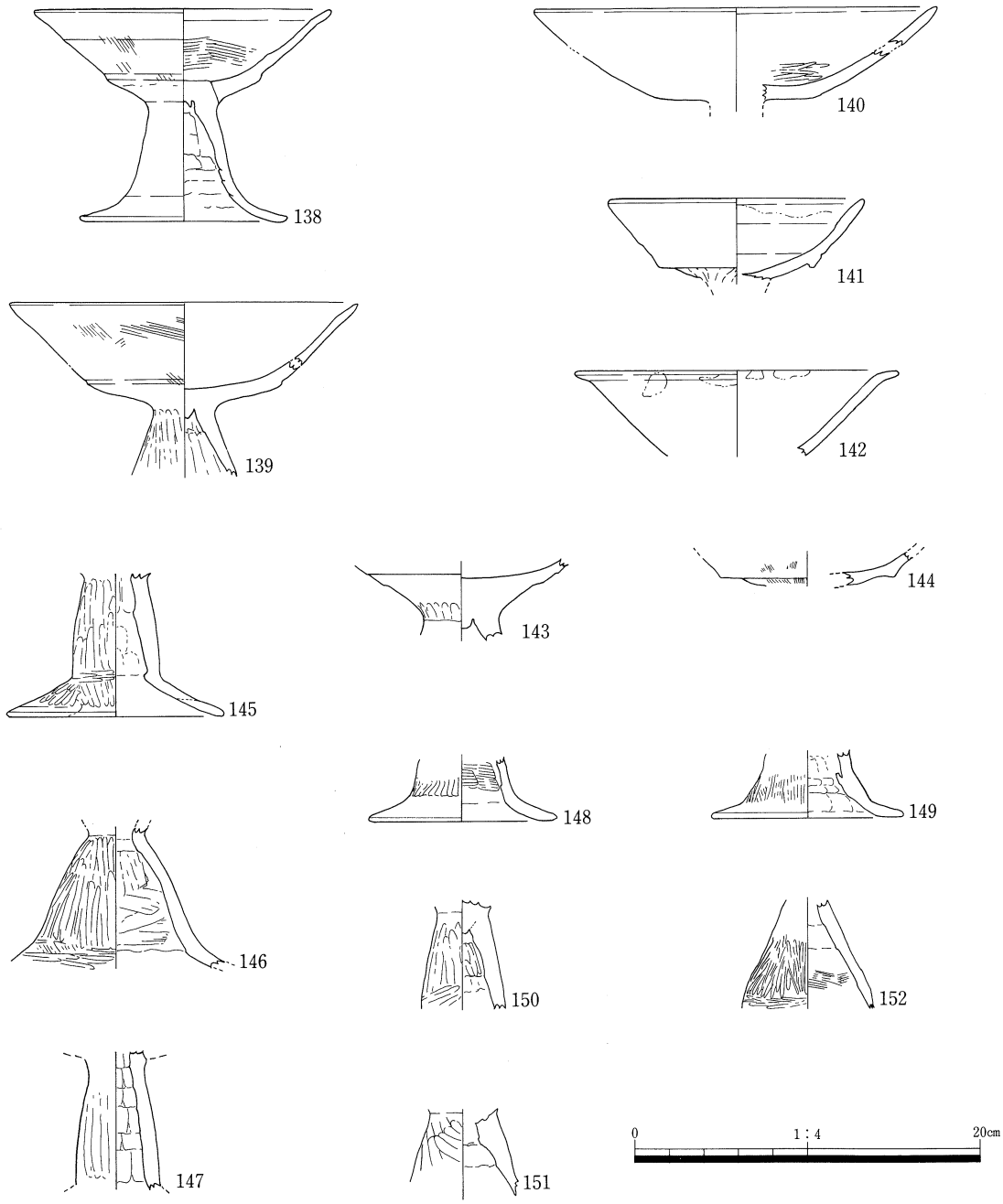
第32図　遺物実測図　(1/4)

包含層



第33図　遺物実測図　(1/4)

包含層



第34図　遺物実測図　(1/4)

2　古代前期

古代前期の遺構は掘立柱建物12棟，柵１条，土坑，溝，畠跡，道路跡，集石遺構がある。遺構はＡ～Ｂ３地区までの遺跡北側で確認されている。掘立柱建物は平面積30㎡以下の小規模なもので，三方に溝が巡るものや，棟持柱列があるものなど多様な在り方をしている。遺物は少ないが，８世紀代～10世紀初め頃までのものがみられ，主体は９世紀後半～10世紀初めにある。

Ａ　掘立柱建物

１号掘立柱建物（ＳＢ１，第35図，図版16）

Ｘ223～222Ｙ118に位置する。道路跡ＳＦ523の南端にあたり，ＳＦ523を切っている。２間×２間の総柱建物である。桁行4.48ｍ，梁行3.8ｍを測り，平面積は17㎡である。主軸はＮ－８°－Ｗの南北棟で，やや西に振れる。柱間は桁行が北から２ｍ，1.9ｍ，梁行が西から1.8ｍ，1.7ｍである。柱掘形は直径40㎝～50㎝の円形であるが，中央の柱穴（ＳＰ688）のみ20㎝×30㎝と一回り小さい。深さは平均20㎝である。掘形埋土は灰オリーブ色砂質シルトまたは黒褐色シルトで，柱痕跡が認められるものはない。柱穴から遺物は出土していないが，ＳＢ２・ＳＢ３との関係から建物の時期は９世紀後半と推定される。

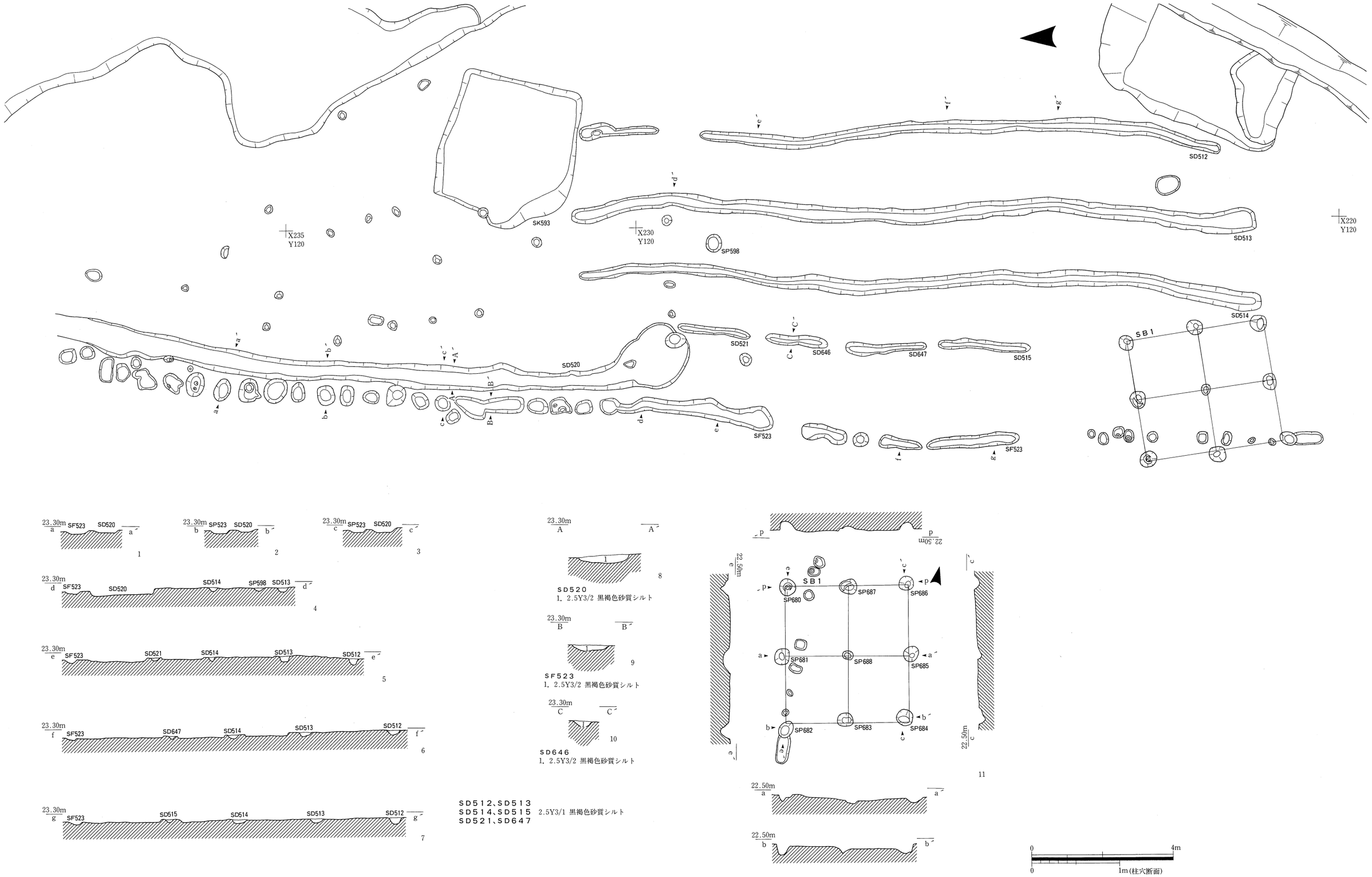
２号掘立柱建物（ＳＢ２，第36・37図，図版16・35）

Ｘ217Ｙ115に位置し，ＳＤ650を切っている。ＳＤ650がほぼ埋まった後の建物で，２間×２間の側柱建物である。桁行3.56ｍ，梁行3.6ｍのほぼ正方形で，平面積は12.8㎡を測る。主軸は真北を向く南北棟である。柱間は桁行が北から1.6ｍ，1.6ｍで，梁行は北柱列が西から1.4ｍ，1.7ｍ，南柱列が1.6ｍ，1.5ｍとなり，南北で柱位置が微妙にずれている。柱掘形は直径50㎝～60㎝の円形で，深さは10㎝～20㎝と浅い。掘形埋土は地山（オリーブ灰色砂質シルト）混じりの黒褐色シルトで，僅かに炭が混じる。柱痕跡はＳＰ538で確認されている。建物の西側を除く三方には浅い雨落ち状の溝ＳＤ530・655・540が巡っている。３本の溝はいずれも幅50㎝～60㎝で，深さは約10㎝と極めて浅いものである。溝の覆土は炭混じりの黒褐色シルトで，柱穴の掘形埋土と変わらない。これらの溝は，単なる雨落ち溝ではなく，溝を含めた範囲を建物敷地とし，竪穴建物構造との融合が想定されており，２間×２間に溝を巡らせるのは，竪穴建物規模の空間利用を継承したものと考えられている[註1]。溝で囲まれた範囲を建物敷地と仮定すると，平面積は約27.5㎡となる。

遺物は柱根と思われる木片と，ＳＰ536から土師器椀の口縁部小片，身舎内側から瓶と思われる須恵器片，体部タタキの須恵器甕が出土している。図示はしていないが，これらの遺物は９世紀後半のものと考えられる。169の甕口縁はＳＤ530からの出土であるが，古墳時代の遺物で混ざり込みと考えられる。建物の時期は９世紀後半と推定される。

３号掘立柱建物（ＳＢ３，第36・37図，図版16・34・35）

Ｘ210Ｙ115付近に位置する，２間×２間の側柱建物である。桁行５ｍ，梁行4.2ｍで，南東角がやや歪んだ建物で，平面積は21㎡である。主軸はＮ－４°－Ｗで，僅かに西に振れる南北棟の建物である。柱間は桁行が西柱列が北から2.4ｍ，2.1ｍで，東柱列が1.8ｍ，2.4ｍとなり，梁行は北柱列が西から1.1ｍ，3.7ｍで，南柱列が1.9ｍ，２ｍとなり，各々柱位置は一致しない。柱掘形は40㎝～50㎝の円形のものが主であるが，ＳＰ671は長軸100㎝×短軸40㎝の楕円形である。掘形埋土はいずれも炭を僅かに含む黒褐色シルトであるが，ＳＰ671の掘形埋土については他の柱穴よりも炭の含有量が多く，さらに焼土を含むものである。柱痕跡は確認されていない。建物の中央北寄りに位置するＳＫ676の覆土は



第35図　遺構実測図

1～3.SF523・SD520（道路跡）　4～7.SD512・SD513・SD514・SD515・SD521・SD647（畠跡）

8.SD520　9.SF523　10.SD646　11.SB1

柱穴と同様の炭混じりの黒褐色シルトで，焼けた石が出土している。建物の北側及び東側にはＳＤ516が巡る。ＳＤ516は幅82cm，深さ10cm～15cmと浅いものである。ＳＢ２と同様に単なる雨落ち溝ではない可能性がある。溝で囲まれた範囲を建物敷地と仮定した場合の平面積は約30m²となる。

遺物は柱穴，ＳＤ516及びＳＤ516に囲まれた内側からまとまって出土している。特にＳＰ659･671･672･673，ＳＫ519で建物の南側から集中して出土している。ＳＰ671からは155の土師器椀や土師器甕が出土しており，地鎮祭祀の可能性も考えられる。153はＳＰ673出土の内面黒色処理された椀で，口径12.6cmを測り，体部下半にロクロケズリを施す。底部に糸切り痕はみられない。155はロクロ目の強く残る椀で，内外面ともに煤が付着している。158は直線的に外方に伸びる体部で，器高の高いものである。160は建物の身舎内部に位置するＳＫ519出土の椀で，体部下半にケズリを施す。161はロクロ成形の皿底部である。162は付け高台の椀で，底部に糸切り痕が残り，10世紀代のものと考えられる。154～162までの椀・皿はいずれもロクロ成形によるもので，153を除く全ての底部は糸切り無調整である。163は須恵器杯底部で，ＳＤ502出土の破片と接合している。164はＳＰ659出土の頸部及び肩部に細い沈線が３本巡る瓶で，９世紀代のものである。165はＳＰ672出土のロクロ成形の小甕で，底部に糸切り痕を残し，内面は黒色を呈している。166は甕で，外面はカキメが施されていると思われるが，煤が付着しており，明瞭ではない。167･168はＳＤ516出土の甕口縁である。この他，図示はしていないが外面にタタキを施された甕胴部破片や，須恵器瓶肩部，平坦な頂部につまみの付く須恵器杯蓋などがある。遺物は160・163・164がやや古手の様相を持ち，162が新しい様相を持つなど若干の時期差があるが，主体は９世紀後半にある。このことから，建物の時期は９世紀後半と推定される。

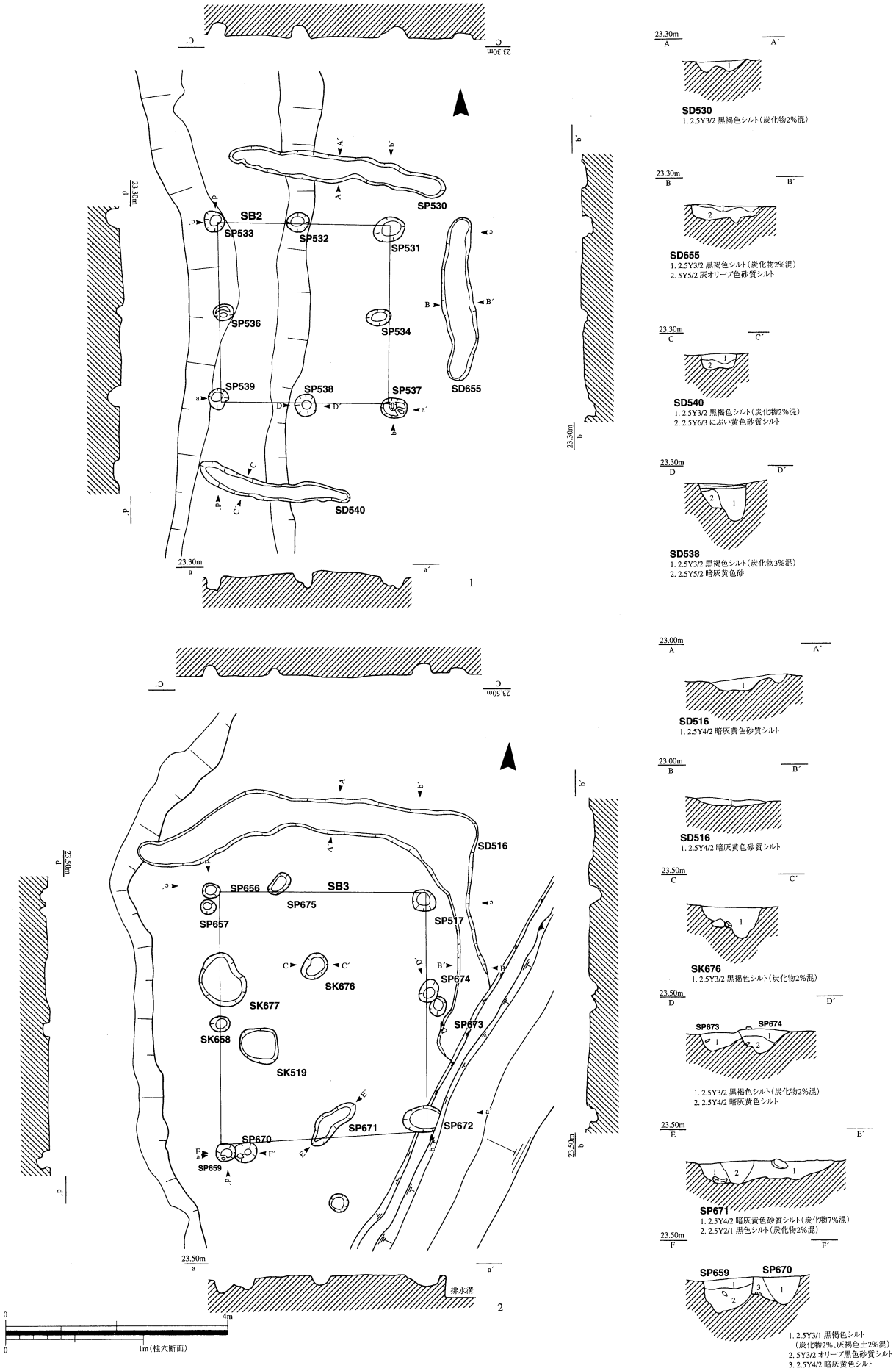
４号掘立柱建物（ＳＢ４，第38・39図，図版16・17）

Ｘ193～194Ｙ92付近に位置し，２間×２間の側柱建物である。桁行６ｍ，梁行4.08ｍで，平面積は28.8m²を測る。柱間は桁行が北から3.8ｍ，２ｍで，梁行が西から２ｍ，２ｍである。柱穴の検出が困難であった為，確認しきれなかった柱穴がある。柱間はほぼ２ｍの間隔であり，ＳＰ3403が北柱列のＳＰ3402から1.8ｍの位置にあることから，柱穴の一つと仮定すると３間×２間の総柱建物となり，柱間は約２ｍ間隔の均一なものになる。主軸がＮ－11°－Ｗの南北棟で，西に振れた建物である。柱掘形は直径30cm～40cmの円形で，深さは約10cmと浅い。柱穴掘形埋土は暗灰黄色砂で，柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

ＳＢ４は古代後期遺構面（Ｖ層）と古代前期遺構面（Ⅶ層）との間のⅥ層上面で検出されている。Ⅵ層は古代前期及び古墳時代の遺物包含層にあたり，５cm～10cmの厚さである。ＳＢ４～ＳＢ７は，古代後期面と前期面の間で検出されていることから，ここでは古代中層面と仮称している。古代中層面は遺物包含層がなく，Ｖ層からすぐに遺構検出面となっている。時期の決め手となる遺物が乏しく，時期は不明だが，層序から古代後期（10世紀後半～）と古代前期（９世紀後半～10世紀初め）の間と考えられる。また，古代前期との間に大きな時期差はないと考えられている。このことから，古代中層面は10世紀前半でも早い時期（10世紀始初め頃）の遺構面と推定される。

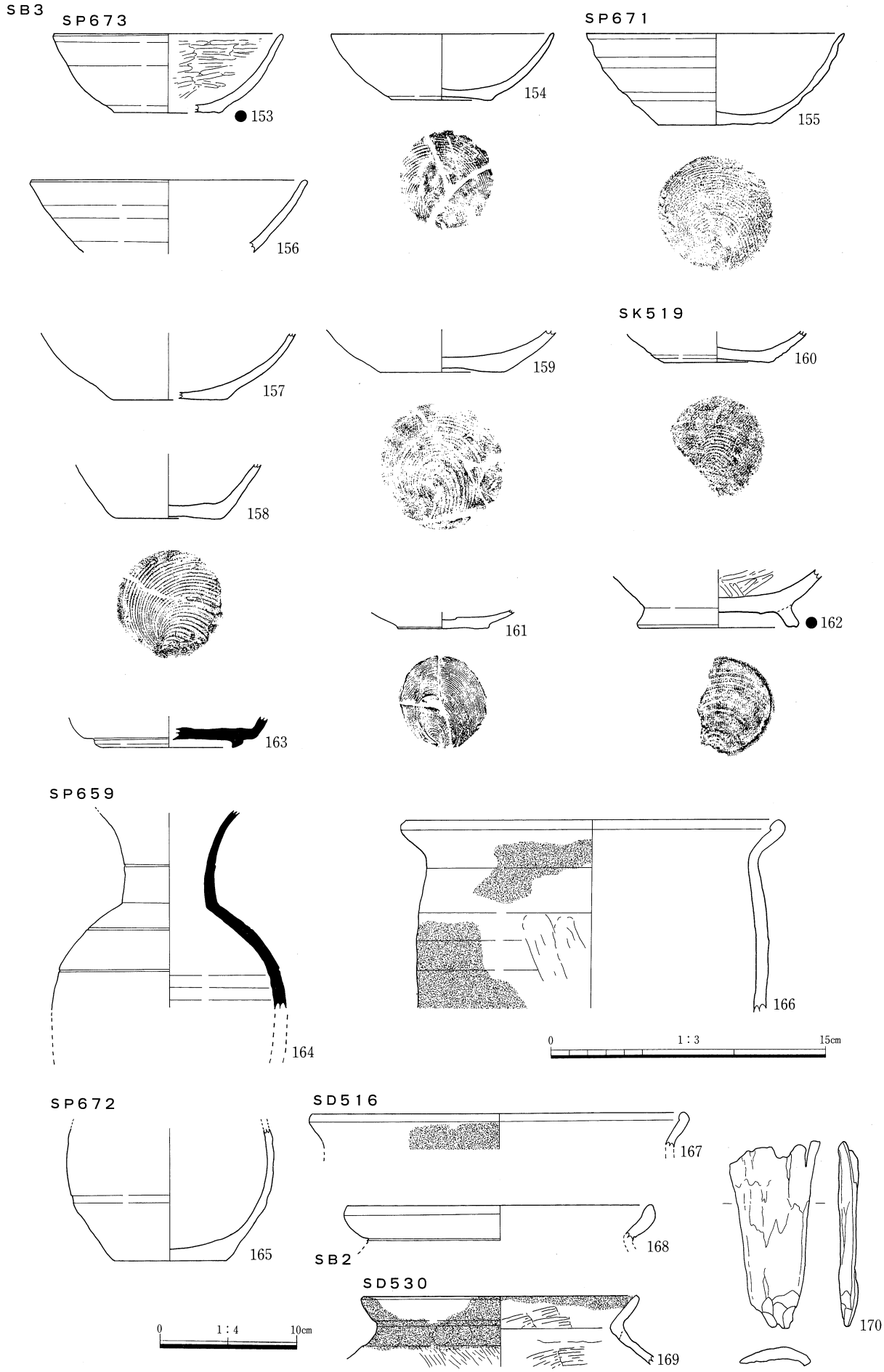
５号掘立柱建物（ＳＢ５，第38・39図，図版16・17）

Ｘ189Ｙ94付近で，ＳＢ４の南４ｍに位置する。２間×２間の側柱建物で，桁行4.4ｍ，梁行3.7ｍ，平面積16.3m²を測る。主軸はＮ－２°－Ｗで，僅かに西に振れる南北棟の建物である。柱間は桁行が北から１ｍ，3.4ｍで，梁行が西から1.5ｍ，2.1ｍである。柱穴はＳＢ４同様に検出が困難であった為，確認されていないが，桁行は３間の可能性が考えられる。桁行３間と仮定すると，ＳＫ3438は西柱列の柱穴の可能性があり，東柱列にはＳＫ3438と対になる位置に柱穴があったと思われる。柱掘形は直

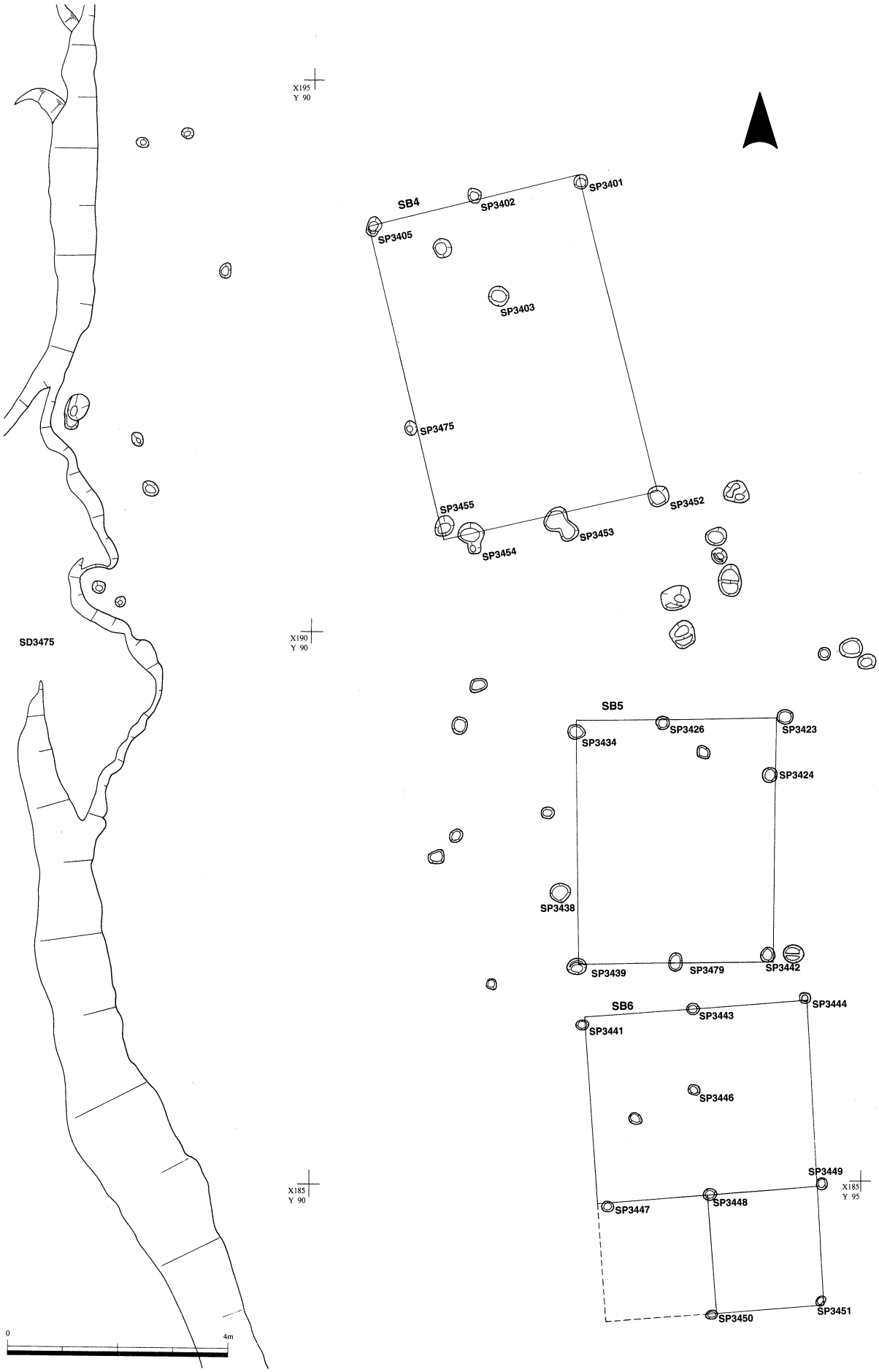


第36図　遺構実測図

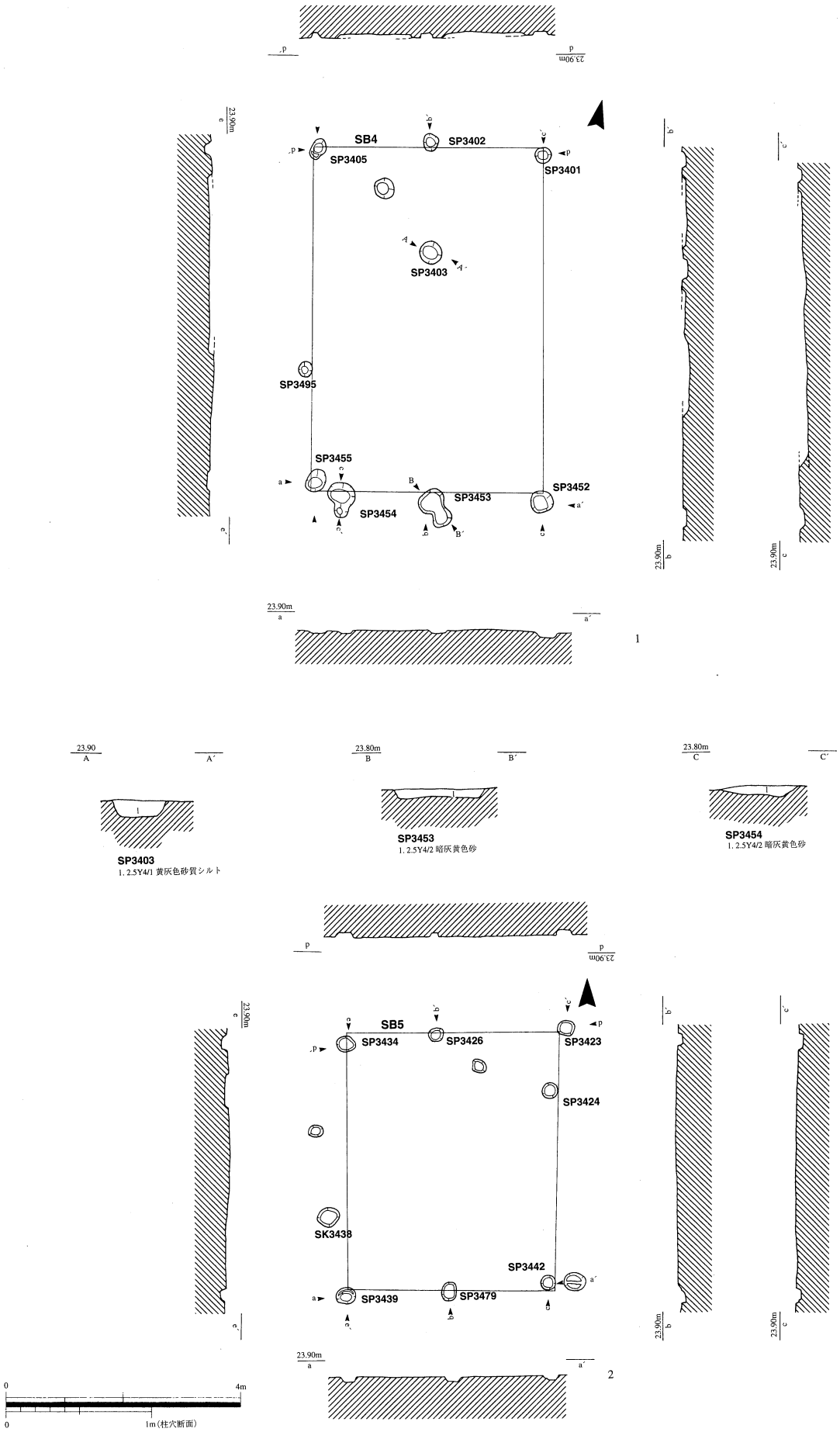
1.SB2　2.SB3



第37図　遺物実測図　(153～166・170　1/3, 167～169　1/4)
SB3 (153～168)　SB2 (169・170)



第38図　遺構実測図
SB4～SB6



第39図　遺構実測図

1.SB4　2.SB5

径約30cmの円形で，深さは10cmと浅い。掘形埋土は黒褐色砂質シルトで，柱痕跡が確認されたものはない。ＳＰ3442から土師器椀の小片が出土しているが，他の遺物はみられない。ＳＢ５はＳＢ４と同様に古代中層面の遺構であり，建物の時期は10世紀初めと推定される。

６号掘立柱建物（ＳＢ６，第38・40図，図版17）

Ｘ186Ｙ94付近に位置し，ＳＢ５の南50cmに近接する建物である。１間×２間の側柱建物に１間×１間の付属施設が付くものであるが，３間×２間の総柱建物である可能性もある。１間×２間の場合，桁行は3.5ｍ，梁行は4.2ｍ，平面積は14.9m²となり，２ｍ×２ｍ（４m²）の付属施設が付く。柱間は桁行が3.4ｍ，梁行は西から２ｍ，２ｍとなる。３間×２間の場合は，ＳＰ3446を柱穴とし，桁行の柱間が北から1.9ｍ，1.9ｍ，２ｍとなり，平面積は23.3m²で柱間２ｍの総柱建物となる。ＳＢ４・５と同様に柱穴の検出が困難であった為，確認されていない柱穴の存在を考慮すると，３間×２間の総柱建物であった可能性の方が高いと思われる。主軸はＮ－５°－Ｗで，やや西に振れる南北棟の建物である。柱掘形は直径20cm～30cm，深さ10cmの小規模なものである。掘形埋土は黒褐色砂，暗灰黄色砂質シルトで，柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していないが，古代中層面の遺構であることから，建物の時期は10世紀初めと推定される。

７号掘立柱建物（ＳＢ７，第40図，図版17）

Ｘ183Ｙ83に位置する１間×１間の側柱建物である。ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６とはＳＤ3475を挟んだ対岸にあたる。桁行2.8ｍ，梁行2.3ｍで，平面積は6.5m²を測る。主軸は真北方向の南北棟である。柱掘形は直径20cm～30cmの円形で，深さは10cmと浅い。掘形埋土は黒褐色砂または暗灰黄色砂で，僅かに炭を含む。柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していないが，ＳＢ４～ＳＢ６と同様に古代中層面検出の遺構であることから，建物の時期は10世紀初めと推定される。

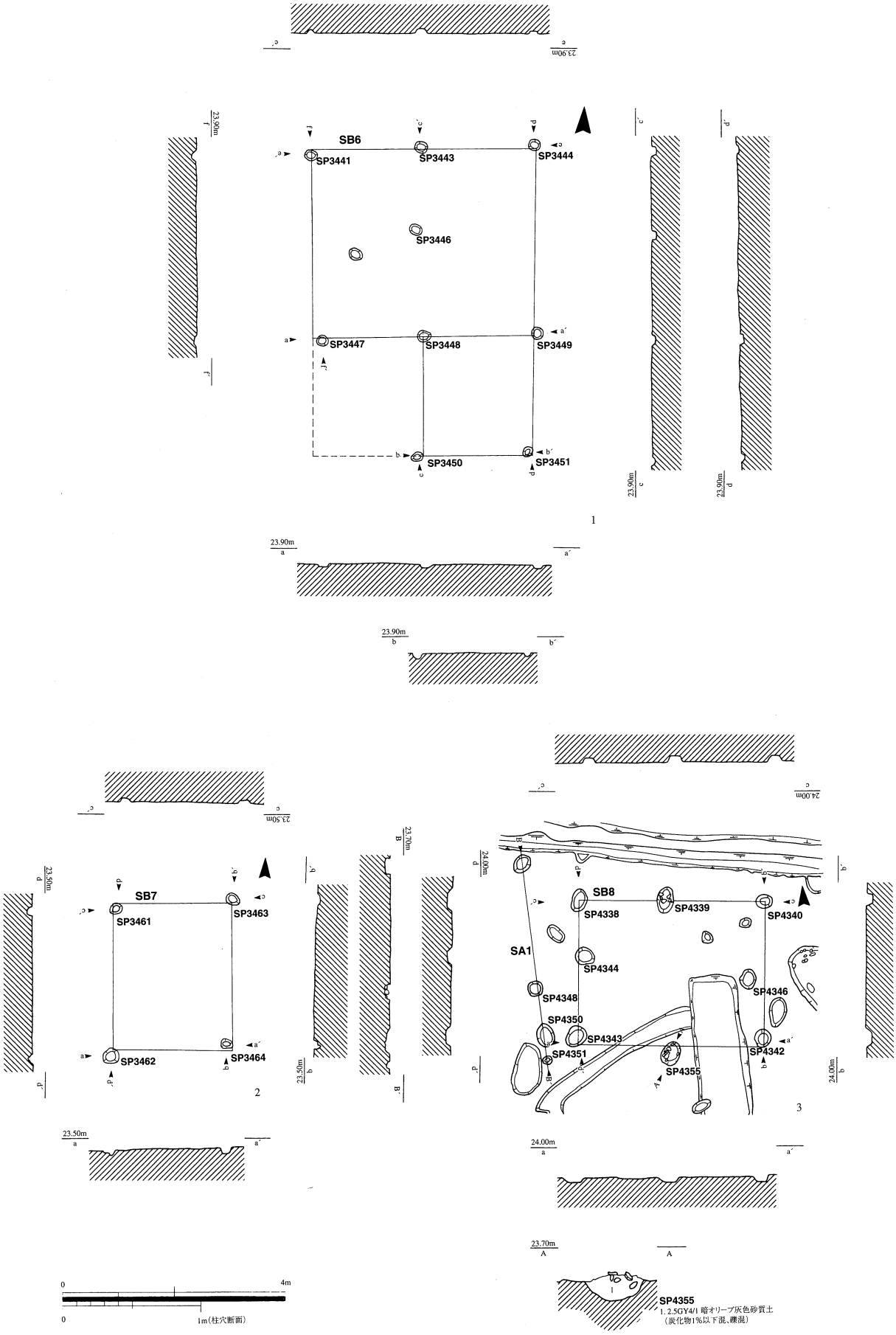
８号掘立柱建物（ＳＢ８，第40・41図，図版18）

Ｘ170Ｙ95付近に位置する。２間×２間の側柱建物で，桁行3.6ｍ，梁行2.8ｍの東西棟である。平面積は10.1m²を測る。柱間は桁行が西から1.5ｍ，1.8ｍで，梁行が北から１ｍ，1.6ｍである。主軸はＮ－82°－Ｗで東西に向く。２間×２間の東西棟としているが，地区北側へ伸びて２間以上となる可能性もあり，この場合はＮ－10°－Ｅの南北棟になる。柱掘形は長軸30～40cm×短軸20cmの楕円形で，深さは10cmほどである。掘形埋土は暗オリーブ灰色砂質土で僅かに炭を含む。柱痕跡は確認されていない。

西柱列の西側80cmには１号柵列（ＳＡ１）がある。ＳＡ１の柱掘形は直径20cmの穴から40cmの穴までで統一性がなく，柱間も不規則である。掘形埋土は黄灰色砂質土である。ＳＡ１は真北を向いており，ＳＢ８とは方位が一致しない。このことから，ＳＡ１がＳＢ８に伴う柵列であるのかは不明である。ＳＢ８・ＳＡ１ともに遺物は出土していないが，Ⅶ層検出の遺構であることから，建物の時期は９世紀後半と推定される。

９号掘立柱建物（ＳＢ９，第41・42図，図版18）

Ｘ168Ｙ95～96付近に位置し，ＳＢ８の南側1.5ｍにほぼ平行に並ぶ３間×２間の東西棟の建物である。桁行4.2ｍ，梁行３ｍ，平面積12.9m²を測る。柱間は桁行が西から0.9ｍ，２ｍ，１ｍで，梁行が北から1.5ｍ，1.4ｍとなり，不規則である。柱掘形は直径20cmの円形のものが多いが，長軸50cm，短軸30cmの楕円形のものもあり，統一性に欠ける。掘形埋土は灰色砂質土で，僅かに炭を含む。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ－80°－Ｗで東西に向く。ＳＢ９の南西角は，ＳＢ10の北東角と重複しているが，新旧関係は不明である。ＳＢ９・ＳＢ10両方の建物の柱穴に挙げられているＳＰ4399から，ロクロ成形の土師器椀の小片が出土しているが，どちらの建物に伴う遺物であるのか不明である。こ



第40図　遺構実測図

1.SB6　2.SB7　3.SB8・SA1

の他に遺物は出土しておらず，時期決定の決め手に欠けるが，ＳＢ８と並ぶことから同時期の建物と考えられ，９世紀後半と推定される。

10号掘立柱建物（ＳＢ10，第41・42図，図版18）

Ｘ167Ｙ94付近に位置し，ＳＢ９と一部重複している。２間×２間の側柱建物で，梁中央に棟持柱と考えられる柱列を持つ。桁行4.2ｍ，梁行3.5ｍの南北棟で，平面積は14.6㎡を測る。柱間は桁行が北から1.8ｍ，2.2ｍで，梁行が西から1.7ｍ，1.7ｍとなり，中央柱列は北から0.8ｍ，２ｍ，1.1ｍとなる。柱位置は桁行，梁行ともに東西南北で一致せず，不規則である。柱掘形は直径20㎝～30㎝の円形であるが，中央柱列の柱穴は40㎝～50㎝の大きな掘形を持つ。掘形埋土は，側柱列が黒色砂，黄灰色砂質土で，中央柱列がオリーブ灰色砂質土で僅かに炭を含んだものであり，両者の埋土は異なる。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ－８°－Ｅで，やや東に振れる。

中央柱列はＳＰ4401・4379・4384で，棟持柱と考えられる。棟持柱には１；独立棟持柱，２；近接棟持柱，３；屋内棟持柱の３形式がある[註2]。１は「妻側柱筋から外に大きくはなれた位置に棟持柱を立てる」もの，２は「妻側中央柱が柱筋に接するかあるいは柱１～２本分外側にずれて棟持柱を立てる」もので，３は「屋内に棟持柱を立てる」ものである。ＳＢ10の場合は近接棟持柱（ＳＰ4401）と，屋内棟通りの両妻側寄りの２ヶ所の棟持柱（ＳＰ4379・4384）が一体となって棟木を支持する形式の屋内棟持柱と考えられる。

ＳＢ９と重複しているＳＰ4339以外の柱穴からは遺物は出土していない。ＳＢ９との新旧関係は不明であるが，大きな時期差はないものと考えられる。また，棟持柱列を持つＳＢ12とほぼ平行に並んでおり，ＳＢ12と同時期の建物と考えられる。このことから，ＳＢ10の時期は９世紀後半の範疇に収まるものと推定される。

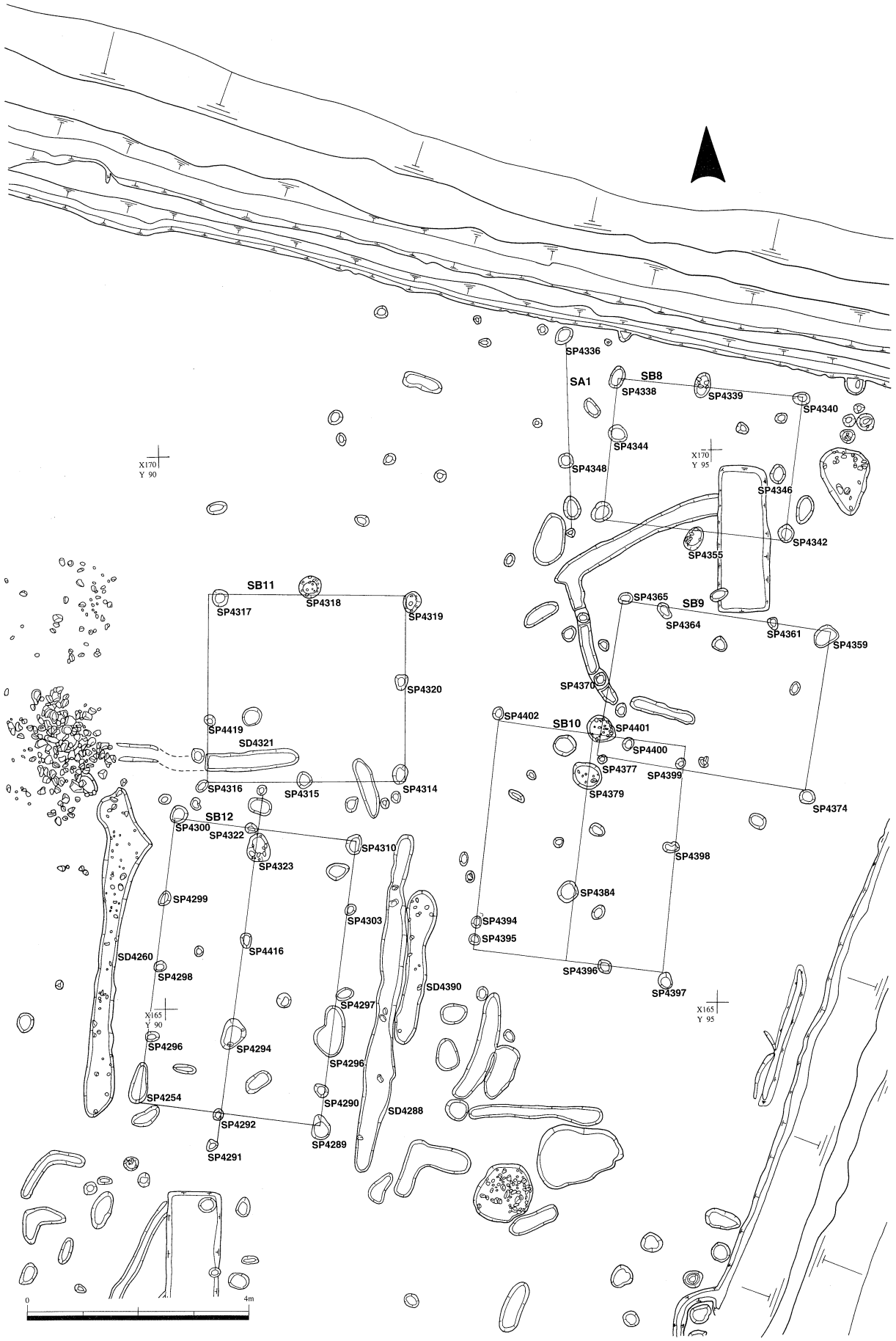
11号掘立柱建物（ＳＢ11，第41・43図，図版18）

Ｘ168～169Ｙ92付近に位置する。２間×２間の側柱建物で，桁行3.6ｍ，梁行3.4ｍで若干東西方向に長い建物である。平面積は12.4㎡を測る。柱間は桁行が西から1.8ｍ，1.7ｍで，梁行は西柱列が北から2.3ｍ，1.1ｍ，東柱列が1.6ｍ，1.7ｍとなり，梁行では東西で柱位置がずれる。主軸はＮ－88°－Ｗで東西を向く。柱掘形は30㎝～40㎝の円形で，深さは10㎝～20㎝である。掘形埋土は灰色砂質土で，僅かに炭が混ざる。柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していないが，建物の時期は９世紀後半と推定される。

12号掘立柱建物（ＳＢ12，第41・43図，図版18）

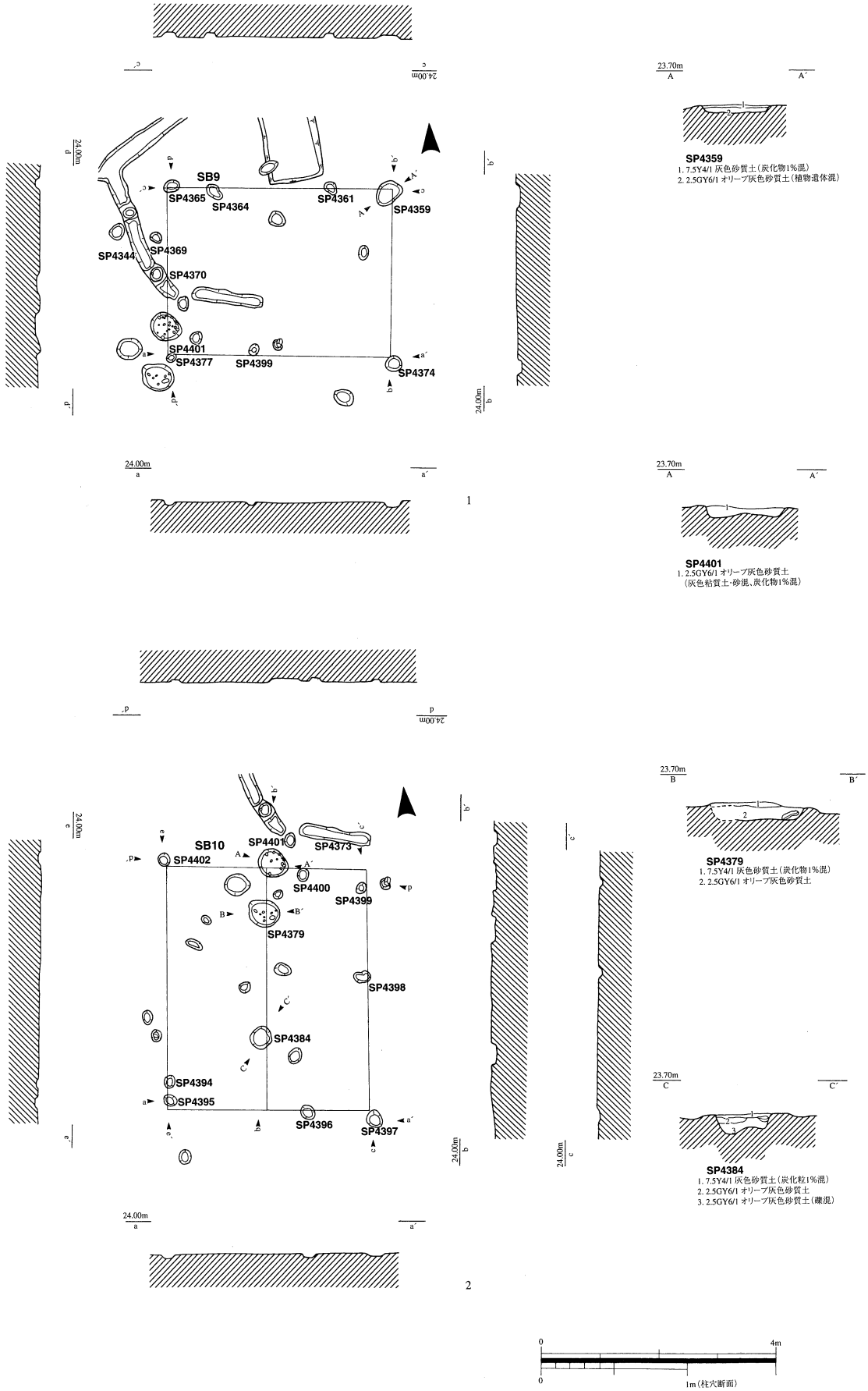
Ｘ166Ｙ91で，ＳＢ11の南１ｍに位置する。４間×２間の南北棟の側柱建物で，棟持柱を持つ。桁行5.4ｍ，梁行3.5ｍで，平面積18.8㎡を測る。柱間は桁行が北から1.5ｍ，1.3ｍ，1.3ｍ，１ｍで，桁行が西から1.4ｍ，1.9ｍである。棟持柱列は北から1ｍ，1.7ｍ，1.7ｍ，1.5ｍ，0.6ｍである。棟持柱は妻側柱筋から北側で70㎝，南側で50㎝外側に出ており，独立棟持柱の形式にあたる。柱掘形は20㎝～30㎝の円形であるが，建物の四隅の柱及び，屋内に位置する棟持柱は40㎝～70㎝と大きなものである。掘形埋土は灰褐色砂質土，オリーブ灰色砂質シルトで，僅かに炭が混ざる。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ－９°－Ｅで僅かに東に振れる。建物は12棟が確認されているが，主軸方向が東に振れるものはＳＢ10・12の２棟のみで，いずれも棟持柱を持つ建物である。

ＳＢ12には南を除く三辺に溝ＳＤ4260・4321・4311・4288が巡っている。ＳＤ4321とＳＤ4311とは一続きの溝になると思われる。これらの溝は幅50㎝～60㎝，深さ10㎝ほどの浅いもので，覆土は灰色砂質土，オリーブ灰色砂質シルトで僅かに炭が混ざる。溝の性格は雨落ち溝であるのか，ＳＢ２・Ｓ



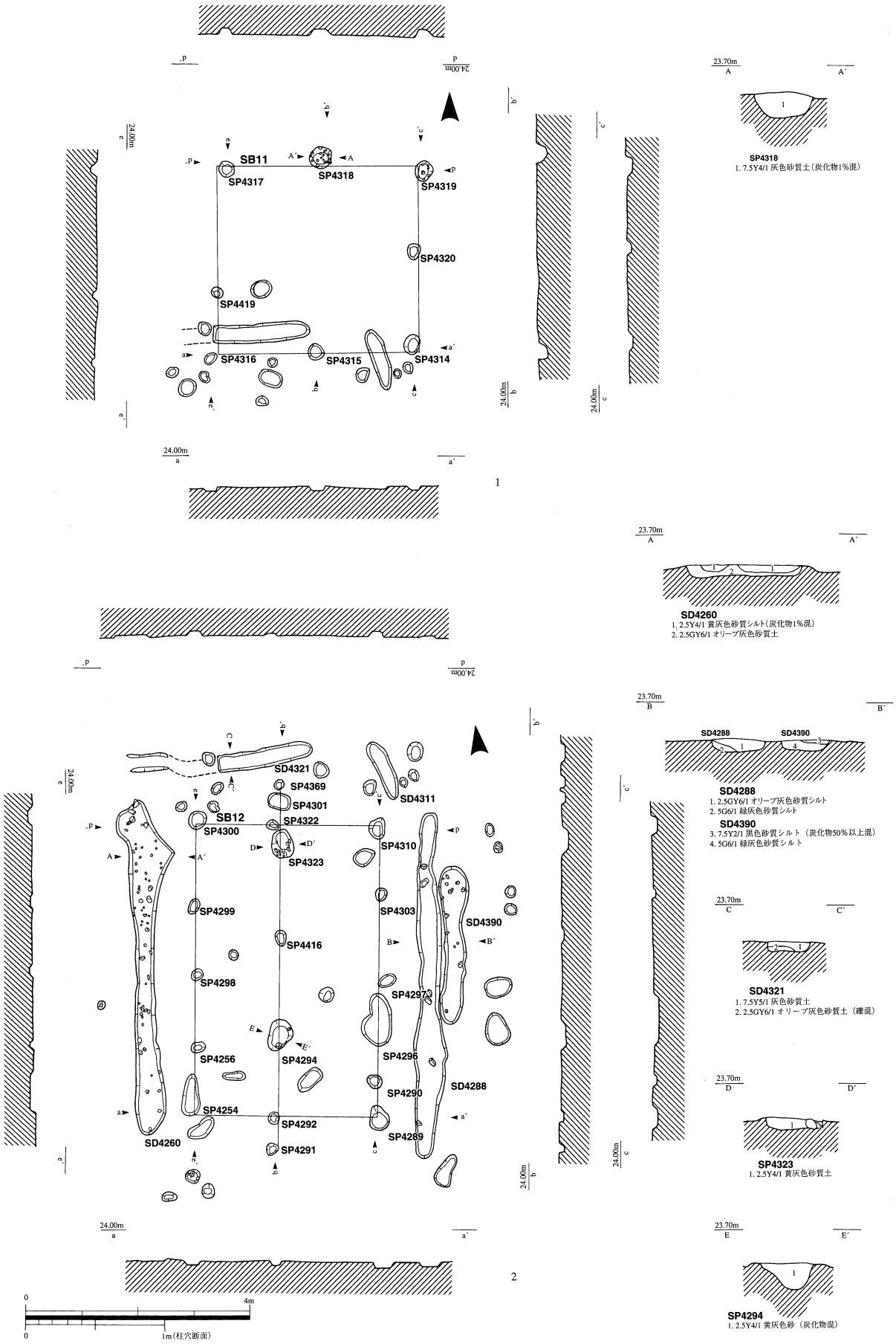
第41図　遺構実測図

SB8～SB12・SA1



第42図　遺構実測図

1.SB9　2.SB10



第43図　遺構実測図

1.SB11　2.SB12

Ｂ３と同様に溝を含めて建物敷地となるのか不明である。溝で囲まれた範囲を建物敷地と仮定すると，平面積は約33m²となる。

遺物は少なく，ＳＰ4303から外面タタキの土師器甕，ＳＰ4323から内外面カキメ調整の土師器甕，ＳＤ4260から土師器甕，ＳＤ4288から外面タタキの土師器甕が出土しているのみである。いずれも小片であり，時期決定の決め手には乏しいが，建物の時期は９世紀後半と推定される。

Ｂ　土　　坑

503号土坑（ＳＫ503，第44図）

Ｘ246Ｙ109に位置する。58×48cmの円形の土坑で，深さは24cmである。覆土上位から詰め込まれたような状態で礫が出土している。礫は長軸15cmほどの楕円形のものと，５cm以下の小礫である。これらの礫が自然に埋まったものか，人為的に埋められたものかは不明である。覆土は褐灰色粘土質シルトの単層である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

519号土坑（ＳＫ519，第36・37・44図，図版34）

Ｘ210Ｙ115に位置する。ＳＢ３の柱筋の内側にあたり，同時期の遺物（160）が出土していることから，ＳＢ３と関連する施設と考えられる。68cm×62cmのやや歪んだ方形で，深さは８cmと浅い。覆土は暗灰黄色シルトである。時期は９世紀後半と推定される。

528号土坑（ＳＫ528，第44図）

Ｘ245Ｙ124に位置する円形の土坑である。88cm×80cmで，深さ18cmを測る。覆土は２層に分かれ，上層は灰黄褐色シルトで下層はピート状の暗褐色粘質シルトである。ＳＤ573を切っており，ＳＤ573が埋まった後に，掘り込まれている。遺物は出土していない。時期は９世紀後半と推定される。

529号土坑（ＳＫ529，第44図）

Ｘ243Ｙ124に位置する。直径約75cmの円形土坑で，深さは26cmを測る。ＳＤ573の西側肩を切っている。覆土は３層に分かれ，上層が明緑灰色砂，中層・下層がオリーブ黒色砂質シルトで，中層と下層の間に薄く灰白色砂が堆積しており，これは地震による噴砂と思われる。遺物は出土しておらず，時期の決め手に欠けるが，９世紀後半の遺構と考えられる。

558号土坑（ＳＫ558，第47図，図版36）

Ｘ233Ｙ114で，ＳＤ650の東側肩に位置する。32cm×26cmの楕円形で，深さは７cmと浅い。覆土は暗灰黄色砂質シルトである。Ｘ230Ｙ113周辺の包含層出土の破片と接合した172の双耳瓶が出土している。172は断面四角形で単孔の耳が付く双耳瓶で，９世紀後半～10世紀初頭に位置づけられるものである。

567号土坑（ＳＫ567，第44図）

Ｘ240Ｙ119に位置する。2.9ｍ×1.2ｍの不整形の土坑で，深さは32cmである。覆土は灰色粘質シルトが主体である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

568号土坑（ＳＫ568，第44図）

Ｘ241～240Ｙ119付近で，ＳＫ567の北側１ｍに位置する。長軸1.3ｍ，短軸0.8ｍの楕円形で，深さは23cmを測る。覆土はＳＫ567と似ており，灰色粘質シルトが主体である。遺物は出土していない。時期は不明である。

603号土坑（ＳＫ603，第47図，図版35）

調査区北東隅のＸ249Ｙ135に位置する。直径約26cmの円形の土坑で，深さは８cmである。遺物は土師器鍋の口縁部（173）が出土している。口縁部のみの出土であるが，強く外反する口縁に半球形の体部が付くものと思われる。口縁端部を巻き込み，内面に巻き込みの段が付く。また，端部外面に強い

ナデを施す。時期は９世紀末～10世紀初頭である。ＳＫ603周辺の包含層からは９世紀後半～10世紀初めの遺物がまとまって出土している。このことから，ＳＫ603の時期は９世紀後半～10世紀初頭と推定される。

676号土坑（ＳＫ676，第36図）

Ｘ211Ｙ110で，ＳＢ３の柱筋の内側に位置する。52cm×38cmの楕円形の土坑で，深さ24cmを測る。覆土は黒褐色シルトで僅かに炭が混ざる。焼石が出土しており，ＳＢ３の柱穴の可能性もある。時期は９世紀後半と推定される。

677号土坑（ＳＫ677，第36・44図）

Ｘ211Ｙ115で，ＳＢ３の西柱列上に位置する。長軸96cm，短軸84cmで，深さ９cmの浅い皿状の土坑である。覆土は暗灰黄色砂質シルトである。柱列上に位置していることから，ＳＢ３と関連する施設の可能性がある。遺物は出土していないが，時期は９世紀後半と推定される。

679号土坑（ＳＫ679，第44図）

Ｘ208Ｙ114で，ＳＢ３の南西３ｍに位置する。ＳＤ650を切っており，ＳＤ650が埋まった後に掘り込まれている。長軸1.3ｍ，短軸0.7ｍの楕円形の土坑で，深さは30cmである。南側が一段深く掘り込まれており，２つの遺構が切り合っている可能性があるが，断面からは判断できない。覆土は３層に分かれ，上層が黒色砂質土で，90％が炭である。中層は暗オリーブ褐色砂質シルトで，下層は暗灰黄色砂質シルトで，40％の炭が混ざる。焼土は確認されていないが，炭の含有量は極めて高い。何かを燃していた施設であるのか，燃え残りを捨てた穴であるのか性格は不明である。遺物は出土していないが，時期は９世紀後半と推定される。

690号土坑（ＳＫ690，第44図）

Ｘ223Ｙ121に位置する。長軸70cm，短軸54cmの楕円形の土坑で，深さ11cmを測る。覆土はオリーブ黒色シルトの単層で，皿状に堆積する。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

3421号土坑（ＳＫ3421，第45図）

Ｘ191Ｙ95に位置する。ＳＢ４とＳＢ５の間にあたり，比較的まとまって遺物が出土している地帯である。43cm×34cmの楕円形の土坑で，深さは12cmを測る。覆土は黒褐色砂である。遺物は製塩土器の小片が出土しているのみである。ＳＢ４～ＳＢ７と同様に古代中層面検出の遺構であることから，土坑の時期は10世紀前半と推定される。

3427号土坑（ＳＫ3427，第45図）

Ｘ191Ｙ94で，ＳＢ４の南東１ｍに位置する。直径約37cmの円形の土坑で，深さは８cmを測る。覆土は黄灰色砂である。遺物は土師器椀の口縁部破片１点である。古代中層面の遺構であり，時期は10世紀前半と推定される。

3429号土坑（ＳＫ3429，第45図）

Ｘ191Ｙ94で，ＳＫ3427の南側50cmの位置にある。長軸58cm，短軸41cmの楕円形で，深さ10cmを測る。覆土は暗灰黄色砂で，僅かに炭が混ざる。遺物は製塩土器がある。製塩土器は破片が細かく接合はしないが，バケツ型になると思われる。底径10cm前後に復元できそうな，外面に指頭圧痕がみられる底部片が１点ある。古代中層面検出の遺構であり，時期は10世紀前半と推定される。

3431号土坑（ＳＫ3431，第45図）

Ｘ190Ｙ94で，ＳＫ3429の南西１ｍに位置する。長軸51cm，短軸45cmの楕円形で，深さ10cmを測る。覆土は黒色砂質シルトで，炭と焼土が混ざる。遺物は製塩土器の小片が１点出土している。古代中層

面の遺構であることから，10世紀前半と推定される。

3438号土坑（ＳＫ3438，第38・39図）

Ｘ188Ｙ93に位置する。38cm×35cmの円形の土坑で，深さ８cmである。覆土は黒褐色砂質シルトで，柱根と思われる木片が残っている。ＳＢ５の西柱列から若干ずれているが，柱根が残っており，覆土が柱穴の掘形埋土と同じ黒褐色砂質シルトであることから，ＳＢ５の柱穴の一つと考えられ，ＳＢ５は３間×２間の側柱建物といえる。遺物は出土していない。時期は10世紀前半と推定される。

3465号土坑（ＳＫ3465）

Ｘ182Ｙ84で，ＳＢ７の南東１ｍに位置する。28cm×23cmの楕円形の土坑で，深さ12cmである。覆土は黒褐色砂で，灰オリーブ色砂が混ざる。遺物は小片ばかりであるが，須恵器瓶肩部，土師器椀，製塩土器が出土している。古代中層面の遺構であることから，10世紀前半と推定される。

4225号土坑（ＳＫ4225，第47図，図版36）

Ｘ161Ｙ87に位置する。42cm×30cmの楕円形で，深さ14cmを測る。覆土はオリーブ灰色砂質土である。遺物は179の須恵器杯と，土師器片である。179はやや内湾気味の杯で，底部はヘラキリである。時期は９世紀後半と推定される。

4248号土坑（ＳＫ4248，第47図）

Ｘ164Ｙ90に位置する。長軸69cm，短軸35cmの楕円形で，深さは10cmを測る。覆土はオリーブ灰色砂質土で礫が混ざる。遺物は土師器片と178の須恵器杯である。178は高台裏に墨痕が認められる。時期は９世紀後半と推定される。

4280号土坑（ＳＫ4280，第45図）

Ｘ164Ｙ94に位置する。1.4ｍ×１ｍの不整形の土坑で，深さは18cmである。覆土は暗オリーブ灰色砂質土で，下位に礫が混ざる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

4281号土坑（ＳＫ4281，第45図）

Ｘ164Ｙ94に位置し，ＳＫ4280の南西に近接する。直径１ｍの円形の土坑で，深さは14cmである。覆土は礫混じりの灰色砂質シルトで，僅かに炭を含む。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

4296号土坑（ＳＫ4296，第41・43図）

Ｘ165Ｙ92に位置する。長軸92cm，短軸52cmの楕円形の土坑で，深さは８cmと浅い。覆土は灰色砂質シルトである。ＳＢ12の東柱列上にあり，ＳＢ12と関連する施設の可能性がある。遺物は出土していないが，ＳＢ12との関係から時期は９世紀後半と推定される。

4313号土坑（ＳＫ4313，第47図）

Ｘ167Ｙ93で，ＳＢ11とＳＢ12の間に位置する。21cm×17cmの円形土坑で，深さは９cmである。覆土は暗褐色砂質土である。遺物は180の須恵器杯が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

4332号土坑（ＳＫ4332，第45図）

Ｘ171Ｙ93に位置する。70cm×28cmの楕円形の土坑で，深さは10cmである。覆土は２層に分かれ，上層は灰色砂質土で僅かに炭を含むもので，下層はオリーブ灰色砂質土である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

4352号土坑（ＳＫ4352，第45図）

Ｘ170Ｙ94に位置し，ＳＡ１の西側に近接する。長軸94cm，短軸48cmで，深さ12cmを測る。覆土は２層に分かれ，上層は灰色砂質土で炭と有機質が僅かに混ざる。下層はオリーブ灰色砂質土である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

4358号土坑（ＳＫ4358，第45図）

Ｘ170Ｙ97で，ＳＢ８の東側１ｍに位置する。長軸1.2ｍ，短軸0.9ｍで三角形状を呈する土坑で，深さは10cmである。覆土は２層に分かれ，上層は灰色砂質土で僅かに炭が混ざり，下層はオリーブ灰色砂質土である。覆土上面に礫が載った状態で検出されている。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

4431号土坑（ＳＫ4431，第46図）

Ｘ168Ｙ90に位置する。集石遺構ＳＸ4425の下部から検出された遺構である。54cm×46cmの円形で，深さ12cmを測る。覆土は灰色砂質土である。遺物は出土していないが，土坑の時期はＳＸ4425との関係から９世紀後半と推定される。

4432号土坑（ＳＫ4432，第46図）

Ｘ168Ｙ90で，ＳＫ4431の南東40cmに位置する。ＳＫ4431と同様にＳＸ4425の下部から検出された遺構である。42cm×28cmの楕円形で，深さは12cmを測る。覆土はオリーブ灰色砂質土で，灰色砂質土が混ざる。遺物は出土していないが，時期は９世紀後半と推定される。

4433号土坑（ＳＫ4433，第46図）

Ｘ161Ｙ88に位置する。集石遺構遺構ＳＸ4204の下部から検出された遺構である。84cm×50cmの楕円形で，深さ10cmである。覆土はオリーブ灰色砂質土である。遺物は出土していないが，土坑の時期はＳＸ4204との関係から９世紀後半と推定される。

Ｃ　溝

501号溝（ＳＤ501，第25・48図）

調査区西側を流れる自然河川ＳＤ552の東肩付近を北流する溝である。ＳＤ552がほぼ埋まった後に掘り込まれた溝である。幅1.3ｍ，深さ約30cmを測る。覆土は灰白色粘質シルト，灰白色砂質シルトからなり，有機質，炭が混ざる。遺物は外面黒色，内面赤色の土師器片が１点出土している。ＳＤ552の堆積後の遺構であることから，時期は９世紀後半以降と推定される。

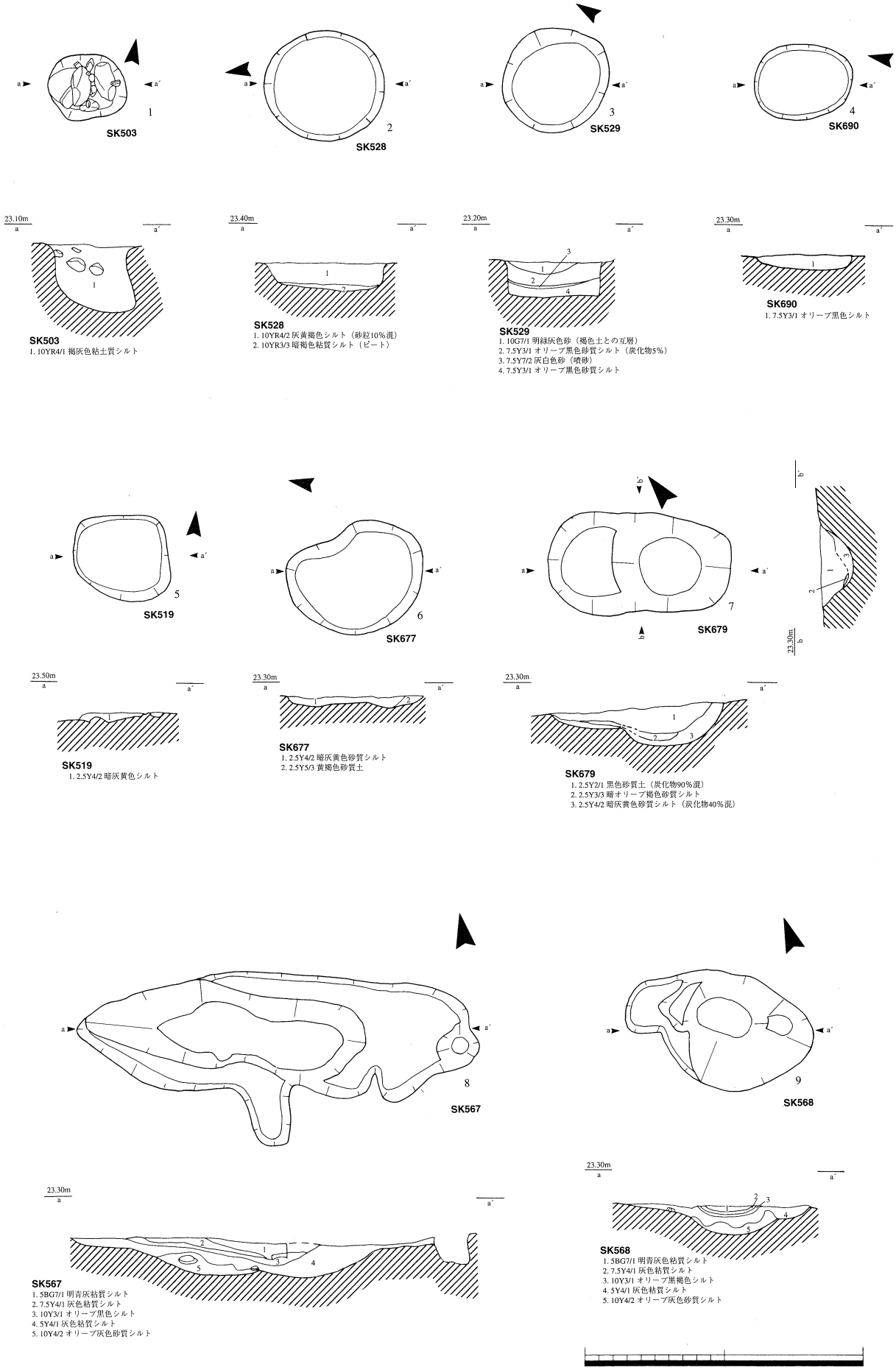
502号溝（ＳＤ502，第25・48・50図，図版36・37）

自然河川ＳＤ552の東側肩の１～２ｍ東を平行して北流する溝である。幅3.7ｍ，深さ40cmを測る。覆土は黒褐色砂質土，黄灰色砂質土である。Ｘ208Ｙ213付近で，ＳＤ650を切る。SD650がほぼ埋まった後に掘り込まれた溝で，肩はしっかりしており，人為的に掘られたものと思われる。遺物は全体を通して比較的多く，186～192以外にも土師器椀，皿，甕，須恵器瓶，杯などが出土している。186は土師器甕で，包含層出土の甕口縁部255と接合している。調整は外面上半カキメ，下半は条の荒いタタキで，深く刻まれている。内面下半はタタキ当て具痕をハケ状工具で消している。内面上半にはタール状の焦げ？が付着しているが，外面への付着はみられない。187は底部糸切り痕を削った土師器椀である。188は軟質で白っぽい胎土の須恵器である。190･191は高台裏に墨痕が認められる。遺物の時期は188がやや古い様相を持つが，概ね９世紀後半のものである。このことから，ＳＤ502の時期は９世紀後半と推定される。

505号溝（ＳＤ505，第25・48図）

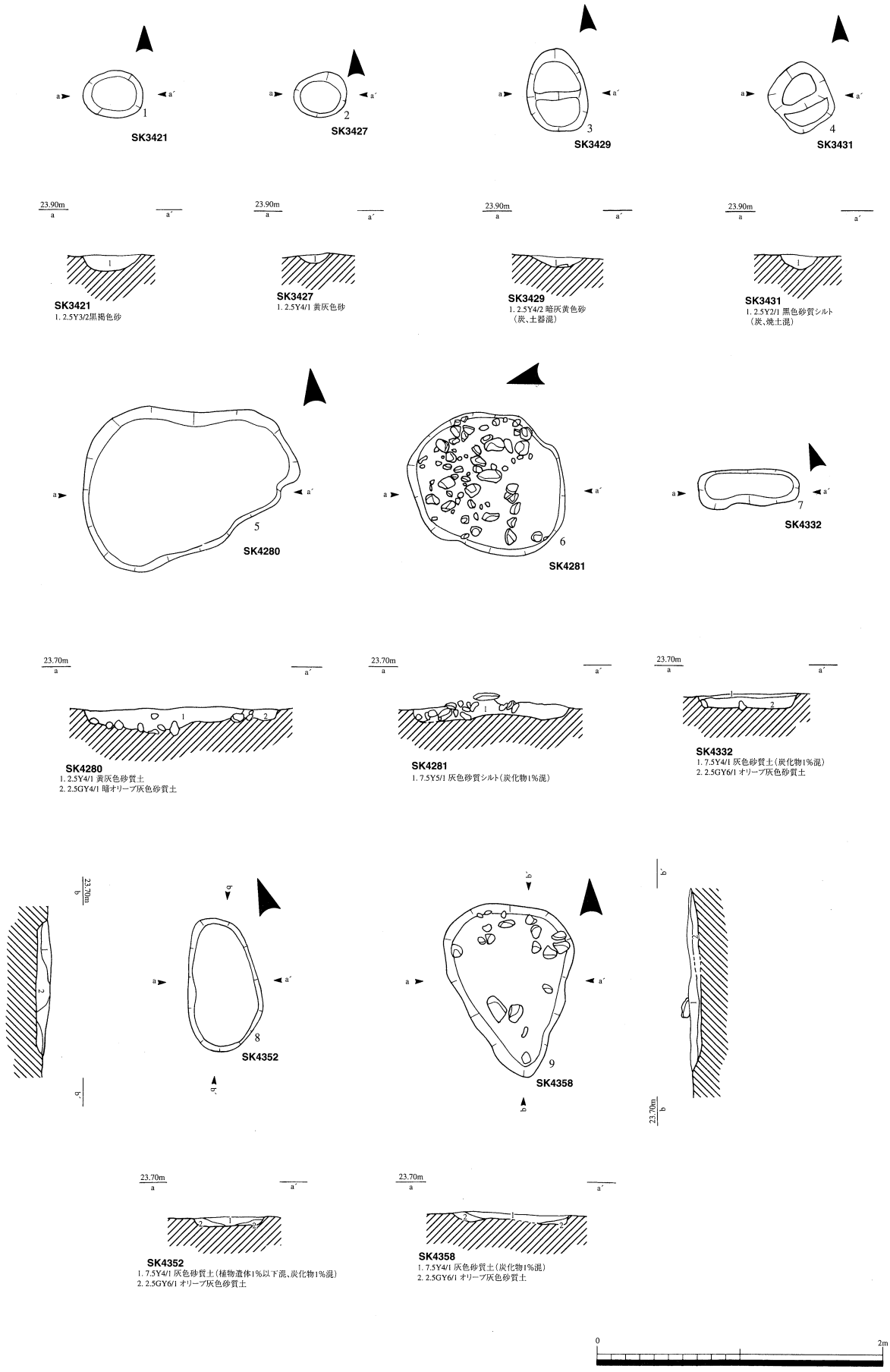
ＳＤ502と自然河川ＳＤ552の東側肩の間を流れる溝で，Ｘ242Ｙ107付近で屈曲し，ＳＤ501に切られている。幅約70cm，深さ30cmを測る。覆土は灰色粘土質シルトが主体である。遺物は散発的に土師器片が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

512号溝（ＳＤ512，第35図，図版16）



第44図　遺構実測図

1.SK503　2.SK528　3.SK529　4.SK690　5.SK519　6.SK677
7.SK679　8.SK567　9.SK568



第45図　遺構実測図

1.SK3421　2.SK3427　3.SK3429　4.SK3431　5.SK4280　6.SK4281
7.SK4332　8.SK4352　9.SK4358

X225Y122付近に位置する。ＳＤ513・514と約２ｍ間隔で並び，畠のさく（畝間）の部分にあたると考えられる。覆土は黒褐色砂質シルトである。ＳＤ513・514も含めて，さく及び畝構成土をプラント・オパールの分析に出しており，その結果イネ科植物が確認されている。このことから，イネ科植物の畑作あるいは，敷藁や稲藁堆肥による施肥などの可能性が考えられている[註3]。遺物は出土していないが，ＳＢ１との関係から９世紀後半の畠と推定される。

513号溝（ＳＤ513，第35・47図，図版16・36）

ＳＤ512と同様に畠のさくの部分にあたる。ＳＤ513内部及び周辺の「畝」部分から171の須恵器甕が出土している。外面肩～中位にかけては平行で，下位は斜めに叩いている。内面は上位は当て具痕を消しているが，下位は同心円の当て具痕が残る。口縁部の破片はなく，頸部で打ち欠いたものと考えられる。時期は９世紀後半と推定される。

514号溝（ＳＤ514，第35図，図版16）

ＳＤ512と同様に畠のさくの部分にあたる。177は土師器椀の底部である。時期は９世紀後半と推定される。

515号溝（ＳＤ515，第35図，図版16）

ＳＤ514の西側２ｍに位置しており，ＳＤ512～514と同様に畠のさくにあたると考えられる。ＳＤ521・646・647とは一続きの溝になると思われる。時期は９世紀後半と推定される。

516号溝（ＳＤ516，第36図，図版16）

ＳＢ３を巡る溝である。幅約80cm，深さ10cm～15cmを測る。覆土は暗灰黄色砂質シルトである。時期は９世紀後半と推定される。

520号溝（ＳＤ520，第35図）

X239Y119からX235Y119付近へ流れる溝である。幅約60cm，深さ10cmである。道路状遺構ＳＦ523の東側を併走する溝で，側溝と考えられる。覆土は黒褐色砂質シルトで，ＳＦ523と同じである。時期は９世紀後半と推定される。

530号溝（ＳＤ530，第36図，図版16）

ＳＢ２の北側を巡る溝である。幅52cm，深さ８cmを測る。覆土は黒褐色シルトで，僅かに炭を含む。遺物は土師器片が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

540号溝（ＳＤ540，第36図，図版16）

ＳＢ２の南側を巡る溝である。幅34cm，深さ12cmを測る。覆土は２層に分かれ，上層は黒褐色シルトで僅かに炭を含むもので，下層はにぶい黄色砂質シルトである。時期は９世紀後半と推定される。

566号溝（ＳＤ566，第49図）

X235Y115付近に位置し，弧を描く短い溝である。幅1.4ｍ，深さ８cmを測る。覆土は２層に分かれ，上層は黒褐色砂質シルトで，下層は暗灰黄色砂質シルトである。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

600号溝（ＳＤ600，第50図，図版37）

調査区北東隅に位置する。幅2.6ｍ，深さ30cmを測る自然流路である。破片が多いが，比較的まとまって遺物が出土している。193～196で，193は口縁端部外面に沈線を巡らせた土師器甕である。194・195は底部糸切り無調整である。196は甕胴部破片である。時期は９世紀後半と推定される。

655号溝（ＳＤ655，第36図，図版16）

ＳＢ２の東側を巡る溝である。幅56cm，深さ14cmである。覆土は２層に分かれ，上層は黒褐色シル

トで僅かに炭を含み，下層は灰オリーブ色砂質シルトである。時期は９世紀後半と推定される。

3475号溝（ＳＤ3475，第50図，図版37）

Ｂ２Ｅ地区の西側を北流する自然流路で，古代後期のＳＤ2020の下層にあたる。古代中層面との層位差は認められない。遺物は図示した197～203以外にも比較的多く出土している。199は内面黒色処理の土師器椀で，高台が剝がれたもので，古代後期の遺物が流れ込んだものと考えられる。202は軟質で白っぽい胎土の須恵器杯で，８世紀代のものと考えられる。遺物の時期は若干の時期幅を持つが，主体は９世紀後半にある。

3476号溝（ＳＤ3476，第49図）

Ｘ190Ｙ102付近から北流する自然流路である。最大幅８ｍで，深さは26cmと浅い。覆土は黄灰色粘土質シルトである。遺物は出土していないが，古代中層面を剝がさないと検出できないことから，時期は９世紀後半と推定される。

3478号溝（ＳＤ3478，第49図）

Ｂ２Ｅ地区の南東隅を北へ流れる自然流路である。遺物は出土していないが，ＳＤ3476と同様に古代中層面を剝がさないと検出できない。このことから，時期は９世紀後半と推定される。

4203号溝（ＳＤ4203，第49・50図，図版37）

Ｂ３地区の北東隅を流れる自然流路である。Ｂ３地区の南東隅を流れるＳＤ4202とは蛇行して一続きの溝になると考えられる。覆土は暗オリーブ灰色粘質シルトである。遺物は散発的に出土している。204は鍋の口縁部で，９世紀後半のものと考えられる。

4235号溝（ＳＤ4235，第49図）

Ｘ162Ｙ89付近に位置する溝で，ＳＤ4405とは一続きの溝になると思われる。幅22cm，深さ12cmを測り，覆土はオリーブ黒色砂質土が主体である。遺物は土師器椀，須恵器杯の小片が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

4259号溝（ＳＤ4259，第49図）

Ｘ165Ｙ89付近に位置する。幅33cm，深さ８cmで，覆土はオリーブ灰色砂質土が主体である。遺物は須恵器杯口縁部がある。時期は９世紀後半と推定される。

4260号溝（ＳＤ4260，第43図）

ＳＢ12の西側を巡る溝である。幅85cm，深さ９cmを測る。覆土は黄灰色砂質シルト，オリーブ灰色砂質土で，僅かに炭が混ざる。遺物は土師器片が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

4288号溝（ＳＤ4288，第43図）

ＳＢ12の東側を巡る。幅60cm，深さ10cmで，覆土はオリーブ灰色砂質シルトが主体である。遺物は外面タタキの土師器甕胴部の破片が出土している。時期は９世紀後半と推定される。

4321号溝（ＳＤ4321，第43図）

ＳＢ12の北側を巡る溝である。ＳＤ4311と一続きになると思われる。幅35cm，深さ７cmを測る。覆土は灰色砂質土が主体である。遺物は出土していないが，時期は９世紀後半と推定される。

4390号溝（ＳＤ4390，第43図）

ＳＤ4288の東隣を併走する溝である。ＳＢ12との関係は不明である。幅55cm，深さ７cmで，覆土は黒色砂質シルト，緑灰色砂質シルトで，僅かに炭が混ざる。遺物は出土していないが，時期は９世紀後半と推定される。

4408号溝（ＳＤ4408，第49図）

X166Y88に位置する。幅40cm，深さ8cmの小規模な溝で，北流する。覆土はオリーブ灰色砂質土で，僅かに炭が混ざる。遺物は土師器片が出土している。時期は9世紀後半と推定される。

D　道路状遺構

523号道路状遺構（ＳＦ523，第35図，図版16）

X220Y118付近からX239Y119にかけて約22個の小穴が並ぶもので，道路を造る時の基礎工事に起因するものと考えられる。小穴は直径50cm～60cmの円形で，深さは5cm前後の浅いものである。南側は溝状になっているが，本来は連続した小穴であったと思われる。覆土は黒褐色砂質シルトである。ＳＦ523の東側を併走する溝ＳＤ520は側溝の可能性が考えられる。ＳＦ523はＳＢ１と一部重複しているが，出土遺物からは周辺の畠跡も含めて時期差は認められず，9世紀後半の範疇に収まるものと考えられる。

E　集石遺構

4204号集石遺構（ＳＸ4204，第46・47図，図版18・35）

X160Y88付近に位置する。4ｍ×3ｍの範囲で15cm以下の礫が密集するもので，掘り込みは認められない。人為的なものではなく，自然の礫層の隆起と思われる。中世面では地震による礫層隆起が確認されており，ＳＸ4204は地震による隆起の可能性が考えられる。礫に混ざって，181～185の遺物が出土している。181は内外面赤彩の土師器椀で，底部に糸切り痕が残る。182は双耳瓶の口縁部である。184は高台裏に線刻らしき痕がある。185は底部回転ヘラキリの杯である。時期は9世紀後半～10世紀初めにかけてのものである。

4206号集石遺構（ＳＸ4206，第46図，図版18）

X159Y90付近に位置する。2.1ｍ×2.1ｍの不整形の掘り込みを持ち，覆土上面に拳大の礫が密集するものである。礫は自然のものなのか，人為的なものなのか不明である。覆土は灰色砂礫が主体である。遺物は土師器片が出土している。時期は9世紀後半と推定される。

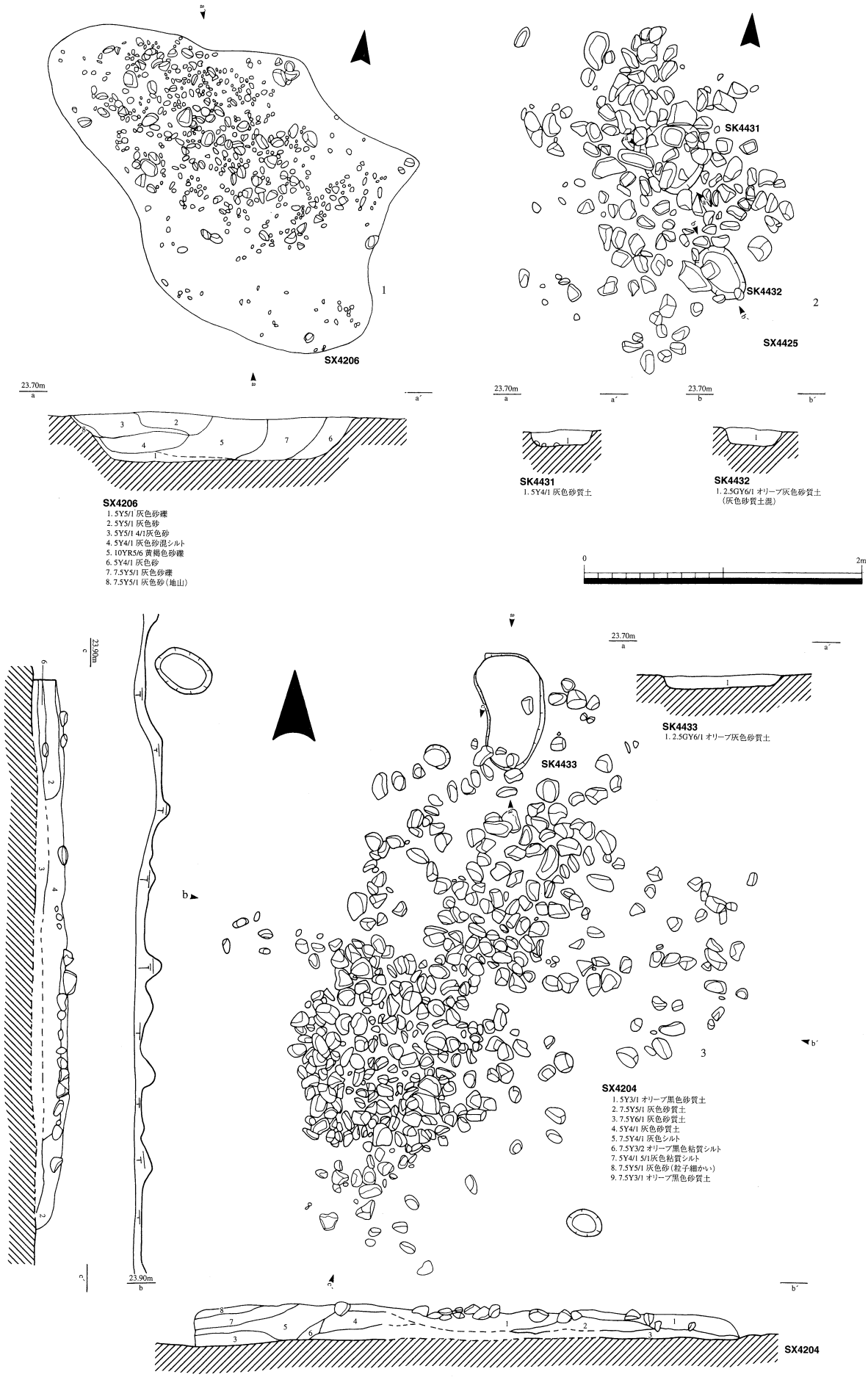
4425号集石遺構（ＳＸ4425，第46・47図，図版18・35）

X168Y90付近に位置する。2.2ｍ×1.6ｍの範囲で15cm以下の礫が密集するもので，掘り込みは認められない。ＳＸ4204と同様に自然の礫層隆起と考えられる。礫に混ざって174～176の遺物が出土している。174は片面に煤が付着した砥石である。石材は砂岩と思われる。175は横瓶で，ＳＸ4204出土の破片と接合している。時期は9世紀代のものである。

F　包含層出土の遺物

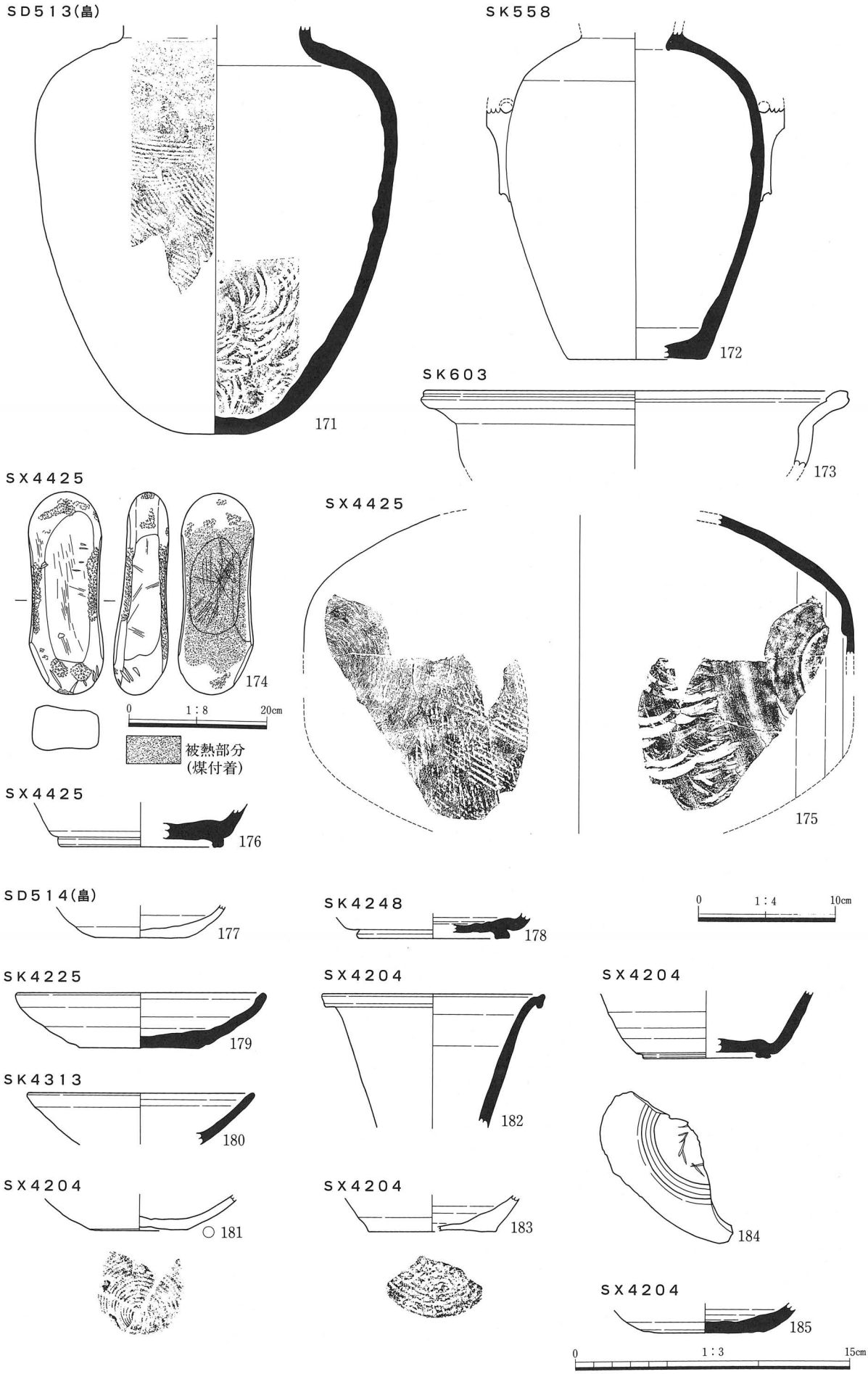
土師器（第51～53図，図版37～40）

椀，皿の食膳具は205～244である。205は土師器内黒椀である。内面は丁寧なヘラミガキである。206は内外面とも黒色処理された椀である。205･206は6世紀～7世紀初め頃のものである。207は外面黒色内面赤彩の椀で，底部は糸切り無調整である。208・210・211は内面に丁寧なミガキを施す。218は内外面ともに赤彩の椀である。221は内面に煤が付着する。207～221の椀は口径が11cm～12cm･13cm～14cm･16cmの3法量に分かれる。222～230の底部はいずれも糸切り痕が残る。226は内黒土器としているが，内外面及び断面にもタール状の煤が付着しており，ロクロ目が残っていることから黒色処理はされていない可能性がある。224･229は底部外面下半にナデが施されている。233は甕の底部と考えられ，内面にタール状の煤が付着している。234は古代後期の遺物の流入品と思われる。235～244は皿で，いずれも底部は糸切り無調整である。235はやや厚めの平高台状の底部の皿である。238は口径11cm，器高2.6cmの小皿である。表面の摩滅が著しく調整は不明である。244は235とよく似た皿の底部で，9世

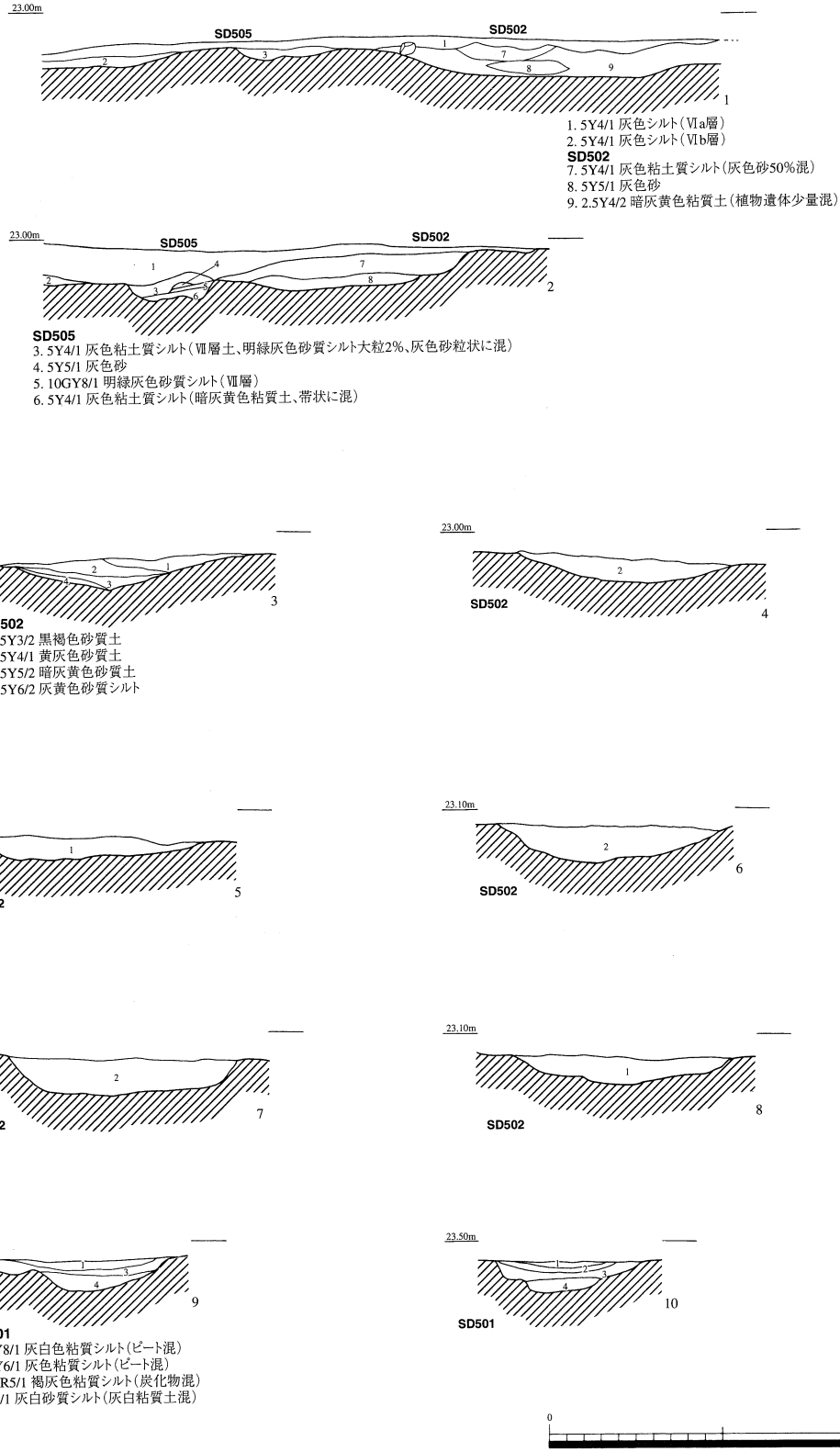


第46図　遺構実測図

1.SX4206　2.SX4425・SK4431・SK4432　3.SX4204・SK4433

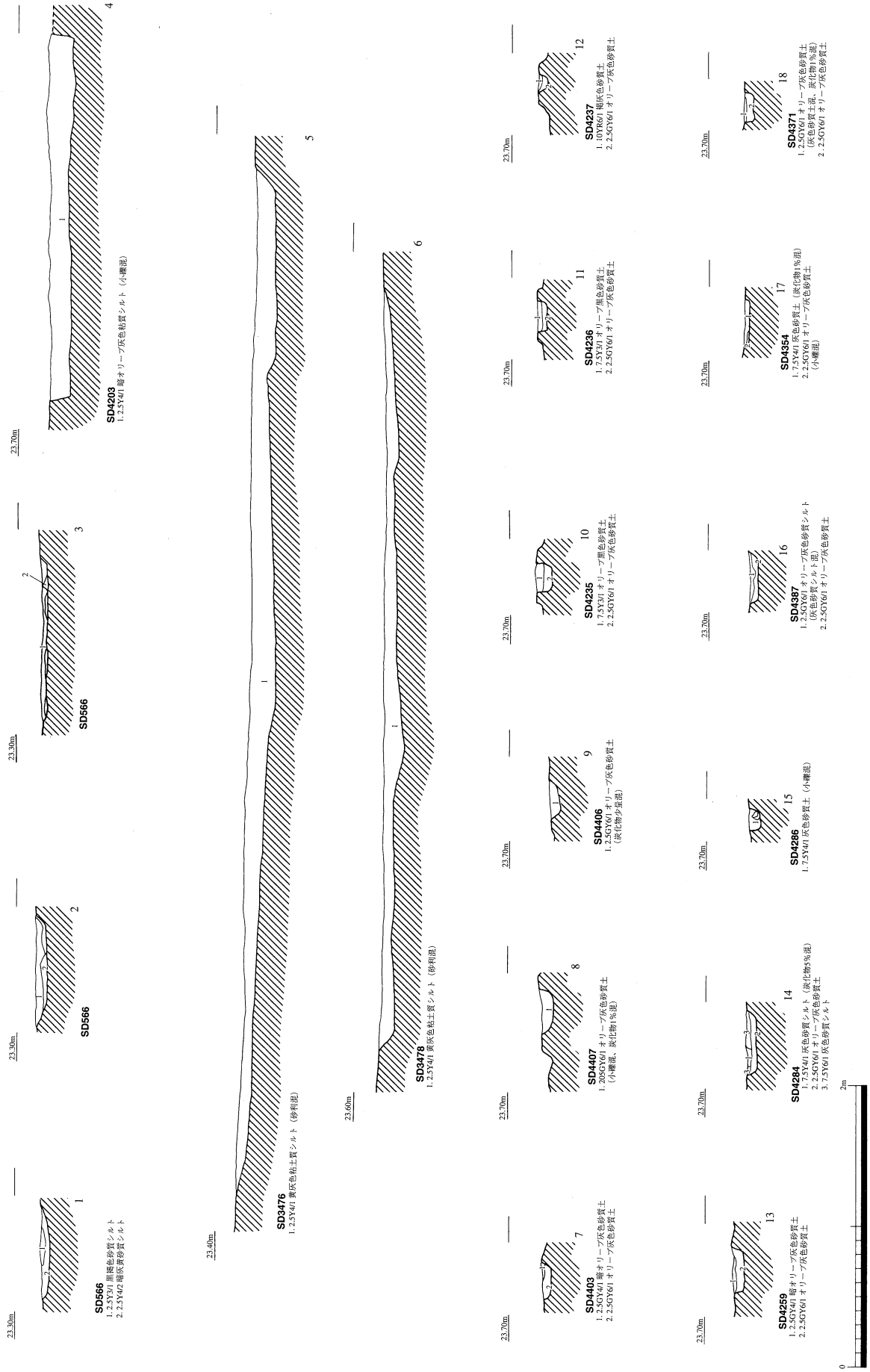


第47図　遺物実測図　(171～173・175　1/4, 174　1/8, 176～185　1/3)
SD513 (171)　SK558 (172)　SK603 (173)　SX4425 (174～176)　SD514 (177)
SK4248 (178)　SK4225 (179)　SK4313 (180)　SX4204 (181～185)



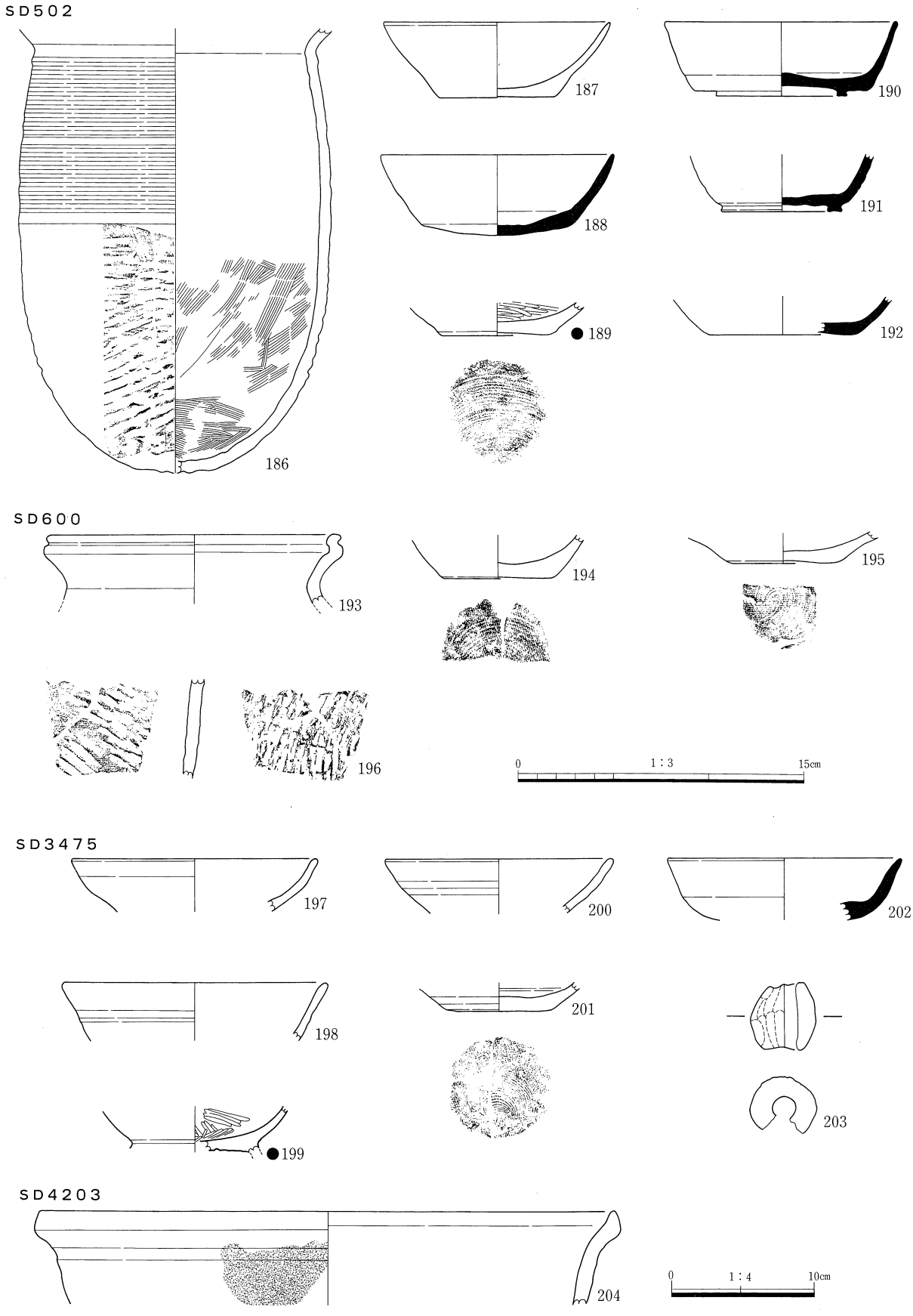
第48図　遺構実測図

1・2.SD502・SD505　3～8.SD502　9・10.SD501



第49図　遺構実測図

1～3.SD566　4.SD4203　5.SD3476　6.SD3478　7.SD4403　8.SD4407　9.SD4408
10.SD4235　11.SD4236　12.SD4237　13.SD4259　14.SD4284　15.SD4286　16.SD4387
17.SD4354　18.SD4371



第50図　遺物実測図　(186・204　1/4, 187～203　1/3)

SD502 (186～192)　SD600 (193～196)　SD3475 (197～203)　SD4203 (204)

紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。

煮沸具については245～250，255～274である。245～250は小型甕である。245の口縁端部は巻き込みによる段がある。口縁部・底部ともに内面は黒色を呈しており，底部外面には薄く煤が付着する。246の口縁部外面にはタール状の煤が付着している。255の甕口縁はＳＤ502出土の甕186と接合した。257の甕は口縁端部をつまみ上げたもので，胴部上位はカキメ，下位はタタキで仕上げている。甕の口縁には端部をつまみ上げるもの，外反し途中で内側に折れ曲がるもの，端部を巻き込むもの，巻き込んだ端部の内側に段が付くものの大きく４つのタイプがみられる[注4]。274は甕胴部破片で，外面格子状タタキ，内面は放射状当て具と思われる。

271・272は口縁端部をつまみ上げ外面に沈線を巡らせている。外面はミガキが施されており，大型の鉢になると思われる。271の内面にはタール状の煤が付着している。271と272とは同一個体になる可能性がある。

須恵器（第54・55図，図版41・42）

食膳具は275～308で，杯蓋，杯，鉢がある。杯蓋は比較的少なく，275～281である。275は頂部が丸みを帯びるもので，やや古手のものである。280は端部が断面三角形状に尖っている。281はつまみを持たないものと考えられる。282～304の杯は若干の時間幅があるが概ね９世紀後半に位置づけられる。282は９世紀後半でも古手の様相を持つ。297・302のような底部内面の立ち上がりにへこみのできるタイプは９世紀後半のものである。303は外面体部下半に「十」状の墨書が認められる。古代前期の遺物では墨痕の認められるものは数点あるが，文字状のものは唯一303のみである。305～307は８世紀後半代の遺物で，他に比べてやや古手である。

貯蔵具は309～324で，甕，双耳瓶，短頸壺である。311～314は双耳瓶・長頸瓶で，いずれも破片数が少なく全体の形が解るものはない。313は断面四角形で，二孔の耳になると思われる。317・318は外側に開く高台を持ち，短頸壺になると思われる。317の底部内面には自然釉が掛かる。320・321・323・324は底部に高台が剝がれた痕跡が認められることから，短頸壺と思われる。323はやや内湾気味に立ち上がり，鉢になる可能性もある。324は体部外面にタタキメが残る。322は底部及び体部下半にケズリを施しており，双耳瓶または短頸壺になると思われる。

その他（第52図，図版44）

251・252は管状土錘である。251は外面に成形時の指痕が残っている。252は重さ16.1ｇを量る。253は鉄鍋の一部と考えられる。254は石製紡錘車で，石材は泥岩かと思われる。

ま　と　め

包含層出土の遺物は以上である。８世紀代の須恵器杯など，若干古手の遺物が混ざるが，主体は９世紀後半～10世紀初頭のものに占められている。遺物は遺構出土のものが少なく，一括性には欠けるが，以下のような様相を持っている。

出土遺物における土師器と須恵器の比率であるが，土師器９割に対し須恵器は１割しかない。これは，個体数ではなく，破片数による比率である。食膳具については，図示したものと遺構出土の破片数による比率で，土師器：須恵器で７：３となる。越中では，食膳具が須恵器主体から土師器主体へ転換するのは９世紀第３～４四半期と考えられている[注5]。五社遺跡の場合は，土師器９割で，食膳具に限っても７割であり，土師器主体に変わってきているといえる。

土師器煮沸具については，全体の形が解るものは少ないが，ロクロ成形甕で体部調整は外面上半にカキメ・ケズリ，下半にタタキ目で，内面下半に当て具痕を残す「北陸型甕」が主体である[注6]。体部下

半のタタキ目については，内面の調整に4パターンがみられる。1；当て具痕をナデで消すもの，2；当て具痕をハケ状の工具で消し，ハケメが残るもの，3；円形の当て具痕が残るもの，4；放射状または扇形の当て具痕が残るものの4パターンがあり，1または2の内面に当て具痕を残さないものが一定量みられる。タタキ具については平行線のものが主体であるが，格子状のものも若干みられる。また，荒い条で，深く刻まれるものが多い。

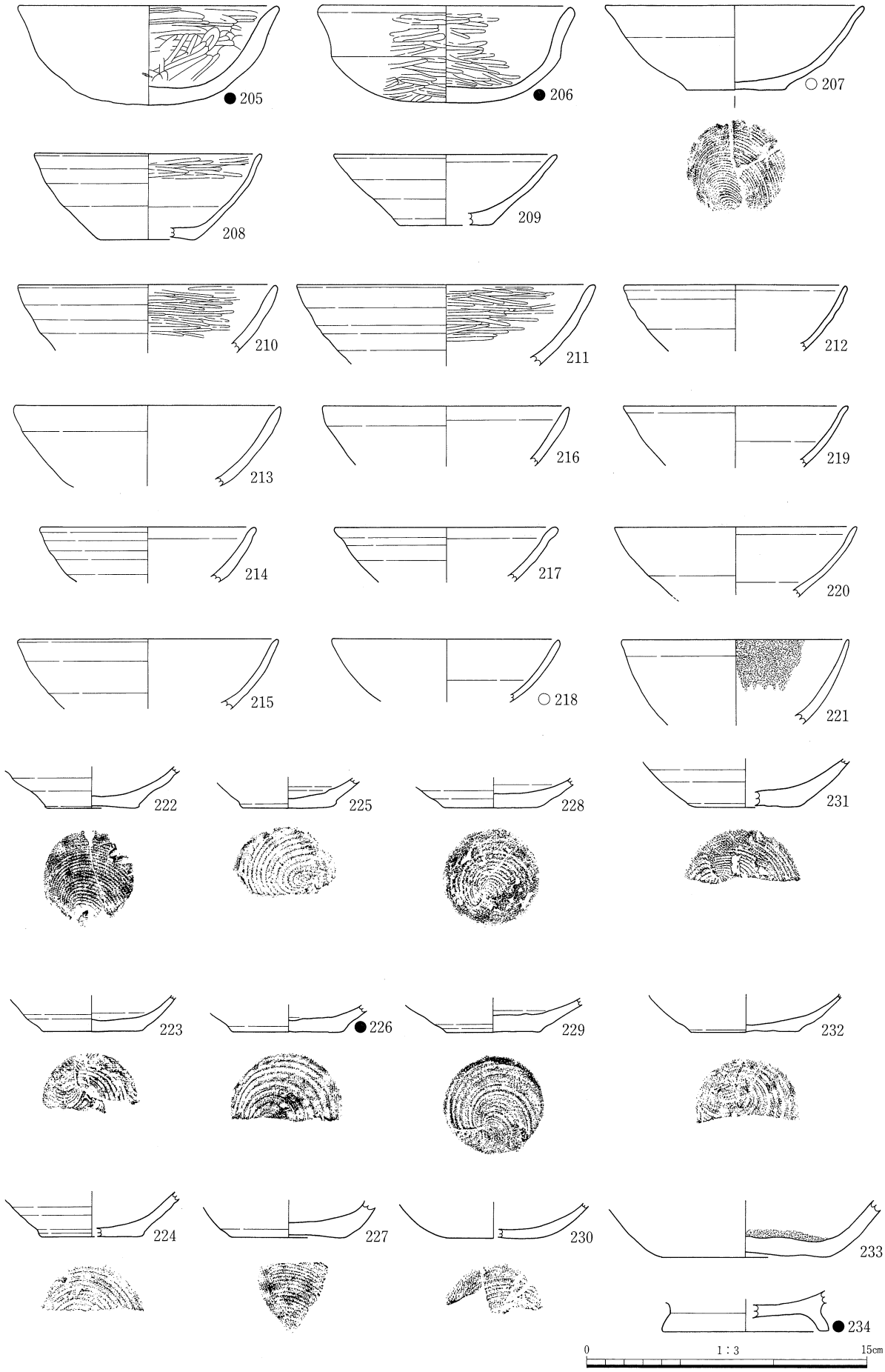
須恵器貯蔵具については，「双耳瓶などの長頸瓶が8割以上を占める」という9世紀後半の特徴と一致している。この他に，五社遺跡では短頸壺等の壺類が一定量あるということと，破片数からみて甕類が殆どないという特徴を持つが，概ね越中における9世紀後半代の様相と一致する。（三島道子）

注1　河西健二　1994「雑記　建物遺構－古墳から近世まで－」『埋蔵文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団
注2　宮本長二郎　1996「第5章第5節　棟持柱」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
注3　第二分冊　自然科学分析　1　プラント・オパール分析
注4　斉藤隆他　1991『南中田D遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
注5　池野正男　1997「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会
注6　池野正男　1988『椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要』小杉町教育委員会
　　岸本雅敏　1982「Ⅷ　東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編』上市町教育委員会

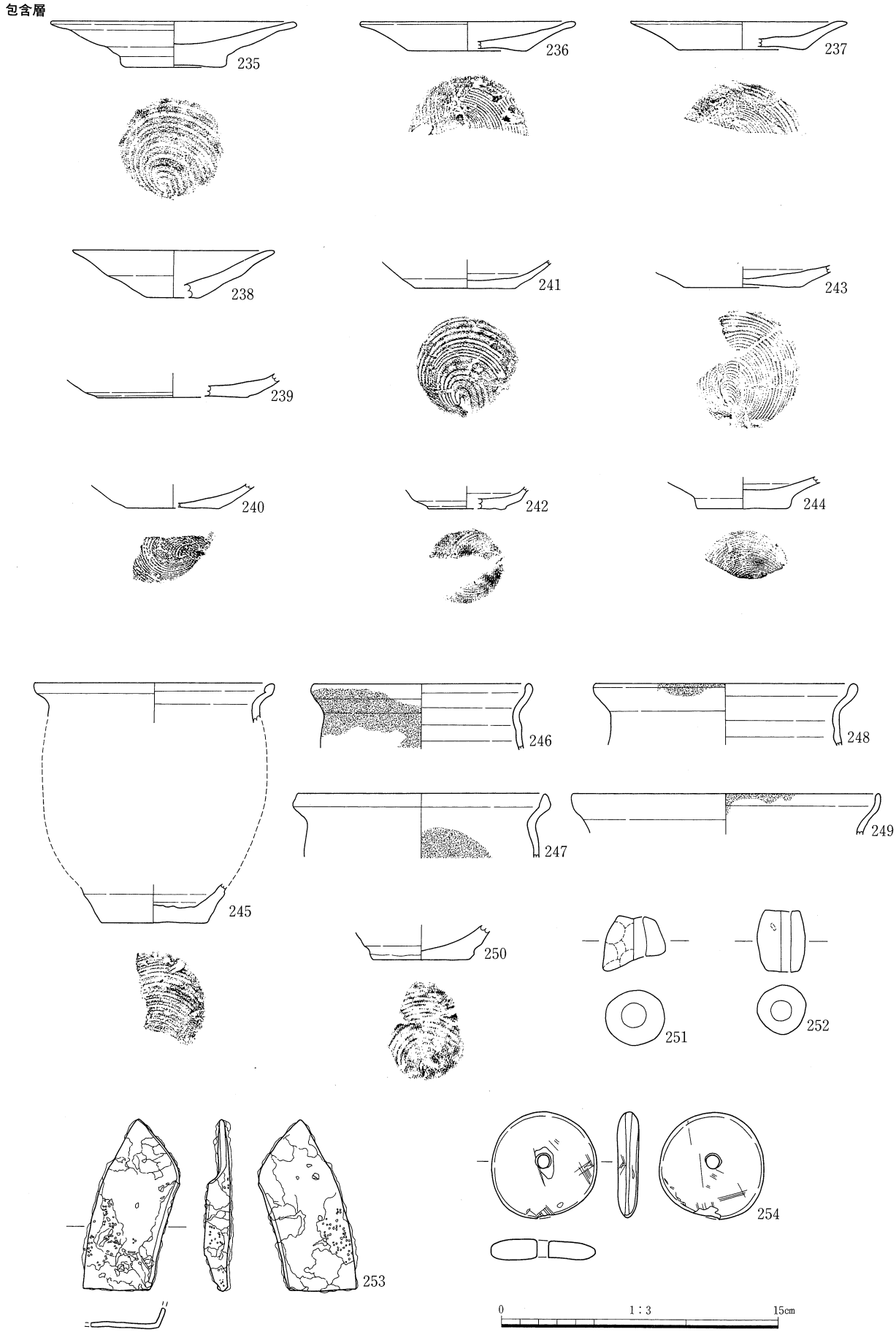
引用・参考文献

宇野隆夫他　1989　『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室
河西健二　1995「富山県の竪穴遺構と建物空間（その1）」『大境』第17号　富山考古学会
北野博司　1996「古代北陸の煮沸具」『古代の土器研究4　煮沸具』古代の土器研究会
酒井重洋他　1993『任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡』富山県埋蔵文化財センター
酒井重洋他　1994『吉倉B遺跡』富山県埋蔵文化財センター
関　清他　1990『栗山楮原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡』富山県埋蔵文化財センター
出越茂和　1997「北陸古代後半における椀皿食器（前）」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会
北陸古代土器研究会　1988『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編

包含層

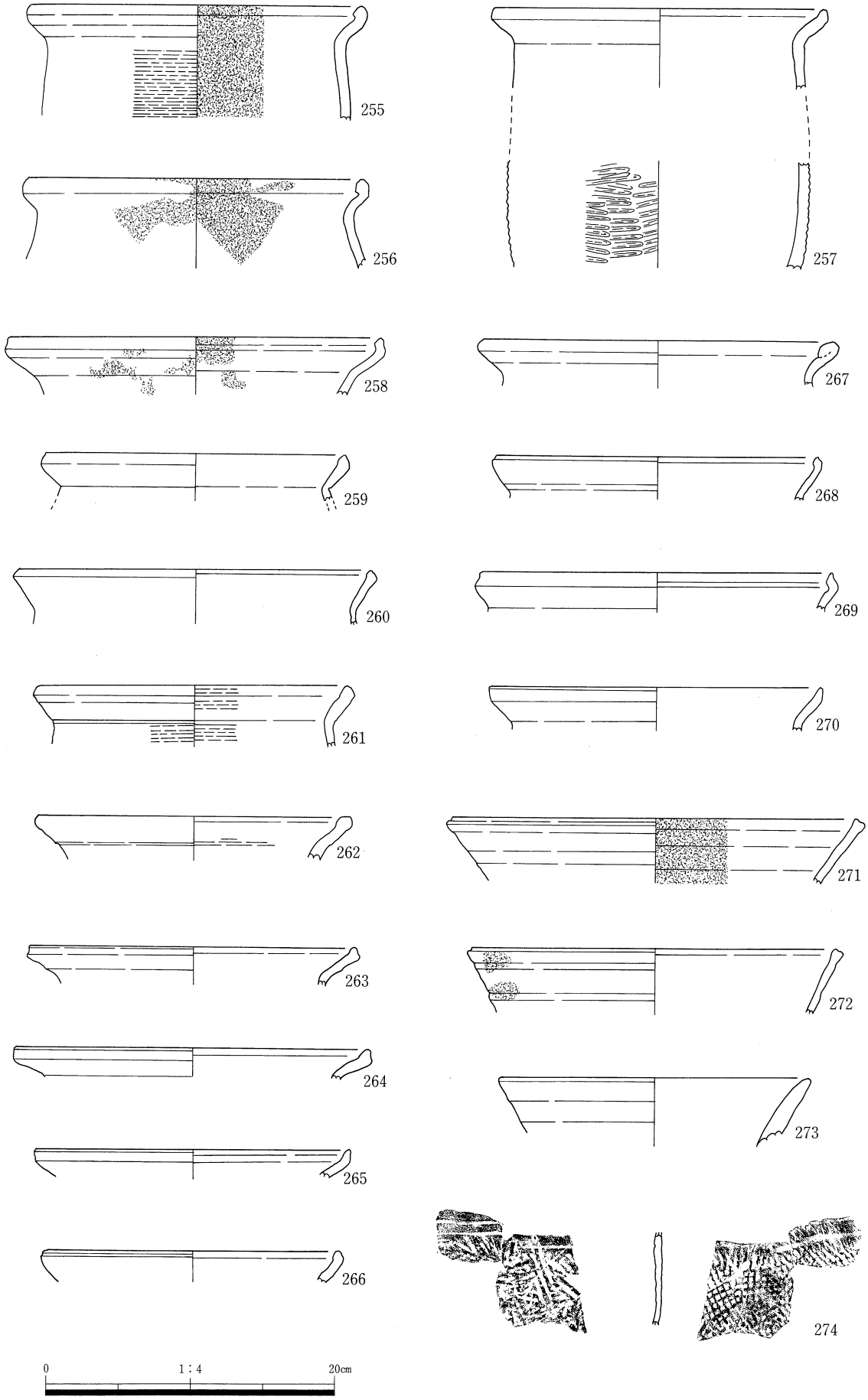


第51図　遺物実測図　(1/3)

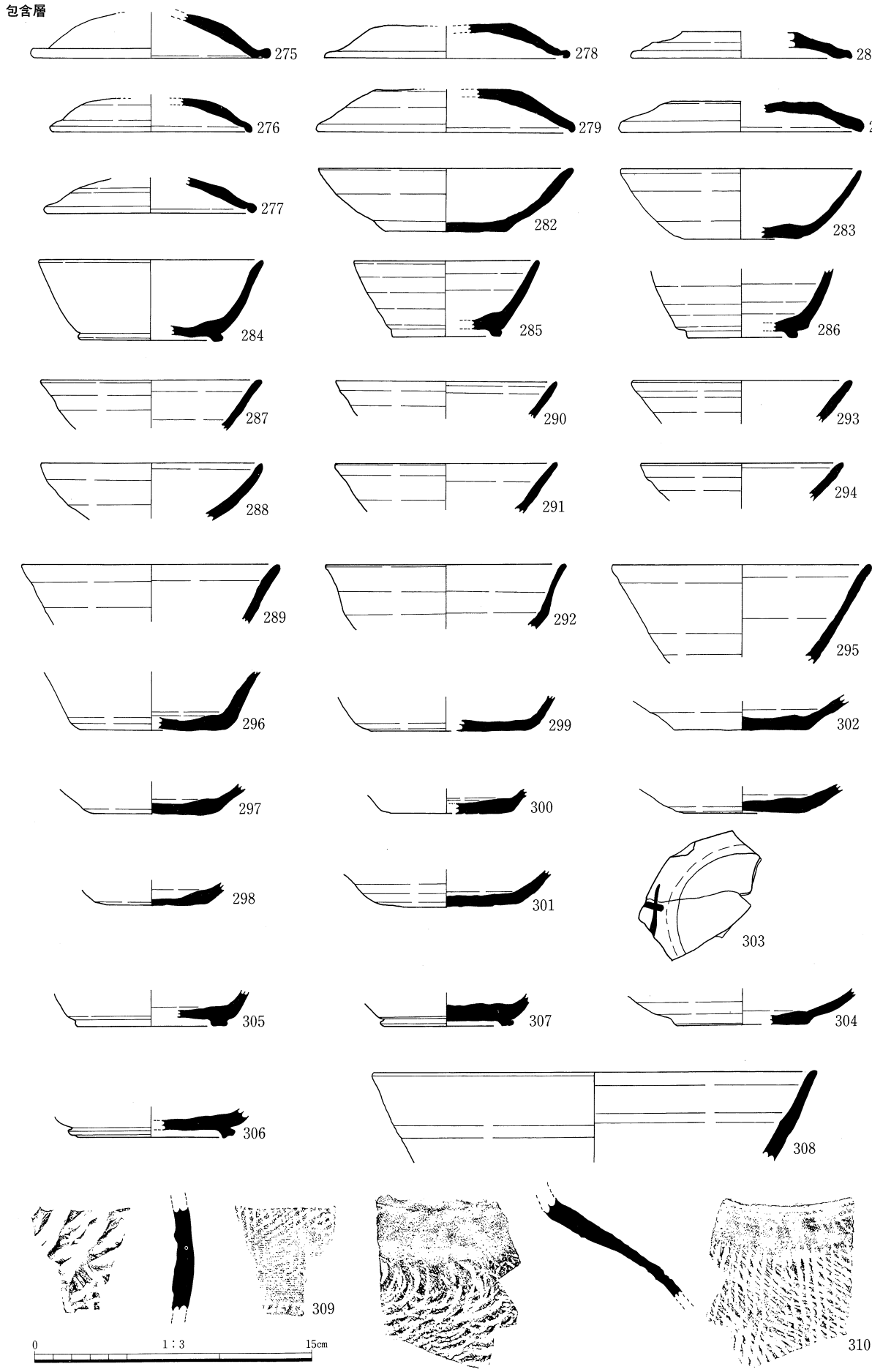


第52図　遺物実測図　(1/3)

包含層

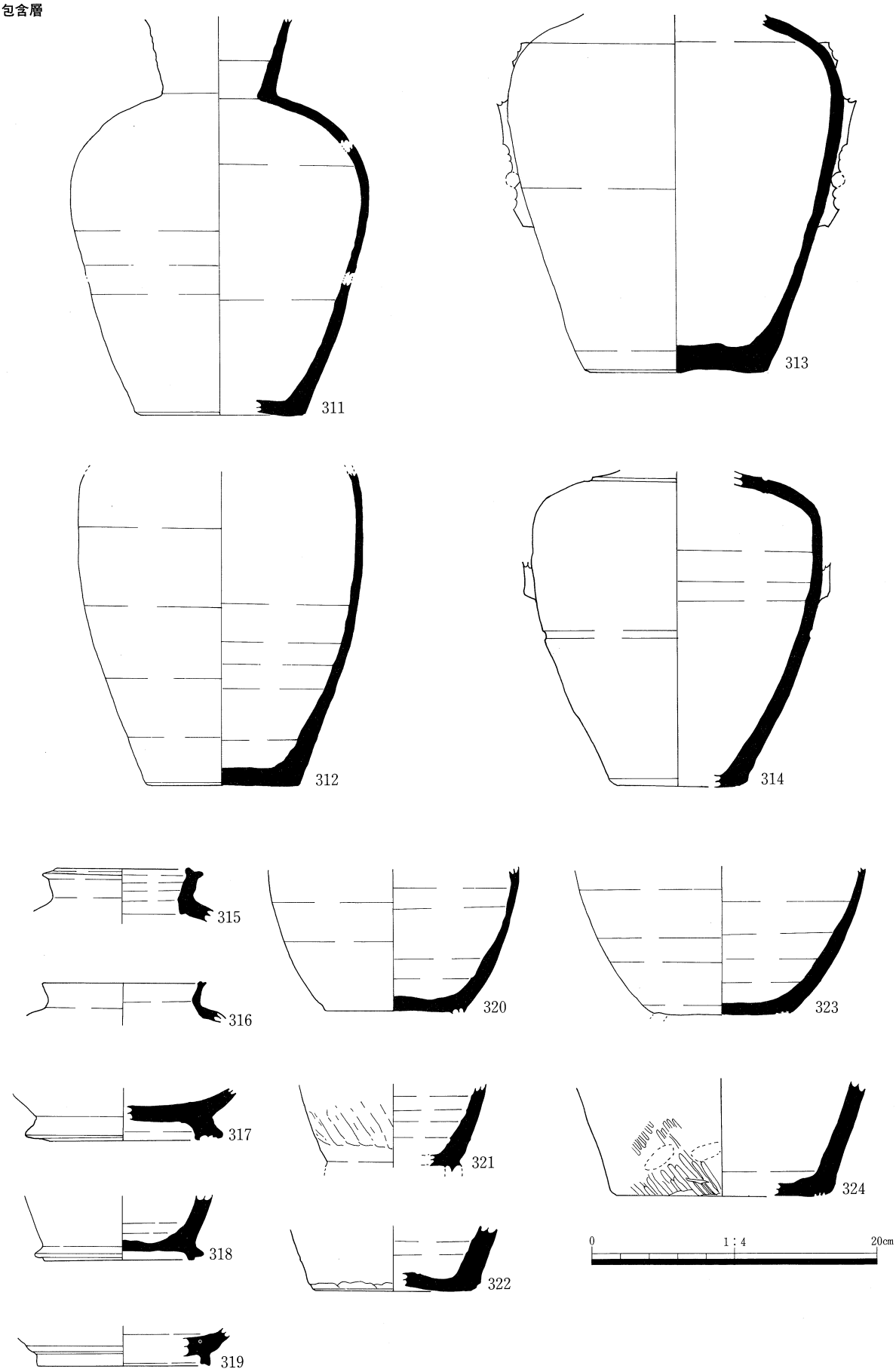


第53図　遺物実測図　(1/4)



第54図　遺物実測図　(1/3)

包含層



第55図　遺物実測図　(1/4)

第 4 表　竪穴建物一覧（古墳時代）

遺構番号	主　軸	規模(m) 東西×南北	床面積 (m²)	深さ (m)	柱穴	カマド	炉	屋内施設	床面状況	挿　図	図版番号
SI546	N－6°－E	6.2×5.8	35.96	0.24		○	○	土坑1 穴1	中央部分的に貼床？	5，6	11，12
SI547	N－7°－W	5.5×5.8	31.9	0.28	2本	○	○	土坑1 周溝 ベッド状段差	南側貼床	8，9	11, 13, 14
SI574	N－31°－W	3.9×4.6	17.94	0.12		×	○			11	14
SI644	N－29°－W	(3.4)×4.7	(15.98)	0.16		○	○	穴1		12，13	14

（　）内の数値は復元値

第 5 表　掘立柱建物一覧（古代前期）

No.	地区	桁行×梁行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積 (m²)	棟方向	方　位	柱形式	時代	備　　考	挿　図	図版番号
1	A	2×2	4.48	3.8	17	南北棟	N－8°－W	総柱	9C後	SF523より新しい。	35	16
2	A	2×2	3.56	3.6	12.8	南北棟	N	側柱	9C後	雨落状の溝がめぐる。	36	16
3	A	2×2	5	4.2	21	南北棟	N－4°－W	側柱	9C後	雨落状の溝がめぐる。	36	16
4	B2E	2×2	6	4.08	28.8	南北棟	N－11°－W	側柱	9C後 ～10C前		38，39	16，17
5	B2E	2×2	4.4	3.7	16.3	南北棟	N－2°－W	側柱	9C後 ～10C前		38，39	16，17
6	B2E	1×2	3.52	4.24	14.9	南北棟	N－5°－W	側柱	9C後 ～10C前	1×1間の付属施設あり。 3×2間の可能性あり。	38，40	17
7	B2E	1×1	2.8	2.32	6.5	南北棟	N	側柱	9C後 ～10C前		40	17
8	B3	2×2	3.6	2.8	10.1	東西棟	N－82°－W	側柱	9C後		40，41	18
9	B3	3×2	4.2	3.08	12.9	東西棟	N－80°－W	側柱	9C後		41，42	18
10	B3	2×2	4.16	3.52	14.6	南北棟	N－8°－E	側柱	9C後	棟持柱列あり。	41，42	18
11	B3	2×2	3.6	3.44	12.4	東西棟	N－88°－W	側柱	9C後		41，43	18
12	B3	4×2	5.4	3.48	18.8	南北棟	N－9°－E	側柱	9C後	棟持柱列あり。 雨落状の溝がめぐる。	41，43	18

第 6 表　柱穴一覧（古代前期）

建物番号	柱　穴　番　号	出　土　遺　物
SB1	SP680，681，682，683，684，685，686，687，688	
SB2	SP531，532，533，534，536，537，538，539	土師器，須恵器，加工材
SB3	SP517, 656, 657, 658, 659, 670, 671, 672, 673, 674, 675	土師器，内黒，須恵器，加工材
SB4	SP3401, 3402, 3403, 3405, 3452, 3453, 3454, 3455, 3475	
SB5	SP3423，3424，3426，3434，3439，3442，3479	土師器
SB6	SP3441, 3443, 3444, 3446, 3447, 3448, 3449, 3450, 3451	
SB7	SP3461，3462，3463，3464	
SB8	SP4338，4339，4340，4342，4343，4344，4346，4355	
SB9	SP4359，4361，4364，4365，4370，4374，4377，4399	土師器
SB10	SP4379，4384，4394，4395，4396，4397，4398，4399，4400，4401，4402	土師器
SB11	SP4314，4315，4316，4317，4318，4319，4320，4419	
SB12	SP4254, 4256, 4289, 4290, 4291, 4292, 4294, 4297, 4298, 4299, 4300, 4301, 4303, 4310, 4322, 4323, 4369, 4416	土師器，須恵器
SA1	SP4336，4348，4350，4351	

第7表　溝一覧（古墳時代・古代前期）

遺構番号	流　路	規模(幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿　図	図版番号
SD500	S→N	3.1－0.36	土師器	5C後～		21，25	
SD501	S→N	1.3－0.27	土師器	9C後？		25，48	
SD502	S→N	3.72－0.4	土師器，須恵器，種子	9C後		25，48	
SD505		0.72－0.26	土師器	9C後		25，48	
SD508		0.38－0.1		9C後			
SD516	E→W	0.82－0.15	土師器	9C後	SB3を巡る	36	16
SD520	N→S	0.66－0.1		9C後	道路跡か？(側溝)？	35	
SD530	E→W	0.52－0.08	土師器	9C後	SB2を巡る	36	16
SD540	E→W	0.34－0.12		9C後	SB2を巡る	36	16
SD552	S→N	14.4－0.83	土師器，須恵器	6C～9C	自然地形（谷）	24, 25, 27	15
SD553	S→N	10.6－0.72	須恵器, 建築材, 加工材	6C～9C	SD552（谷）の一部	24	
SD555	SE→NW	1.64－0.18	下駄	6C～9C	SD552（谷）の一部	24	
SD566	S→N	1.38－0.08		9C後？		49	
SD572	SE→NW	7.1－0.19	土師器	5C後～		21	
SD573	SE→NW	3.82－0.27	土師器	5C後～		12, 13	
SD600	NW→SE	2.58－0.29	土師器，須恵器	9C後			
SD650	S→N	4.82－0.38	土師器，須恵器	5C後～		19, 21	
SD655	N→S	0.56－0.14		9C後	SB2を巡る	36	16
SD800	S→N	2.2－0.55	大足	6C～9C	SD552（谷）の一部	24, 25, 26	
SD3475	SW→NE	6.7－1.4	土師器，須恵器，製塩土器，土錘	9C後			
SD3476	S→N	8.1－0.26		9C後		49	
SD3478	SW→NE	8.2－0.18		9C後		49	
SD4202	SW→NE	4.0－0.07	土師器	9C後	SD4203と同一？		
SD4203		2.22－0.2	土師器，須恵器	9C後		49	
SD4235		0.22－0.12	土師器，須恵器	9C後		49	
SD4236		0.21－0.06		9C後		49	
SD4237		0.14－0.03		9C後？		49	
SD4259	SW→NE	0.33－0.08	須恵器	9C後		49	
SD4260	S→N	0.85－0.09	土師器	9C後	SB12を巡る	43	
SD4284	(E→W)	0.44－0.08		9C後？		49	
SD4286		0.32－0.08	土師器	9C後？		49	
SD4288	N→S	0.6－0.1	土師器	9C後	SB12を巡る	43	
SD4321		0.35－0.07		9C後	SB12を巡る	43	
SD4354	(NE→SW)	0.34－0.04		9C後？		49	
SD4371		0.24－0.11		9C後？		49	
SD4387		0.38－0.08		9C後？		49	
SD4390		0.55－0.07		9C後		43	
SD4403	S→N	0.4－0.07		9C後？		49	
SD4405		0.25－0.06		9C後	SD235と同一か？		
SD4407		0.36－0.11		9C後？		49	
SD4408	S→N	0.4－0.08	土師器	9C後		49	

第8表　土坑一覧（古墳時代・古代時期）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出土遺物	時期	備考	挿図	図版番号
SK503	隅丸	0.58－0.48－0.24		9C後？		44	
SK511	方	5.68－2.7－0.48		5C後～		18	
SK519	方	0.68－0.62－0.08	土師器	9C後	SB3	36, 44	
SK528	円	0.88－0.8－0.18		9C後	SD573を切る	44	
SK529	円	0.76－0.74－0.26		9C後	噴砂あり	44	
SK545	方	3.95－2.7－0.36	土師器，炭化材	5C後～		15	14
SK558	楕円	0.32－0.26－0.07	須恵器	9C後			
SK567	不整形	2.9－1.2－0.32		9C後？		44	
SK568	楕円	1.32－0.86－0.23		9C後？		44	
SK593	不整形	4.24－3.88－0.29		5C後～		17	
SK599	不整形	2.26－2.22－2.15	土師器	5C後～		17	14
SK603	円	0.28－0.26－0.08	土師器	9C後～			
SX645	不整形	4.14－＊＊－0.19	土師器	5C後～		12, 13	14
SK649	不整形	4.44－＊＊－0.15	土師器	5C後～	SD650に切られる	19	
SK676	楕円	0.52－0.38－0.24	焼石	9C後	SB3の柱穴か？	36	
SK677	楕円	0.96－0.84－0.09		9C後	SB3	36，44	
SK679	楕円	1.3－0.7－0.3		9C後		44	
SK690	楕円	0.7－0.54－0.11		9C後？		44	
SK691	不整形	2.52－1.7－0.26	土師器	5C後～		18	
SK692	円	0.3－0.28－0.1	土師器	5C後～			
SK3421	楕円	0.43－0.34－0.12	製塩土器	10C前		45	
SK3427	円	0.37－0.33－0.08	土師器	10C前		45	
SK3429	楕円	0.58－0.41－0.1	製塩土器	10C前		45	
SK3431	楕円	0.51－0.45－0.1	製塩土器	10C前		45	
SK3438	円	0.38－0.35－0.08		10C前	SB5の柱穴か？	38, 39	
SK3465	楕円	0.28－0.23－0.12	土師器，須恵器，製塩土器	10C前			
SX4204	不整形	3.9－＊＊－0.3	土師器，赤彩，須恵器	9C後	集石	46	18
SX4206	不整形	2.14－2.1－0.35	土師器	9C後	集石	46	18
SK4208	楕円	0.44－0.3－0.14	土師器	9C後			
SK4215	円	0.36－0.28－0.08	土師器	9C後			
SK4225	楕円	0.42－0.3－0.14	土師器，須恵器	9C後			
SK4234	楕円	0.7－0.18－0.07	土師器	9C後			
SK4238	楕円	0.42－0.26－0.12	土師器	9C後			
SK4248	楕円	0.69－0.35－0.1	土師器，須恵器	9C後			
SK4277	円	0.25－0.27－0.06	土師器	9C後			
SK4278	円	0.36－0.42－0.19	須恵器	9C後			
SK4280	不整形	1.38－1.07－0.18		9C後？		45	
SK4281	円	1.06－0.97－0.14		9C後？		45	
SK4296	楕円	0.92－0.52－0.08		9C後	SB12？	41, 43	
SK4313	円	0.21－0.17－0.09	土師器，須恵器	9C後			
SK4332	楕円	0.7－0.28－0.1		9C後？		45	
SK4352	楕円	0.94－0.48－0.12		9C後？		45	
SK4358	楕円	1.2－0.9－0.1		9C後？		45	
SK4372	円	0.24－0.18－0.04	土師器	9C後			
SK4375	円	0.32－0.26－0.08	土師器	9C後			
SK4418	円	0.25－0.22－0.1	石製品	9C後			
SX4425	不整形	＊＊－＊＊－＊＊	土師器，須恵器，砥石	9C後	集石	46	18
SK4431	円	0.54－0.46－0.12		9C後	SX4425の下	46	
SK4432	楕円	0.42－0.28－0.14		9C後	SX4425の下	46	
SK4433	楕円	0.84－0.5－0.1		9C後	SX4204の下	46	

遺構が切り合っていて計測不能な場合＊で示した。

第9表　土器一覧(1)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
7	1	19・20	SI546		土師器	甕	18.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	2	19・20	SI546		土師器	甕	(20.8)－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	内外面に煤付着
	3		SI546		土師器	甕	22.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	4	19	SI546		土師器	甕？	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色	5C中～後	
	5		SI546		土師器	壺？	＊＊－＊＊－6.3－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	6		SI546		土師器	壺	8.4－11.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	7	19・20	SI546		土師器	高杯	19.6－16.7－12.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	8	19・20	SI546		土師器	高杯	18.0－14.6－12.4－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	9	19・21	SI546		土師器	高杯	20.0－	5YR5/6	明赤褐色	5C中～後	内面に煤付着，内外面に赤彩
	10	19・20	SI546		土師器	高杯	17.3－	10YR8/3	浅黄橙色	5C中～後	
	11	19	SI546		土師器	高杯	17.5－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	カマド北側中央
	12	19	SI546		土師器	高杯	18.0－	7.5YR8/8	黄橙色	5C中～後	
	13	19	SI546		土師器	鉢	19.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	14	19・21	SI546		土師器	高杯	＊＊－＊＊－15.7－	10YR8/4	浅黄橙色	5C中～後	
	15	19・21	SI546		土師器	高杯	＊＊－＊＊－12.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	16	19・21	SI546		土師器	高杯	＊＊－＊＊－12.0－	10YR5/4	にぶい黄褐色	5C中～後	フイゴの羽口に転用？
	17		SI546		土師器	高杯	＊＊－＊＊－12.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	18	19	SI546		土師器	高杯		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	19	21	SI546			炉壁				5C中～後	中央炉の近くで発見(カマド寄り)溶解面，黒色の溶解物(鉄ではない)内面砂8%の剥落状態
10	21	22・23	SI547		土師器	甕	(16.0)－25.2－	7.5YR7/6	橙色	5C中～後	煤付着
	22	22・23	SI547		土師器	甕	15.9－22.9－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	煤付着
	23	22	SI547		土師器	甕	16.6－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	24	22	SI547	X239Y114	土師器	甕	16.0－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	外面に煤付着
	25	22	SI547		土師器	壺		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	26	22・23	SI547		土師器	壺	8.0－	2.5YR7/8	橙色	5C中～後	
	27	22・23	SI547		土師器	高杯	23.8－	10YR8/3	浅黄橙色	5C中～後	
	28	22・23	SI547		土師器	高杯	17.6－	2.5Y7/3	にぶい橙色	5C中～後	内外面に赤彩？
	29	22	SI547		土師器	高杯		10YR8/4	浅黄橙色	5C中～後	
	30	22	SI547		土師器	高杯	20.0－	7.5YR8/4	浅黄橙色	5C中～後	
	31		SI546・547	X244Y119	土師器	高杯		5YR6/6	橙色	5C中～後	
	32	22	SI547		土師器	高杯	＊＊－＊＊－12.0－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	33		SI547		土師器	高杯		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
14	35		SI574		土師器	壺	10.0－	10YR4/1	褐灰色	5C中～後	
	36		SI574		土師器	高杯	16.0－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	
	37		SI574		土師器	高杯		10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	床直上
	38	24	SI644	X250Y122	土師器	甕	14.0－24.4－	5Y6/1	灰色	5C中～後	内外面に煤付着
	39		SI644	X250Y122 X248Y125	土師器	甕		2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	煤付着
	40		SX645	X246Y124	土師器	甕		2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	41	24	SX645・SD573	X246Y124	土師器	甕		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内外面に煤付着
16	42	24	SK545	X245Y110	土師器	甕	18.0－27.9－	2.5Y5/2	暗灰黄色	5C中～後	煤付着
	43	24	SK545	X245Y118	土師器	甕	13.0－32.0－7.6－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	44	25	SK545		土師器	壺	12.0－15.5－	2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	
	45		SK545		土師器	甕	10.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	46	24	SK545		土師器	高杯	20.5－	2.5YR7/4	淡赤橙色	5C中～後	
	47	24	SK545		土師器	高杯		2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	48		SK545		土師器	高杯	＊＊－＊＊－16.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	49	25	SK545		土師器	高杯	19.9－13.8－13.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	50	25	SK545		土師器	高杯	17.4－12.3－12.1－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	
	51	25	SK545		土師器	高杯	21.4－14.0－12.8－	10YR8/4	浅黄橙色	5C中～後	
	52	25	SK545		土師器	高杯	14.7－18.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	

法量の数値は左から口径・器高・底径・高台径を示し，残存部が少なく計測不能な場合は＊で示し，数値が何の値を示すかわかるようにした。

第 9 表　土器一覧(2)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径㎝)	色調		年代	備考
16	53	25	SK545		土師器	高杯	20.8－15.1－13.4－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	煤付着
20	54	26	SK599		土師器	甕	15.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	5C中～後	外面に煤付着
	55	26	SK599		土師器	甕		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内面に煤付着
	56		SK599		土師器	壺	11.5－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	
	57	26	SK599	X249Y125 X248Y125	土師器	高杯	20.7－	7.5YR7/3	にぶい橙色	5C中～後	内面に煤付着
	58		SK599		土師器	高杯	15.8－	10YR8/2	灰白色	5C中～後	赤彩
	59	26	SK599		土師器	高杯	＊＊－＊＊－13.5－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	60	26	SK599		土師器	高杯	＊＊－＊＊－15.1－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	61	27	SK649	X221Y115 X222Y114	土師器	甕	16.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	62	27・28	SK649		土師器	甕		2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	内外面に煤付着
	63		SK691		土師器	甕	17.8－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	外面に煤付着
22	64	27・28	SD650		土師器	甕	16.4－25.9－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	外面に煤付着
	65	27・28	SD650		土師器	甕	18.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	66	27	SD650		土師器	甕	18.6－	2.5Y8/4	淡黄色	5C中～後	
	67	27	SD650	X246Y123	土師器	甕	15.1－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	内面底部に煤付着
	68	27	SD650		土師器	甕	16.0－22.6－7.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	69	27・28	SD650		土師器	高杯	18.6－11.7－12.1－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	
	70	27・28	SD650		土師器	高杯	＊＊－＊＊－13.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	71		SD650	X218Y115	土師器	高杯		7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	
	72	27	SD650	X238Y111	土師器	高杯		2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	
	73	27・28	SD650		土師器	蓋	12.0－	10YR8/3	浅黄橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	74	27	SD650	X223Y113 X231Y114	黒色土器	無台椀	＊＊－＊＊－7.0－			9C後～10C	内黒
	75	27	SD650	X232Y113	土師器	椀	15.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	外面に煤付着
	76		SD650	X227Y114	土師器	椀	12.4－	10YR7/4	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	77		SD650	X233Y113	土師器	無台皿	15.8－3.0－8.6－	10YR8/2	灰白色	9C後～10C	
23	78	29	SD572	X244Y119	土師器	甕	26.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	5C中～後	
	79	29	SD572		土師器	甕	16.0－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	煤付着
	80	29	SD572	X245Y121	土師器	甕		10YR6/2	灰黄褐色	5C中～後	内外黒変，煤付着
	81	29	SD572	X251Y118	土師器	甕		2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	黒変
	82	29	SD572		土師器	甕	11.0－19.8－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	煤付着
	83		SD572		土師器	甕？	11.0－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	84	29	SD572		土師器	壺		2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	底部に煤付着
	85	29	SD572	X246Y120	土師器	高杯		7.5YR7/3	にぶい橙色	5C中～後	
	86	29	SD572		土師器	高杯？	21.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色	5C中～後	内面にみがき処理？
	87		SD572		土師器	高杯？	14.0－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	
28	88	30	SD552	X226Y108	黒色土器	稜椀	13.1－5.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	6C～7C	内黒
	89		SD552	X210Y110	須恵器	杯G		N6/0	灰色	7C	
	90		SD552	X210Y111	土師器	甕	15.0－	10YR6/4	にぶい黄橙色	6C～7C	
	91		SD552	X241Y107	土師器	椀	16.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C代？	内面赤彩・外面黒色
	92	30	SD552	X243Y105	須恵器	甕	(22.4)－47.5－	2.5Y5/1	黄灰色	7C初	
32	108		A	X248Y125 X249Y125	土師器	甕	16.6－26.0－	10YR6/2	灰黄褐色	5C中～後	煤付着
	109	31	A	X247Y123	土師器	甕	16.8－25.2－4.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	110	30	A	X245Y119	土師器	甕	17.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	5C中～後	
	111	30	A	X251Y114	土師器	甕	17.8－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	
	112	30	A	X238Y117	土師器	甕	17.6－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	113	30	A	X239Y114	土師器	甕	18.0－	2.5Y8/3	淡黄色	5C中～後	
	114	30	A	X250Y117	土師器	甕	15.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	外面に煤付着
	115	30	A	X236Y115	土師器	甕	17.2－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	煤付着
	116		A	X236Y115	土師器	甕	＊＊－＊＊－4.0－	5Y8/1	灰白色	5C中～後	
	117	30	A	X251Y117	土師器	甕				5C中～後	
	118		A	X237Y117	土師器	甕	＊＊－＊＊－6.6－	2.5Y7/3	浅黄色	5C中～後	外面黒変

第9表　土器一覧(3)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
33	119	31	A	X213Y116	土師器	壺	16.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	120	31	A	X217Y118	土師器	壺		7.5YR7/3	にぶい橙色	5C中～後	煤付着
	121	31	A	X237Y117	土師器	壺	15.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	122	31	A	X237Y117	土師器	壺	16.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	黒変
	123		A	X241Y115 X241Y116	土師器	壺	16.0－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	内外面に煤付着
	124		A	X244Y129 X245Y126	土師器	壺？	14.0－	7.5YR7/3	にぶい橙色	5C中～後	
	125	31	A	X237Y117	土師器	壺	＊＊－＊＊－8.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	外面に煤付着
	126	31	A	X244Y117	土師器	壺	9.7－	5YR6/4	にぶい橙色	5C中～後	
	127		A	X241Y115 X241Y116	土師器	壺	＊＊－＊＊－3.0－	2.5Y7/2	灰黄色	5C中～後	内面黒変
	128		B3	X167Y88 X167Y97	土師器	壺	＊＊－＊＊－5.0－	2.5Y7/2	浅黄色	5C中～後	内外面に煤付着
	129		A	X236Y118	土師器	小甕	＊＊－＊＊－5.8－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C～10C	煤付着，流れ込み品
	130		A	X214Y117	土師器	壺	＊＊－＊＊－6.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	内外黒変
	131	32	A	X220Y113	土師器	壺	11.8－17.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	内外面に煤付着
	132	32	A	X222Y114 X221Y115	土師器	壺	9.0－10.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	黒変
	133	32	A	X220Y118	土師器	壺	7.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	煤付着
	134	32	A	X219Y116	土師器	壺	8.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	外面黒変
	135		A	X249Y121	土師器	壺	10.0－	2.5Y8/3	浅黄色	5C中～後	
	136		A		土師器	壺	10.8－	2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	黒変
	137		A	X250Y117	土師器	壺	12.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	内面黒変
34	138	32	A	X245Y118	土師器	高杯	17.0－12.2－12.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	139		A	X248Y125	土師器	高杯	(19.9)－	2.5YR6/4	にぶい橙色	5C中～後	
	140		A	X237Y117 X238Y117	土師器	高杯		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	141		A	X243Y119	土師器	高杯	14.5－	2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	内外面黒変
	142		A	X251Y117	土師器	高杯	18.4－	7.5YR7/4	にぶい橙色	5C中～後	煤付着
	143	33	A	X238Y116	土師器	高杯		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	144	33	A	X238Y115	土師器	高杯	＊＊－＊＊－10.0－	10YR6/1	褐灰色	5C中～後	
	145	32	A	X236Y117	土師器	高杯	＊＊－＊＊－12.1－	10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	146	33	A	X250Y116	土師器	高杯		2.5Y6/2	灰黄色	5C中～後	
	147	33	A	X238Y116	土師器	高杯		10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	148	33	A	X245Y126	土師器	高杯		10YR6/2	灰黄褐色	5C中～後	黒変
	149	33	A	X249Y125	土師器	高杯	＊＊－＊＊－11.0－	5Y6/2	灰オリーブ色	5C中～後	
	150	33	A	X250Y122	土師器	高杯		10YR7/3	にぶい黄橙色	5C中～後	
	151	33	A	X250Y125	土師器	高杯		10YR7/2	にぶい黄橙色	5C中～後	
	152	33	A	X237Y117	土師器	高杯		5YR7/6	橙色	5C中～後	
37	153	34	SP673	X213Y117	黒色土器	無台椀	12.6－4.3－6.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	内黒
	154	34	SB03	X210Y115	土師器	無台椀	12.1－3.6－5.4－	10YR8/2	灰白色	9C後～10C	
	155	34	SP671		土師器	無台椀	14.0－5.0－6.2－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C後～10C	煤付着
	156		SB03	X210Y114	土師器	椀	15.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	157		SB03	X211Y116 X211Y115	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－6.2－	5YR7/4	にぶい橙色	9C後～10C	内面に煤付着
	158	34	SB03	X212Y115	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.8－	7.5YR7/3	にぶい橙色	9C後～10C	
	159	35	SB03	X210Y114	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－7.0－	7.5YR6/3	にぶい褐色	9C後～10C	
	160	34	SK519	X209Y116	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.8－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	
	161	34	SB03	X211Y115	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	162	35	SB03	X210Y115	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－8.6	2.5Y8/2	灰白色	10C代	内黒，流れ込み品
	163		SB03	X208Y113	須恵器	杯B	＊＊－＊＊－8.0－	7.5Y6/1	灰色	9C中	
	164	35	SP659		須恵器	瓶		N7/0	灰白色	9C代	
	165		SP672	X210Y115	土師器	小甕	＊＊－＊＊－6.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	
	166	35	SB03	X210Y115	土師器	甕	20.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C中～	煤付着
	167		SD516		土師器	鍋	27.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C後～10C	煤付着
	168		SD516		土師器	甕	(22.0)－	7.5YR8/3	浅黄橙色	9C後～10C	
	169	35	SD530		土師器	甕	20.2－	10YR7/4	にぶい黄橙色		内外面に煤付着，流れ込み品

第 9 表　土器一覧(4)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径･器高･底径･高台径cm)	色調		年代	備考
47	171	36	SD513	X223Y117	須恵器	甕		2.5Y8/1	灰白色	9C後～10C	
	172	36	SK558	X227～232Y112～121	須恵器	双耳瓶	＊＊－＊＊－(10.0)－	N7/0	灰白色	9C後～10C初	胎分2
	173	35	SK603		土師器	鍋	(30.0)－	10YR8/2	灰白色	9C末～10C初	
	175	35	SX4425	X164Y91 X163Y94	須恵器	横瓶		2.5Y6/1	黄灰色	9C代	
	176		SX4425		須恵器	杯B	＊＊－＊＊－8.7－	5B6/1	青灰色	9C代	
	177		SD514	X219Y120 X221Y121	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.0－	5YR6/6	橙色	9C後～10C	
	178		SK4248	X162Y92	須恵器	杯B	＊＊－＊＊－8.2－	N6/0	灰色	9C後～10C	
	179	36	SK4225	X167Y90	須恵器	杯A	13.3－3.0－6.5－	2.5Y7/1	灰白色	9C後～10C初	底部に煤付着
	180		SK4313		須恵器	杯	12.2－	7.5Y6/1	灰色	9C後～10C	
	181	35	SX4204		土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C末～10C	赤彩
	182	35	SX4204	X168Y90 X167Y89	須恵器	双耳瓶	12.0－	5B5/1	青灰色	9C後～10C	
	183		SX4204		土師器	甕	＊＊－＊＊－7.0－	10YR5/3	にぶい黄褐色		
	184	35	SX4204		須恵器	杯B	＊＊－＊＊－7.0－	10BG5/1	青灰色	9C後～10C	底部に記号あり，線刻
	185	35	SX4204	X162Y91	須恵器	杯A	＊＊－＊＊－7.0－	5Y6/1	灰色	9C後～10C	
50	186	36	SD502	X226Y110 X227Y109	土師器	甕		7.5YR7/6	橙色	9C後～10C初	
	187	36	SD502		土師器	無台椀	(11.6)－3.8－(6.0)－	7.5YR5/4	にぶい褐色	9C後～10C	
	188	36	SD502	X210Y111	須恵器	杯A	12.2－4.2－8.0－	2.5Y8/2	灰白色	～9C中	胎分4
	189	37	SD502	X235Y107	黒色土器	無台椀	＊＊－＊＊－5.6－	10YR6/3	にぶい黄橙色	9C後	内黒
	190	36	SD502	X241Y108 X243Y109	須恵器	杯B	12.2－3.9－6.9－	N6/0	灰色		胎分3
	191		SD502	X230Y109	須恵器	杯B	＊＊－＊＊－6.4－	N6/0	灰色	9C後	高台裏に墨痕
	192		SD502		須恵器	杯A	＊＊－＊＊－8.0－	7.5Y7/1	灰白色	9C後	
	193	37	SD600		土師器	甕	(15.0)－	2.5Y8/3	淡黄色		
	194		SD600		土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.4－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C代	
	195	37	SD600		土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.4－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後～10C	黒変
	196		SD600		土師器	甕		7.5YR7/4	にぶい橙色		
	197	37	SD3475	X185Y88	土師器	椀	12.7－	5YR7/6	橙色	9C後～10C	
	198	37	SD3475	X185Y88	土師器	椀	13.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	199	37	SD3475	X185Y88	黒色土器	有台椀		10YR7/4	にぶい黄橙色	10C代？	内黒，流れ込み？
	200	37	SD3475	X185Y88	土師器	椀	11.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	201	37	SD3475	X185Y88	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	内外黒変
	202	37	SD3475		須恵器	杯	12.1－	2.5Y7/1	灰白色	8C代	
	203	37	SD3475	X180Y89	土製品	土錘	3.3－3.4－1.2－(20.8)	7.5YR8/6	浅黄橙色		長さ―幅―孔径―重さ（cm，g）
	204	37	SD4203	X170Y87 X171Y91	土師器	鍋	40.0－	10YR8/4	浅黄橙色	9C後？	
51	205	37	B2E	X180Y78	黒色土器	無台椀	13.8－5.4－	2.5Y7/3	浅黄色	6C～7C	内黒
	206		B2E	X180Y78	黒色土器	無台椀	13.8－5.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	6C	内黒
	207	37	A	X240Y107	土師器	無台椀	(13.0)－4.5－5.3－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C後～10C	内面に赤彩？
	208	38	A	X210Y113	土師器	無台椀	12.0－4.6－5.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後～10C	
	209	38	A	X232Y116	土師器	無台椀	12.0－(3.6)－5.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	210	38	A	X234Y114	土師器	椀	14.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色	9C後～10C	外面に煤付着
	211	38	A	X234Y111	土師器	椀	16.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色	9C後～10C	内外面に煤付着
	212	38	A	X211Y116	土師器	椀	11.7－	7.5YR6/4	にぶい橙色	9C後～10C	
	213	38	A	X221Y118	土師器	椀	14.0－	7.5YR8/6	浅黄橙色	9C後～10C	
	214	38	A	X209Y107	土師器	椀	11.2－	10YR7/4	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	215	38	B2E	X189Y96	土師器	椀	13.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	216	38	A	X220Y118	土師器	椀	13.0－	7.5YR8/4	浅黄橙色	9C後～10C	
	217	38	A	X240Y102	土師器	椀	12.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	218	38	B3	X161Y89	土師器	椀	12.0－	10YR8/3	浅黄橙色	9C後	内外面に赤彩
	219	38	A	X210Y115	土師器	椀	12.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後～10C	煤付着
	220	38	B1		土師器	椀	13.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	221	38	B3	X163Y93	土師器	椀	12.0－	2.5Y6/1	黄灰色	9C後～10C	内面に煤付着
	222	39	A	X251Y108	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	

第9表　土器一覧(5)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
51	223		A	X210Y116	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.4－	10YR6/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	224	38	B2E	X199Y103 Ⅶ	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.4－	2.5Y6/2	灰黄色	9C後	
	225	38	A	X280Y116	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
	226	38	A	X230Y110	黒色土器	無台椀	＊＊－＊＊－6.0－	7.5YR7/2	明褐灰色	9C後	内黒，外面に煤付着
	227		B3	X170Y94	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	内面に煤付着
	228	38	A	X234Y114	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	内底面に煤付着
	229	39	A	X233Y115	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
	230		B3	X162Y94 X165Y88	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
	231	38	A	X210Y115	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.8－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後	煤付着
	232	38	B1		土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.8－	7.5YR7/6	橙色	9C後	
	233	38	A	X215Y117	土師器	無台皿？	＊＊－＊＊－9.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後	内外面に煤付着
	234	38	B1		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－9.0－	10YR8/1	灰白色	10C代	内黒
52	235	39	A	X234Y114	土師器	無台皿	(13.3)－2.5－5.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
	236	39	A	X214Y115	土師器	無台皿	(11.6)－1.5－(6.5)－	7.5YR6/4	にぶい橙色	9C後	
	237	39	A	X210Y117	土師器	無台皿	11.4－1.4－6.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色	9C後	煤付着
	238	38	A	X219Y115	土師器	無台皿	11.0－2.6－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後	
	239		A	X222Y116	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－8.0－	7.5Y7/1	灰白色	9C後	
	240		A	X238Y117	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.0－	10YR8/4	浅黄橙色	9C後	
	241	39	A	X222Y111	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.5－	2.5Y8/3	淡黄色	9C後	
	242	38	A	X225Y108	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－4.0－	10Y6/4	にぶい黄橙色	9C後	
	243	39	A	X216Y116	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－6.4－	2.5Y8/3	淡黄色	9C後	
	244	38	A	X231Y115	土師器	無台皿	＊＊－＊＊－5.0－	7.5YR7/3	にぶい橙色	9C後～10C	煤付着
	245	40	B1		土師器	甕	13.0－＊＊－5.7－	10YR5/3	にぶい黄褐色	9C後	煤付着
	246	40	A	X228Y110	土師器	甕	12.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	煤付着
	247	40	B3	X168Y93	土師器	甕	14.0－	2.5Y7/1	灰白色	9C後	内面に煤付着
	248	40	A	X220Y115	土師器	甕	14.0－	5YR7/4	にぶい橙色	9C後	外面に煤付着
	249	40	B3	X165Y93	土師器	甕	16.6－	2.5Y7/2	灰黄色	9C後	内外面に煤付着
	250		A	X238Y110	土師器	無台椀	＊＊－＊＊－5.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色		底部に煤付着
	251	38	A	X219Y150	土製品	土錘	(2.9)－3.3－1.3－(15.4)	5YR7/6	橙色		長さ―幅―孔径―重さ（cm，g）
	252	38	B1		土製品	土錘	3.2－2.6－1.1－16.1	10YR8/2	灰白色		長さ―幅―孔径―重さ（cm，g）
53	255	36	A	X227Y110	土師器	甕	22.8－	7.5YR7/6	橙色	9C後～10C	煤付着
	256	40	A	X231Y117	土師器	甕	23.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	9C中～後	内外面に煤付着
	257	40	B1		土師質	甕	23.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
	258	40	A	X244Y130	土師器	甕	26.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C中～後	内外面に煤付着
	259	40	A	X211Y116	土師器	甕	(20.4)－	10YR8/3	浅黄橙色	9C後～10C	
	260		B3		土師器	甕	24.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	261	40	B2E	X179Y95	土師器	甕	21.0－	2.5Y7/2	灰黄色	9C後～10C	
	262		B2E	X187Y95	土師器	甕	21.4－	10YR6/4	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	263		B2E	X175Y98	土師器	甕	22.6－	10YR5/2	灰黄褐色	9C後～10C	
	264		B2E	X186Y93	土師器	甕	24.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後～10C	
	265		B2E	X174Y100	土師器	甕	21.7－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	
	266		B2E	X177Y99	土師器	甕	20.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後～10C	
	267	40	B3	X163Y89	土師器	甕	24.0－	10YR8/4	浅黄橙色	9C中～	
	268	40	B3	X164Y95	土師器	甕	22.0－	2.5Y6/2	灰黄色	9C後～10C	
	269	40	B3	X168Y88	土師器	甕	22.0－	2.5Y7/2	灰黄色	9C後	内面に煤付着
	270		B3	X162Y94	土師器	甕	22.6－	2.5Y7/3	浅黄色	9C後	
	271	40	A	X233Y115	土師器	鉢	28.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	内面に煤付着
	272		A	X218Y113	土師器	鉢	25.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	煤付着
	273		A	X238Y115	土師器	鉢？	21.6－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	
	274	40	B3	X163～165Y92～94	土師器	甕		10YR7/3	にぶい黄橙色	9C後	
54	275	41	A	X248Y135	須恵器	杯蓋	12.6－2.4－	N7/0	灰白色	9C前～中	

第 9 表　土器一覧(6)（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
54	276	41	B3	X163Y92	須恵器	杯蓋	11.0－	5Y6/1	灰色	9C後	
	277	41	B3	X165Y82	須恵器	杯蓋	11.1－	5B5/1	青灰色	9C後	
	278	41	A	X239Y111	須恵器	杯蓋	13.2－1.8－	10Y7/1	灰白色	9C後	
	279	41	B3	X165Y95 X165Y73	須恵器	杯蓋	14.0－	7.5Y5/1	灰色	9C後	
	280	41	B2E	X184Y92	須恵器	杯蓋	11.8－	N4/0	灰色	9C後	
	281	41	B3	X170Y97	須恵器	杯蓋	13.0－	10YR5/1	褐灰色	9C後	転用硯
	282	42	A		須恵器	杯A	13.5－3.5－6.6－	2.5Y8/1	灰白色	9C中～後	
	283	42	A		須恵器	杯A	13.0－3.8－6.3－	N7/0	灰白色	9C後	
	284	42	A	X209Y111	須恵器	杯B	(12.2)－4.4－(7.6)－	5Y5/1	灰色	9C後～	
	285	41	A	X209Y113	須恵器	杯B	10.0－4.1－6.0－	7.5Y5/1	灰色	9C後	
	286	41	A	X211Y116	須恵器	杯B	＊＊－＊＊＊－6.0－	7.5Y5/1	灰色	9C後	
	287	41	A	X207Y101	須恵器	杯	12.0－	2.5Y7/1	灰白色	9C後	内外面に煤付着
	288	41	B3	X167Y91	須恵器	杯	12.0－	5Y7/1	灰白色	9C後	
	289		B3	X163Y87	須恵器	杯	14.0－	7.5Y5/1	灰色	9C後	煤付着
	290		A	X230Y106	須恵器	杯	12.0－	2.5Y7/1	灰白色	9C後	
	291	41	B3	X164Y96	須恵器	杯	12.0－	7.5Y6/1	灰色	9C後	
	292	41	B3	X162Y92	須恵器	杯	13.0－	5Y5/1	灰色	9C後	
	293		B2E	X176Y91	須恵器	杯	11.7－	N5/0	灰色	9C後	
	294	41	B3	X168Y96 X168Y92	須恵器	杯	11.0－	7.5Y6/1	灰色	9C後	
	295	41	B3	X165Y94 X164Y93	須恵器	杯	14.0－	5Y5/1	灰色	9C後	煤付着
	296		A	X237Y117	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－7.9－	5Y7/1	灰白色	9C後	
	297	41	B3	X167Y93	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－8.0－	5Y7/1	灰白色	9C後	外底部に煤付着
	298		B3	X164Y93	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－6.0－	7.5Y5/1	灰色	9C後	
	299	41	B1		須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－8.2－	5Y6/1	灰色	9C後	
	300		B3	X162Y93	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－7.0－	7.5Y6/1	灰色	9C後	
	301	41	B3	X167Y91	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－8.0－	2.5Y7/1	灰白色	9C後	内面に煤付着
	302	41	B2E	X176Y101	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－7.2－	7.5Y2/1	黒色	9C後	
	303	42	B3	X169Y88	須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－7.0－	5Y7/1	灰白色	9C後	墨書「十」
	304	41	B3		須恵器	杯A	＊＊－＊＊＊－7.4－	5Y7/1	灰白色	8C後	
	305	41	B2E	X176Y101	須恵器	杯B	＊＊－＊＊＊－8.0－	10YR4/1	褐灰色	8C後	
	306	41	B3	X164Y94	須恵器	杯B	＊＊－＊＊＊－9.0－	5Y5/1	灰色	8C後	
	307	41	A	X241Y132	須恵器	杯B	＊＊－＊＊＊－7.0－	5Y6/1	灰色	8C後	
	308		B3	X164Y93	須恵器	鉢？	24.0－	7.5Y6/1	灰色		
	309		B3	X166Y86	須恵器	甕？		5Y6/1	灰色		
	310		B3	X169Y95 X166Y97	須恵器	甕？		N4/1	灰色		胎分5
55	311		A	X210Y115	須恵器	瓶	＊＊－＊＊＊－12.0－	5Y7/1	灰白色	9C後～10C	胎分1
	312		A	X210Y114 X210Y115	須恵器	瓶	＊＊－＊＊＊－11.0－	N5/0	灰色	9C後～10C初	
	313	42	A	X231Y117	須恵器	双耳瓶	＊＊－＊＊＊－13.2－	5Y6/1	灰色	9C後～10C初	
	314	42	B2E	X193Y88	須恵器	双耳瓶	＊＊－20.4－8.0－	N7/0	灰白色	9C後～10C初	
	315	42	A	X235Y109	須恵器	壺	11.1－	2.5YR7/1	灰白色	9C後～10C？	
	316		A	X247～248Y132～134	須恵器	壺	(9.0)－	N7/0	灰白色	9C後～10C？	短頸
	317		B3	X164Y94	須恵器	壺	＊＊－＊＊＊－13.5－	5Y6/1	灰色	9C後～10C？	
	318		A	X247Y129	須恵器	壺	＊＊－＊＊＊－11.8－	N6/0	灰色	9C後～10C？	断面に一部煤付着
	319		B3	X162Y96	須恵器	壺？	＊＊－＊＊＊－12.0－	5Y6/1	灰色	9C後～10C？	
	320	42	A	X236Y120	須恵器	壺		N6/0	灰色	9C後～10C？	
	321		B3	X162Y94	須恵器	壺		N7/0	灰白色	9C後～10C？	
	322		A	X213Y116	須恵器	瓶？	＊＊－＊＊＊－11.0－	N7/0	灰白色	9C後～10C？	
	323		B3	X163～166Y92～94	須恵器	壺	＊＊－＊＊＊－10.0－	5Y6/1	灰色	9C後～10C？	
	324		A	X248Y135	須恵器	壺		N6/0	灰色	9C後～10C？	

第10表　木製品一覧（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	規格(長－幅－厚cm)	樹種	備考
28	93	44	SD555	X213Y105	下駄	25.8－(10.4)	ケヤキ	四つ歯
	94	43	SD553	X213Y108VId	加工板	120.5－9.5		
29，31	95	43	SD800		大足(横木)	(48.5)－3.9－2.05		
	96	43	SD800		大足(横木)	(47.7)－3.5－2.25	スギ	
	97	43	SD800		大足(横木)	(44.3)－3.3－2.1		
	98	43	SD800		大足(横木)	(22.9)－3.6－1.65		
	99	43	SD800		大足(横木)	(21.4)－4.6－1.2		
	100	43	SD800		大足(横木)	(17.1)－5.2－1.3		
	101	43，44	SD800		大足(横木)	(35.5)－4.9－3.2		転用材，墨書
	102	43	SD800		大足(横木)	(40.3)－4.1－1.45	スギ	
	103	43	SD800		大足(横木)	(21.7)－6.5－1.3	スギ	
30，31	104	43	SD800		大足(枠木)	(80)－4.6－1.1	スギ	
	105	43	SD800		大足(足板)	38.3－7.5－1.1	ヒノキ科	
	106	43	SD800		大足(足板)	(24.6)－6.8－1.7	スギ	
	107	43	SD800		大足(足板)	(18.2)－6.2－1.45	スギ	
31	95～107	43，44	SD800		大足	161.9－60	スギ・ヒノキ科	推定復元
37	170		SB2		加工板	10.3－4.5		

欠損している場合は残存している部分の数値を（　）内に示した。

第11表　石製品一覧（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	規格（長－幅－厚－重cm・g）	材質	備考
10	34	44	SI547		砥石	8.3－6.2－4.7－428.5		
47	174	44	SX4425		砥石	28.8－9.8－7.8－3400	砂岩	
52	254	44	A	X227 Y109	紡錘車	5.6－5.6－1.2－49	泥岩？	

第12表　金属製品一覧（古墳時代・古代前期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	規格（長－幅－厚－重cm・g）	材質	備考
7	20	21	SI546	X244 Y114	舟くぎ状	18.4－2.9－1.4－190.33	鉄	
52	253	44	A	X245 Y18	鍋	10.0－4.0－1.1－70.13		

3　古代後期

古代後期の遺構には，掘立柱建物，溝，土坑，集石遺構，さく状遺構がある。時期は10世紀末～11世紀である。

A　掘立柱建物

古代後期では25棟の掘立柱建物が復元できた。A地区からC３地区にわたり，溝で区画されるように数棟単位で分布しており，建物には総柱のものと側柱のものがあるが，後者が多い。なお，柵については近接する建物の記述のところで述べている。

13号掘立柱建物（ＳＢ13，第56・57図，図版65）

Ａ地区のＳＤ301・ＳＤ324に近接する３間×２間の側柱建物である。桁行7.6ｍ×梁行5.4ｍ，平面積41㎡，主軸はＮ－87°－Ｗの東西棟である。ＳＤ301以北には溝以外に遺構はなく，北端の建物である。柱穴は直径20㎝～40㎝の円形，深さ10㎝～30㎝の規模で，埋土はオリーブ黒色砂質シルトである。柱穴のなかには掘形が北へ傾いているものもあり，地震や洪水の影響によるものと考えられ，他の掘立柱建物の柱穴にも見られる。柱列は整然と並ばず，柱間も不均等である。建物としては多柱型と考えられる[注1]。柱穴から遺物の出土はないが，主軸方向などから11世紀前半であろう。

14号掘立柱建物（ＳＢ14，第56・57図，図版65）

ＳＢ13と重なるように位置する３間×２間の側柱建物である。桁行7.3ｍ×梁行4.7ｍ，平面積34.3㎡，主軸はＮ－85°－Ｅの東西棟である。柱穴は直径30㎝～50㎝の円形，深さ20㎝～50㎝の規模で，埋土はオリーブ黒色砂質シルトである。ＳＰ336やＳＰ382は掘形が北に傾いている。ＳＢ14も柱列は整然としておらず，多柱型と考える。ＳＰ362からは土師器が出土しているが，小破片である。建物の時期は主軸の方向がＳＤ325に平行で且つ，ＳＤ325はＳＤ324より古いことから，10世紀末～11世紀初めと考える。

15号掘立柱建物（ＳＢ15，第57・58図，図版65）

ＳＢ13・ＳＢ14に重なるように位置する。３間×２間の側柱建物で，桁行4.6ｍ×梁行2.5ｍ，平面積11.5㎡，主軸はＮ－62°－Ｗの東西棟である。柱穴の規模は直径20㎝～30㎝の円形，深さ20㎝～40㎝を測り，埋土はオリーブ黒色砂質シルトである。ＳＢ15の柱穴の掘形はほとんどが北に傾いており，地震や洪水の影響と考えられる。柱列は比較的整然としているが，柱間は不均等であることから多柱型と考える。ＳＰ367からは土師器が出土しているが小破片である。建物の時期はＳＤ301と建物の主軸方向が平行していること，ＳＤ301はＳＤ324と直交しＳＤ325より新しいことから，11世紀中頃と考える。

２号～４号柵（ＳＡ２～ＳＡ４，第56・58・71図）

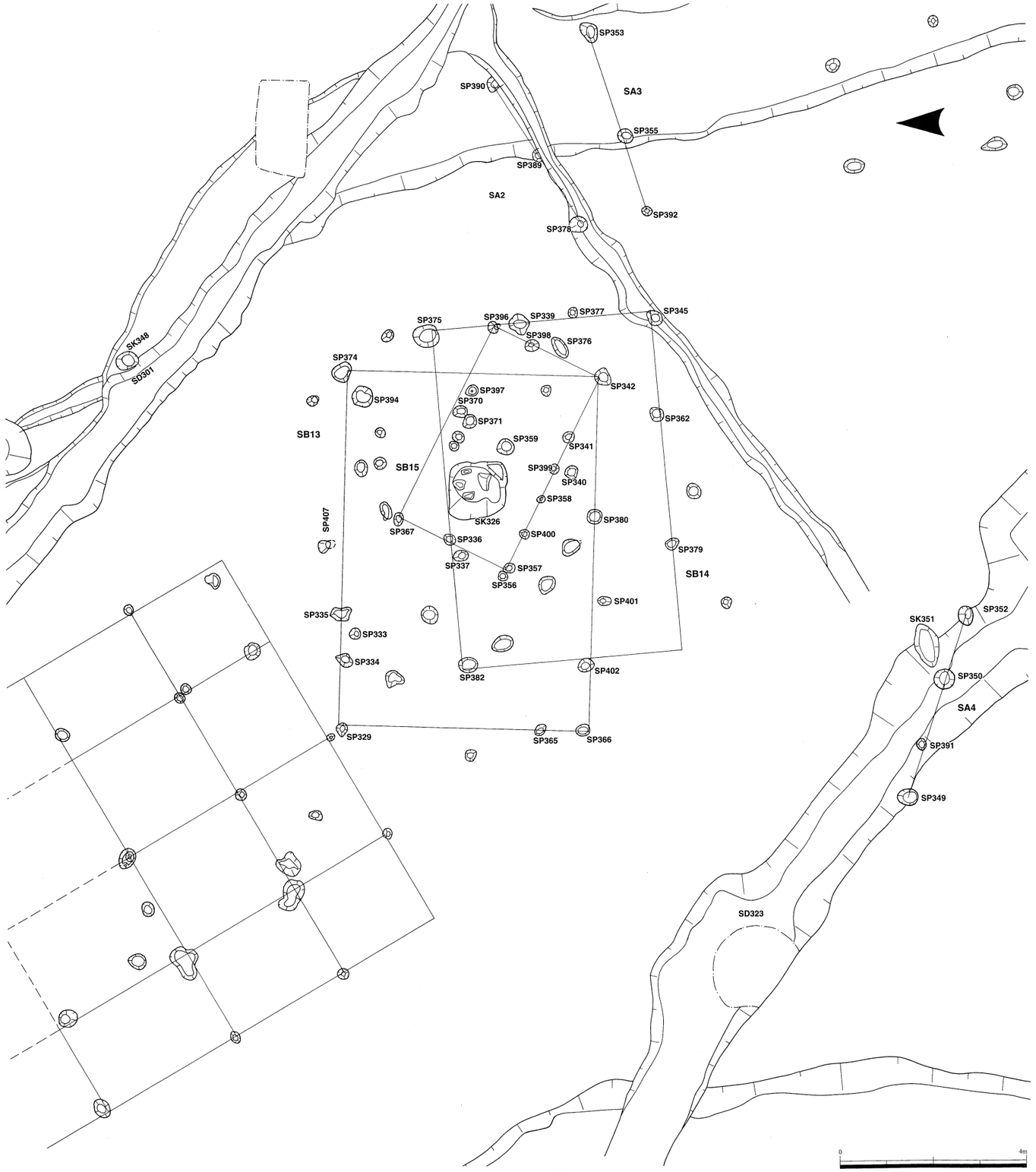
なお近接したところに柵が３列ある。ＳＡ２はＳＤ324，ＳＡ３はＳＤ325，ＳＡ４はＳＤ323にそれぞれ柱穴が切られている。柵の方向はそれぞれ異なり，また掘立柱建物の主軸方向とも異なることから，直接ＳＢ13～ＳＢ15に付属するものではないと考えられる。遺物はＳＡ４のＳＰ352から出土している。325は内外面回転ナデ，底部回転糸切りの土師器皿である。遺構の時期は掘立柱建物群とほぼ同時期の11世紀代であろう。

16号掘立柱建物（ＳＢ16，第58図，図版65・66）

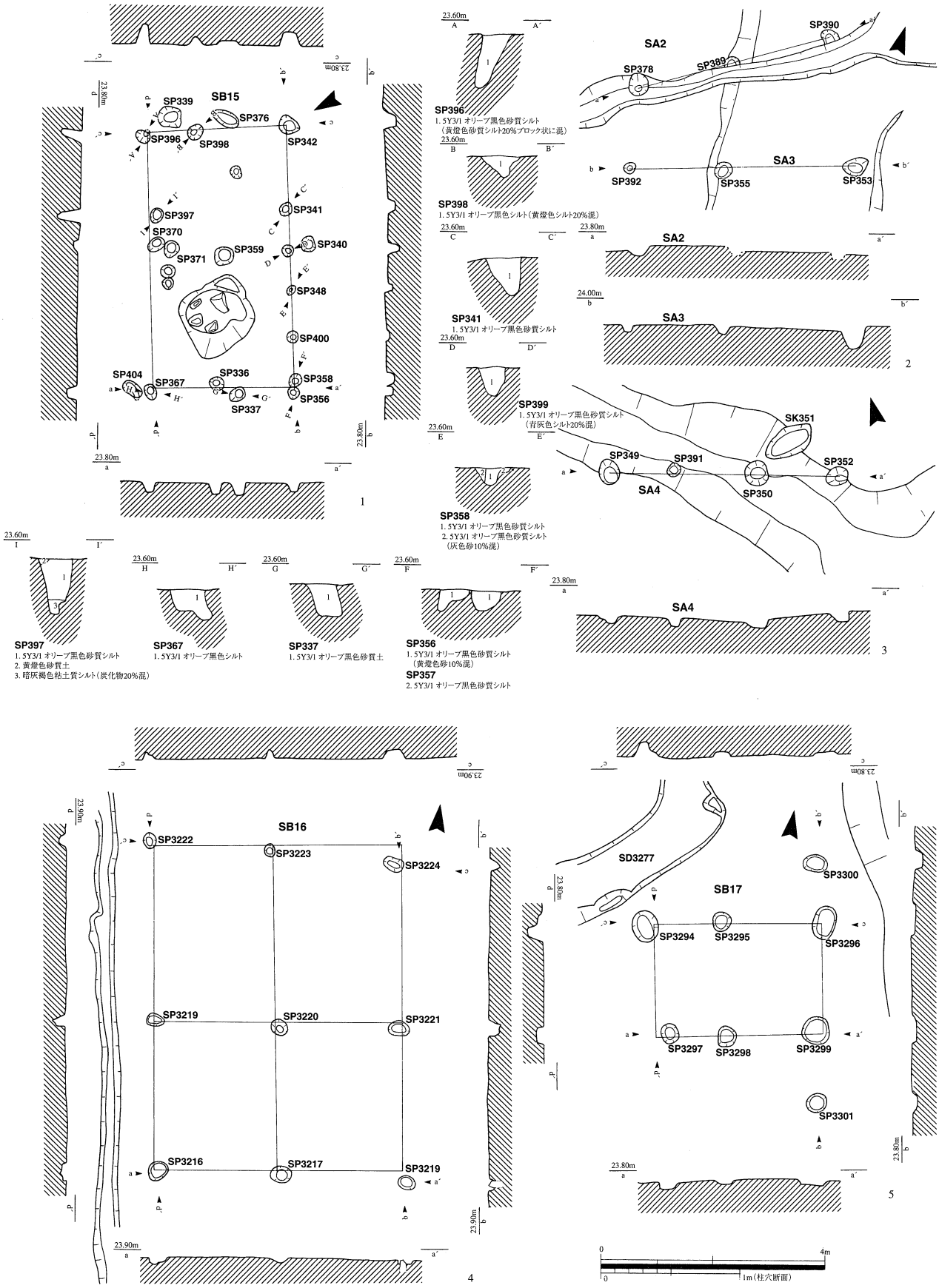
Ｂ２Ｅ地区の畠のさくと溝に囲まれるようにしてある２間×２間の総柱建物である。桁行5.7ｍ×梁行4.6ｍ，平面積26.2㎡，主軸はＮ－12°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は直径30㎝～40㎝の円形，深

第56図　遺構実測図

1.SB13　2.SB14



第57図　遺構実測図
SB13～SB15・SA3・SA4



第58図　遺構実測図

1.SB15　2.SA2・SA3　3.SA4　4.SB16　5.SB17

さ20cmを測り，埋土は黄灰色砂質シルトである。柱間は桁行方向に南から2.7m（9尺），3.0m（10尺），梁行方向に2.3m（7.6尺），2.3m（7.6尺）である。ＳＰ3221は掘形がやや北に傾いている。

遺物はＳＰ3218から柱根が出土した。建物時期は整然とした総柱建物であることから11世紀後半と考える。

17号掘立柱建物（ＳＢ17，第58図，図版65・66）

Ｂ２Ｅ地区の西南部に位置する２間×１間の側柱建物である。桁行2.9m×梁行2.0m，平面積5.8m²，主軸はＮ－79°－Ｅの東西棟である。柱穴の規模は直径40cm～60cmの円形，深さ10cm～30cmを測り，埋土はオリーブ黒色砂質土である。柱間は桁行方向に西から1.1m，1.8mで，Ｂ２Ｅ地区では最も小規模な建物である。柱穴の規模に比べ建物の規模が小さく，周囲を溝や自然流路に囲まれていることから，他の掘立柱建物より階層が下がると考えられる。ＳＰ3300とＳＰ3301はＳＢ17の柱穴とほぼ同様な規模の穴で，建物の構造に関わっている可能性がある。遺物の出土はないが，建物の時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

18号掘立柱建物（ＳＢ18，第59・60・71・87図，図版65・66・76・77）

Ｂ２Ｅ地区のほぼ中央に位置する３間×２間の側柱建物である。桁行5.1m×梁行3.2m，平面積16.3m²，主軸はＮ－２°－Ｗの東西棟である。柱穴の規模は直径30cm～50cmの円形，短径50cm×長径70cmの楕円形，ともに深さ20cm～30cmを測り，埋土は黒褐色砂質土～黒褐色砂質シルトである。桁行方向の柱間は西から1.8m・1.6m・1.7mと南北両側ともほぼ均等なのに対し，梁行方向のそれは西側が南から1.6m，1.5m，東側は1.0m，2.2mと南側に寄っている。

ＳＢ18の内部にあるＳＰ3266は長径118cm×短径92cm，深さ12cmの楕円形を呈し，埋土は黒褐色砂である。遺物は土師器・須恵器・製塩土器が一括して出土している。326～331は土師器椀で底部は回転糸切り，329～331は口径11.2cm～11.6cm，器高は3.0cm～3.3cm，体部はやや丸みをもって口縁部で段をもち外反する。328は底部回転糸切りで，足高高台が付く有台椀であるが，高台は剥離している。口径は14.6cmで体部は直線的に伸びる。332は須恵器壺で肩部の破片と体部から底部にかけて残存するものは同一個体である。底部回転糸切りで体部下部はヘラケズリしている。333は製塩土器の口縁部である。小破片であるため口径は復元できないが，平底のものであろう。329～331はほぼ完形で，その他の遺物も西側に集中している出土状況から，遺構の性格は土器を埋納した，いわゆる埋納土坑[注2]であると考える。また遺物は10世紀末～11世紀初めのものであることから，遺構も同時期と考える。

19号掘立柱建物（ＳＢ19，第59・60図，図版65・66）

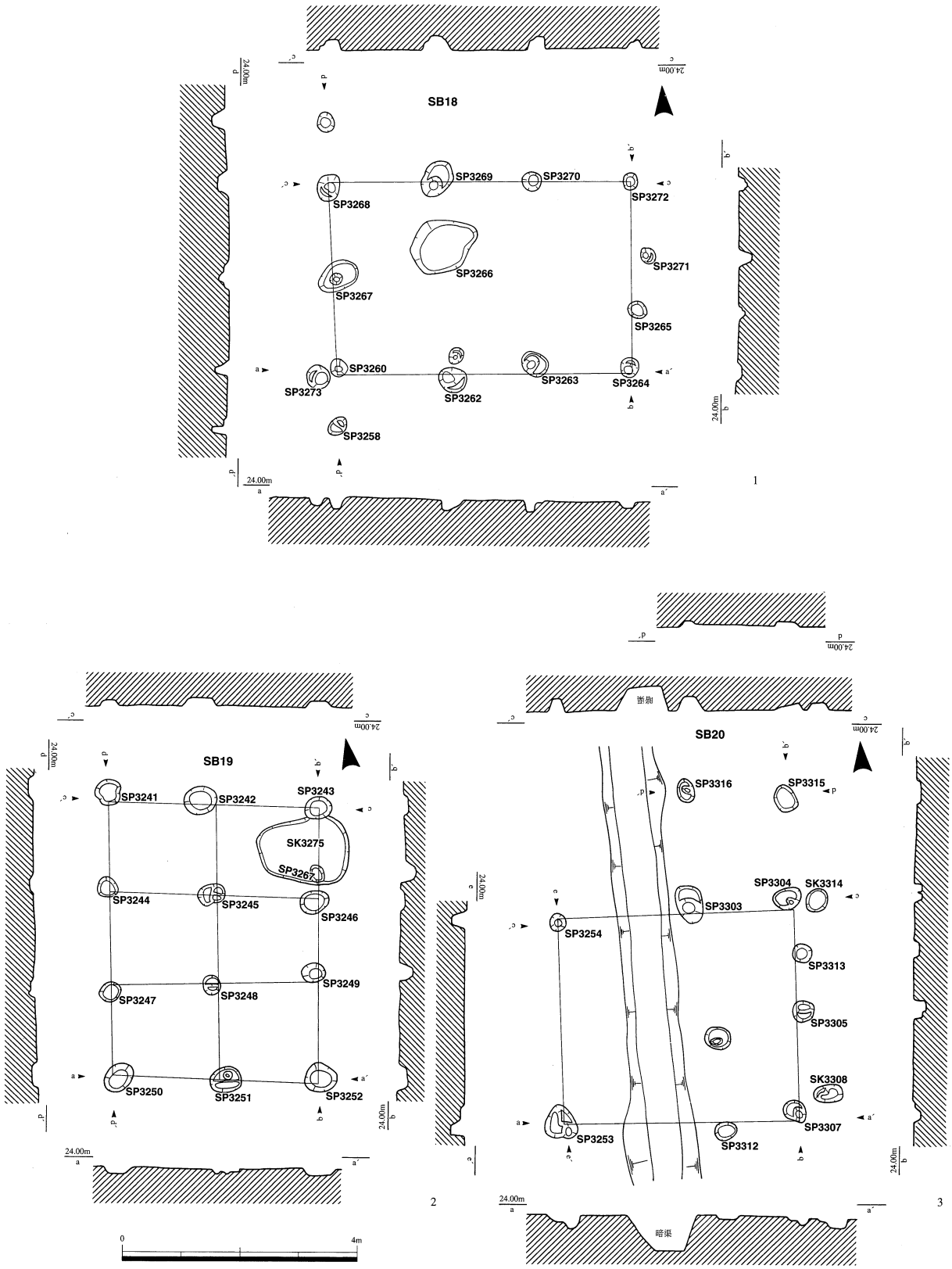
ＳＢ18よりやや南に位置する３間×２間の総柱建物である。桁行4.65m×梁行3.55m，平面積16.5m²，主軸はＮ－10°－Ｅの南北棟である。柱穴の規模は直径30cm～60cmの円形，深さ10cm～20cm，埋土は黒褐色砂である。柱間は桁行方向に南から1.5m・1.6m・1.55m，梁行方向に東から1.6m・1.95mとほぼ均等である。ＳＰ3249から土師器が出土しているが，小破片のため時期は不明である。

ＳＢ19の内部には東にはみ出すようにＳＫ3275があり，規模は長径1.55m×短径1.12m，深さ８cmを測る。遺物は回転糸切りの土師器椀底部が出土しているが，時期は不明である。またＳＫ3275の内部にはＳＫ3276があり，土師器が出土している。これらの遺構はＳＢ19に付属するものと考えられる。遺物からは時期を決定できないが，ＳＢ19の主軸方位がＳＤ3204とほぼ平行していることから11世紀中頃と考える。

20号掘立柱建物（ＳＢ20，第59・60図，図版65・66）

ＳＢ19の東に近接する２間×２間の側柱建物で，桁行４m×梁行3.5m，平面積14m²を測る。主軸は

第59図　遺構実測図
SB18～SB20



第60図　遺構実測図

1.SB18　2.SB19　3.SB20

N－86°－Wの東西棟であり，柱穴は直径40cm～60cm，深さ10cm～20cmを測り，埋土は黒褐色砂である。柱間は桁行方向の北辺では東から1.8m・2.2m，南辺では1.2m・2.8m，梁行方向の東辺では南から1.7m・1.8m，西辺は1間であるなど，不均等である。出土遺物は無く，時期の決定は難しいが，主軸の方向から10世紀末～11世紀初めと考える。

21号掘立柱建物（ＳＢ21，第62図）

Ｂ３地区の中央西端，ＳＤ2020の西岸に位置する。検出した柱穴は１間×１間分であるが，調査区外西へ延びる可能性がある。確認した部分は東西方向を桁行とし，桁行1.8m以上×梁行２m，主軸はN－87°－Wの東西棟で，側柱建物と復元する。柱穴の規模は直径35cm～60cm，深さ10cmである。埋土は灰色オリーブ砂質土である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

22号掘立柱建物（ＳＢ22，第61・62・71図）

Ｃ１地区の中央に位置する三方を細く短い溝に囲まれた，４間×２間の総柱建物である。桁行6.55m×梁行４m，平面積26.2m²の規模をもつが，柱穴はどれも整然とせず，各柱列にある柱穴から復元したものである。柱穴の規模は直径20cm～50cm，深さ10cm～25cm，主軸はN－６°－Eの南北棟で，埋土は黒色砂質シルトと堅くしまった灰黒色土である。柱穴からの出土遺物はＳＰ5217から土師器の小破片，ＳＰ5364から土師器がある。ＳＰ5364はＳＸ5003の下部から検出した遺構で，規模は直径37cm，深さ15cmである。343・344はＳＰ5364出土で，343は底部回転糸切りの土師器椀，344は底部回転糸切りで，足高高台をもつ有台椀であるが，高台が欠損している。ＳＢ22の内部にあるＳＸ5001は付属施設と考えられるが，ここからは土師器・製塩土器が出土している。またＳＰ5215・ＳＰ5217付近の包含層からは土師器がまとまって出土している。出土した遺物の時期からＳＢ22は10世紀末～11世紀初めのものであろう。

またＳＢ22の東にはＳＡ５がある。ＳＰ5211・ＳＰ5215から土師器が出土している。掘立柱建物の主軸の方向とはやや異なる。

23号掘立柱建物（ＳＢ23，第61・62図）

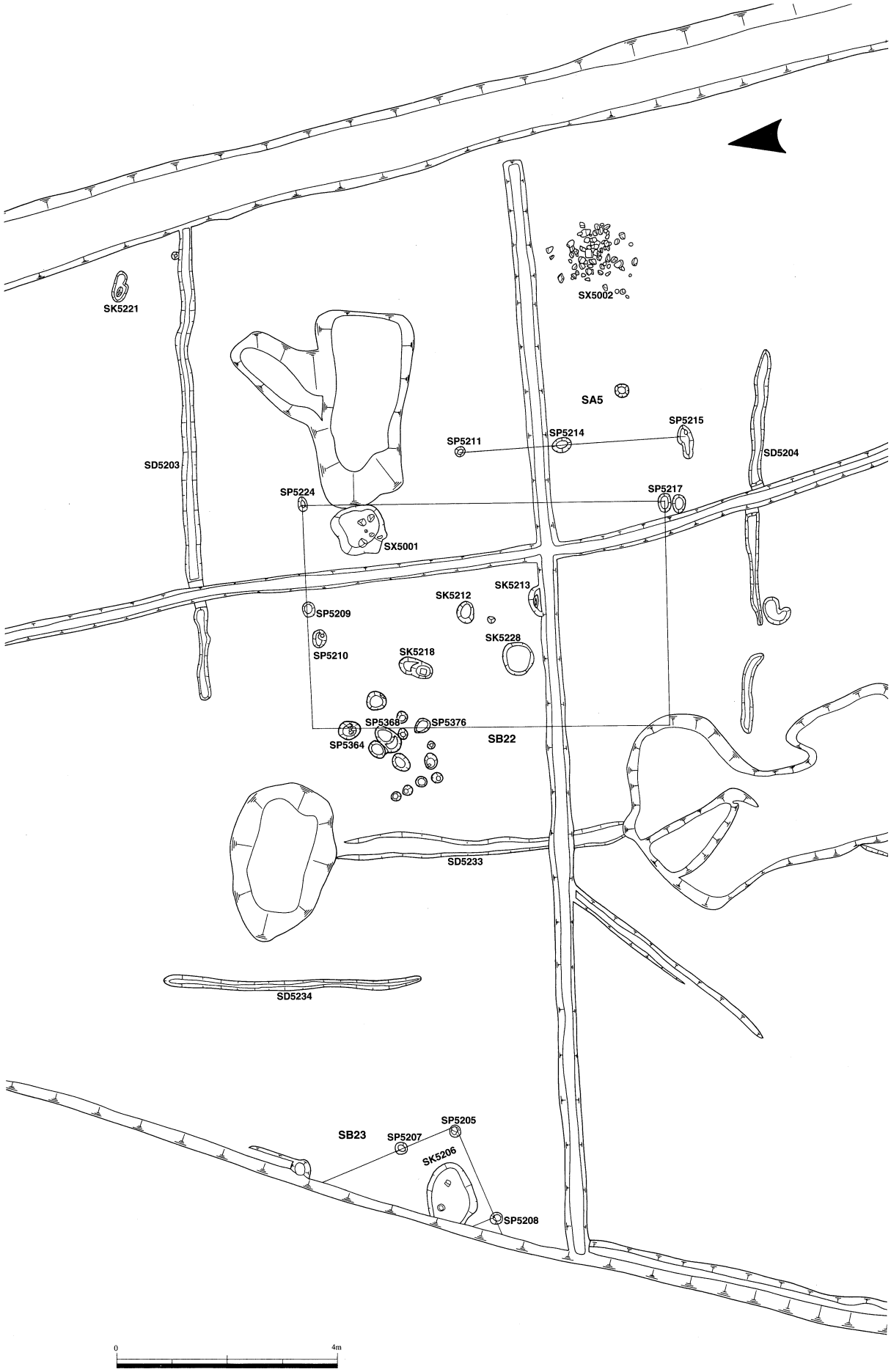
ＳＢ22の西に位置する。検出したのは柱穴３基と土坑１基であるが，調査区外に延びる可能性がある。検出した部分は１間×１間であるため，主軸方向はN－14°－Wの南北棟と仮定する。桁行方向の柱間は1.1m，梁行方向の柱間は1.8mである。柱穴の規模は直径20cm～25cmの円形，深さ10cm～14cmを測り，埋土は黒色シルトである。ＳＰ5208からは土師器が出土している。

ＳＢ23の内部にあるＳＫ5206は長径106cm×短径84cmの楕円形を呈するもので，深さは12cmを測る。埋土は黒色シルトで，ＳＢ23に付属した土坑であろう。ここからは土師器皿が出土している。

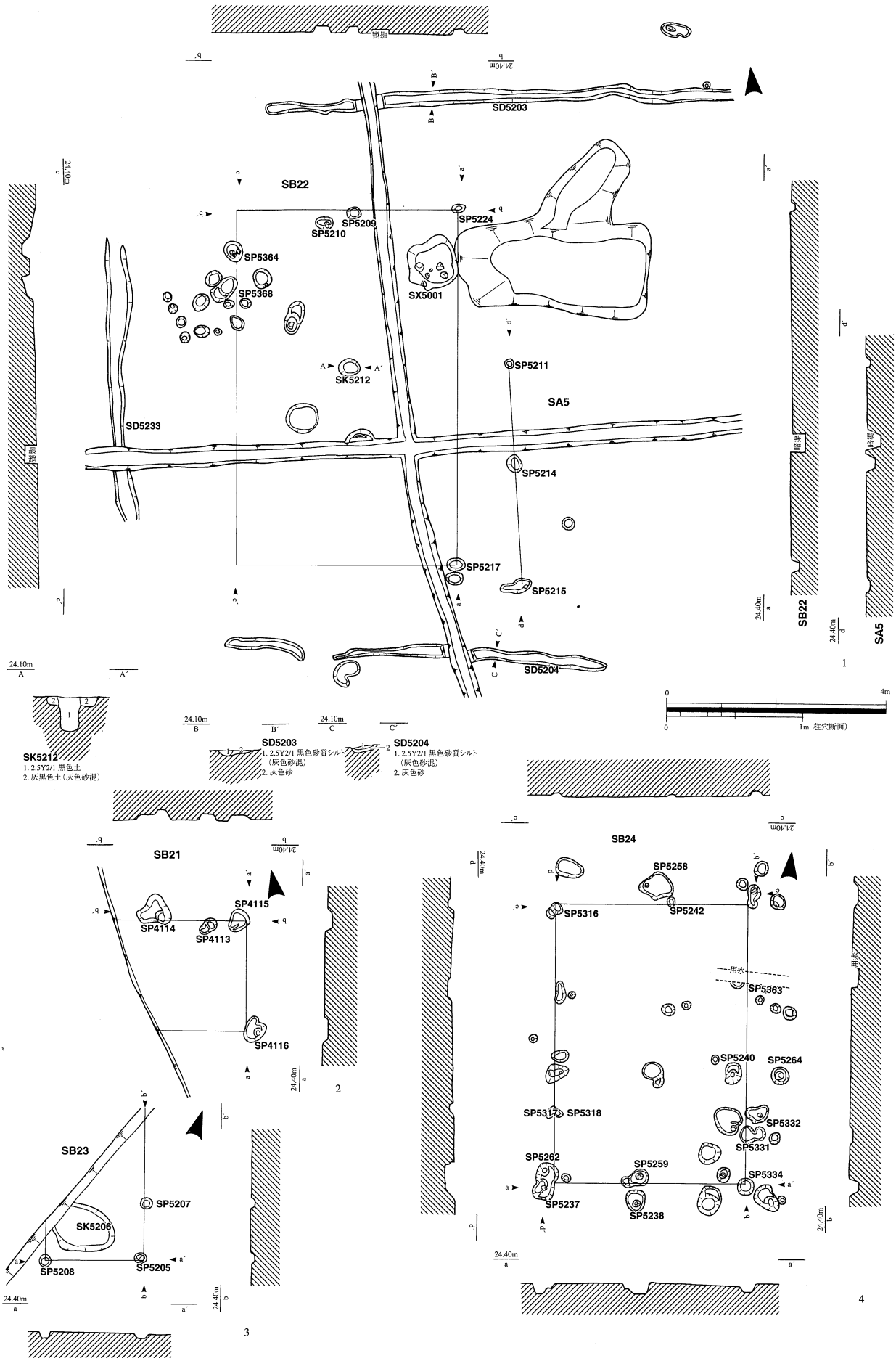
建物の時期は，柱穴出土遺物からは時期を決定するのが困難であるが，ＳＫ5206の出土遺物から11世紀中頃であろう。

24号掘立柱建物（ＳＢ24，第62・63図，図版67・68・78）

Ｃ１地区の南端に位置する３間×２間の側柱建物である。桁行5.1m×梁行3.6m，平面積18.4m²，主軸はN－３°－Wの南北棟である。柱穴の規模は直径16cm～50cmの円形，深さ５cm～20cmを測り，埋土は黒色シルトに灰色砂質シルトが混じる。桁行方向の柱間は北から1.6m・2.1m・1.4m，梁行方向は東から1.8m・1.8mである。ＳＰ5257からは土師器皿（477），ＳＰ5321からは土師器，ＳＰ5363からは柱根が出土している。477は完形の皿で，口径8.9cm，器高2.1cm，底径4.9cmを測り，底部は回転糸切り，体部中程で段をもち，口縁端部に面取りを施す。柱穴の中位から上向きで出土しており，建物廃棄の際に埋納した可能性がある。ＳＰ5262とＳＰ5237は重なっているが，切り合いが不明である



第61図　遺構実測図
SB22・SB23・SA5



第62図　遺構実測図

1.SB22・SA5　2.SB21　3.SB23　4.SB24

ため建物の新旧関係を明確にできないが，時期は11世紀後半であろう。

25号掘立柱建物（ＳＢ25，第63・64・71図，図版67～69）

ＳＢ24に重なるように位置する２間×２間の総柱建物である。桁行5.8ｍ×梁行3.25ｍ，平面積18.9㎡，主軸はＮ－５°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は直径20㎝～64㎝の楕円形，深さ10㎝～30㎝を測り，埋土は黒色シルトに灰色砂質シルトが混じるものである。桁行方向の柱間は北から3.6ｍ・2.2ｍ，梁行方向は東から1.45ｍ・1.8ｍである。ＳＰ5237はＳＢ24の柱穴ＳＰ5262と重なっているが，建物の新旧関係は不明である。またＳＰ5236・ＳＰ5243・ＳＰ5261は柱穴が北に傾いており，地震や洪水などの自然災害による影響が伺える。

遺物はＳＰ5238・ＳＰ5241・ＳＰ5256からは土師器，ＳＰ5237からは土師器皿（335），須恵器の甕の破片（334）が出土している。335は底部回転糸切りの土師器皿で，口径8.2㎝，器高2.2㎝，底径4.8㎝を測る。丸みをもった体部中程で段をもち，やや外反気味に開く口縁端部には面取りを施している。334は外面に不定方向の平行叩き，内面には同心円状の当て具痕が残る。

ＳＢ24とＳＢ25を囲むように２重の柵ＳＡ６がある。建物に近い内側の柵は西と南，外側のものは西・南・東にかけて建物を囲むように位置する。これらの柵を構成している穴には柱が残っているものが多く，その柱には皮がついたままのものとそうでないものの２種がある。皮付きの柱が出土したのはＳＰ5264・ＳＰ5269・ＳＰ5271・ＳＰ5274・ＳＰ5281・ＳＰ5296，皮がついていない柱が出土したのはＳＰ5263・ＳＰ5275・ＳＰ5276・ＳＰ5277・ＳＰ5284である。ＳＰ5275・ＳＰ5276・ＳＰ5320からは柱を固定するために使用したと考えられる石も出土している。またＳＰ5319からは黒色土器（336）が出土している。336は内黒の有台椀底部で，高台は断面三角形でやや内湾する。高台内部はナデている。

ＳＡ６の柱間は内側では比較的広く，最小で1.7ｍ，最大で3.3ｍなのに対し，外側は最小が0.5ｍ，最大が1.7ｍと狭く，西側の柵列が平行していないことから時期差があると考えられる。さらに外側の柵列については作り替えている可能性もある。ＳＡ６の時期差については，内部にあるＳＢ24とＳＢ25は主軸の方向が異なり，ＳＢ24と外側の柵列，ＳＢ25と内側の柵列がほぼ平行していることから，それぞれの建物に付属していた可能性が高い。柱穴の出土遺物からＳＢ25の時期は11世紀中頃であり，ＳＢ24よりやや古いと考える。

26号掘立柱建物（ＳＢ26，第63・64・71図，図版67・69・103）

ＳＢ24・ＳＢ25に近接し，ＳＡ６に重なるように位置する２間×２間の総柱建物である。桁行5.3ｍ×梁行3.25ｍ，平面積17.2㎡，主軸はＮ－45°－Ｗの東西棟である。柱穴の規模は直径20㎝～40㎝の円形，長径が40㎝～70㎝の楕円形，深さ10㎝～30㎝を測り，埋土は黒色シルトに灰色砂質シルトが混じるものである。桁行方向の柱間は北よりの柱列では東から2.3ｍ・3.2ｍ，南よりでは1.7ｍ・3.4ｍ，梁行方向は東よりの柱列では南から1.7ｍ・1.4ｍ，西よりでは1.7ｍ・1.7ｍとなり，歪んだ方形となる。またＳＰ5247・ＳＰ5248・ＳＰ5250は柱穴が北に傾いているが，ＳＰ5250はとくに柱根が残っている部分が大きくずれており，これらは自然災害の影響であると考えられる。

遺物はＳＰ5247とＳＰ5250からは丸太の柱（342）が出土している。342はＳＰ5250出土で，直径13.6㎝，残存長28.2㎝である。下面の中央を尖らすように削っている。樹種はヤナギ類である。ＳＰ5247・ＳＰ5248・ＳＰ5249からは土師器，ＳＰ5253からは内黒の黒色土器，ＳＰ5246からは土師器（337～339），黒色土器（340・341）が出土している。337は底部回転糸切りの土師器皿で，口径10㎝，器高1.3㎝で口縁端部に面取りを施す。338は回転糸切りの土師器皿の底部。339は口径14.2㎝，器高3.7㎝，底径5.6

cmの土師器椀。底部は回転糸切り，体部は丸みをもち口縁端部が外反し面取りを施す。340は内黒の有台椀である。内面の調整は口縁部付近がミガキ，底部にかけてはナデである。高台は断面三角形で，高台内底面には高台を引き出して成形した際の痕跡が菊花状に残っている。341は内黒の椀で，底部を欠損しているが，340と同様に有台椀であろう。体部はやや腰が張り，口縁部にかけて外反している。内面のミガキは底部にまで及んでいる。ＳＢ24・ＳＢ25に付属するＳＡ６の柱穴ＳＰ5266とＳＰ5249の切り合いで，ＳＰ5249の方が古いことから，ＳＢ26はＳＢ24・ＳＢ25より古いもので，遺物の時期からＳＢ26の時期は11世紀前半である。

27号掘立柱建物（ＳＢ27，第63・64図）

C1地区の南東隅に位置する。検出した部分は３間分の柱列であり，さらに北や東へ延びる可能性がある。検出した柱列を桁行として桁行5.6ｍ以上，主軸はＮ－５°－Ｗの南北棟と復元する。柱穴の規模は直径26cm～36cmの円形，深さ10cm前後，埋土は黒色シルトに灰色砂質シルトが混じるものである。桁行方向の柱間は北より1.9ｍ・2.2ｍ・1.5ｍを測る。

遺物はＳＰ5350より柱根が出土しているのみであるが，建物の主軸方向から10世紀末～11世紀初めと考える。

28号掘立柱建物（ＳＢ28，第66・67・71図，図版67）

Ｃ２地区の北東隅に，畑と溝に囲まれるように位置する４間×４間の総柱建物である。桁行8.6ｍ×梁行7.7ｍ，平面積66.2m²，主軸はＮ－６°－Ｗの東西棟である。柱穴の規模は直径16cm～56cmで，主体は30cm台～50cm台の円形で，深さ10cm～24cmを測る。埋土は黒色シルトである。桁行方向の柱間は東から2.1ｍ・２ｍ・2.4ｍ・1.9ｍ，梁行方向は南から1.8ｍ・２ｍ・２ｍ・1.9ｍとなり，ほぼ均等である。ＳＢ28のほとんどの柱穴は北に傾いており，ＳＰ6366やＳＰ6399のように大きく傾くものもあり，地震や洪水などの自然災害による影響がみられる。

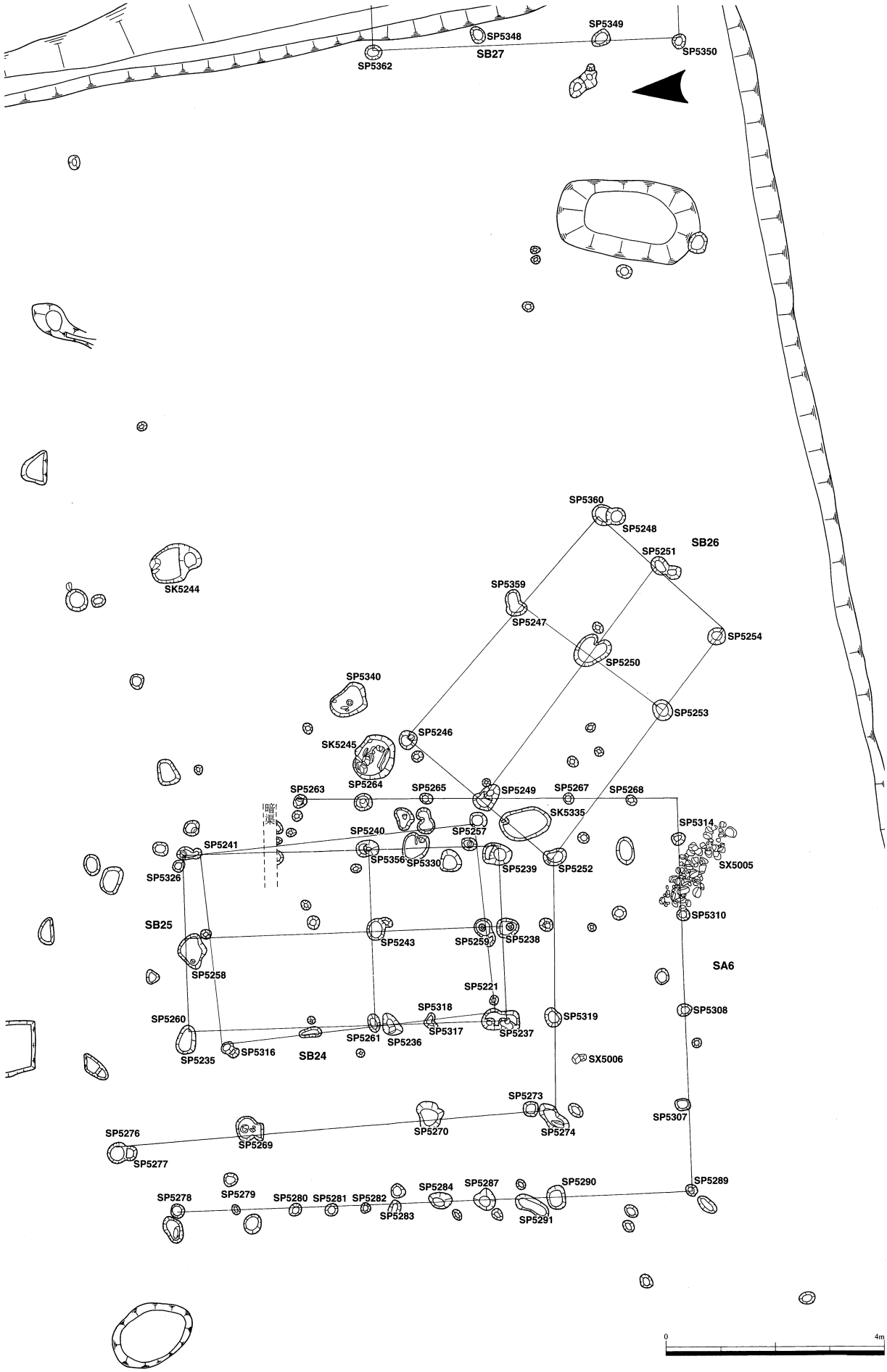
遺物が出土する柱穴は比較的多い。ＳＰ6312から柱が出土している。またＳＰ6300から土師器，黒色土器，ＳＰ6302から土師器・製塩土器，ＳＰ6303から土師器，ＳＰ6305から土師器，ＳＰ6315から内黒の黒色土器（345），ＳＰ6317から土師器，ＳＰ6322から土師器・内黒の黒色土器（346）・須恵器の横瓶（347），ＳＰ6323から土師器・内黒の黒色土器・須恵器・製塩土器，ＳＰ6399から土師器椀底部と甕の破片が出土している。

345は内黒の有台椀の底部で，内面はミガキ，底部外面には高台を絞り出して成形した際できた菊花状の痕跡がある。高台は低く，断面はやや三角形である。346は内黒の黒色土器椀で，口径14.2cm，直線的に伸びた体部と外反する口縁部をもつ。内面には煤が付着しており，外面も黒変している。347は須恵器。横瓶の破片で，外面は平行叩き，内面は同心円文当て具痕である。湾曲が強いことから，閉塞部付近の体部破片と考える。その他の遺構から出土した遺物は小破片のため図化するのは困難である。これら遺物の時期からＳＢ28の時期は11世紀後半と考える。

またＳＢ28の北に隣接して柵ＳＡ７がある。ＳＡ７の柱穴も全て北に傾いており，ＳＢ28と様相が同じであることから建物に付属したものと考える。遺物はＳＰ6372から土師器が出土しているが，小破片であるため時期は不明である。

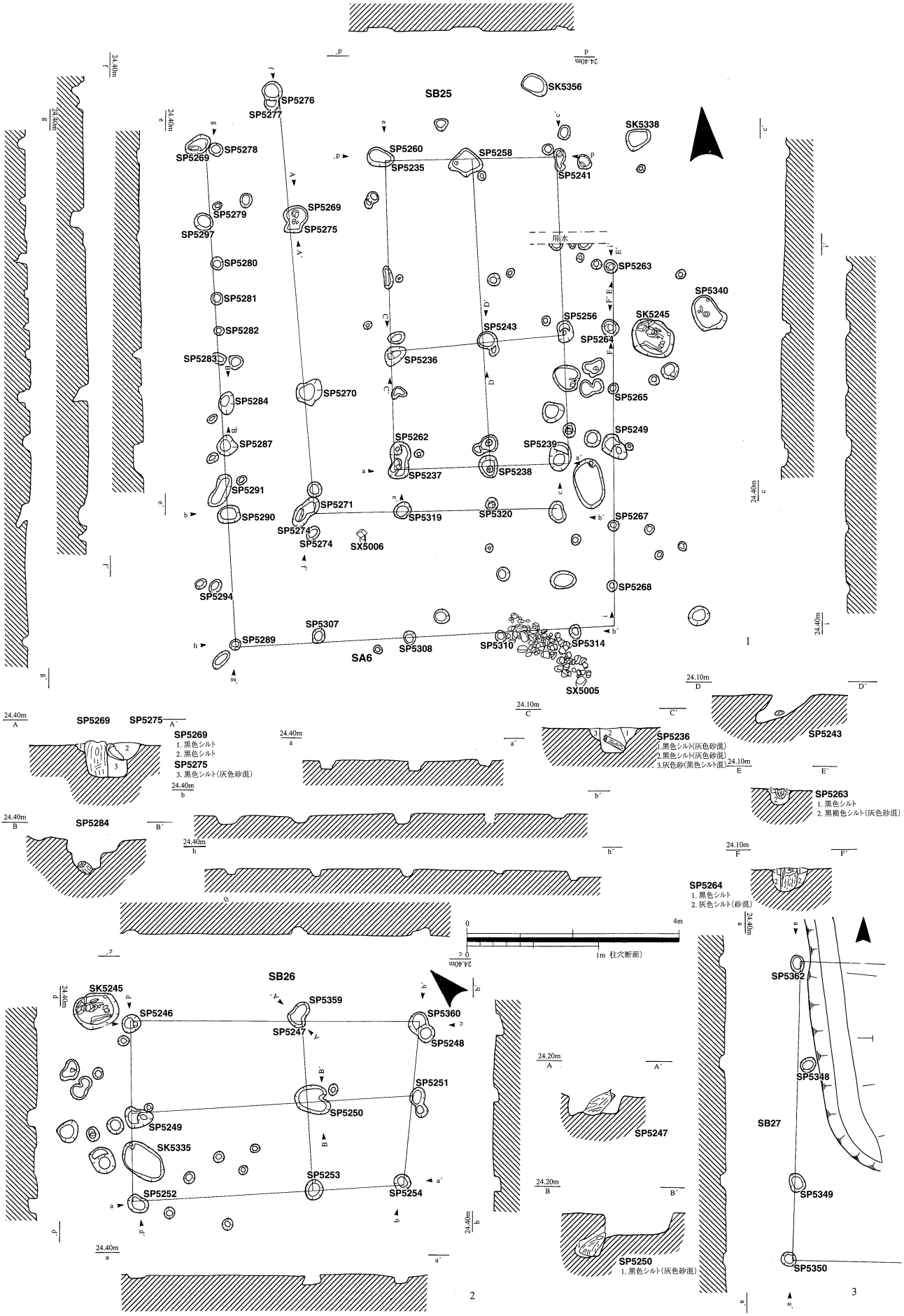
29号掘立柱建物（ＳＢ29，第66・68図，図版67）

ＳＢ28に重なるように位置する３間×１間の側柱建物である。桁行9.2ｍ×梁行3.4ｍ，平面積31.3m²，主軸はＮ－９°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は直径24cm～44cm，50cm台の円形で，深さ10cm～24cmを測る。埋土は黒色シルトが主体である。桁行方向の柱間は南から３ｍ・2.8ｍ・3.4ｍである。Ｓ



第63図　遺構実測図

SB24～SB27・SA6



第64図　遺構実測図

1.SB25・SA6　2.SB26　3.SB27

Ｐ6309・ＳＰ6310は北に傾いており，自然災害による影響がみられる。

遺物が出土した柱穴には，土師器が出土したＳＰ6309・ＳＰ6359・ＳＰ6371，内黒の黒色土器が出土したＳＰ6310がある。これらは時期を決定するには少量，かつ小破片である。ＳＢ29の時期は主軸方向より11世紀後半でＳＢ28より新しいと考える。

30号掘立柱建物（ＳＢ30，第65～67図，図版67）

ＳＢ28･ＳＢ29の南に位置する２間×１間の側柱建物である。桁行3.8ｍ×梁行2.4ｍ，平面積9.1㎡，主軸はＮ－78°－Ｅの東西棟である。柱穴の規模は直径25㎝～39㎝の円形で，深さ12㎝～19㎝を測る。埋土は黒色シルトである。桁行方向の柱間は北辺が東から1.6ｍ･2.2ｍなのに対し，南辺は1.9ｍ･1.9ｍとほぼ均等である。ＳＰ6325・ＳＰ6327・ＳＰ6330は北に傾いており，自然災害による影響がみられる。

遺物はＳＰ6325から土師器・内黒の黒色土器，ＳＰ6327から内黒の黒色土器，ＳＰ6341から回転糸切りの土師器底部が出土しているが，時期は不明である。ＳＢ30とＳＢ28は主軸の方向がほぼ同じなので，存在していた時期もほぼ同時期の11世紀後半と考える。

31号掘立柱建物（ＳＢ31，第66・68図，図版67）

ＳＢ28・ＳＢ29の東に隣接する。検出した部分は２間分の柱列で，調査区東へさらに伸びる可能性が高い。確認した柱列を桁行とし，桁行５ｍ以上，主軸はＮ－９°－Ｗの南北棟に復元する。柱穴の規模は直径28㎝～34㎝の円形で，深さ16㎝～18㎝を測る。埋土は黒色シルトである。桁行方向の柱間は南から2.5ｍ・2.5ｍと均等である。

遺物はＳＰ6320とＳＰ6363から土師器が出土しているが，時期を決定できない。ただＳＢ31の主軸の方向から，建物の時期は10世紀末～11世紀初めと考える。

32号掘立柱建物（ＳＢ32，第66・67図）

Ｃ２地区の北端で，ＳＢ28・ＳＢ29の建物群とは畠を挟んだ北西側に単独で存在する。検出した部分は２間×１間の総柱建物であるが，柱穴の残りが悪く消失したものもあり，さらに調査区内西や調査区外北へ伸びる可能性が高い。確認した部分は南北を桁行とし，桁行3.6ｍ以上，梁行2.0ｍ以上，主軸はＮ－１°－Ｗの南北棟に復元する。柱穴の規模は直径25㎝～38㎝の円形で，深さ３㎝～７㎝と非常に浅い。埋土は黒色シルトである。梁行方向の柱間は東から1.9ｍ・1.7ｍとほぼ均等である。

遺物の出土はないが，ＳＢ32の主軸の方向から，11世紀後半のものと推定する。

33号掘立柱建物（ＳＢ33，第65・68図）

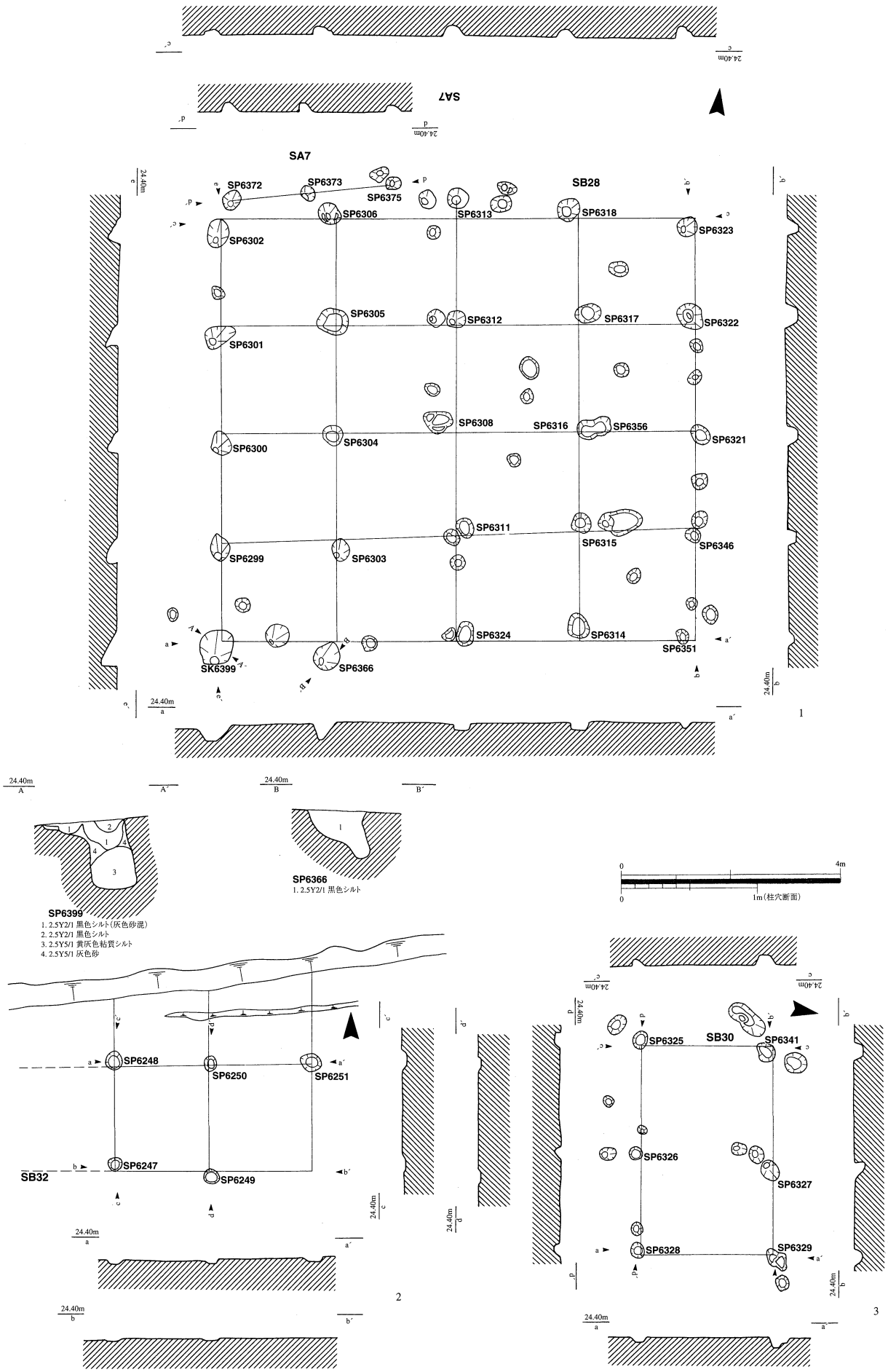
Ｃ２地区の中央東端で，ＳＤ4102の南に位置する。検出した部分は４間×１間の側柱建物であるが，さらに調査区外東へ伸びる可能性が高い。確認した部分は南北を桁行とし，桁行5.5ｍ×梁行1.7ｍ以上，主軸はＮ－24°－Ｗの南北棟に復元する。柱穴の規模は直径26㎝～62㎝の円形で，深さ３㎝～17㎝を測る。埋土は灰色砂混黒色シルトである。桁行方向の柱間は南から1.5ｍ・1.3ｍ・1.6ｍ・1.1ｍである。遺物の出土はなく，時期は不明であるが，ＳＢ33の主軸の方向がＳＤ4102と平行なことから，11世紀前半であろう。

34号掘立柱建物（ＳＢ34，第68・69・72図，図版67・103）

Ｃ２地区とＣ３地区の境界中央に位置する。４間×３間の側柱建物で，桁行7.7ｍ×梁行5.1ｍを測り，平面積39.3㎡，主軸はＮ－82°－Ｅの東西棟である。柱穴は直径20㎝～36㎝の円形と長径62㎝×短径25㎝の楕円形を呈し，深さは５㎝～20㎝を測る。埋土は灰色シルト混黒色シルトが主体である。桁行方向の柱間は北辺が東から1.6ｍ・2.2ｍ・2.4ｍ・1.5ｍ，南辺は1.7ｍ・2.3ｍ・２ｍ・1.7ｍとほぼ

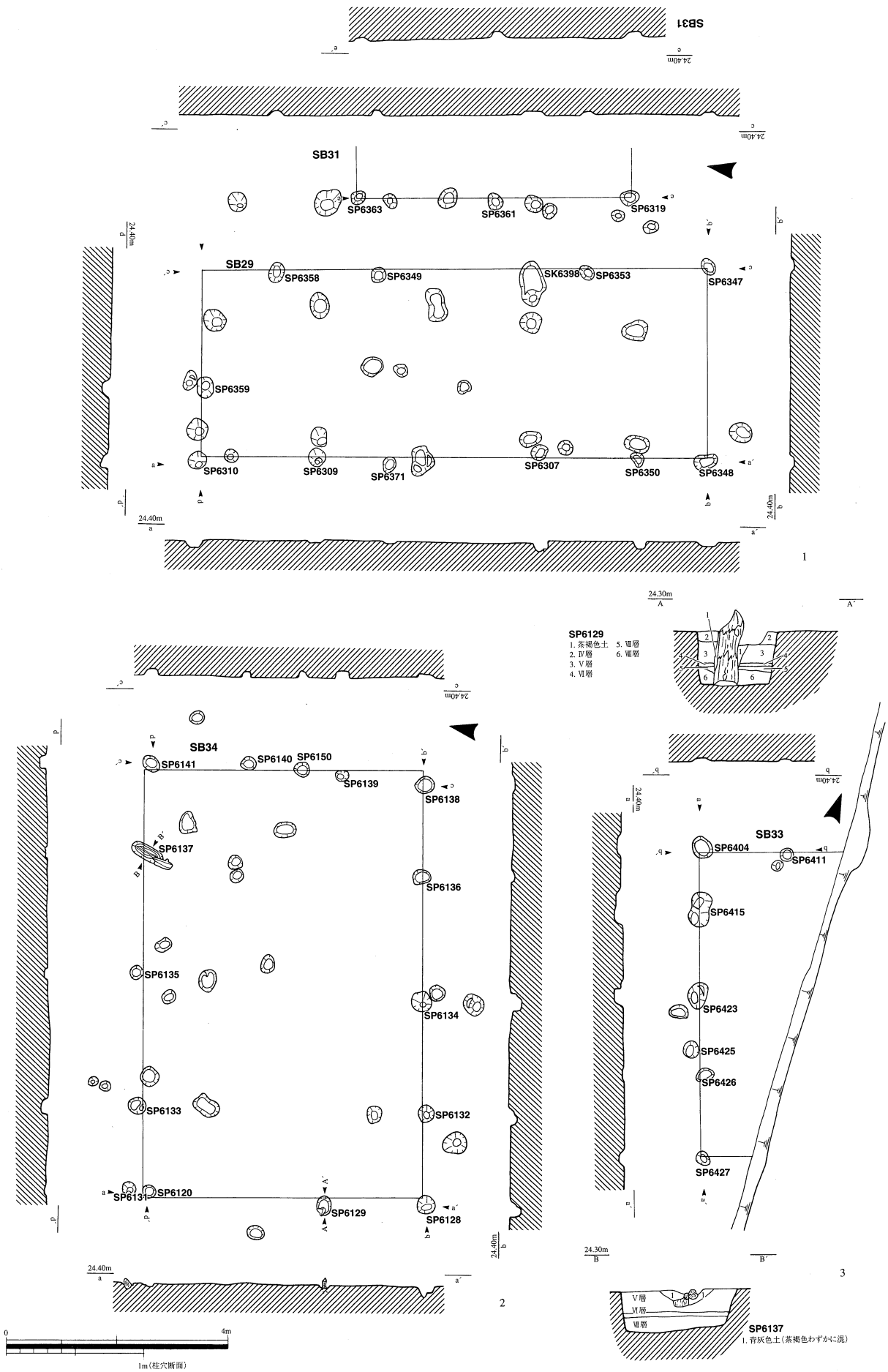
第65図　遺構実測図
SB30・SB33

第66図　遺構実測図
SB28～SB32・SA7



第67図　遺構実測図

SB28・SB30・SB32・SA7



第68図　遺構実測図

1．SB29・SB31　2．SB34　3．SB33

均等であるのに対し，梁行方向では東辺は南から1.6m・1.7m・1.8m，西辺では柱穴が1基無く，1.8m・3.2mとなっている。

遺物はＳＰ6210・ＳＰ6129・ＳＰ6137から柱根（348・349）が出土している。348はＳＰ6137から出土したもので，幅12.3cm，残存長43.3cmの角材状，樹種はヒノキ科である。349もＳＰ6137から出土したもので，幅14.2cm，残存長48.6cmの角材状，樹種はヒノキ科である。349を取り上げる際に下層確認のため断割ったところ，348が下から出土した。348・349ともに横になって出土している。

木製品以外のＳＢ34の柱穴出土の遺物については，ＳＰ6128とＳＰ6134から土師器があるが，小破片のため時期は不明である。ＳＢ34の時期は主軸の方向より，10世紀末～11世紀初めと考える。

35号掘立柱建物（ＳＢ35，第69・70図，図版67）

ＳＢ34に重なるように位置する3間×3間の側柱建物である。桁行7.2m×梁行5.6mを測り，平面積40.3m²，主軸はＮ－88°－Ｗの東西棟である。柱穴の規模は直径21cm～43cmの円形で，深さは3cm～24cmを測る。埋土は灰色シルト混黒色シルトが主体である。桁行方向の柱間は北辺が東から2.4m・2.4m・2.4m，南辺は2.4m・2.5m・2.3mとほぼ均等であるのに対し，梁行方向では東辺は南から3.8m・1.8m，西辺では3.1m・2.5mとなっており不均等である。またＳＰ6121・ＳＰ6122・ＳＰ6123・ＳＰ6125・ＳＰ6126は柱穴が北に傾いており，自然災害の影響を受けたことを示している。

遺物はＳＰ6131から柱根が出土している以外にＳＢ35の柱穴出土の遺物は無く，遺物の時期は不明であるが，ＳＢ35の主軸の方向より，10世紀末～11世紀初めと考える。

36号掘立柱建物（ＳＢ36，第69・70図，図版67）

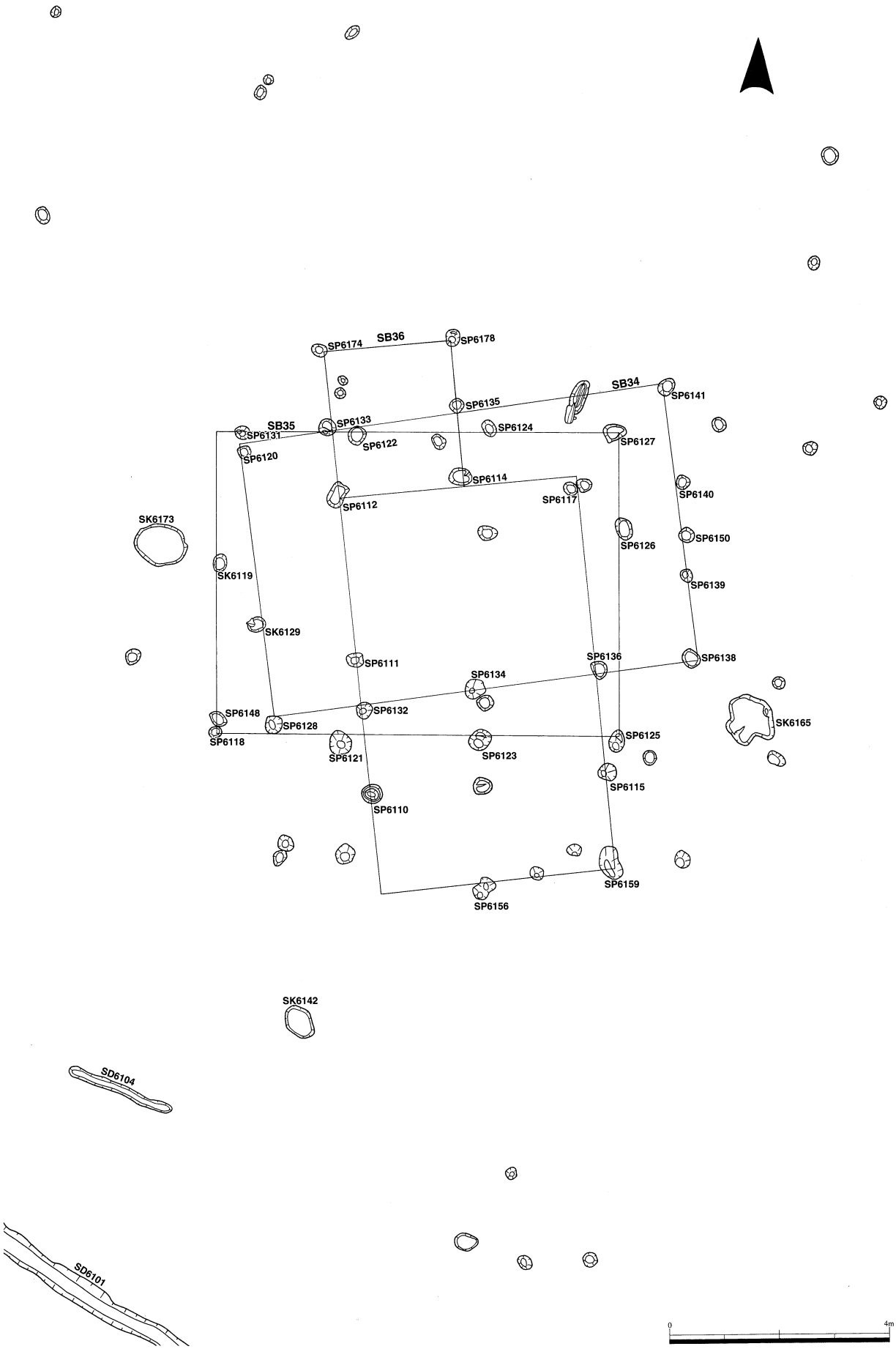
ＳＢ34・ＳＢ35に重なるように位置する。身舎部分が3間×2間の側柱建物で，北側に1間×1間の張り出しがある。身舎部分は桁行7.3m×梁行4.2mを測り，平面積30.7m²，主軸はＮ－5°－Ｗの南北棟である。柱穴は直径27cm～34cmの円形，長径40cm～62cm×短径24cm～34cmの楕円形のものがあり，深さは8cm～27cmを測る。桁行方向の柱間は東辺が南から1.8m・1.9m・3.3m，西辺は南端の柱穴が欠けているが，1.8m（復元）・2.5m・3m，梁行方向では北辺は東から1.8m・2.4m，南辺では2.3m・1.9m（復元）となっており不均等である。張り出し部分は桁行2.7m，梁行2.4mを測り，平面積6.5m²である。柱穴は直径28cm～30cmの円形，深さは18cmを測る。身舎部分の柱穴と張り出し部分のものともに，埋土は灰色シルト混黒色シルトが主体である。ＳＰ6111・ＳＰ6115・ＳＰ6154・ＳＰ6156は柱穴が北に傾いており，自然災害の影響を受けている。

ＳＢ36に伴う遺物は無く，建物の時期を決定するのは困難であるが，ＳＢ36の主軸の方向からみて，11世紀後半であろう。

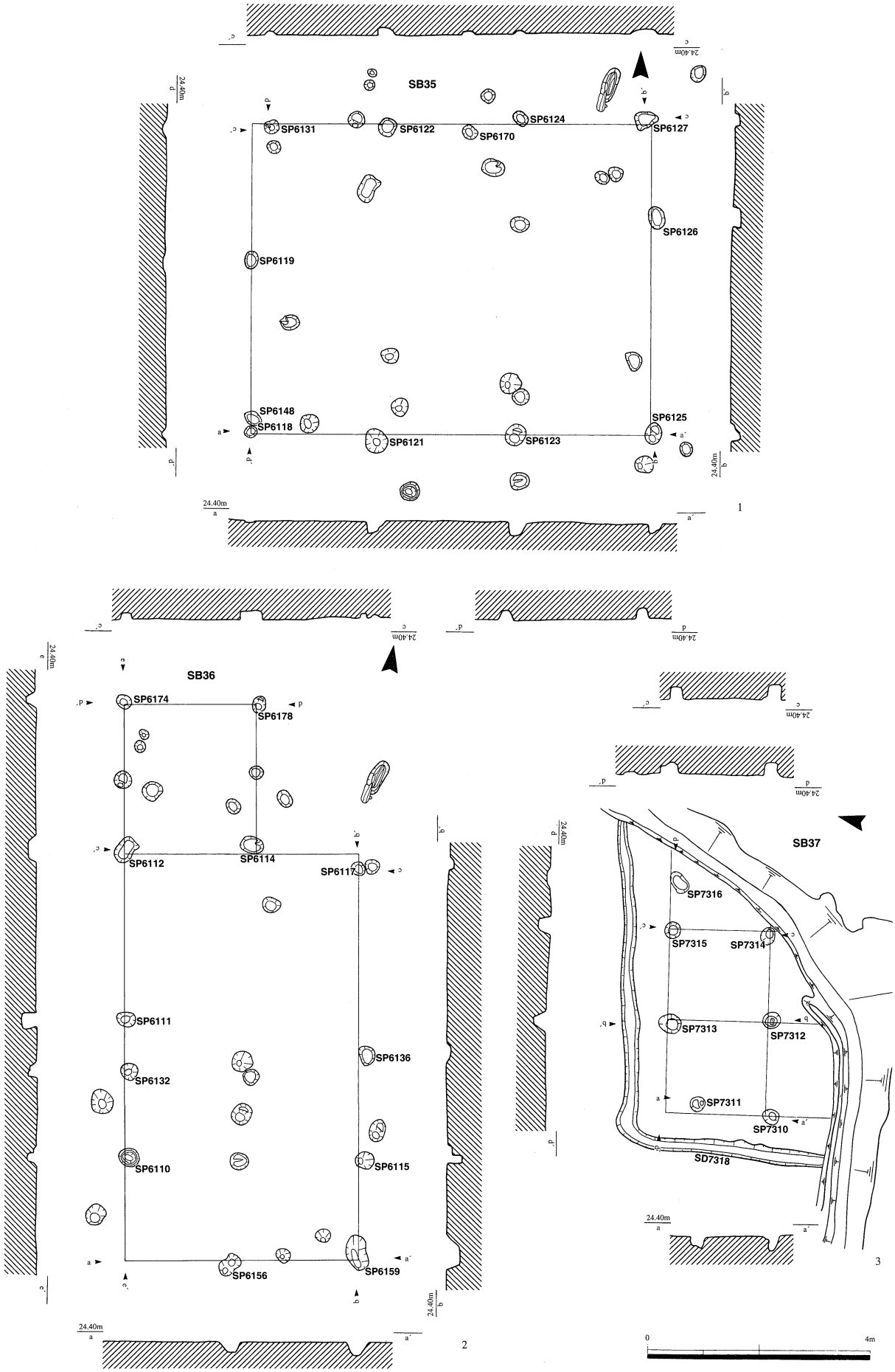
37号掘立柱建物（ＳＢ37，第70・72図，図版67・103）

Ｃ3地区南端に位置し，建物の一部を検出したものである。確認した部分は2間×1間の総柱建物で，周囲に溝が巡る。調査区が排水管によって分断されているため全容は明らかではないが，排水管より南には周溝が確認できないことから，ＳＢ37は南北に2間以上延びることはないであろう。したがって桁行2間以上，梁行2間の東西棟に復元する。確認した部分は桁行3.3m×梁行1.8mを測り，主軸はＮ－76°－Ｅである。柱穴は直径27cm～33cmの円形，長径41cm×短径24cm～35cmの楕円形のものがあり，深さは22cm～28cmを測る。桁行方向の柱間は西から1.6m・1.7mと均等である。

遺物はＳＰ7311から土師器，ＳＰ7314から黒色土器（内外面黒色），ＳＰ7312から礎板（350）が出土している。350は長さ14.3cm，幅8.8cm，厚さ3.2cmを測り，表面は平坦に削られている。ＳＰ7312の底部から出土していることより，建物の柱を立てる際に柱が安定するように使用したものであろう。

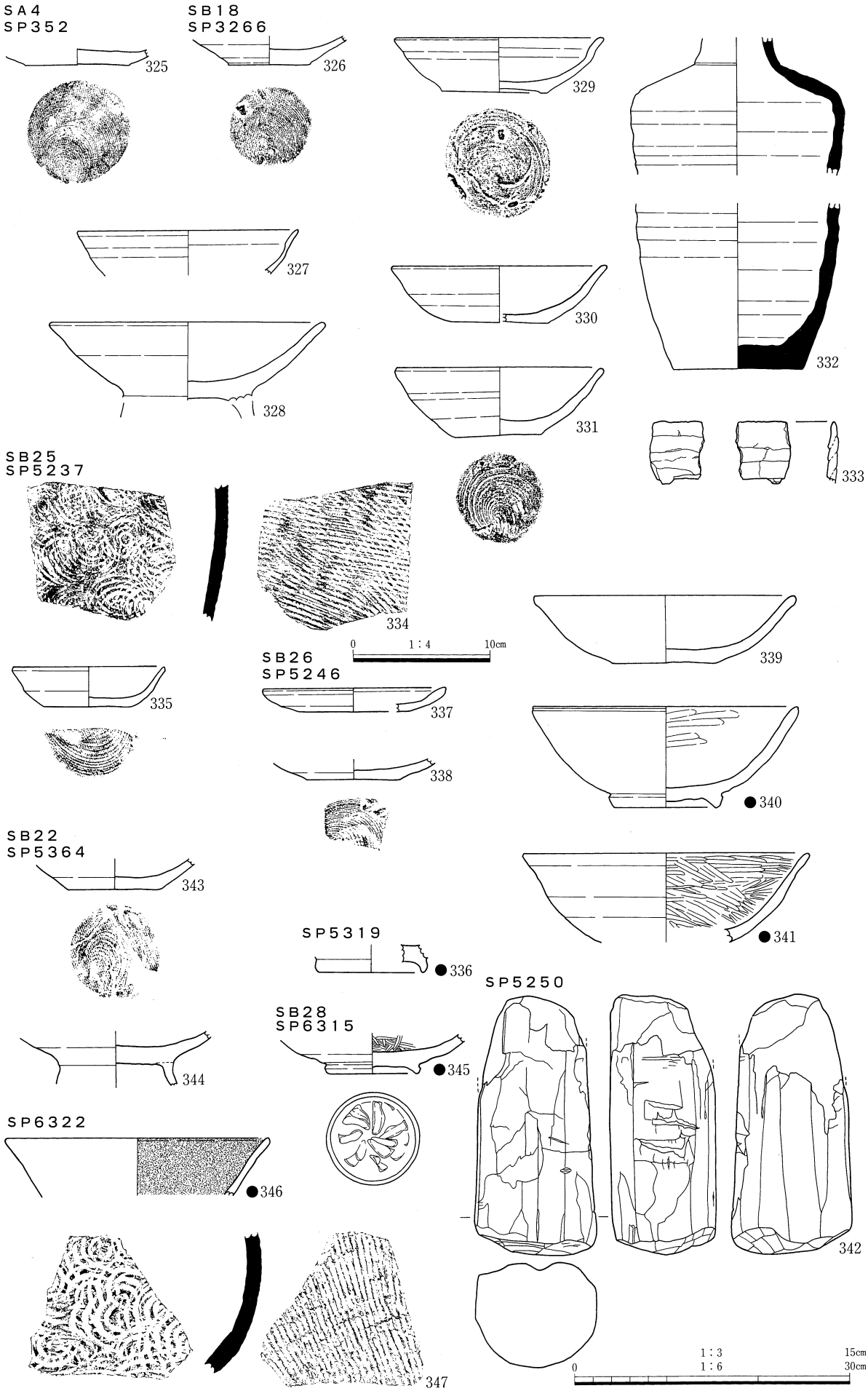


第69図　遺構実測図
SB34～SB36



第70図　遺構実測図

1.SB35　2.SB36　3.SB37



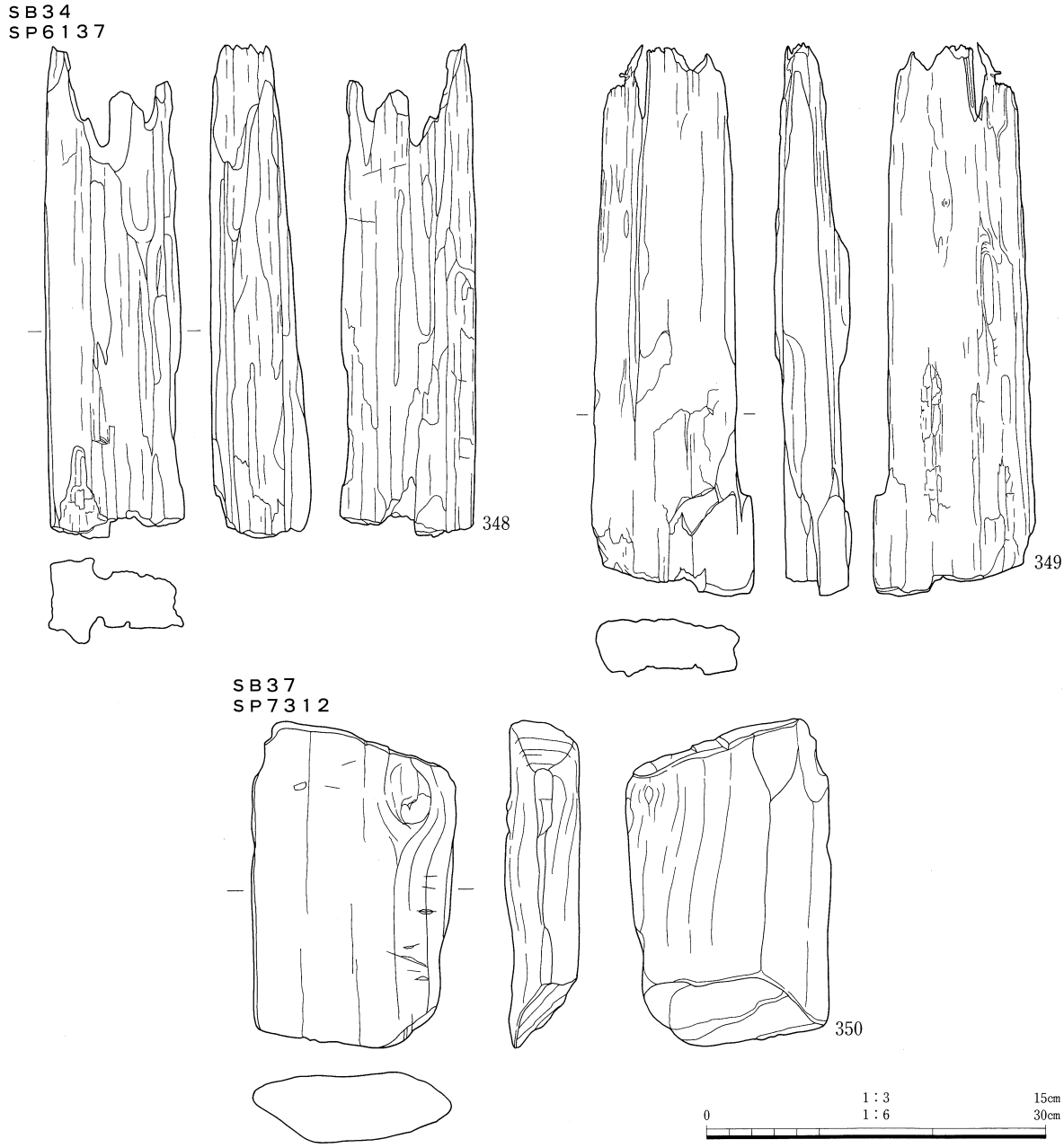
第71図　遺物実測図　(325～332・335～341・343～346　1/3, 334・347　1/4, 333・342　1/6)

SA4 (325)　SB18 (326～333)　SB22 (343・344)　SB25 (334～336)　SB26 (337～342)
SB28 (345～347)

遺物からは時期の決定は困難であるが，主軸の方向から，建物の時期は11世紀後半と考える。

注１　河西健二　1993　「五社遺跡調査で思ったこと」『埋蔵文化財年報』(4)　財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所

注２　遺物の出土状況が廃棄されたというより，何らかの目的のために意図的に埋められたと推定できるもの。例えば地鎮のために行った祭祀との関連を推定するような場合。このような場合，遺物は完形であったり，使用痕がほとんどみられないことが多い。



第72図　遺物実測図　(350　1/3，348・349　1/6)
SB34（348・349）　SB37（350）

B　溝

古代後期で約52条の溝と自然流路を検出した。溝の方向は大きく３方向に分類でき，掘立柱建物群を区画している。これらの溝の方向は条里地割との関連が強いと指摘されているもの[注1]で，建物の時期と同様に３時期あると考える。

202号溝（ＳＤ202，第73・80図，図版70）

Ａ地区の中央やや東よりを南から北に向かって流れる，最大幅1.94ｍ，深さ16cmを測る溝である。深さは南側が深く，北に行くに従い浅くなり，二股に分かれる。二股に分かれる付近でＳＤ221と合流しているが，新旧関係ははっきりしなかった。埋土は黒色砂質土，褐色砂質土，灰白色シルトからなるが，中央部分は窪み，包含層の土が入っていることから，長い期間をかけて埋没したと考えられる。溝の断面の観察からは底部がややずれていることがわかり，掘立柱建物の傾いた柱穴と同様に地震の影響を受けていると考えられる。

遺物はＳＤ202南端付近の中位層から漆椀（358）が出土している。高台は欠損しているが，内外面黒漆のもので，残存部分では，高台内径8.0cmを測る。樹種はケヤキである。

溝の方向は条里との関連が強く，規格性の高いもので，条里地割と関連して建物を区画する重要な役割をもっていたと考えられ，時期は11世紀後半であろう。

221号溝（ＳＤ221）

Ａ地区の北東部を南西から北東に向かって流れる，最大幅94cm，深さ10cmを測る溝である。深さは北東に行くに従い浅くなり，中世の溝にぶつかって消滅する。ＳＤ202との新旧関係ははっきりしない。埋土は黒色砂質土，褐色砂質土，灰白色シルトからなるが，中央部分は窪み，包含層の土が入っていることから，長い期間をかけて埋没したと考えられる。

遺物の出土はないが，掘立柱建物の区画と関連性が高く，時期は11世紀前半と考える。

301号溝（ＳＤ301，第73・80・85図，図版70・79）

Ａ地区の中央を南東から北西に向かって流れる，最大幅2.25ｍ，深さ12cmを測る溝である。ほぼ中央部分でＳＤ324と直交しているが，新旧関係ははっきりせず，同時期に存在したものであろう。埋土はオリーブ黒色砂質土，オリーブ黒色砂質土シルト，灰色砂質シルトからなるが，中央部分は窪み，包含層の土が入っていることから，長い期間をかけて埋没したと考えられる。溝の断面の観察からは西半部分では南側の溝肩がオーバーハングしており，東半部分では溝の底部がずれている。これも地震の影響であろう。しかし同じ溝でも西半部分のオーバーハングは５cm～10cm程度であるのに対し，東半部分のずれの幅は最大で１ｍとずれの幅が異なる。とくに東半部分のずれは上部と下部のずれ面の境に地表面にも観られる噴砂と同質の黄褐色砂が薄く堆積しており，水平方向にずれたため下部の上は地山（Ⅴ層）になっている。

遺物は土師器（351～357）と須恵器壺が出土している。351～356は土師器椀で，底部回転糸切りであり，357は有台椀の底部である。351は口径13cm，器高3.6cm，底径5.8cmを測り，丸みをもった体部から段をもち，口縁部はやや外反する。352は直線的に伸び口縁端部に面取りを施す。口径13.2cm，器高3.6cm，底径5.6cmを測る。357は高台径６cmを測り，高台は四角くやや外に踏ん張る形態で，内面はナデである。ＳＤ301内から出土した遺物は少ないが，ＳＤ324と直交する付近のＳＤ301北側の包含層からは遺物が集中して出土している。

ＳＤ301は人為的な溝であり，溝の方向は他地区の溝とも平行しており，規格性が高く，建物を区画する重要な役割をもっていたと考えられる。時期は11世紀中頃であろう。

303号溝（ＳＤ303，第73図）

ＳＤ301中央やや西寄りの北側に位置し，ＳＫ302より古く，ＳＫ304にぶつかって無くなる溝で東から西へ流れる。規模は最大幅1.57ｍ，深さ14cmを測る。埋土はオリーブ黒色砂質土，灰色砂質シルトからなる。

322号溝（ＳＤ322，第73・80図，図版70・71・79）

Ａ地区の南西隅を南東から北西に向かって蛇行して流れる，最大幅23.6ｍ，深さ34cmを測る自然流路であり，Ｂ１地区では最大幅23.3ｍをもつＳＤ1201（旧番号）に接続し，斜めに横断している。埋土は緑灰色砂，オリーブ黒色粘質土，黒色粘質土からなるが，粘質土中にはピートが互層に入っている。ＳＤ322の内部にはしっかりとした肩をもち一段深い部分があり，Ｂ１地区ではＳＤ1202(旧番号)としていたが，この部分は人為的なものと考えられる。最大幅5.6ｍ，深さ72cmを測り，埋土は黒色粘質土と緑灰色砂が互層になっており，水の流れがある程度あったことを示している。また中央東側にあるＳＤ1204（旧番号）は砂礫が痕跡状に残った浅い溝で，最大幅2.74ｍ，深さ６cmを測り，ＳＤ322に含まれる。Ａ地区では中央部分北側からはＳＤ323が合流してくる。

遺物は土師器，黒色土器，須恵器双耳瓶，須恵器壺，製塩土器，曲物の底板が出土している。359～361は最深部分の溝底部に貼りつくように集中して出土したもので，359は土師器椀の底部で，回転糸切りである。360は底部回転糸切りの土師器有台椀であるが，高台が剝離している。口径は15cmである。361は製塩土器。小破片のため口径は不明確であるが，平底のものであろう。

自然流路としては中位層から土師器が出土しており，人為的な溝としては最下層から11世紀のものと考えられる遺物が出土している。

323号溝（ＳＤ323，第74図，図版70・71）

ＳＤ322に合流する自然流路で，最大幅3.76ｍ，深さ30cmを測り，Ｂ１地区ではＳＤ1203（旧番号）に接続し，南東から北西に流れている。埋土はオリーブ黒色砂質シルトである。Ｂ１地区からＡ地区にかけては浅く，肩もはっきりしていないが，ＳＤ322に近づくにつれ急激に深くしっかりした溝になる。またＢ１地区内では直径約１ｍの範囲で礫が隆起した箇所があり，地震による噴砂で約40cm下にある礫層から吹き上がったものと考えられる。このような噴砂は震度Ⅵ（烈震）・震度Ⅶ（激震），特に液状化し易い地盤条件では震度Ⅴ（強震）で発生する[注2]ことから，非常に強い地震があったことを示している。

遺物は土師器，黒色土器，須恵器壺，製塩土器が出土しているが，図示可能なものはない。したがって遺物から時期を決定するのは困難であるが，ＳＤ322に流れ込んでいることから，11世紀代のものであろう。

324号溝（ＳＤ324，第74・80図）

ＳＤ301に直交し，北東から南西に流れる，最大幅58cm，深さ10cmを測る溝で，ＳＤ323の手前で徐々に浅くなり消滅する。遺構の切り合い関係からＳＢ14・ＳＡ２・ＳＤ325より新しいことが判った。埋土は灰色砂質シルト，オリーブ黒色砂質シルト，灰白色砂質シルトからなる。ＳＤ324はＳＤ221とほぼ同じ方向の溝で，ＳＤ221に比べ規模は小さいが，建物の区画に関連した規格性の高い溝で，条里との関連が強いと考えられる。

遺物は土師器（362），黒色土器が出土している。362は口径９cmを測る土師器皿である。ＳＤ324内からの遺物の出土は少量であるが，ＳＤ324とＳＢ14とに挟まれた範囲，ＳＤ325とで挟まれた範囲の包含層からは，集中して遺物が出土している。また前述したが，ＳＤ301と直交する付近の包含層から

も集中して遺物が出土することから，これら３条の溝を意識して遺物が廃棄されていることが推察される。遺物から時期は11世紀前半であろう。

325号溝（ＳＤ325，第74・80図，図版70・71・79）

ＳＤ301にぶつかって消滅する溝で，南から北へ流れる。最大幅3.86ｍ，深さ18cmを測る溝で，Ｂ１地区のＳＤ1207（旧番号）に接続する。ＳＤ301にぶつかって終わることからＳＤ301とほぼ同時期の遺構であり，ＳＤ324より古いことが判った。埋土はオリーブ黒色砂質シルト，灰色砂質土からなる。溝はＢ１地区からＡ地区にかけて直線的であり，人為的なものと考えられるが，他の溝に比べ自然流路のように肩部がなだらかである。ＳＤ325は条里地割に基く建物の区画に関連した規格性の高い溝であろう。

遺物は土師器（363～365），黒色土器（366～368）が出土している。363は土師器椀で，口径13cmを測る。口縁部まで直線的に伸びる。364は土師器椀で，口径11.8cmを測り，体部は丸みをもち，口縁端部内面は内傾している。365は土師器有台椀の底部で，底径６cm，高台内面は回転糸切りで高い高台を貼り付けている。366は内黒の有台椀の底部である。底径は５cmを測り，高台内面は回転糸切りで，低くて断面三角形の高台を貼り付けている。367・368は内黒の有台椀の底部である。底径は6.5cmを測り，高台内面には引き出して高台を作り出す際の菊花状文がある。高台は低く外に開き，しっかりしている。367は外面に面取りを施しており，368は断面三角形である。ともに体部内面のミガキははっきりしない。ＳＤ325からの遺物の出土量は少量であるが，ＳＤ324とで挟まれた範囲の包含層からは集中して遺物が出土する。遺物から時期は10世紀末～11世紀初めと考える。

347号溝（ＳＤ347，第73図）

ＳＤ301の中央部に接続し北西から南東に流れる溝で，最大幅51cm，深さ13cmを測る。ＳＤ301に切られていることから，ＳＤ301より古く，埋土は灰色粘質土である。遺物の出土はないが，溝の時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

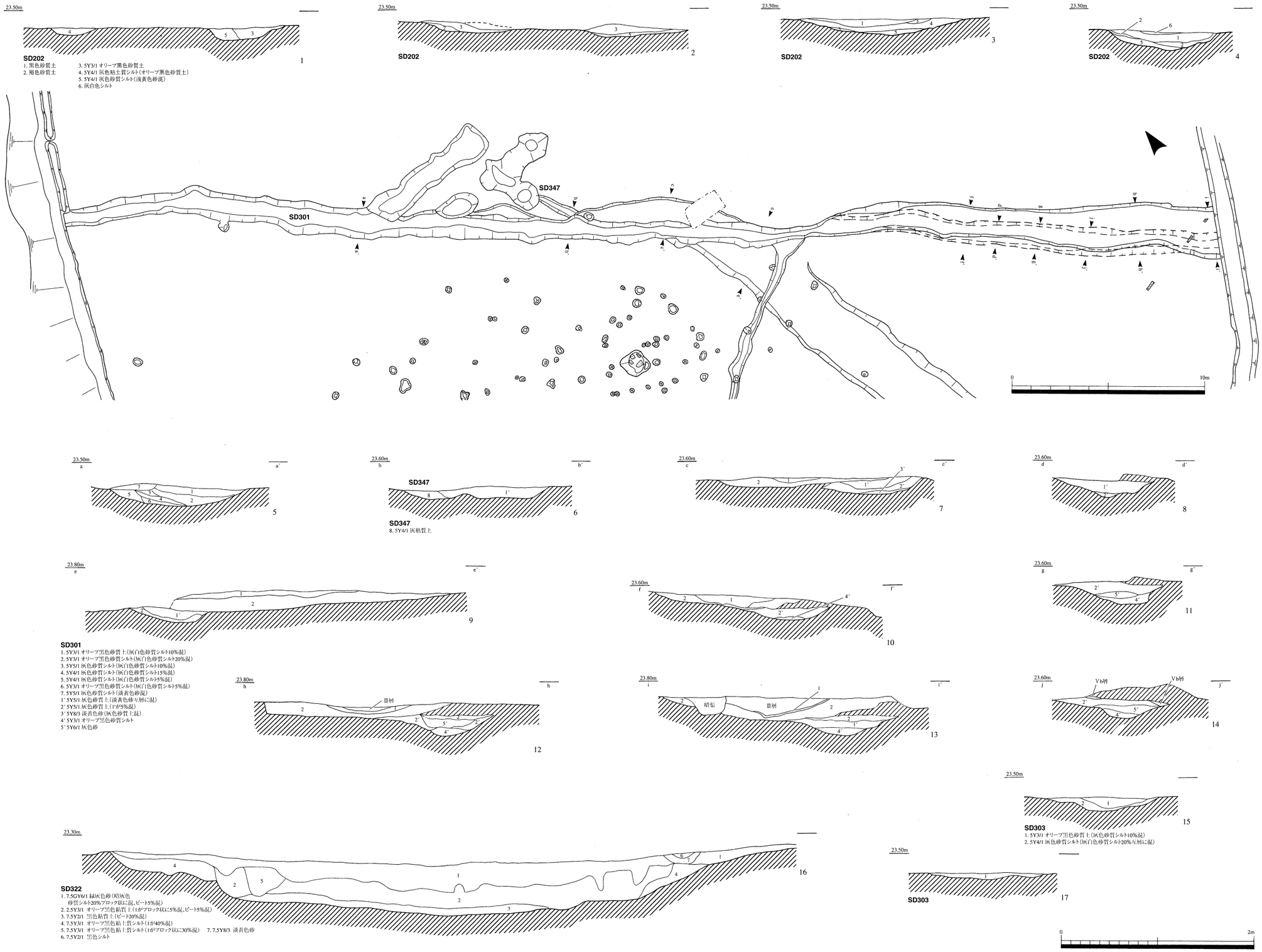
1200号溝（ＳＤ1200，第74図）

Ｂ１地区の西半部を北西から南東に流れる溝である。Ｂ２Ｅ地区のＳＤ3203に接続するもので，最大幅1.4ｍ，深さ26cmを測る。溝は北西側が深くしっかりしているのに対し，南東側は浅くぼんやりしている。埋土は黒色砂質シルト，オリーブ黒色シルト，オリーブ黒色粘土質シルトからなる。ＳＤ1200は直線的でＳＤ301と平行しており，ＳＤ301との距離は約60ｍである。人為的に建物を区画する規格性の高い溝で条里地割との関連があろう。

遺物は土師器，製塩土器，フイゴの羽口が出土しているが，小破片で時期を決定するのは困難である。しかしＢ１地区ほぼ中央のＳＤ1200上の包含層（Ｘ210Ｙ95付近）からは，直径約10ｍの範囲で遺物が集中して出土している。土器の廃棄が溝の中でないことに何らかの意味があるものと考えられる。これはＡ地区でみられた溝付近の包含層から遺物が集中して出土した様相と同様であろう。溝の時期は11世紀前半と考える。

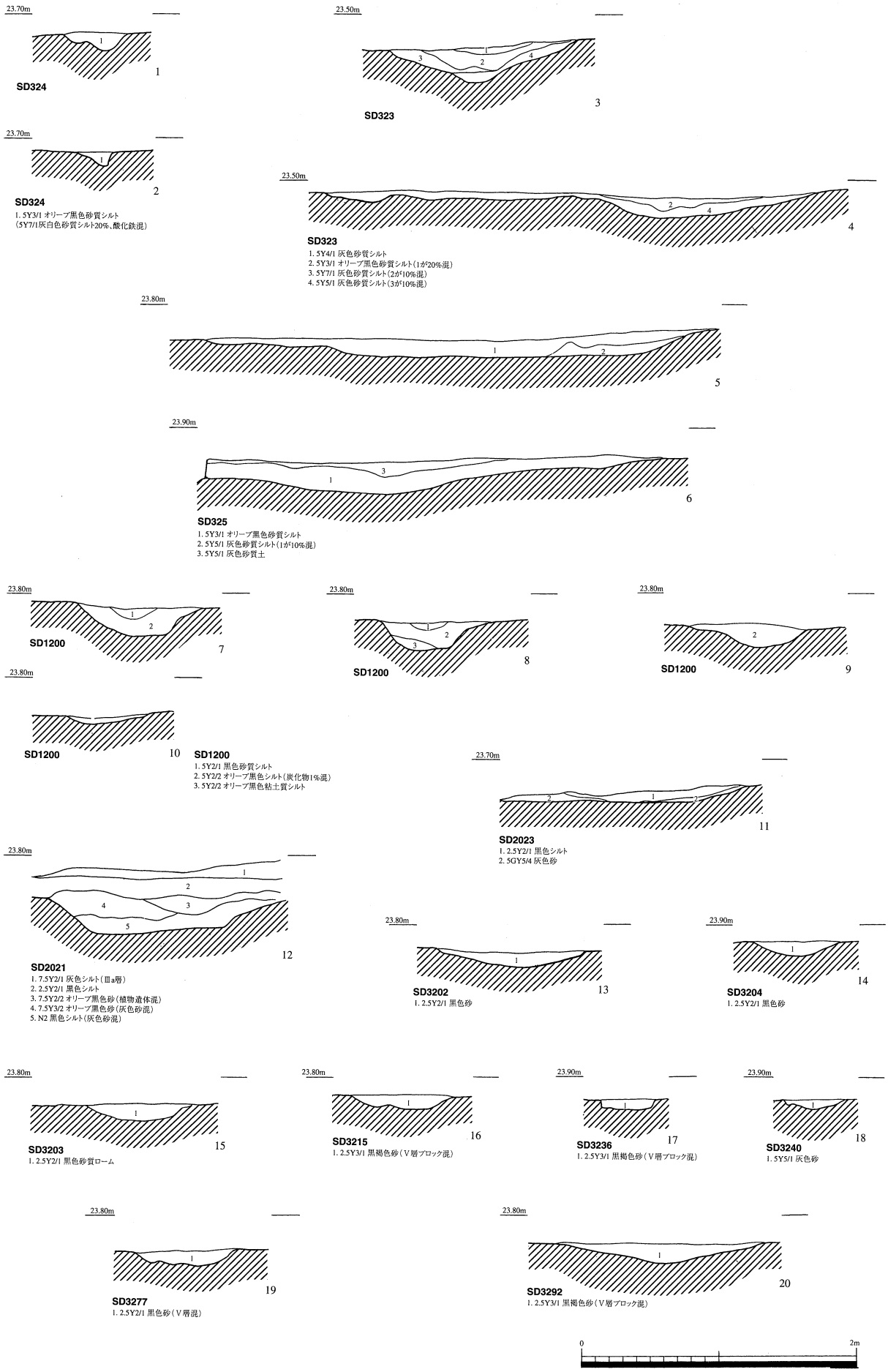
2020号溝（ＳＤ2020，第75・76・80～82図，図版71・72・80～82・104～106）

Ｂ３地区の中央を縦断し，Ｂ２Ｅ地区西側からＢ２地区中央を南東から北西へ流れる自然流路である。最大幅6.21ｍ，深さ1.13ｍを測る。南側が細く，北側に向かって広く深くなっている。ＳＤ2020は古代前期～中世にかけての自然流路が上下に重なっているもので，古代後期のＳＤ2020の埋土は第76図で網を掛けた部分，灰色シルト，黒色砂質シルト，黒色砂，灰色砂からなる。その下部の土層15～18は古代前期の自然流路ＳＤ475の埋土で，ＳＤ2020の埋土との間には13・14の古代前期の包含層であるＶ層・Ⅵ層がある。Ｖ層は洪水で大量に堆積した層で，オリーブ褐色粗砂であり，ＳＤ2020はＶ層～Ｓ



第73図　遺構実測図

1～4. SD202　5～14. SD301　15. SD303　16・17. SD322



第74図　遺構実測図

1・2.SD324　3・4.SD323　5・6.SD325　7～10.SD1200　11.SD2023　12.SD2021　13.SD3202
14.SD3204　15.SD3203　16.SD3215　17.SD3236　18.SD3240　19.SD3277　20.SD3292

D3475の埋土を削り取る流量があったようである。またＳＤ2020の上部には無遺物包含層Ⅲ層があり，中世面と古代後期面を分けている。Ⅲ層はオリーブ褐色砂で，洪水の堆積物である。中世の自然流路ＳＤ2007はＳＤ2020が埋まった後再び同じところにできたものであるが，厚く堆積したⅢ層を全部削り取るほどの流量はなかったとみられる。したがってそれぞれの溝から出土した遺物は，洪水による砂にパックされた状態で出土しているため，時期差が明らかである。

遺物は土師器（369～374・379～388・398），黒色土器（375～378・389～392），須恵器（393～397），製塩土器（399～401），土錘（402・403），杭，コロバシ（404），漆器（405・406），曲物（407～411），加工材（412～419），種子が出土しているが，ほとんどがＢ２Ｅ地区から出土したものである。

369は底部回転糸切りの土師器皿。口径９㎝，器高2.2㎝，底径3.2㎝を測る。器壁は薄く，底部は縮小しており，体部は直線的に伸び，中程で屈曲して立ち上がる。370～372は土師器椀で，口径が11㎝台，器高が370・371は3.2㎝，372は４㎝である。丸みをもった体部中程で段をもち，口縁部はやや外反する。373は口径14.4㎝，374は口径15.6㎝の底部回転糸切りの土師器椀である。器高はともに4.2㎝，底径も６㎝，6.1㎝と口径の大小以外はほぼ同法量である。373は腰が張り，体部中程でくびれ，口縁部は内湾する。底部外面の一部が黒変している。374は直線的に伸びた体部と，やや外反する口縁部をもつ。器壁は比較的薄い。375～378は内黒の有台椀である。375は口径14㎝，376～378は14.8㎝であり，器高は5.5㎝～5.6㎝である。底径は375は6.4㎝，376は７㎝，377は6.8㎝で，ともに高台を引き出して作成した際の菊花状の痕跡をナデ消している。高台の形態は375が外に開く細く四角い高台であるのに対し，376・377はやや内湾する三角形で，シャープに作り出されている。内面は375がやや雑なミガキであるのに対して，376・377は比較的丁寧なミガキである。黒色処理は内面のみで，外面については口縁部端部に少し黒変部分があるだけである。378は高台が剝離しているもので，引き出した高台をもつものとは形態を異にする。体部は直線的に開き，器高は浅め，底部は回転糸切りで高台を貼りつけていたものである。379～381は回転糸切りの土師器底部で，器種は椀であろう。382～384は土師器椀で，384は口径16㎝の大型ものである。385～388は土師器有台椀の底部。385は高台を引き出しているため，高台の元は窪み，底部中央が盛り上がったようになっている。高台はやや内湾する断面三角形である。386～388はやや高い貼付け高台をもつもので，388は高台内底面に回転糸切り痕がある。389～392は内黒の有台椀の底部で，389・390・392は高台を引き出して成形した際の菊花状文をナデ消している。高台の形態は389・390はやや外に開き外面が直線的で，断面三角形，392はやや内湾する断面三角形で，シャープに作り出されている。少し時期幅のある遺物も含まれるが，多くは11世紀代ものである。

393は須恵器杯Ｂで，高台がつぶれている。394は短頸壺の蓋で，頂部は屈曲する部分まで削っている。頂部外面には自然釉が掛かる。395は双耳瓶で，頸部から上が欠損している。再利用の際に意図的に耳とともに打ち欠いたのであろう。上末窯産の10世紀前半のものであろう。396・397は須恵器甕の破片で，外面は平行叩き，内面は同心円文当て具痕があるものである。

398は土師器壺である。口径8.8㎝で，頸部がくびれ，なだらかに肩部につながる。外面・口縁内面を磨く特殊な器形で，石川県金沢市千木ヤシキダ遺跡に類例がある[注3]。

399～401は製塩土器で，すべて平底のものであろう。口縁部の形態には399のように器壁が厚く，外反するものと，400のように器壁が薄くやや内傾するものがある。

402・403は管状土錘。42は端部が少し欠損しているが，ほぼ完形。403は全体の４分の１ほどが残存するのみで，端部は欠損している。側面からの形態による分類[注4]によると，402・403ともにＩａ類で，402は端部に面取りがなく，403は端部に面取りを施している。402と403は長さ，幅とも403が大きいの

に対し，孔径はほぼ同じで，これは富山市吉倉Ｂ遺跡出土の土錘と同じ様相[注5]である。

404はコロバシである。芯持ち材を使用した一木造で，本体部分と両端の軸部分は出土した時折れていた。本体部分は６枚の羽根状の歯があるが，先端は摩滅・破損していた。軸部分は先端を丸く削りだした円柱形で本体側に向かって細くなっており，本体に取り付く部分はさらに抉るように細く削りこんである。軸部を含めた全長は103.5cm，歯先までの直径は最大で20cmである。樹種はクヌギ節である。

コロバシは砕土機で，全国で４例目，県内では初例である。コロバシはその形態から横長の歯車を回転させる『<ruby>磟碡<rt>ろくとく</rt></ruby>系』と棘のついたドラムを回転させる『<ruby>礰礋<rt>かくたく</rt></ruby>系』に分類される[注6]が，404は磟碡系である。コロバシの使用については家畜に引かせる畜力用と人力用に分類されるが[注7]，404はその大きさから人力用の可能性が高いと考えられている[注8]。

405は漆椀で，内外面黒漆塗りであるが，ほとんど剝落している。底部には成形の際のツメ跡が５カ所ある。406は木皿である。非常に薄い器壁をもつもので，破損がひどいが，底径は８cmである。樹種はともにケヤキである。

407・408は円形板。408の表面はケズリの痕がはっきり残っており，とくに端部を集中的に削るため，断面形は中央が膨らんだレンズ形である。また側面もケズリの痕が顕著で，側板と結合するための木釘の穴が３カ所残っている。407は直径10.5cm，408は直径8.2cmを測る小型のもので，柄杓の底板であろう。樹種は407がスギ，408はヒノキである。409は直径15.5cm，高さ９cmを測る曲物である。側板は１枚で，打合わせは約８cm，上端の下縁は斜めに抉って角を落とす「キメカキ」であり[注9]，上縁は欠損しているが同様であろう。重ね綴じ方は，本綴じは綴り皮で１列外２段綴じで，最上段が長く，小綴じは２段であろう。底板との結合は４本の木釘であるが，１本の木釘は斜めに底面にまで打ち込まれて見えている。底板の内面に２条の傷がある他は，底面にも目立った使用痕や傷はない。樹種はスギである。410は直径13cmの曲物で，底板の側面に木釘が１カ所，釘穴が３カ所あり，一部欠損しているところに残る釘穴は表面にまで達している。表面に２カ所焼けた痕がある。樹種は側板・底板ともスギである。411は直径13.8cmの円形板で，半分しか残存していないが，側面に５カ所ほぼ等間隔で木釘が残存している。また割れ口側の断面にも木釘の穴が１カ所残っており，割れた板同士を結合させていたものと考えられる。表面は黒変しており，片面には線状痕がみられる。円形板の木釘から，ほとんどが底板が側板内側に入り込み，結合させるために木釘を用い，固定した「クレゾコ」の曲物であったとみられる。

412は板で，長さ52cm，幅13.5cm，厚さ2.1cmを測る。両面に線状根が多くみられる。413は加工棒で長さ12.6cm，幅2.5cmの断面菱形をしている。一部焼けて欠損しているが，上端は削って平坦な面を作り中央部にほぞを作り出している。414は長さ40.3cm，幅6.0cm，厚さ1.7cmの加工板。長辺側の両端は面取りを施しており，表面は黒色で黒漆の下地であろうか。415～419は加工棒である。415は全面に面を取り，断面形はほぼ円形で，先端が細くなる。上端部は４方向からのケズリで山形になっており，中央部で折れている。樹種はモミである。416も同様に断面は円形で，上部に穿孔があり，下端は欠損している。417は長さ52.5cm，幅2.5cmを測り，断面長方形で，下端は欠損している。樹種はスギである。418は長さ23cmの箸状のもの。樹種はヒノキ科である。419は断面方形を呈し，やや湾曲したもので，両端が焼けている。

ＳＤ2020から出土した種子にはオニクルミ，モモなどがある。遺物の多くは最下層の植物遺体を多く含む灰色砂層から出土している。遺物の時期は10世紀前半ものを少量含むが，主体となるのは11世前半のものであり，溝の時期も10世紀後半～11世紀と考える。

2021号溝（ＳＤ2021，第74図）

Ｂ２地区の中央西端に位置し，南から北へ流れている溝で，ＳＤ2023につながるものと考えられる。幅1.54ｍ，深さ24cmを測り，埋土はオリーブ黒色砂，黒色シルトで，上層には植物遺体を含む。遺物は土師器が出土している。ＳＤ325と平行して流れており，間隔は約80ｍである。建物の区画と関連するもので，時期も同時期の10世紀末～11世紀初めと考える。

2023号溝（ＳＤ2023，第74図）

Ｂ２地区の南部分にある，南から北に流れる溝で，ＳＤ2021につながる可能性が高い。幅1.76ｍ，深さ14cmを測り，埋土は黒色シルト，灰色砂である。遺物は土師器と製塩土器が出土しており，溝の時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

3202号溝（ＳＤ3202，第74図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅に位置し，南東から北西に流れる溝である。幅1.4ｍ，深さ14cmを測り，埋土は黒色砂である。遺物の出土はないが，自然流路ＳＤ322を挟んでＳＤ325と平行して流れており，間隔は約35ｍ，条里地割に関連した溝と考えられるが，Ｂ１地区には続かない。溝の時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

3203号溝（ＳＤ3203，第74図）

ＳＤ3202の南にある溝で，北東から南西に流れる。幅2.45ｍ，深さ12cmを測り，埋土は黒色砂質シルトである。遺物は土師器が出土しているが，小破片である。ＳＤ1200とつながる可能性が高く，ＳＤ301と平行している。ＳＤ301・ＳＤ1200は建物を区画する規格性の高い溝で，条里地割との関連が強いと考えられる。時期は11世紀前半である。

3204号溝（ＳＤ3204，第74図）

ＳＤ3203の南に位置し，南から北に流れる溝である。幅82cm，深さ12cmを測り，埋土は黒色砂である。ＳＤ3203との交点では新旧関係がはっきりしていないが，合流しているのであろうか。遺物は出土していないが，溝の時期は11世紀後半であると考える。

3214号溝（ＳＤ3214，第79図）

Ｂ２Ｅ地区の北部中央で，畠遺構の中にある北から南に流れる溝で，畠のさくの可能性が高い。幅47cm，深さ６cmを測り，埋土は黒褐色砂質シルトである。遺物の出土はないが，溝の時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

3215号溝（ＳＤ3215，第74図）

ＳＢ16の北にある自然流路で，畠遺構の東に位置する。幅92cm，深さ11cmを測り，埋土は黒褐色砂である。遺物の出土はない。

3240号溝（ＳＤ3240，第74図）

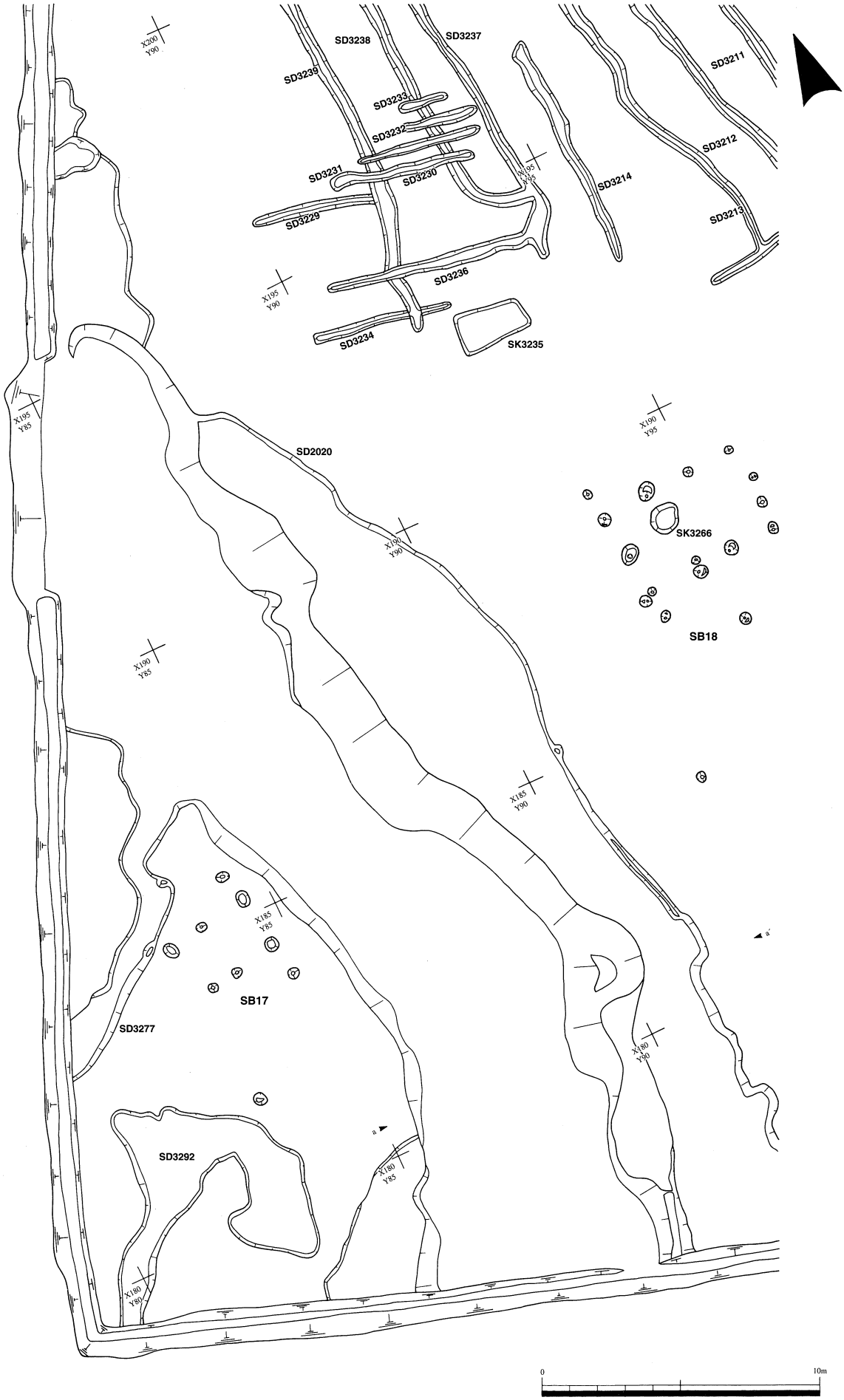
Ｂ２Ｅ地区の中央やや東寄りで，ＳＢ18とＳＢ19の間に位置する。南から北へ流れ，幅68cm，深さ６cmを測り，埋土は灰色砂である。遺物の出土はない。

3277号溝（ＳＤ3277，第74図）

Ｂ２Ｅ地区の南西で，ＳＤ2020に合流する自然流路である。南西から北東へ流れ，幅1.42ｍ，深さ12cmを測り，埋土は黒色砂である。溝の方向はＳＤ221・ＳＤ324と平行しており，建物の区画に関連したものであろう。遺物は土師器，黒色土器が出土している。

3292号溝（ＳＤ3292，第74図）

Ｂ２Ｅ地区の南西隅に位置する，逆Ｊ字形の自然流路である。幅1.58ｍ，深さ16cmを測り，埋土は黒褐色砂である。流れはほとんどなく，澱みのようであったと考えられる。遺物は土師器が出土している。



第75図　遺構実測図
SD2020

4102号溝（ＳＤ4102，第77・83・84図，図版72・73・83・106）

Ｂ３地区南端からＣ２地区中央を横断する溝である。南西から北東に流れ，幅2.03ｍ，深さ66cmを測る。埋土は黄灰色シルト，黒色砂質シルト，オリーブ黒砂質シルト，黒色シルトからなる。ＳＤ6207とＣ２地区中央で交差するが，ＳＤ4102が新しい。溝の方向はＳＤ221・ＳＤ324・ＳＤ3277とほぼ平行で，条里地割に基づき建物を区画する規格性の高い溝であろう。

遺物は土師器（426～435），黒色土器（436～440），製塩土器（441），土錘（442･443），柱，下駄の歯，木簡（444），加工材（445・446），炭化材，種子が出土している。

426～429は底部回転糸切りの土師器皿。426は口径7.6cm，器高2.1cmで最も小型のものである。429は口径10.1cm，器高2.4cmで最も大型もので，底部外面から体部にかけて黒変している。ともに体部中程に段をもち，口縁が外反する形態である。427は体部が直線的に伸びる形態，428は底部がやや厚めで，丸い体部をもつ形態である。430は底部回転糸切りの土師器椀で，口径14.6cm，器高4.5cm，底径５cmを測る。体部はやや丸みをもち，口縁端部は外反する。431～433は底部回転糸切りの土師器椀底部。432は外面の一部が黒変し，内面は赤色をしている。434は底部回転糸切りの柱状高台をもつ土師器有台椀の底部。底径は4.4cmを測り，高台は低い台形である。435は回転糸切りの土師器皿底部であるが，底径は8.6cmと大きく，体部は一旦くびれてから立ち上がる。

436は口径15.2cm，器高５cm，底径６cmを測る内黒の有台椀である。体部は丸みがあり，段をもって直線的に伸びる。高台は引き出して成形されており，外に開く丸い形態で，その際できた菊花状文をナデ消している。内面は口縁から底部にかけてしっかり磨いている。437・438は内黒の椀で底部は欠損している。437は口径13.3cm，438は口径15.5cmを測る。439は内黒の有台椀の口縁を欠損したもの。高台は引き出して成形されており，底部中央部が盛り上がり，成形の際できた菊花状文をナデ消している。高台と体部の境ははっきりしない。440の高台も引き出して成形されており，外は垂直に高台内面は外に向かって斜めになっており，断面三角形である。高台内底面には菊花状文があり，底部内面は粗いミガキを施している。441は製塩土器の口縁部である。

442・443は管状土錘である。442は完形，443は端部の一部を欠損している。形態分類ではともにＩｂ類で，両端部に面取りをしている。

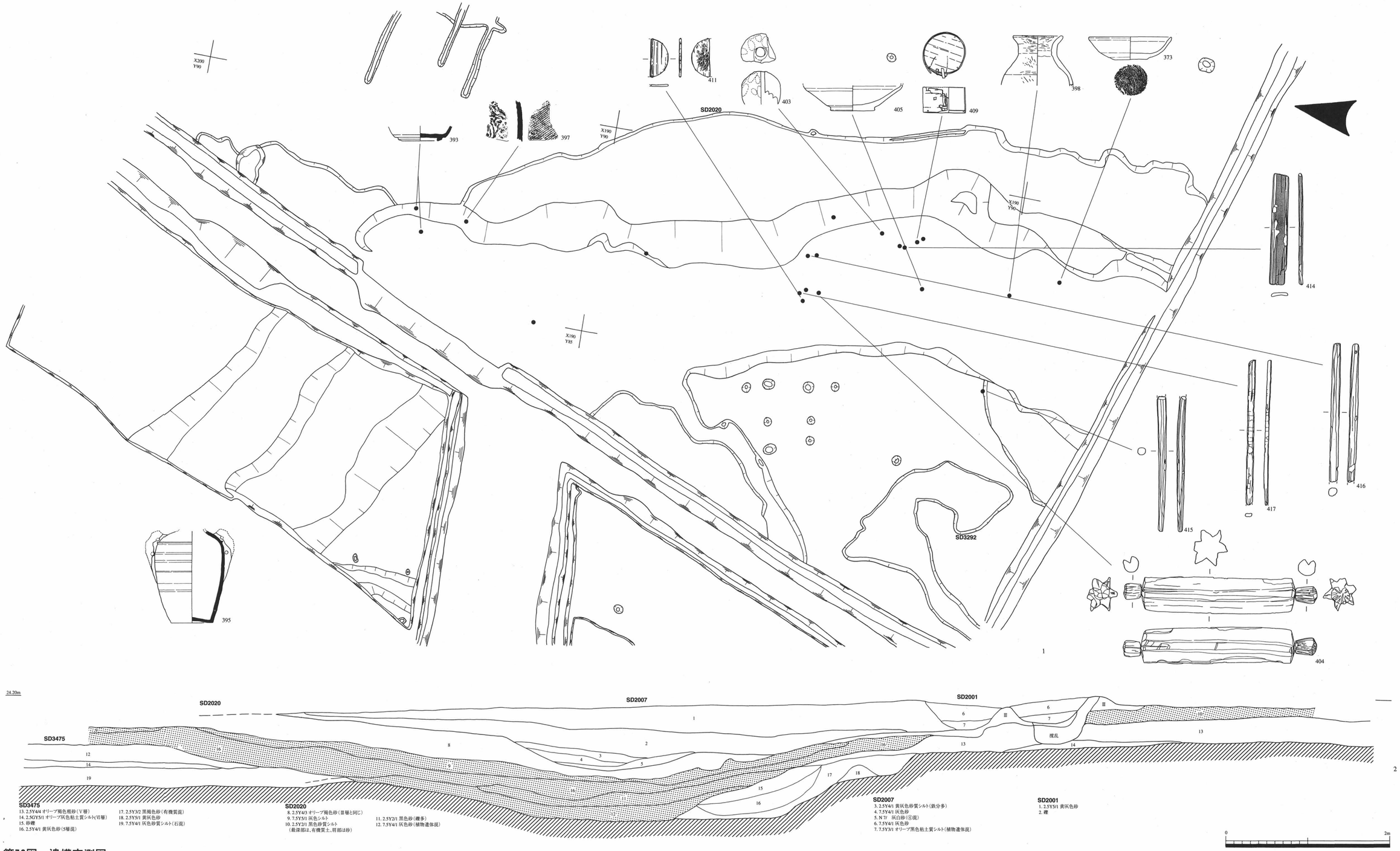
444は長さ22.8cm，幅3.8cm，厚さ0.7cmの木簡で，一部を欠損している。木簡の形態は上端が圭頭，下端は斜めで，011型式である[註10]。文字は確認できない。樹種はヒノキである。445は長さ30cm，幅２cmで，面取りを施しているため断面は角の丸い長方形で，片側にほぞを作り出している。表面には漆が残存している部分もある。一方は焼けて欠損しているが，建築材であろう。446は長さ38.8cm，幅８cm，厚さ2.9cmを測る。断面三角形で一面を平滑に削っている。ＳＤ4102の時期は出土した遺物が11世紀前半のものを中心としていること，平行する他の溝の時期から11世紀前半と考える。

4103号溝（ＳＤ4103，第77図，図版72）

Ｂ３地区の北東隅に位置する，幅1.68ｍ，深さ13cmを測る溝で，北西から南東に流れる。埋土はオリーブ黒色土である。遺物の出土はないが，溝の方向はＳＤ301･ＳＤ1200とほぼ平行で，ＳＤ1200との間隔は約50ｍである。ＳＤ4103も人為的な溝で，建物の区画に関連した規格性の高い溝であろう。溝の時期は11世紀前半と考える。

5200号溝（ＳＤ5200，第77図，図版72）

Ｃ１地区の北端に位置する溝で，ＳＤ5201・ＳＤ5202と平行して流れている。幅62cm，深さ10cmを測る。南東から北西に流れ，埋土は黒色砂質シルト，暗灰黄色砂である。出土遺物はないが，溝の流



第76図　遺構実測図

1．SD2020　遺物出土状況　2．SD2001・SD2007・SD2020・SD3475

路方向から11世紀前半と考える。

5201号溝（ＳＤ5201，第77図，図版72）

Ｃ１地区の北端でＳＤ5200に平行している，幅72cm，深さ５cmを測る溝である。南東から北西に流れ，埋土は黒色砂質シルト，灰色砂である。出土遺物はないが，時期は11世紀前半と考える。

5202号溝（ＳＤ5202，第77図，図版72）

ＳＤ5200・ＳＤ5201に平行している，幅1.2ｍ，深さ13cmを測る溝である。南東から北西に流れ，埋土は黒色砂質シルト，オリーブ黒色砂質シルト，灰オリーブ色砂質シルトである。ＳＸ5004が上から掘り込んでいる。出土遺物はないが，時期は11世紀前半であろう。

5203号溝（ＳＤ5203，第62・83図）

Ｃ１地区の中央に位置するＳＢ22の北にある，幅28cm，深さ５cmを測る溝で，埋土は黒色砂質シルトである。ＳＢ22の周囲にある３条の溝中最も長い。敷地の区画溝であろうか。

出土遺物は黒色土器（425）である。425は内外面黒色の有台椀底部である。高台は引き出して成形しており，高台内底面には菊花状文がある。高台端部は外に開いており，内面は高台の元に強いナデを施しくびれている。時期はＳＢ22と同時期の10世紀末～11世紀初めであろう。

5204号溝（ＳＤ5204，第62図）

ＳＢ22の南で，ＳＤ5203と平行している幅25cm，深さ５cmを測る溝で，埋土は黒色砂質シルトである。出土遺物は製塩土器である。敷地の区画溝であろうか。時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

5233号溝（ＳＤ5233，第77図）

ＳＢ22の西を南から北へ流れる，幅１ｍ，深さ８cmを測る溝で，埋土は黒色シルト，灰色砂である。出土遺物は土師器，黒色土器，製塩土器である。時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

6101号溝（ＳＤ6101，第77図）

Ｃ２地区からＣ３地区にかけて北西から南東へ流れる，幅75cm，深さ12cmを測る溝である。埋土は黒色シルトである。出土遺物はない。ＳＤ301・ＳＤ1200・ＳＤ4103・ＳＤ6207と平行であり，ＳＤ6207との間隔は約35ｍで，建物の区画に関連した規格性の高い溝と考えられる。平行する溝から時期は11世紀前半であろう。

6207号溝（ＳＤ6207，第77・84図，図版72）

Ｃ２地区中央を南東から北西へ流れる，幅2.62ｍ，深さ16cmを測る溝である。埋土は黒色シルト，黄灰色砂質シルト，灰色粘質シルトである。ＳＤ4102と交差しており，ＳＤ6207が古い。ＳＤ4102の北側で一旦細くなり，南側では再びしっかりした溝になるが，南端ほど浅くなりはっきりしない。ＳＤ301・ＳＤ1200・ＳＤ4103・ＳＤ6101と平行で，条里地割に基づいて建物の区画に関連した規格性の高い溝と考えられる。

遺物は土師器(447～449)，黒色土器が出土している。447は回転糸切りの土師器皿の底部。底径6.2cmを測り，体部外面には煤が付着している。448・449は土師器甕。448は外面に沈線が１条巡り，叩き目がある。449は口径17.6cmを測る口縁で，端部はわずかに巻き込む。９世紀後半のものであろう。出土した遺物は９世紀後半のものを含むが，溝の時期は11世紀前半であろう。

6208号溝（ＳＤ6208，第77図）

ＳＤ4102の北を北西から南東へ流れる，幅2.38ｍ，深さ24cmを測る溝である。埋土は黒色シルト，灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

7300号溝（ＳＤ7300，第78図）

Ｃ３地区の北東部に位置する，南西から北東に流れる溝である。幅1.2ｍ，深さ28cmを測り，埋土は灰色砂，オリーブ黒色シルト，オリーブ灰色砂である。遺物は出土していない。

7301号溝（ＳＤ7301，第78・84図）

Ｃ３地区の中央を南東から北西に流れる溝である。幅2.24ｍ，深さ15cmを測り，埋土は黒色シルト，オリーブ黒色シルト，灰オリーブ色粘質シルトである。Ｄ１地区のＳＤ8201につながる可能性もある。

遺物は土師器（450）が出土している。450は土師器甕の口縁部で，端部は巻き込んでおり，内外面回転ナデである。９世紀後半のものであろう。ＳＤ325・ＳＤ3202と平行で，条里地割と関連する溝で，時期は10世紀末～11世紀初めと考える。

7303号溝（ＳＤ7303，第78図，図版73）

Ｃ３地区の南部を北東から南西に流れる溝で，幅1.5ｍ，深さ24cmを測り，埋土はオリーブ黒色粘質シルト，黒色粘質シルトである。遺物は土師器が出土している。ＳＤ7303はＳＤ4102に平行しており，間隔は約50ｍで，条里地割と関連した規格性の高い溝であろう。溝の時期は11世紀前半と考える。

7304号溝（ＳＤ7304，第78図）

ＳＤ7303と交差する溝で，幅1.04ｍ，深さ６cmを測り，埋土はオリーブ黒色粘質シルトが主体である。南東から北西に流れ，Ｄ１地区のＳＤ8202につながる可能性がある。ＳＤ7304はＳＤ7303より古い溝で，ＳＤ7301と平行している。遺物は出土していなが，時期は10世紀末～11世紀初めであろう。

7318号溝（ＳＤ7318，第70図，図版67）

Ｃ３地区の南部に位置する，ＳＢ37の周囲を方形に巡る溝である。幅27cm，深さ４cmを測り，埋土は黒色シルトである。出土遺物はないが，建物と同時期の11世紀後半と考える。

8201号溝（ＳＤ8201，第84図，図版73・83）

Ｄ１地区の調査区東側に沿う自然流路で，幅4.23ｍ，深さ24cmを測り，埋土は黒色シルトが主体である。Ｄ１地区のほぼ中央で90°東に折れ，ＳＤ7304とつながる可能性がある。屈曲地点では細く浅い溝が分岐し直線的に伸びている。

遺物は土師器（451・452・454～456）・黒色土器（453）・須恵器（457～461）が出土している。

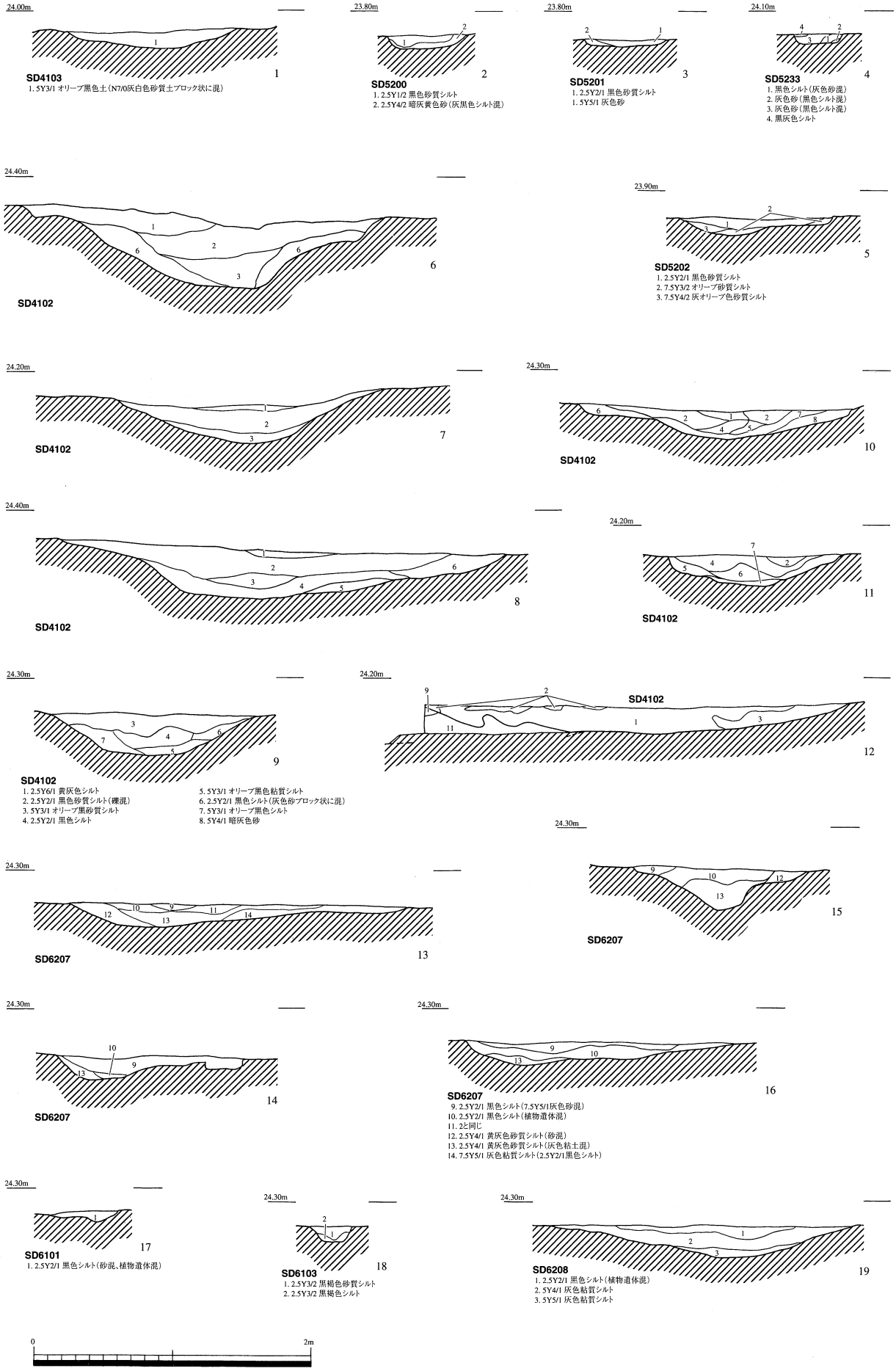
451は内外面赤彩の土師器椀である。口径12.5cm，器高4.4cm，底径4.6cmを測り，底部回転糸切りで，体部は直線的に伸びる。452は回転糸切りの椀底部。453は内黒の無台椀である。底部は回転糸切りで胎土は粗い砂粒が多い。454～456は土師器甕で，454は内面にハケメが残り，455は平底で，内外面に粗いハケメが残るものである。456は外面が粗く深い平行叩き，内面は同心円文当て具痕のある甕体部破片である。457は杯蓋端部で僅かに屈曲する。458は杯Ｂで，高台は少し外へ踏ん張り，端部は外傾する。459は皿で，大きく外反して開く。460は杯Ａで，461は短頸壺の蓋である。頂部には回転ヘラケズリを施している。451・453は９世紀後半のもので，455は８世紀後半～９世紀前半のものである。須恵器の時期も９世紀後半を主体としていることから，ＳＤ8201は古代前期の遺物が多く出土する，古代後期の自然流路である。

8202号溝（ＳＤ8202）

ＳＤ8201の屈曲地点から分岐した細い溝に平行で，幅71cm，深さ６cmを測り，埋土はオリーブ黒色粘質シルトが主体である。ＳＤ7304とつながる可能性があるが，遺物もなく，時期は不明である。

8203号溝（ＳＤ8203，第78図，図版73）

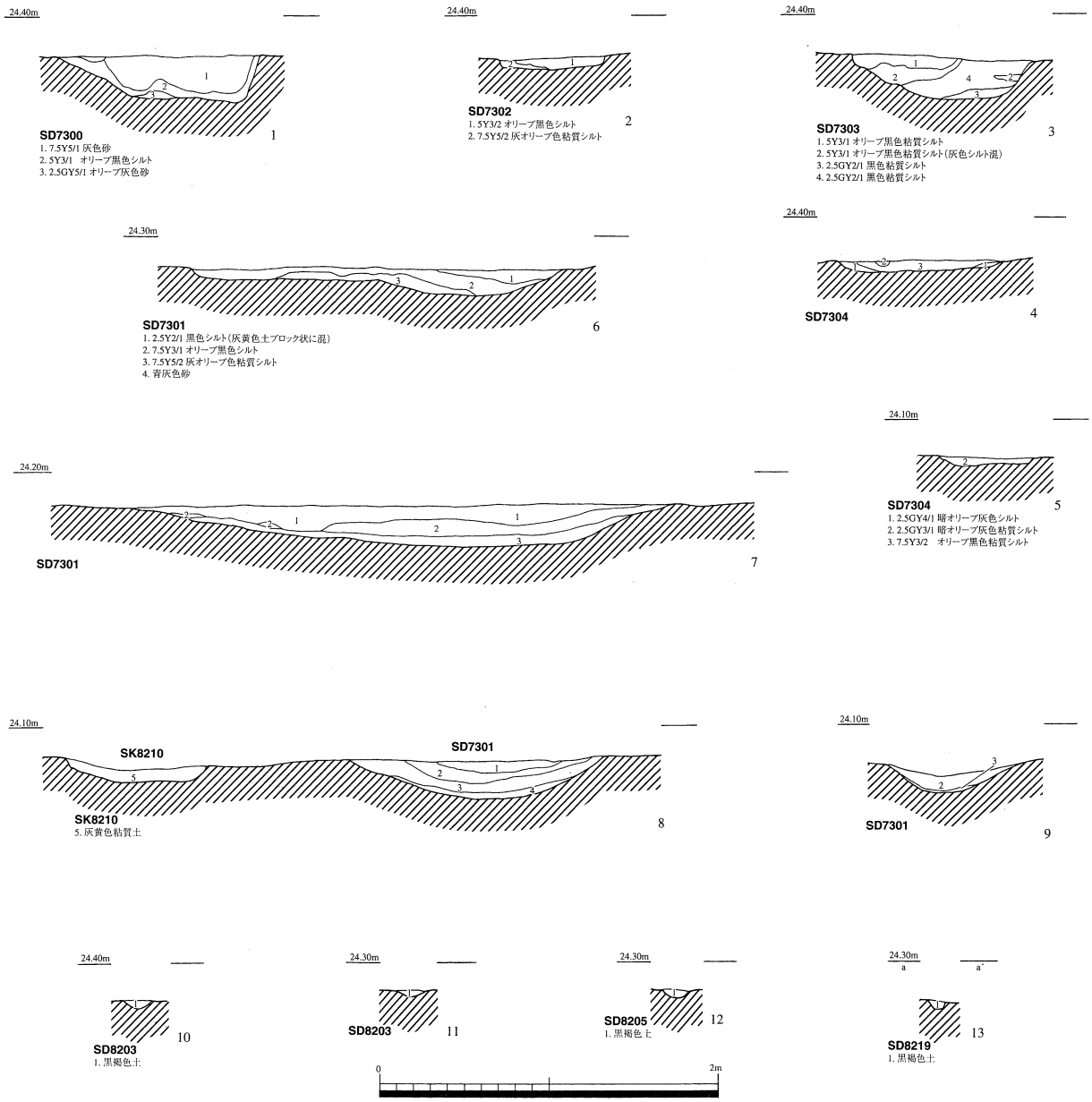
Ｄ１地区の南西部に位置する，幅23cm，深さ５cmを測る溝である。不整形な円を描き，埋土は黒褐色土である。遺物の出土はなく時期は不明である。この溝は最南端の遺構である。



第77図　遺構実測図

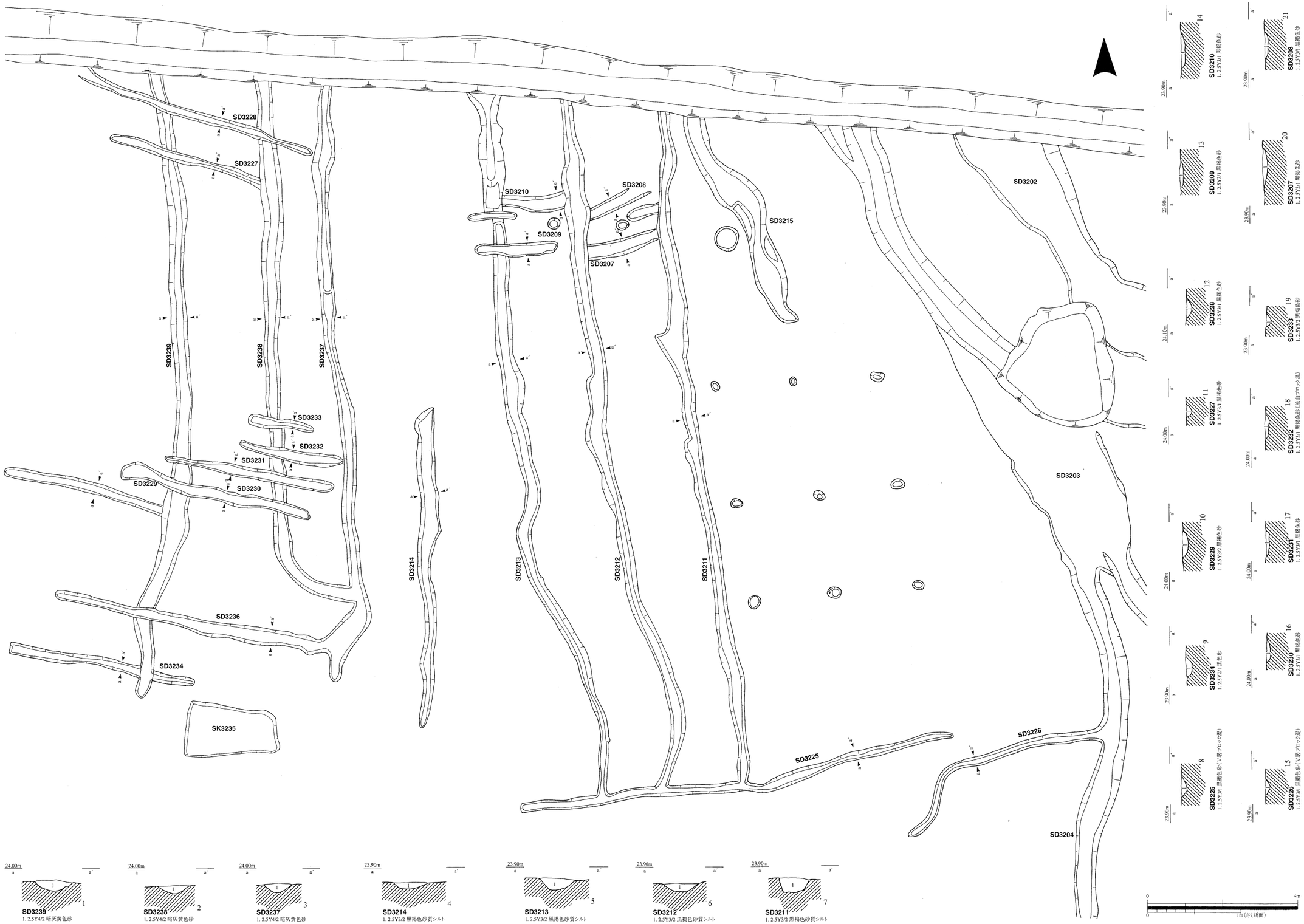
1. SD4103　2. SD5200　3. SD5201　4. SD5233　5. SD5202　6～11. SD4102
12. SD4102・SD6207　13～16. SD6207　17. SD6101　18. SD6103　19. SD6208

注１　岡本淳一郎　1995　「五社遺跡古代上層面の集落構造について」『埋蔵文化財年報』(6)　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
　同　上　　1996　「庄川扇状地先端部の福岡町江尻遺跡」『砺波散村地域研究所研究紀要』第13号　砺波市立礪波散村地域研究所
　河西健二　1993　「五社遺跡」『第６回北陸中世土器研究会　中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』　北陸中世土器研究会
注２　寒川　旭　1992　『地震考古学』　中央公論社
注３　金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合　1991　『金沢市千木ヤシキダ遺跡・II』
注４　山本直人　1986　「石川県における古代・中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』第29号　石川考古学研究会
注５　越前慶祐　1994　「土錘について」『吉倉Ｂ遺跡』　富山県埋蔵文化財センター
注６　河野道明　1994　『日本農耕具史の基礎的研究』日本史研究叢刊14　和泉書院
注７　渡辺　誠　1989　「水白モンショ遺跡出土の農具・コロバシについて」『石川県鹿島郡鹿島町水白モンショ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
注８　森本英津子　1995　「五社遺跡出土のコロバシについて」『埋蔵文化財年報』(6)　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注９　奈良国立文化財研究所　1985　『木器集成図録近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所史料第27冊
　西村　歩　1994　「曲物の細部技法」『奈良大学文化財学論集』　奈良大学文化財学論集刊行会
注10　木簡学会発行の『木簡研究』の木簡型式番号による。



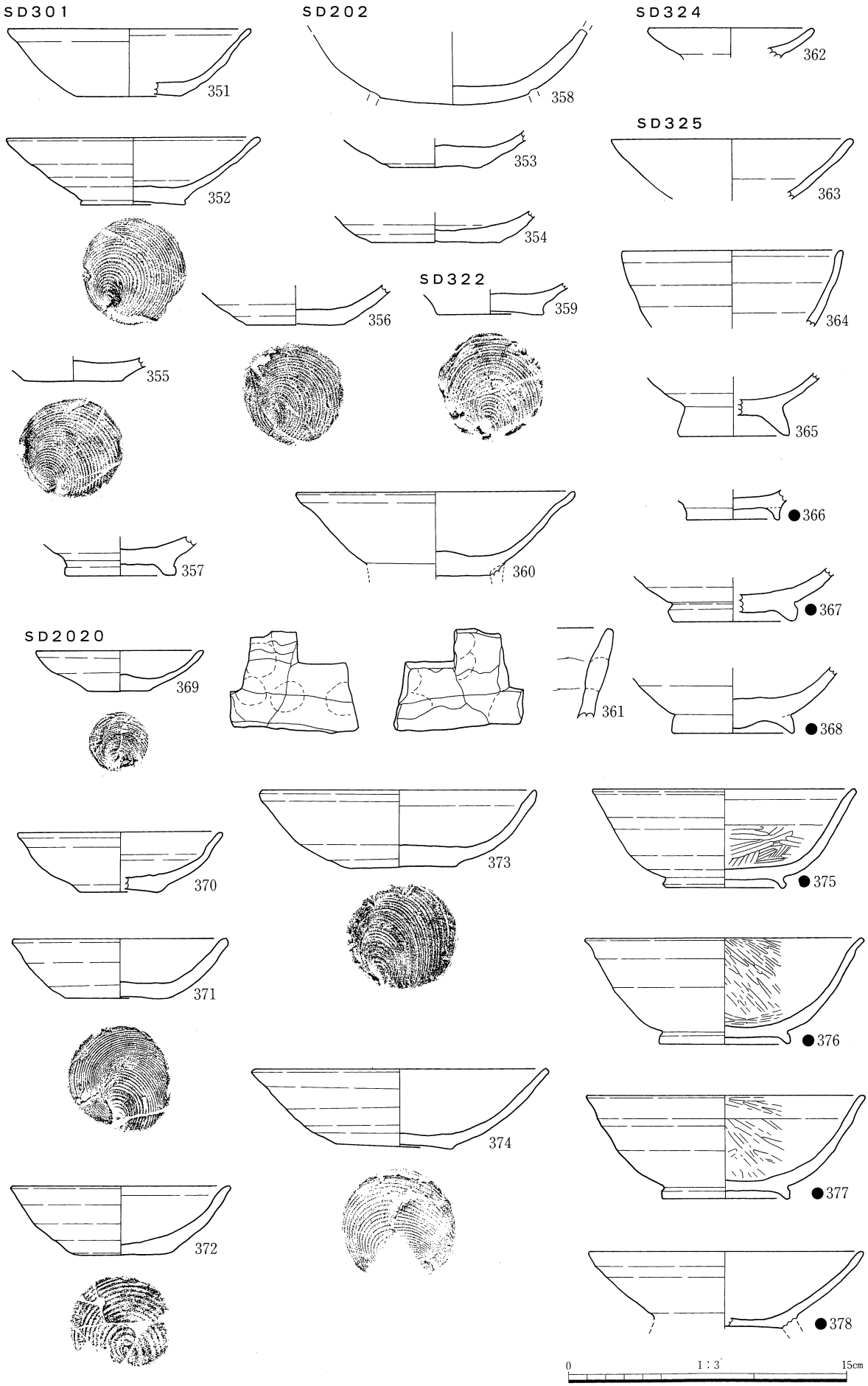
第78図　遺構実測図

1．SD7300　2．SD7302　3．SD7303　4・5．SD7304　6・7・9．SD7301　8．SK8210・SD7301
10・11．SD8203　12．SD8205　13．SD8219



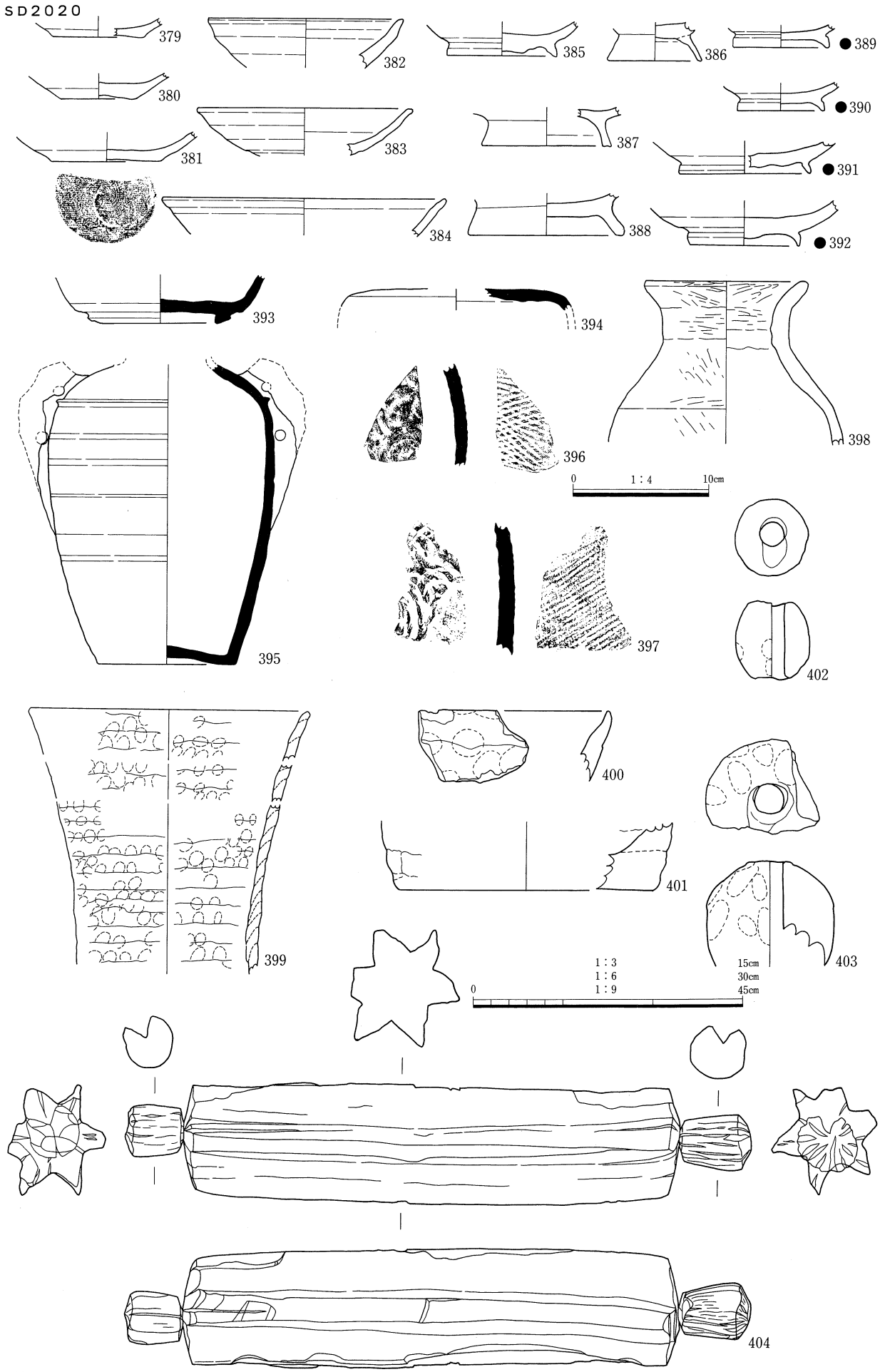
第79図　遺構実測図

1. SD3239　2. SD3238　3. SD3237　4. SD3214　5. SD3213　6. SD3212　7. SD3211
8. SD3225　9. SD3234　10. SD3229　11. SD3227　12. SD3228　13. SD3209　14. SD3210
15. SD3226　16. SD3230　17. SD3231　18. SD3232　19. SD3233　20. SD3207　21. SD3208

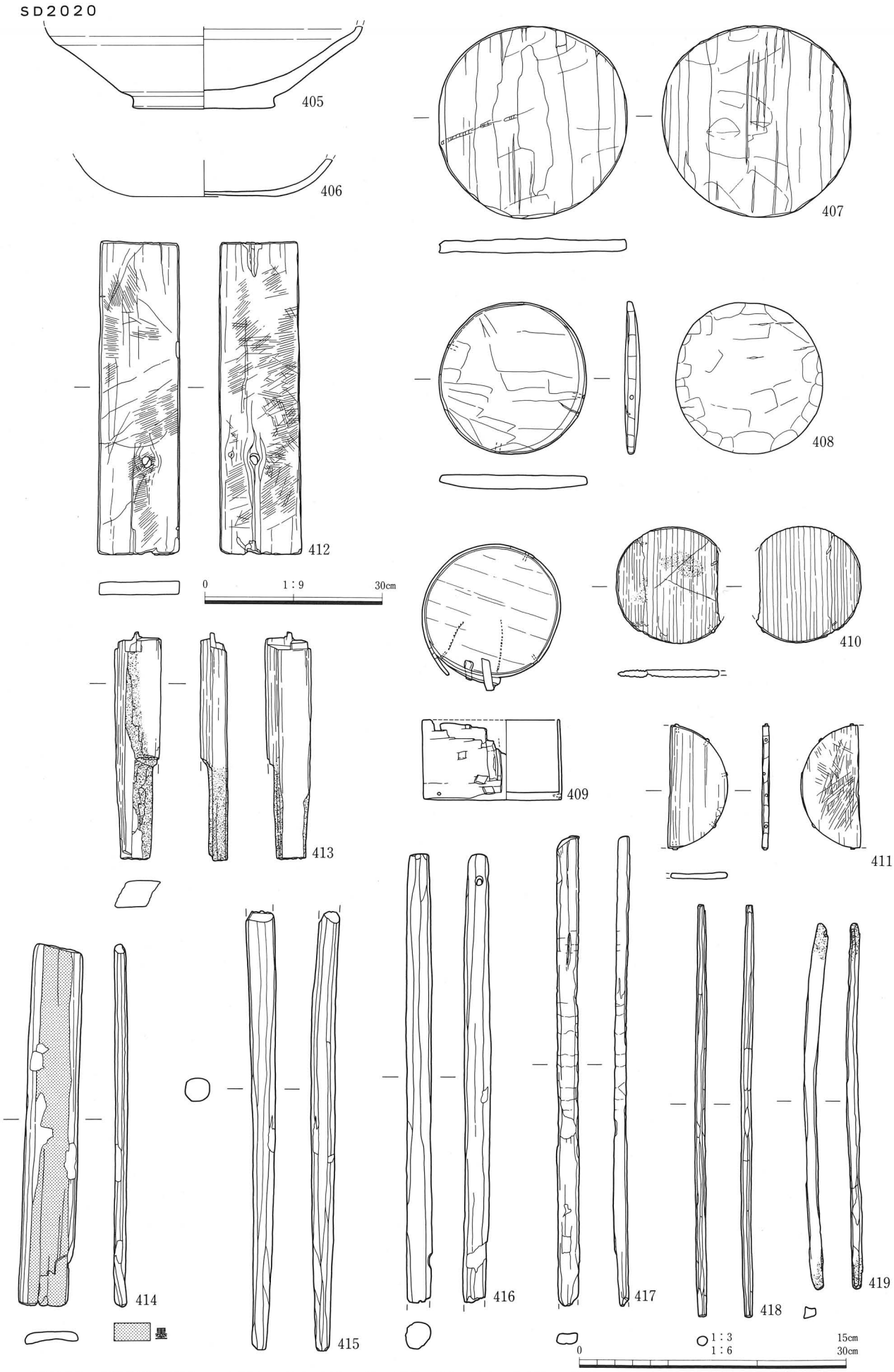


第80図　遺物実測図　(1/3)

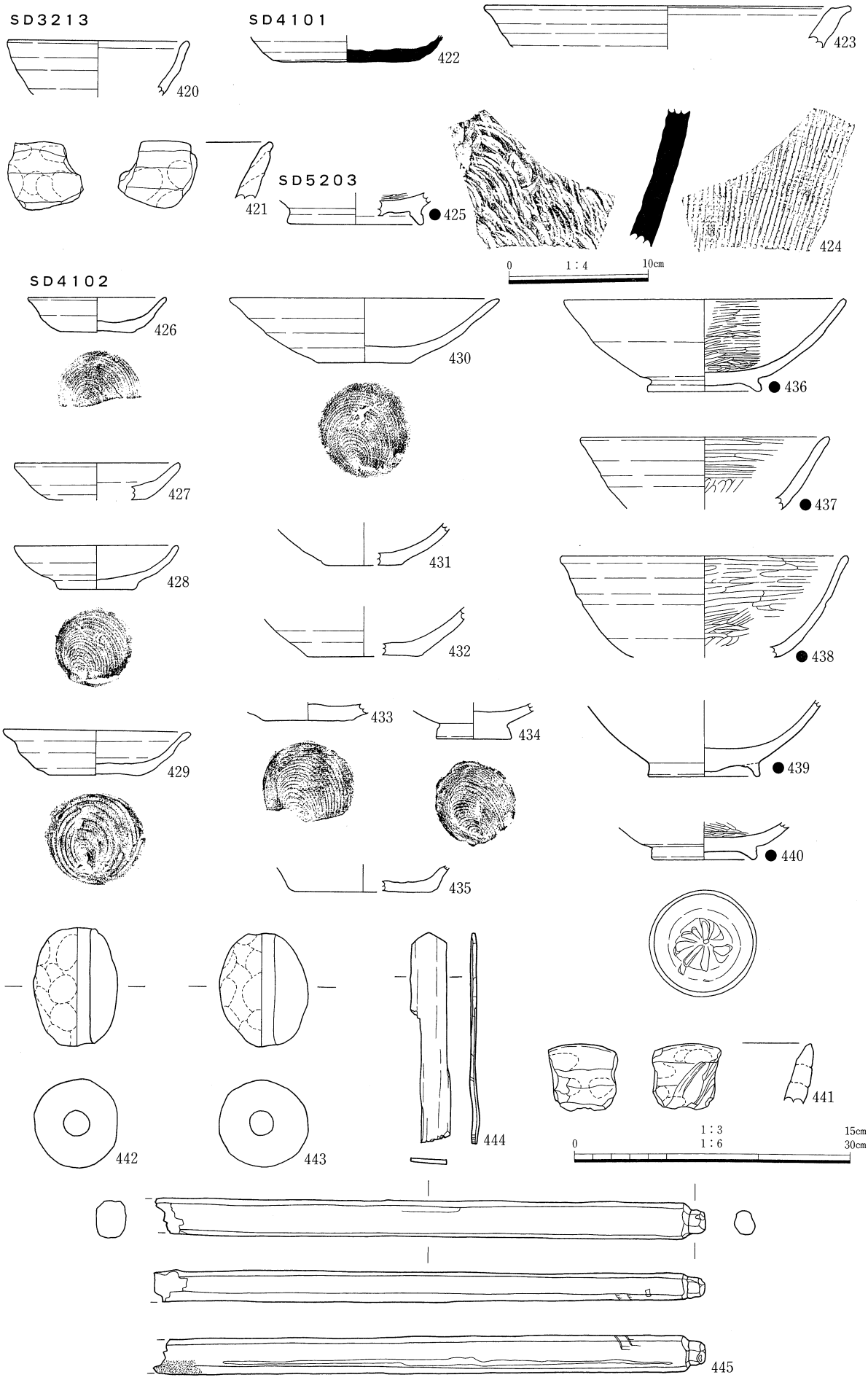
SD202（358）　SD301（351～357）　SD322（359～361）　SD324（362）　SD325（363～368）
SD2020（369～378）



第81図　遺物実測図　(379～394・398・400～403　1/3，396・397　1/4，395・399　1/6，404　1/9)
SD2020 (379～404)



第82図　遺物実測図　(405～408・413・415・416・418・419　1/3，409～411・414・417　1/6，412　1/9)
SD2020 (405～419)



第83図　遺物実測図　(420～423・425～443　1/3, 424　1/4, 444　1/6)
SD3213 (420・421)　SD4101 (422～424)　SD4102 (426～445)　SD5203 (425)

C　畠　遺　構

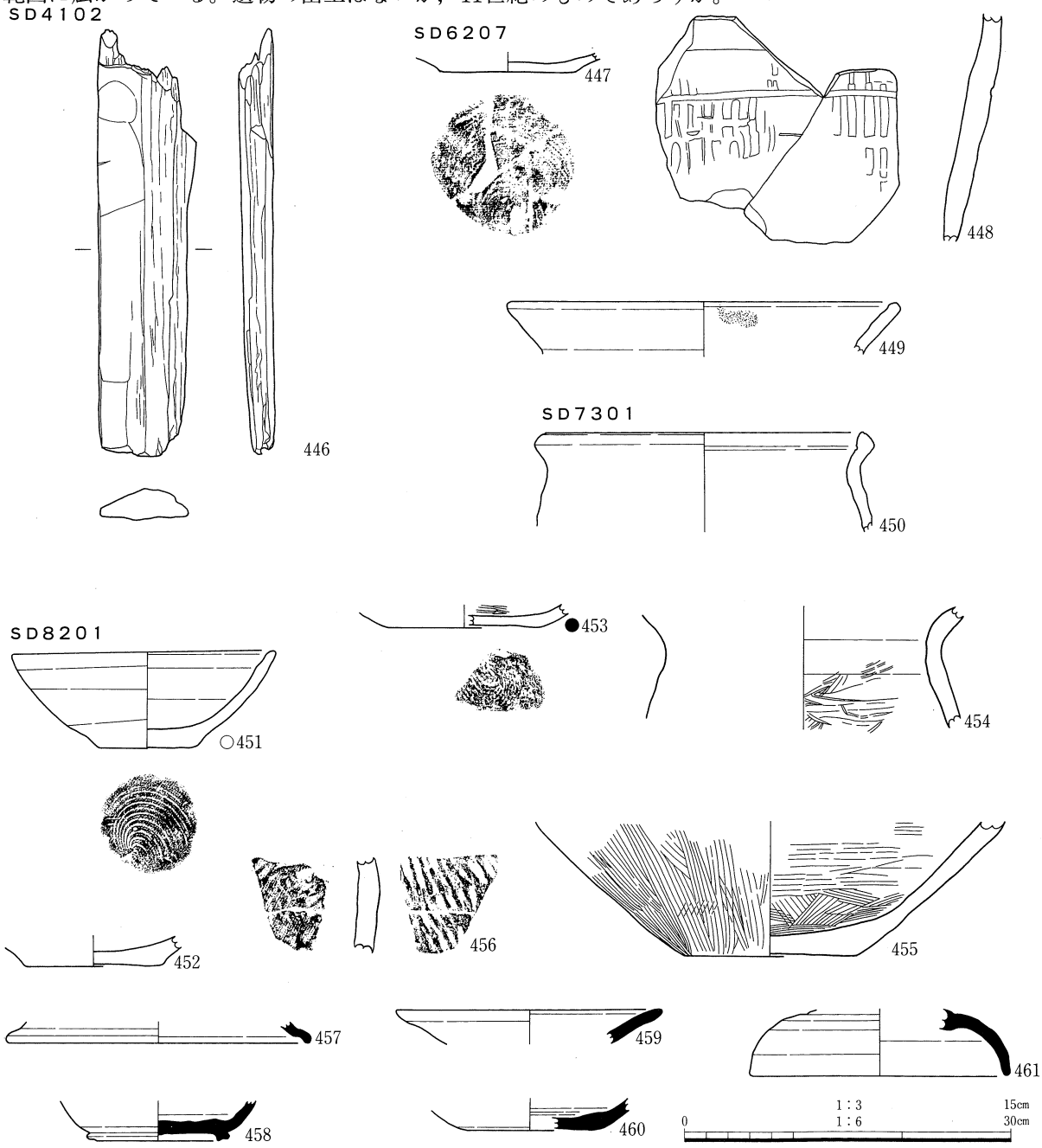
畠遺構はＢ２Ｅ地区とＣ２地区検出した。ともに建物に隣接するが，畠遺構の様相が異なる。

Ｂ２Ｅ地区畠（第79・83図）

検出したのは畠のさくで，南北方向のさくと東西方向のものがあり，切合い関係から２時期に分類される。南北方向のさくは東西２群，それぞれＳＤ3225，ＳＤ3236から北へ分岐している。平均幅30㎝，深さ６㎝，さく間隔は約２ｍを測る。遺物はＳＤ3213から土師器(420)・黒色土器・製塩土器(421)，ＳＤ3237から土師器・製塩土器，ＳＤ3238から土師器が出土した。東西方向のさくは短く間隔も狭く，南北方向のさくより新しい。南北方向のさくは10世紀末～11世紀初めのもので，東西方向のものは11世紀後半と考えられる。

Ｃ２地区畠（第65図）

東西方向に並ぶさくを検出した。平均幅23㎝，深さ４㎝，間隔８ｍで，ＳＢ28～ＳＢ32に挟まれた範囲に広がっている。遺物の出土はないが，11世紀のものであろうか。



第84図　遺物実測図　(447～461　1/3，446　1/6)

SD4102（446）　SD6207（447～449）　SD7301（450）　SD8201（451～461）

D　土　　坑

古代後期の土坑には掘立柱建物の内部や隣接して位置し，建物に付属した施設として捉えられるものと，単独または土坑群として存在するものがあるが，前者が多い。なお，集石遺構などもここで順次記述している。

302号土坑（ＳＫ302，第85図）

Ａ地区のＳＤ301より新しく，長さ1.65ｍ，深さ26cmを測る。またＳＤ303より新しく，埋土は灰色砂質シルト，淡黄色砂，灰色粘土，オリーブ黒色砂質シルトである。遺物は出土していないが，時期は11世紀であろう。

304号土坑（ＳＫ304，第85図）

ＳＤ303の北に位置し，長さ1.64ｍ，深さ14cmを測る。埋土は灰色砂質シルト，淡黄色砂，灰色粘土，オリーブ黒色砂質シルトである。ＳＤ303との切合いは不明で，遺物も出土していない。ＳＫ302と同時期であろうか。

305号土坑（ＳＫ305，第85図）

ＳＤ301の北に位置し，長径2.24ｍ×短径1.26ｍ，深さ14cmを測り，平面形は楕円である。埋土は灰色砂質シルト，淡黄色砂，灰色粘土，オリーブ黒色砂質シルトである。ＳＤ301より新しいことから11世紀後半であろう。

306号土坑（ＳＫ306，第85・92図，図版84）

ＳＤ301の北に位置する不整形な土坑で，風倒木痕と考えられる。遺物は土師器(462)，黒色土器(463)，須恵器が出土している。462は口径11.4cmを測る土師器椀で，口縁端部が薄く外反している。体部はロクロの挽き目がはっきりしている。463は内黒の有台椀底部で，器壁は厚く，内底面には螺旋状に強いナデが残る。高台は引き出して成形しており，底部外面中央には菊花状文があり，中央部を残してナデている。体部との境には強いナデを施し，高台の断面は四角く外に開き，端部は面取りを施す。遺物は11世紀後半のものである。

361号土坑（ＳＫ361，第92図，図版84）

ＳＢ13とＳＢ14の内部に位置する。長径46cm×短径34cm，深さ22cmを測り，掘り形が北に傾いており，地震の影響を示している。遺物はほぼ完形の土師器皿（464）が中位層から出土している。

464は口径10cm，器高２cm，底径4.5cmを測り，底部回転糸切り，口縁端部は丸く，面取りを施しており，11世紀中頃のものである。

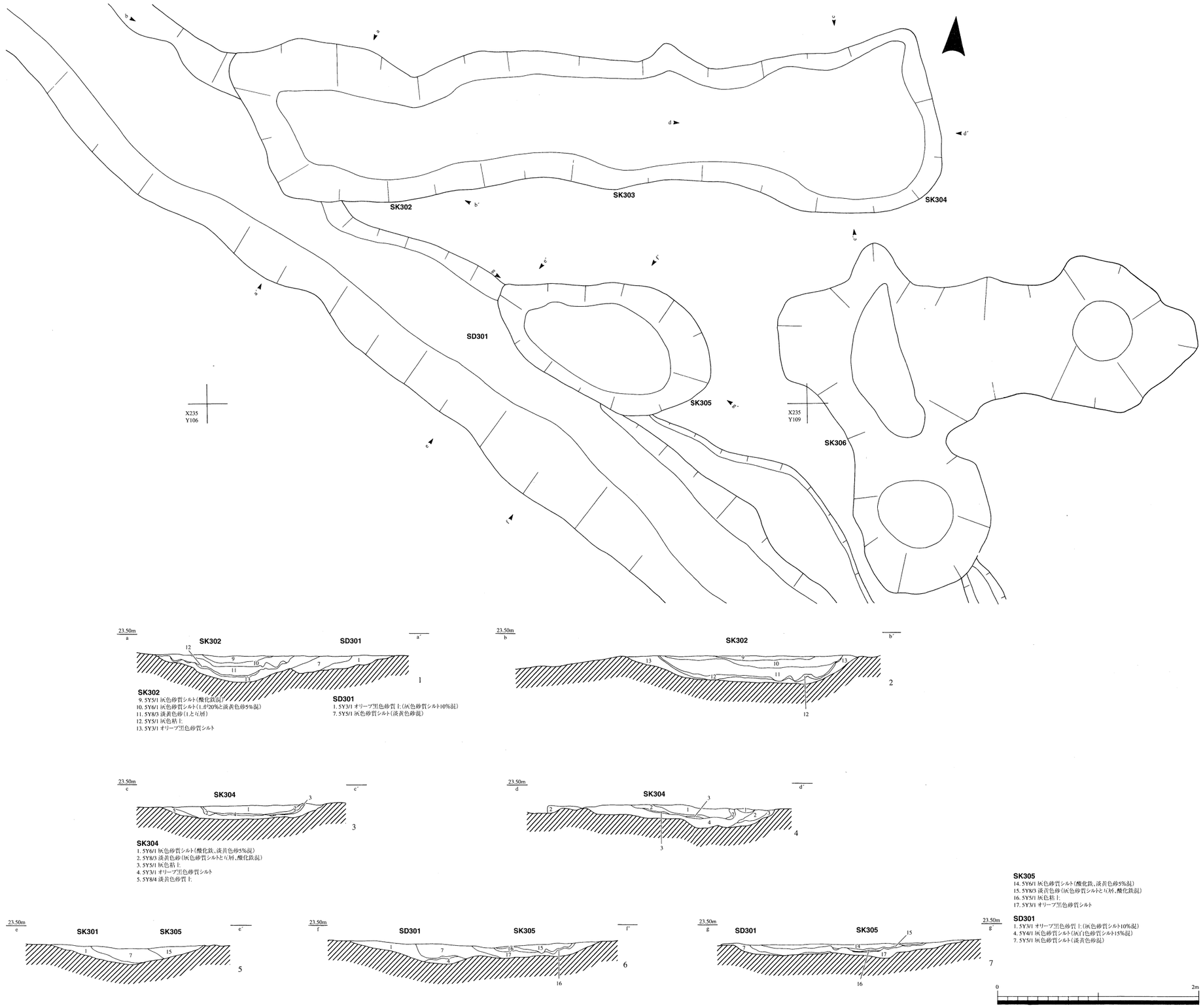
2022号土坑（ＳＫ2022，第92図）

Ｂ２地区の西端で，ＳＤ2020とＳＤ2021にはさまれている。長径36cm×短径24cmの楕円形で，深さ10cmを測る。遺物は土師器(465)，製塩土器が出土している。465は有台椀の高台で，身部から剥離したものである。高台径４cm，高台高1.8cmを測る。丸みをもってわずかに外に開く，足高高台であろう。時期は11世紀前半である。

3205号土坑（ＳＫ3205，第86・92図，図版74）

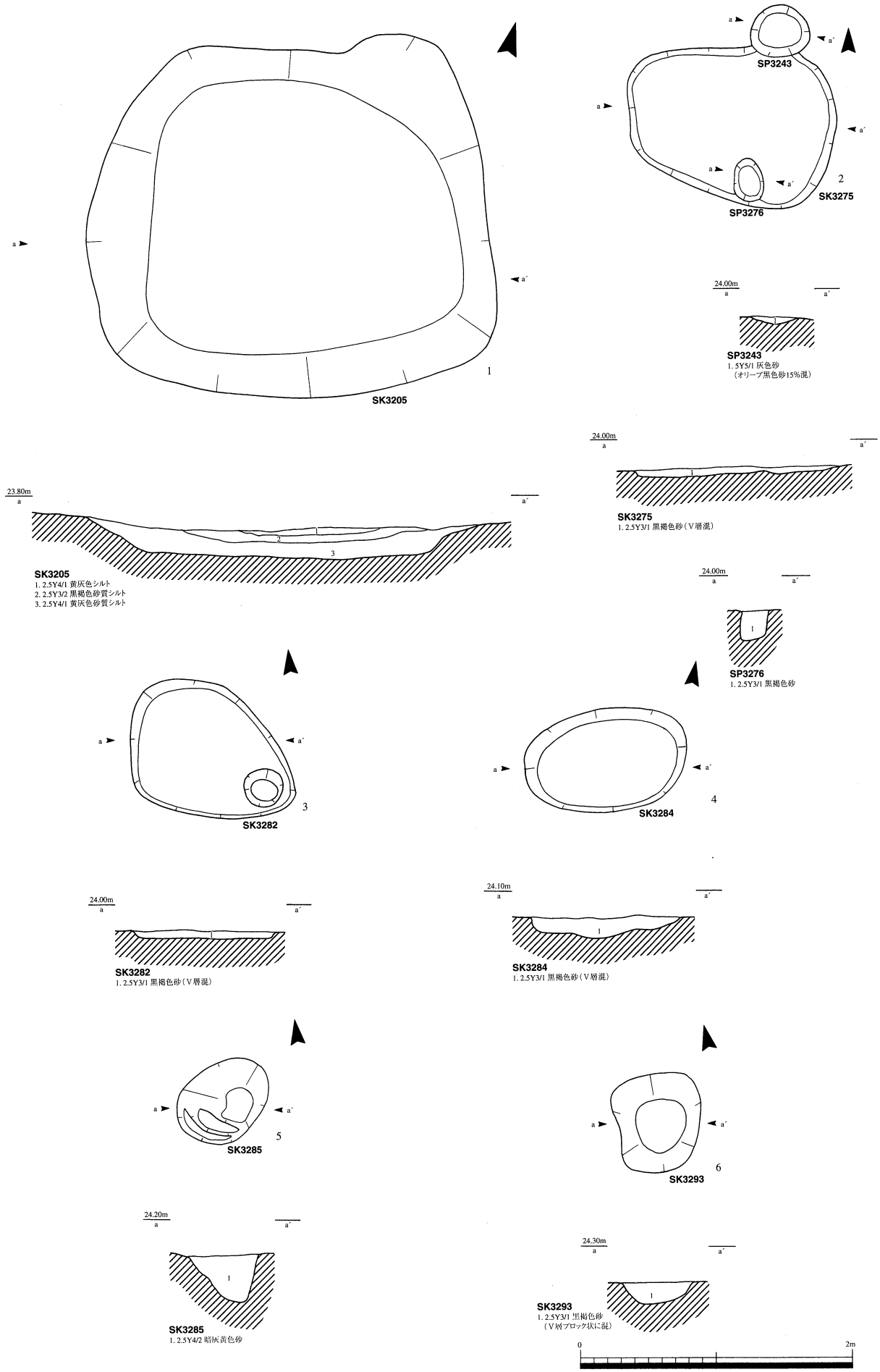
ＳＤ3202とＳＤ2020に挟まれた，Ｂ２Ｅ地区の北東隅に単独で位置する。長径３ｍ×短径2.54ｍ，深さ32cm，埋土は黄灰色シルト，黒褐色砂質シルト，黄灰色砂質シルトである。遺物は土師器(466)，曲物側板，加工板が出土している。

466は口径14cmの土師器椀で，体部下半が黒変している。器壁が厚く，ぼてっとしており，11世紀後半のものであろう。



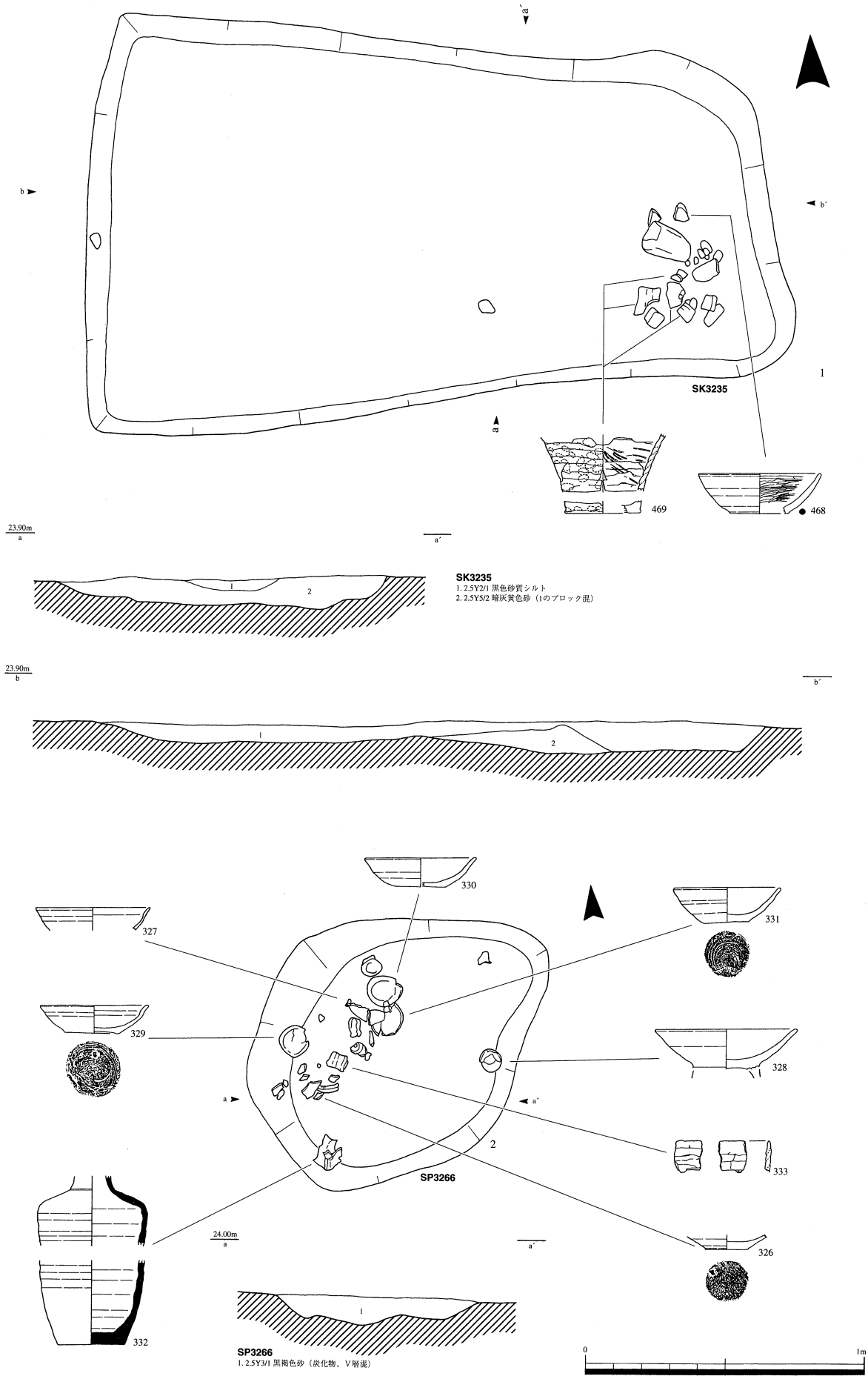
第85図　遺構実測図

1.SK302・SD301　2.SK302　3・4.SK304　5～7.SD301・SK305



第86図　遺構実測図

1．SK3205　2．SP3243・SK3275・SP3276　3．SK3282　4．SK3284　5．SK3285　6．SK3293



第87図　遺構実測図

1.SK3235　2.SP3266

3235号土坑（ＳＫ3235，第87・92図，図版74・84）

Ｂ２Ｅ地区の畠遺構の南に単独で位置する。長辺2.45ｍ×短辺1.18ｍ，深さ10cmを測る方形の土坑で，埋土は黒色砂質シルト，暗灰黄色砂である。遺物は東端に集中しており，土師器，黒色土器(468)，製塩土器（469）が出土している。468は内黒の無台椀で口径13cm，器高4.3cm，底径６cmを測る。体部は丸く，底部回転糸切りのである。469は平底の製塩土器で，破片は多い。10世紀後半のものであろう。

3275号土坑（ＳＫ3275，第86図）

ＳＢ19の内部北東隅に位置する長径1.55ｍ×短径1.12ｍ，深さ８cmの土坑で，埋土は黒褐色砂である。ＳＰ3243に切られているが，ＳＢ19に付属したものであろう。遺物は土師器出土している。

3282号土坑（ＳＫ3282，第86図）

Ｂ２Ｅ地区南東部の土坑群中に位置する長径1.37ｍ×短径0.97ｍ，深さ４cmの土坑で，埋土は黒褐色砂である。遺物は土師器が出土している。

3284号土坑（ＳＫ3284，第86図）

ＳＫ3282の東に位置する長径1.22ｍ×短径0.75ｍ，深さ14cmの土坑で，埋土は黒褐色砂である。遺物は黒色土器が出土している。

3285号土坑（ＳＫ3285，第86図）

ＳＫ3282の南に位置する70cm×55cm，深さ36cmを測る土坑である。埋土は暗灰黄色砂で，黒色土器が出土している。

3293号土坑（ＳＫ3293，第86・92図）

Ｂ２Ｅ地区南東部の土坑群の南端に位置する72cm×62cm，深さ16cmの土坑で，埋土は黒褐色砂である。遺物は土師器(467)，黒色土器が出土している。467は口径12.8cmを測る土師器椀で，体部中程でくびれ，口縁端部に面取りを施す。11世紀前半のものである。

5001号土坑（ＳＸ5001，第88図，図版75）

ＳＢ22の内部北東隅に位置する，一辺86cmの方形の土坑である。埋土は黒色シルト，黄灰色シルトで，遺物は土師器，製塩土器の他被熱した石が出土している。ＳＢ22の付属施設と考えられるが，用途は不明である。遺構の時期は11世紀前半であろう。

5002号集石遺構（ＳＸ5002，第88・93図，図版75・86）

ＳＢ22の東に位置する，長径2.1ｍ×短径1.6ｍ，高さ26cmの盛土をもつ集石遺構である。盛土は黒色シルト，黄灰色砂，灰色砂で，石は上面から中位層まであり，上面は被熱している。遺物は土師器(493・494)，黒色土器（495），須恵器（497・498），製塩土器，土錘（496）の他被熱した石が出土した。

493は口径13.7cmの土師器椀で，口縁は大きく外反し，体部に段をもつ。494は回転糸切りの土師器椀底部で，器壁は厚い。495は内外面黒色の椀。口径17.7cmで，内面のミガキは少ない。496は管状土錘で形態分類のＩｂ類，両端を面取りしている。497は須恵器甕体部で，外面は平行叩き，内面は細かい同心円文当て具痕である。498は双耳瓶の耳であるが，両端を欠損している。10世紀後半のものであろう。

5003号集石遺構（ＳＸ5003，第89・93図，図版86）

ＳＢ22の西側の柱列上にある集石遺構で，石は被熱している。またＳＸ5003を完掘すると下部から柱穴・土坑が検出される。遺物は土師器（499～502）が出土している。

499は口径12cm，500は11.6cm，器高はともに3.3cmを測る土師器椀である。器形はともに体部の立ち上がりはややくびれ，口縁部付近で段をもち，口縁端部は外反し面取りを施す。502は口径15cmの土師器有台椀で，高台が剥離している。体部は直線的に伸びて口縁付近でくびれ，端部は外反し面取りを

施しており，足高高台が付く形態である。遺物の時期は10世紀後半である。

5004号集石遺構（ＳＸ5004，第88図，図版75）

ＳＤ5202の上から掘り込まれたもので，1.7ｍ×1.58ｍ，深さ52cmを測り，埋土は灰色砂，礫が多量に入っているが，被熱はしていない。礫は円形に積み上げられたようであるが，用途は不明である。遺物は出土していないが，11世紀後半のものであろう。

5005号集石遺構（ＳＸ5005，第93図，図版75）

ＳＢ24・ＳＢ25を囲う外側の柵ＳＡ６の南辺にかかるように位置する集石遺構であり，長さ1.8ｍ，幅60cmの帯状である。石は被熱している。遺物は土師器，黒色土器(503)，製塩土器が出土している。

503は内黒の有台椀底部で，内底面は粗いミガキで凸凹している。高台は引き出して成形しており，外底面には菊花状文がある。高台は外に開き，体部との境は強くナデ，端部に面取りを施す。時期は11世紀後半であろう。

5206号土坑（ＳＫ5206，第90・92図，図版74・85・86）

ＳＢ23の内部にあり，一部調査区外であるが，長径1.06ｍ×短径0.84ｍ，深さ12cmを測る楕円形の土坑で，埋土は黒色シルトである。出土遺物は土師器（470～474）である。

470は口径8.7cm，器高1.8cm，底径４cmの土師器皿で，底部回転糸切り，体部の立ち上がりはややくびれるが，丸みをもって直線的に伸びる。471は口径8.9cm，472は９cm，473は8.2cmで，器高がともに2.2cmの，底部回転糸切りの土師器皿である。体部は丸みをもち直線的に伸びるが，472･473はとくに器壁が薄く，口縁端部は内外面から面を取って尖る。474は口径10.2cm，器高2.7cm，底径４cmの土師器皿で，丸みをもった体部は口縁部付近でくびれ，口縁端部は外反する。口縁部の内外面には煤が付着している。遺物の時期は11世紀中頃である。

5218号土坑（ＳＫ5218，第90・92図）

ＳＢ22の内部に位置する，長径62cm×短径30cm，深さ20cmを測る楕円形の土坑である。埋土は黄灰色砂，灰色砂，黄灰色砂質シルトである。出土遺物は土師器(475)である。475は底部が回転糸切りの土師器椀で，底径は4.8cmである。遺物の時期は不明であるが，ＳＢ22内部にあることから11世紀前半と考える。

5219号土坑（ＳＫ5219，第91・92図）

ＳＢ22の南にあるＳＤ5204に隣接する土坑で，52cm×38cm，深さ15cmを測る不整形な土坑である。埋土は黒色シルトと灰色シルトである。遺物は土師器（476）が出土している。476は底部回転糸切りで，底径5.2cmの土師器椀の底部である。内面は底部近くまで煤が付着している。11世紀前半のものであろう。

5225号土坑（ＳＫ5225，第91図）

ＳＢ22とＳＢ24・ＳＢ25の中間に位置する土坑群の北端にある。直径84cm，深さ12cmを測り，埋土は黒色シルトである。遺物は土師器が出土しているが，ＳＰ5246の土師器と接合したものもある。したがって，時期は11世紀前半であろう。

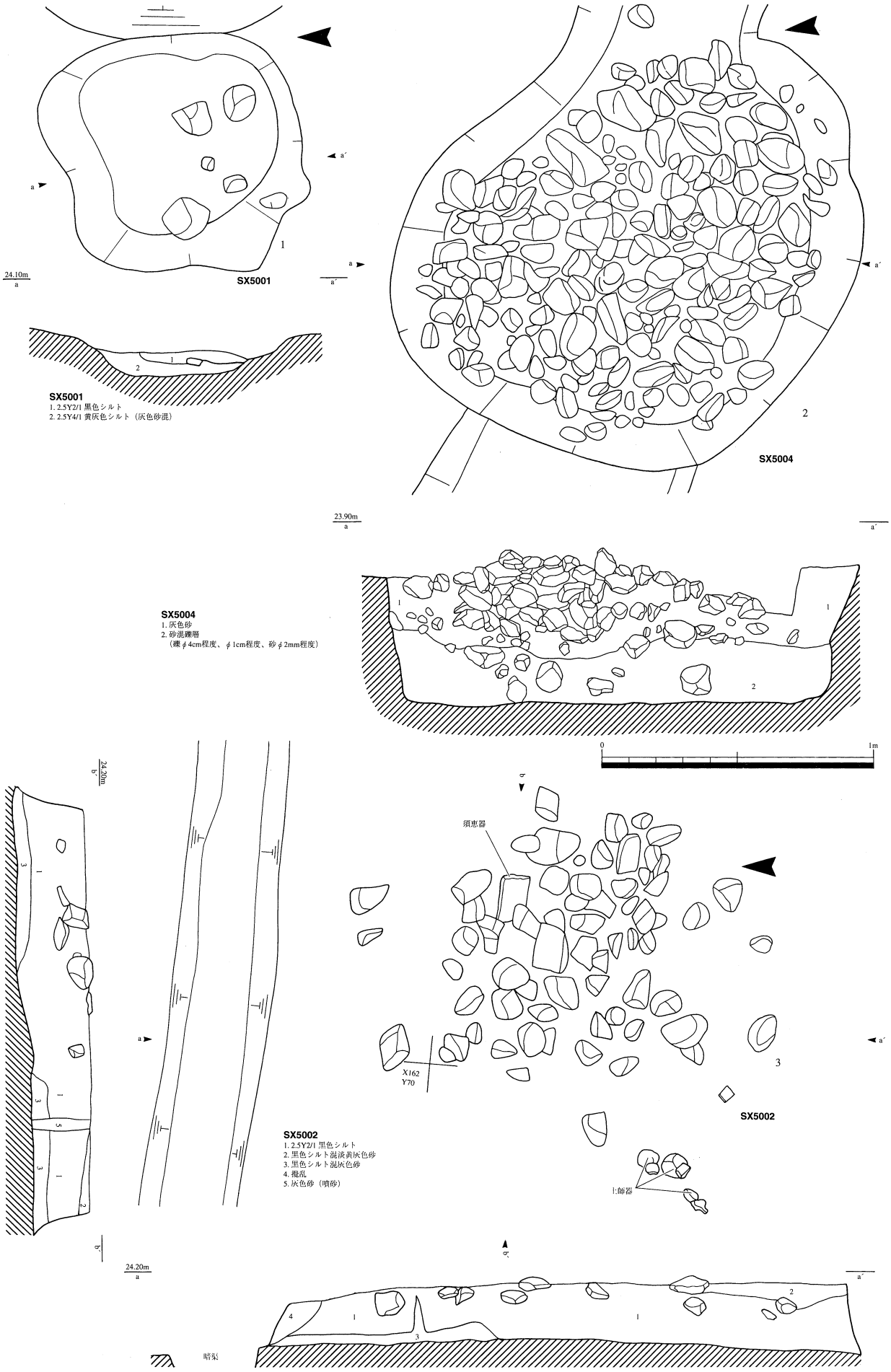
5228号土坑（ＳＫ5228，第91図）

ＳＫ5225の南に位置する，直径58cm，深さ16cmの土坑で，埋土は灰黒色シルト，黒色シルトである。出土した遺物には土師器と製塩土器がある。

5232号土坑（ＳＫ5232，第91・92図）

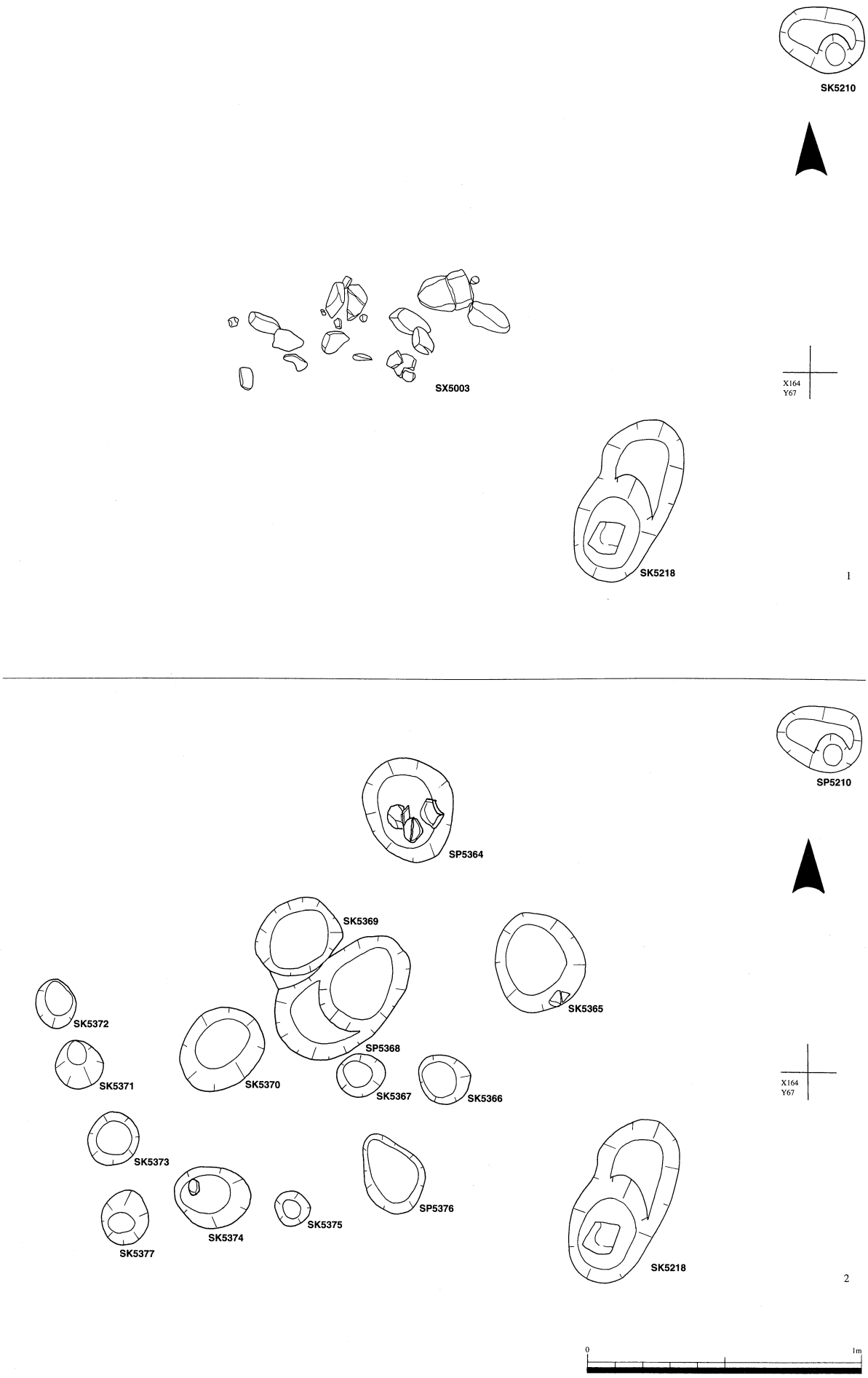
ＳＢ24の柱列とＳＡ６に挟まれて位置する，直径22cm，深さ７cmの土坑である。埋土は黒色砂質シルトと灰色砂である。出土遺物には土師器（480）がある。

480は土師器有台椀で，高台径7.6cm，高台高1.2cmを測る。体部は直線的であり，高台は大きく開き，



第88図　遺構実測図

1.SX5001　2.SX5004　3.SX5002



第89図　遺構実測図

1.SX5003　2.SX5003の下部

端部が外反する。高台は貼り付けであるため，高台内の外底面はナデの後の指押さえで凸凹している。11世紀前半のものであろう。

5244号土坑（ＳＫ5244，第91図）

土坑群の南端に位置し，長径94cm×短径64cm，深さ11cmを測る楕円形の土坑である。埋土は黒色シルトであり，出土遺物には土師器がある。

5245号土坑（ＳＫ5245，第90・92図，図版74・85・86）

ＳＡ６とＳＢ26に挟まれるように位置する，長径84cm×短径70cm，深さ13cmの楕円形の土坑である。埋土は黒色シルトで，上層から遺物が出土している。出土遺物には土師器(481～483)，黒色土器(484・485)，須恵器，木製品，石がある。

481・482は底部回転糸切りの土師器皿で，口径は8.9cm，8.6cm，器高は2.4cm，2.2cm，底径はともに3.8cmである。体部の立ち上がりはややくびれるが，口縁部に向かって丸みをもって直線的に伸び，端部に面を取る。483は底部回転糸切りの土師器椀である。口径は13.7cm，器高3.8cm，底径5.2cmを測る。体部の立ち上がりはややくびれ，丸みをもって伸び，口縁部付近でくびれ，端部は外反し，面取りを施す。484は内外面黒色の椀で，口径16cmを測る。直線的に伸びた体部は，口縁端部でわずかにくびれ外反し，端部には面取りを施す。内面のミガキは底部付近まである。485は底部回転糸切りの無台椀底部である。底径は6.4cm，内外面黒色であるが，内面にミガキはない。体部は直線的に開くが，器壁は厚ぼったい。遺物の時期は11世紀中頃のもので，遺構はＳＢ25に関連したものと考えられる。遺物の出土状況から埋納土坑の可能性が高い。

5257号土坑（ＳＰ5257，第90・92図，図版68・78）

ＳＢ24・ＳＢ25の柱列にかかるもので，直径27cm，深さ17cmの規模である。埋土は黒色シルトであり，遺物はほぼ完形の土師器の皿（477）が１点，上向きで出土しているのみである。出土したのは中位層からである。

477は口径8.9cm，器高2.1cm，底径4.9cmを測る，底部回転糸切りの土師器皿である。体部は直線的に立ち上がるが，中程でくびれ，口縁部は外反し，端部に面取りを施す。11世紀前半のものであろう。

5330号土坑（ＳＫ5330，第92図）

ＳＢ24の内部に位置し，直径54cm，深さ６cmを測るものである。出土した遺物には土師器（478），加工板（479）がある。478は口径9.7cm，器高2.3cm，底径４cmを測る，底部回転糸切りの土師器皿である。立ち上がりは外反気味で，口縁付近で屈曲し，直線的に伸びる。11世紀中頃のものであろう。

479は長さ14.5cm，幅1.7cm，厚さ１cmを測る。両端は削って細く丸く，片面は中央より端部にかけて削られ，ヘラ状に窪み，一方の端部は先端に浅い抉りがある。裏面は欠損しているが，断面形は半円形となる。

5338号土坑（ＳＫ5338，第91・92図）

ＳＢ22とＳＢ24・ＳＢ25の中間に位置する土坑群の西にある。46cm×38cm，深さ６cmを測る，不整形なものである。埋土は黒色シルト，灰色砂で，出土遺物は土師器（486）である。

486は回転糸切りの土師器椀の底部で，器壁が厚い。11世紀中頃のものであろう。

5340号土坑（ＳＫ5340，第90・92図，図版84）

ＳＫ5245の東に位置する，長径70cm×短径50cm，深さ７cmの楕円形の土坑である。埋土は黒色シルト，灰色砂で，出土遺物は土師器（487・488），黒色土器（489），製塩土器である。

487は口径8.2cm，器高１cm，底径4.4cmを測る，底部回転糸切りの土師器皿である。器高が非常に低

く，体部は直線的に伸びるが，下部で段をもつ。口縁端部は丸く面取りを施す。488は口径8.9cm，器高2.2cm，底径5.1cmを測る，底部回転糸切りの土師器皿である。体部は直線的に伸び，口縁端部は丸く面取りを施す。器壁は厚い。遺物の時期は11世紀後半であろう。

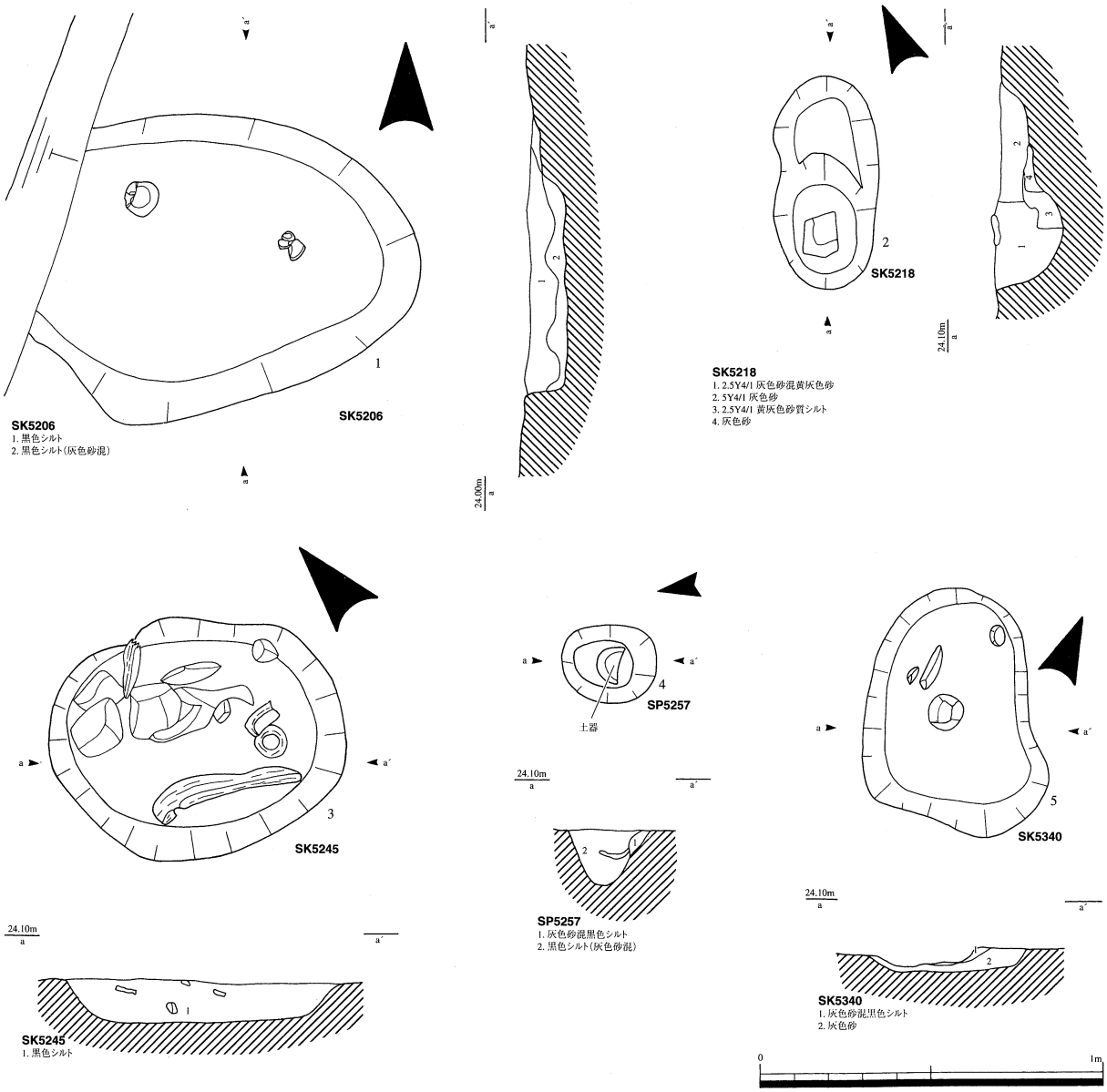
5357号土坑（ＳＫ5357，第91図）

ＳＢ22とＳＢ24・ＳＢ25の中間に位置する土坑群の西にある。直径36cm，深さ６cmを測る，円形のものである。埋土は黒色シルト，灰色砂で，出土遺物は土師器である。

6165号土坑（ＳＫ6165，第91・92図，図版74・87）

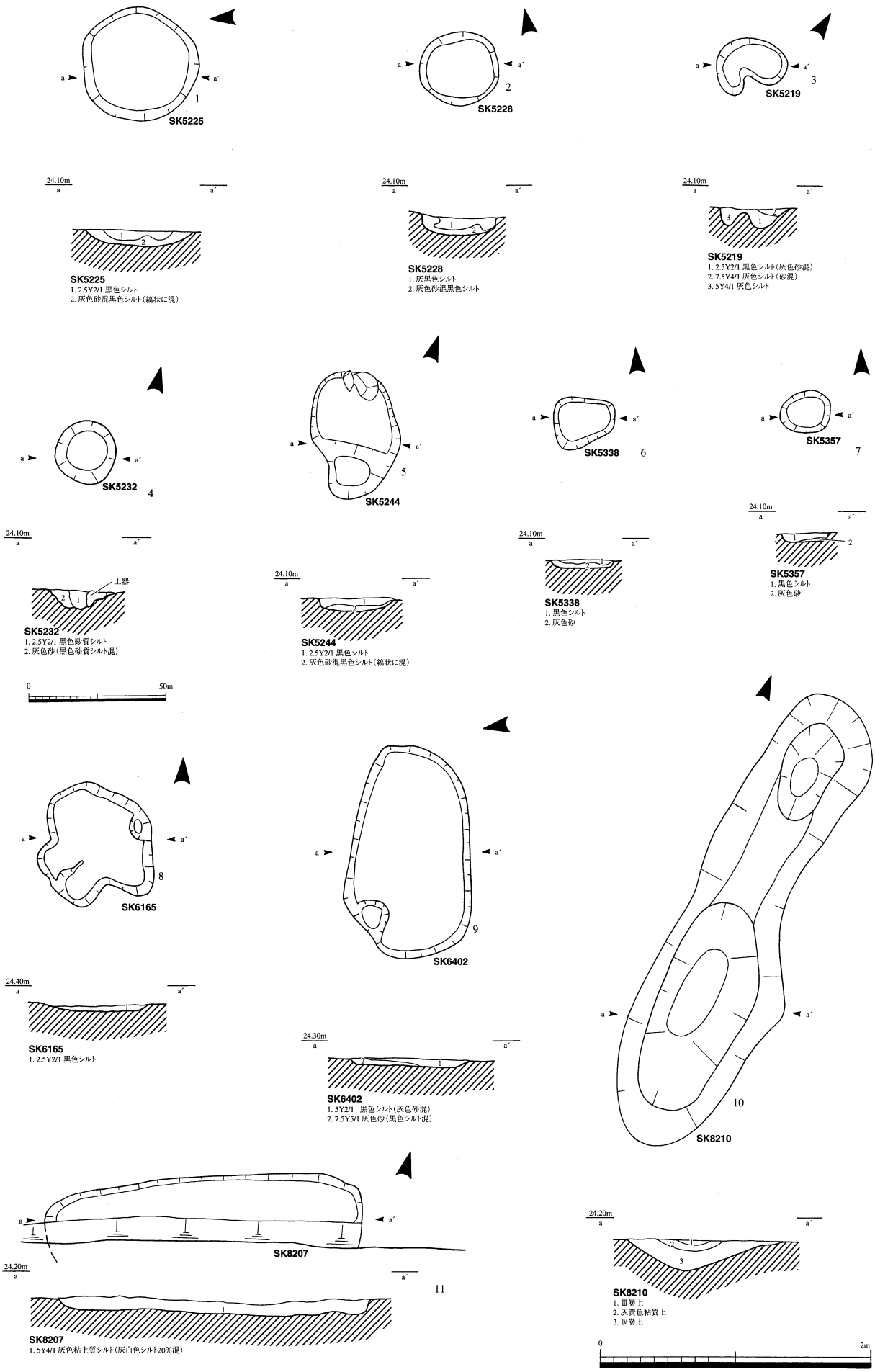
ＳＢ34～ＳＢ36の東に隣接する94cm×86cm，深さ４cmの不整形の土坑である。埋土は黒色シルトで，遺物は土師器（490～492）が出土しているが，集中しているため一括性が高い。

490・491は底部回転糸切りの土師器皿で，それぞれ口径は8.8cm，9.2cm，器高は2.2cm，2.5cm，底径は4.6cm，4.9cmである。丸みをもった体部で，腰が張り，口縁部にかけて外反する。492は底部回転糸切りの土師器椀である。くびれて立ち上がり，丸く張った腰から口縁は外反し，端部は面取りを施す。遺物の時期は11世紀前半であろう。ＳＫ6165は遺物の時期からＳＢ34・ＳＢ35に関連したものと考えられ，埋納土坑の可能性が高い。



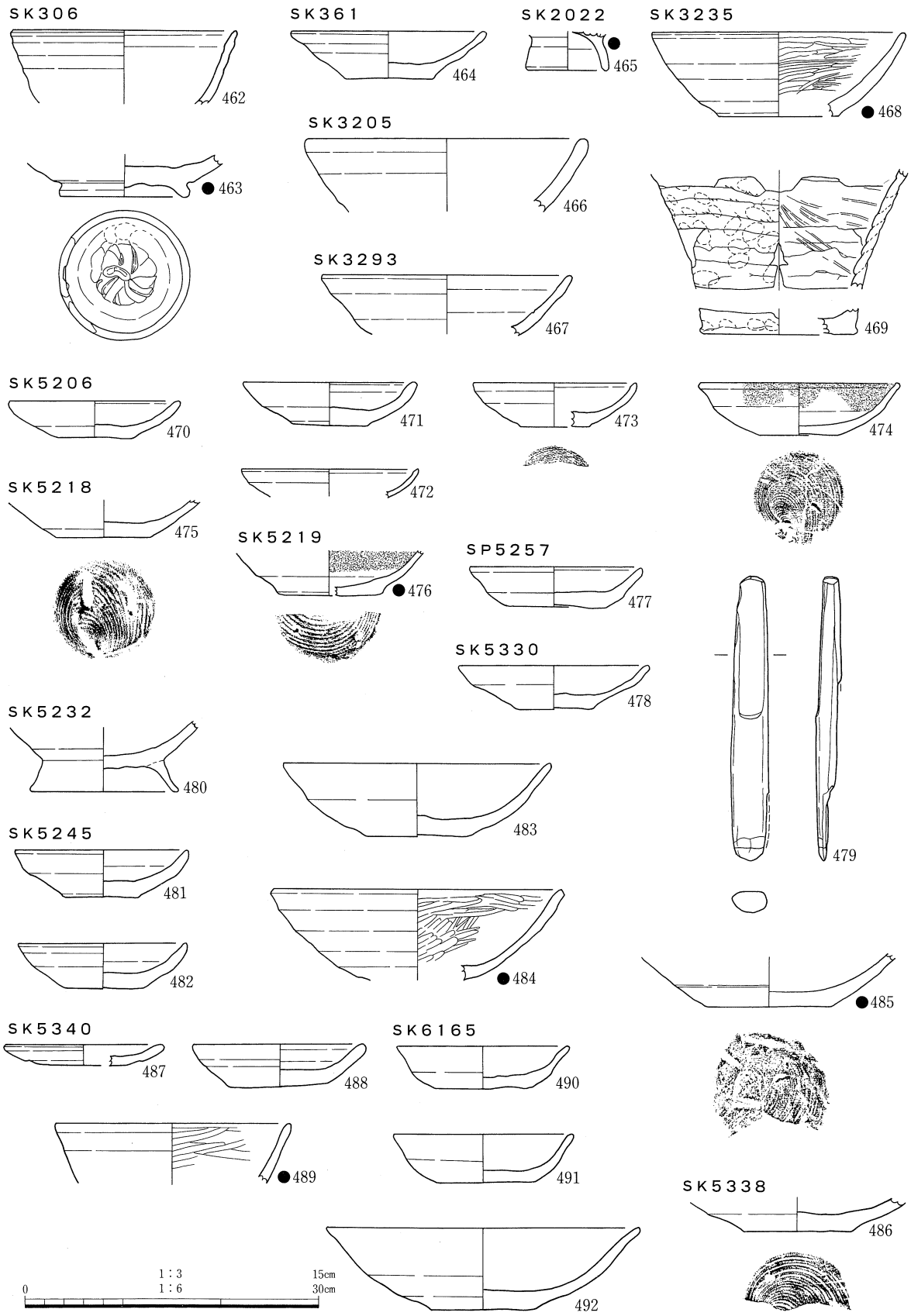
第90図　遺構実測図

1.SK5206　2.SK5218　3.SK5245　4.SP5257　5.SK5340



第91図　遺構実測図

1.SK5225　2.SK5228　3.SK5219　4.SK5232　5.SK5244　6.SK5338　7.SK5357　8.SK6165
9.SK6402　10.SK8210　11.SK8207



第92図　遺物実測図　(462～468・470～492　1/3，469　1/6)

SK306 (462・463)　SK361 (464)　SK2022 (465)　SK3205 (466)　SK3235 (468・469)
SK3293 (467)　SK5206 (470～474)　SK5218 (475)　SK5219 (476)　SK5232 (480)　SK5245 (481～485)
SP5257 (477)　SK5330 (478・479)　SK5338 (486)　SK5340 (487～489)　SK6165 (490～492)

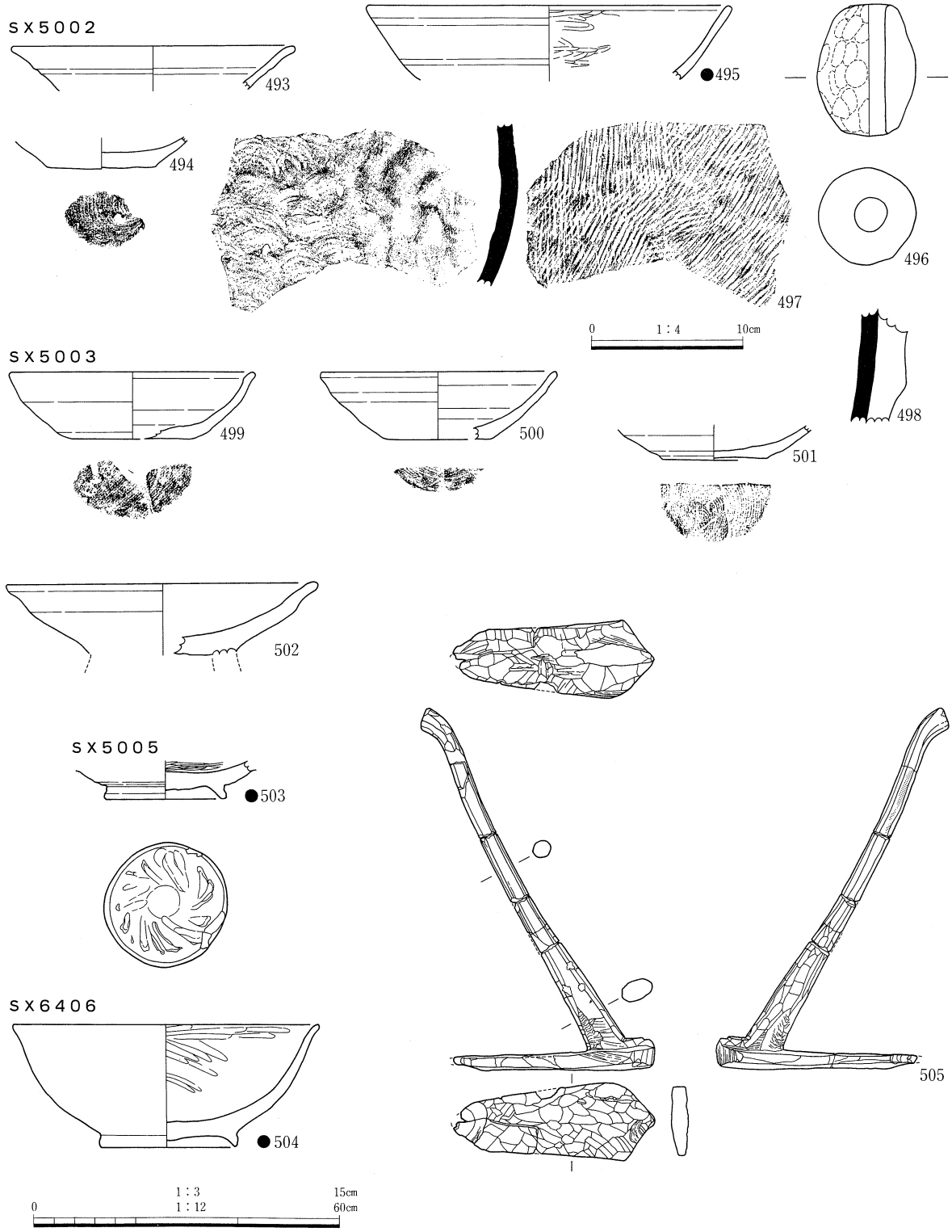
6402号土坑（ＳＫ6402，第91図）

Ｃ２地区東端で，ＳＤ4102の南側に位置する土坑である。長径1.56ｍ×短径0.88ｍ，深さ６cmの規模で，埋土は黒色シルト，灰色砂である。遺物は出土していない。

6406号土坑（ＳＸ6406，第93図，図版75・86・106）

ＳＤ4102の上から掘り込んでいる，長径1.88ｍ×短径1.46，深さ34cmの不整形の土坑である。埋土は植物遺体が多く含まれる黒色シルトで，上層には包含層の土が堆積している。

出土した遺物は黒色土器（504），木製の鍬（505）である。504は内黒の有台椀で，口径は15cm，器



第93図　遺物実測図　（493～496・498～504　1/3，497　1/4，505　1/12）
SX5002（493～498）　SX5003（499～502）　SX5005（503）　SX6406（504・505）

高は6㎝，底径は6.7㎝を測る。腰が張り，丸みをもった体部で，端反りである。内面は粗いミガキで，口縁部と体部の上部にのみある。高台は断面三角形で，体部との境を強くナデ，外面に面を取る。高台内底面は，高台を引き出して成形した際の菊花状文があり，中心部を除いてナデ消している。11世紀前半のものであろう。

505は鍬で，全長39.2㎝，身の部分は全長20㎝，幅7.5㎝，柄の付近での厚さ2.8㎝，刃先では0.7㎝，柄の太さは元では3.7㎝，先端では1.6㎝を測る[注1]。身の前面は刃先をとくに細かく削って成形されており，後面は平滑に削って仕上げられている。柄の部分も丁寧に削り出され，断面はなめらかな円形である。先端に向け細く，やや撓って伸びるが，柄の先端は刃先側に屈曲する。柄の上部には一部茶褐色の漆が付着している。着柄角度は68°で[注2]，刃先の摩滅がみられず，未使用のものとみられる。樹種はカエデ属ウリカエデ節である。

遺物の出土状況は，土坑の最下層から，鍬の横に黒色土器が上向き置かれたようであり，埋納した可能性がある。埋土からは，黒色シルトが下層に堆積し，上部には大量の包含層の土が堆積しており，土坑を廃棄して間もなく，洪水などで一気に埋まったものと考えられる。遺構の時期は11世紀中頃であろう。

8204号土坑（ＳＫ8204）

Ｄ１地区の北端部に位置する土坑で，調査区外に伸びている。検出した部分は長さ2.3ｍ，深さ18㎝である。埋土は灰色粘土質シルトである。遺物の出土はない。

8210号土坑（ＳＫ8210，第91図，図版74）

Ｄ１地区のＳＤ8201の西に位置する，3.54ｍ×1.04ｍ，深さ22㎝の不整形な土坑である。埋土は灰黄色粘質土で，上層には包含層の土が堆積している。遺物の出土はない。

注１　鍬の部分の名称については以下のものに従った。
　　奈良国立文化財研究所　1985　『木器集成図録近畿古代篇』　同研究所史料第27冊
注２　柄と前面との角度を測る。

Ｅ　包含層出土の遺物

包含層から出土した遺物は土師器，黒色土器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，中国製白磁，製塩土器，木製品，土錘で，出土地点によっては包含層の遺物に特徴がある場合もある。ここでは種類毎にまとめて記述していく。

土師器（第94～97図，図版88～98）

506～545は土師器皿で，全て底部回転糸切りである。506～511は口径8.4㎝～9.8㎝，器高1.5㎝～2.3㎝，底径4.7㎝～6.2㎝である。体部は腰が張って，口縁部は外反する形態である。口縁部の形態は丸いものや細くなるものがある。506は底部中央に焼成前の穿孔がされている。内面は汚れていない。512～515は口径8.3㎝～９㎝，器高2.2㎝～2.4㎝，底径3.7㎝～4.9㎝である。体部はくびれて立ち上がり，口縁部は段をもって直線的に伸びる。512は内面に，515は内外面にタールが付着している。516は口径10㎝，底径5.3㎝，器高は低く，1.6㎝である。体部が直線的に伸び，体部中程に段をもち，端部が細くなり面取りを施す。517・518は口径8.4㎝・9.2㎝，器高2.3㎝・2.1㎝，底径4.1㎝・4.9㎝である。立ち上がりがややくびれるが，体部は丸みをもち直線的に伸びる。519～521は口径9.6㎝～9.9㎝，器高2.4㎝～2.7㎝，底径4.8㎝～5.6㎝を測る。立ち上がりはややくびれ，体部中程で段をもち，口縁部は外反し，端部は面取りを施す。522は口径９㎝，器高1.6㎝，底径6.1㎝を測る。底部糸切り痕は直径４㎝であるが，接地している部分の直径が6.1㎝である。体部は外反しているが，本来は519～521のような器形だ

ったものが，変形した可能性が高い。523～527は口径8.6cm～9cm，器高1.9cm～2.3cm，底径3.8cm～5.3cmを測る。体部は立ち上がりから口縁部にかけて外反し，口縁部は内湾して端部は面取りを施す。525は器壁が厚く，ぼてっとしている。526は器壁が薄く，内底面に丸く褐色になっている部分がある。焼成時に重なった部分が変色したのであろうか。528・529は口径10cm・9.2cm，器高2.5cm・2.1cm，底径5.4cm・5.3cmを測る。体部下部は丸く腰が張り，体部中程はくびれ，口縁部は面を取ってやや内傾する。530～536は口径8.3cm～9.2cm，器高1.4cm～2.4cm，底径3.6cm～5.2cmを測る。体部中程まで直線的に伸び，口縁部にかけて外反し，端部は面を取って直立ないし内傾する。比較的器壁の厚いものが多く，端部の面取りは段がつくほど強く撫でたもの(531・534・536) もある。537・538は底部を欠く。538は器壁が非常に薄い。539～545は底部。底径は2.7cm～5.3cmまでと幅広い。

546～573は土師器椀で，底部は全て回転糸切りである。546～548は口径11.4cm～13.2cm，器高3.5cm～3.9cm，底径4.6cm～5cmを測る。体部の立ち上がりから中程までは直線的に伸び，口縁部にかけて外反する。546は口縁部の内外面に煤が付着している。548は底部から口縁部の内外面に黒変している部分がある。549～551は口径13.7cm～17.1cm，器高4cm～4.6cm，底径4.3cm～7.6cmを測る。体部は直線的に伸び，口縁端部はやや外反する。549は内面がにぶい橙色をしているのに対し，外面は灰黄褐色で，底部から口縁部にかけて黒斑がある。552～555は口径11.2cm～13.6cm，器高3.3cm～4.1cm，底径4.4cm～7.6cmを測る。立ち上がりから口縁部にかけて丸みをもった体部で，口縁端部に面取りを施す。555は底部がやや厚く，立ち上がりに段をもち，柱状高台に近い様相がある。

556・557は口径11.6cm・14.2cm，器高3.3cm・4.8cm，底径4.8cm・5.4cmを測る。体部はやや丸みをもって伸び，僅かにくびれて口縁部は直線的に立ち上がる。端部はやや外反するものと面取りを施すものとがある。558は口径14.5cm，器高4cm，底径4.4cmを測る。体部と底部との境ははっきりせず，丸く腰が張り，口縁部が外反する。559～567は底部を欠く。口径11.6cm～18cmと幅広い法量がある。559は挽き目がはっきりしている。561は内面に煤が付着しており，外面は体部中程に僅かであるが煤が付着している。568～581は底部。底径4.8cm～6.1cmを測る。568は焼成後に穿孔しているもので，569は焼成前に穿孔しているものである。ともに内面は汚れていない。570～573は外面に，575は内外面に煤が付着している。576は外面に黒変部分がある。

582～586は高台の低い椀で，582は口径14.1cm，器高5.7cm，底径6.9cmを測る。体部は腰が張り，直線的に伸びた口縁の端部に面取りを施す。外底面は回転糸切りで，高台は断面三角形の貼り付け高台である。583・584・586は底部回転糸切りで貼り付け高台，585は高台を引き出して成形した菊花状文があり，高台の元部分は成形と仕上げのナデで窪み，底部中央が膨らむ。587～590は高台を欠いている。588は内外面に煤が付着している。589・590は底部回転糸切りの貼り付け高台であるが，剝離している。590は体部に粘土ひも巻き上げの輪積み跡が残る。591～597は足高高台が付くもので，591～593は口径12.9cm～14.6cm，器高5.6cm～6.2cm，底径8cm～8.3cmを測る。高台内面は回転糸切りで，貼り付け高台である。591は体部が直線的に伸び，高台は大きく外に開き，端部に面を取る。592・593は体部が丸みをもち口縁部は外反し，高台は大きく開き端部は丸い。594・595は底部回転糸切りで，底径8.2cm・7cmを測る直線的な高台であり，596・597は底径4.5cm・4.8cmを測り，やや外反する。高台内底面はナデである。598～603は柱状高台をもつもので，598は口径14.8cm，器高5.5cm，底径5cmを測り，体部は丸みをもって伸びる。

黒色土器（第97・98図，図版96～98）

604～641は黒色土器である。604～606は底部回転糸切りの内黒の無台椀である。604は口径10.7cm，

器高3.2cm，底径７cmを測る。体部が丸く内湾し，口縁端部に面取りを施している。内面はミガキである。605は口径14.3cm，器高3.6cm，底径５cmを測る。体部は直線的に伸び，内面にミガキはない。606は底径６cmを測り，体部は低く立ち上がる。内面にミガキはない。607～610は内黒の有台椀である。口径13.8cm～14.7cm，器高６cm～6.3cm，底径5.7cm～6.8cmを測る。体部は丸く，口縁端部が外反するもの（608・609）と直線的なもの（610）がある。高台の形態は断面三角形のもの（607・609）と，小さい長方形のもの（608・610）があり，体部との境を強く撫で，面を取るもの（609）もある。底部には高台を引き出して成形した菊花状文があり，ナデ消すもの（608）もある。607以外は内面のミガキは全面にある。609・610は外面に煤が付着している。611～615は内黒の椀で，口径13cm～17.8cm，612は内面にミガキがない。616～641は内黒の有台椀底部で，底径4.9cm～7.5cmを測る。底部は回転糸切りのもの（619・620・624・627）と菊花状文があるものがあり，前者は少ない。菊花状文は丁寧にナデ消すもの，高台周囲のみナデるもの，そのまま残るものとがある。高台の形態は前述したとおりで，低い三角形で，体部との境のナデが弱いものが多い。

土師器甕（第98図，図版101・102）

642～647は土師器甕である。642はロクロ成形の長胴の甕で，口縁部と底部は接合しないが，同一個体である。口縁部は外反し，体部は挽き目がはっきりしている。底部下部はヘラケズリを施すが，内面はナデのみである。口縁部外面は全面に，底部には一部煤が付着している。643はロクロ成形の長胴甕で，口縁部は外反し，端部は屈曲して内傾する。内外面ナデで，外面の挽き目ははっきりしている。644はロクロ成形の甕の口縁部で，大きく外反し，端部は面を取る。646・647はロクロ成形の長胴甕の体部で，内外面ナデである。645は非ロクロ成形の小型甕で，短い頸部はやや外反し，胴部はやや丸く張る。外面は口縁部から，内面は胴部からハケメ調整である。外面には口縁部から厚く煤が付着しており，内面も胴部の一部にコゲがある。645以外は９世紀後半のものであるが，645は７世紀後半～末のもの[注1]であろう。

須恵器（第98・99図，図版99）

648・649は杯蓋で，端部は断面三角形，内外面はロクロナデ 648は頂部のみロクロケズリを施す。650は杯Ａで，口径12.8cm，器高3.8cm，底径8.5cmを測る。器壁が厚く，底部ヘラキリで，体部の立ち上がりは丸く，直線的に立つ。651・652は杯である。652は口径13.8cmを測り，大きく開く。653・654は双耳瓶で，655は広口壺の頸部である。662～673は甕の体部破片である。基本的には外面は平行叩き，内面は同心円文当て具痕であるが，原体が異なっている。時期は650が８世紀末～９世紀初頭である以外は，９世紀後半～10世紀前半にかけてのものである。

施釉陶器（第98図，図版99～101）

656・657は緑釉陶器の皿で，656は口径12.8cm，器高2.5cm，底径7.6cmを測る。高台端部が外傾して，内側に段をもち，外底面には釉がかかり回転糸切り痕がある。口縁端部は端反りで，腰部が張り，内面見込みには一条沈線が巡る。近江系のもので，森編年のII段階（10世紀後半頃）[注2]である。657は底径7.6cmを測り，底部は摩滅が激しい。高台の形態，内面の沈線ともに656と同様であるが，外底面に釉がかからないことから，11世紀初頭のものである。658・660は灰釉陶器で，658は皿で胎土は細かく灰白色である。高台は断面三角形に近く，高台は中心からずれており，歪んだ円形である。体部は直線的に伸び，口縁は端反りであるが，ひいていない。内面には重ね焼き痕があり，摩滅してつるつるしている。灰釉は漬け掛けで，極薄い。東濃産のもので，虎渓山１号窯式ものである[注3]。660は椀で口径19cmを測る。体部は丸く，口縁は端反りである。外面はナデ，内面は体部中程より上にはコテがあ

たっていない。灰釉は体部中程まで漬け掛けされ，内面は摩滅してつるつるである。虎渓山１号窯式のものである。659･661は中国製白磁椀である。659は丁寧に削りだした高台で，外面はほぼ直で，内面は膨らみをもって傾斜する。体部内面は摩滅している。白磁椀Ⅱ類で11世紀後半～12世紀である。661は口径12.8cmを測る。玉縁は小さく，口縁端部は細くシャープで，内面下位には段があり，外面のヨコナデは玉縁の下やや広めに施され，丁寧な調整である。釉は水色味をおび，体部上半に掛かる。白磁小椀Ⅳ類で時期は11世紀末～12世紀前半である[注4]。

製塩土器（第99図，図版101・102）

674～683は口縁部，684～689は平底の底部である。内外面に粘土紐の継ぎ目と成形の際の指頭痕，ハケメがある。底部の観察から円盤状粘土に体部の粘土紐を付加しているものが大半を占めている。能登では８世紀後半～９世紀初めに多用される製作技法である[注5]。遺構として製塩に関連するものはないが，製塩土器が出土する地区はＢ１地区・Ｂ２地区・Ｂ２Ｅ地区にまとまっていることが指摘できる。

土錘（第99図，図版102）

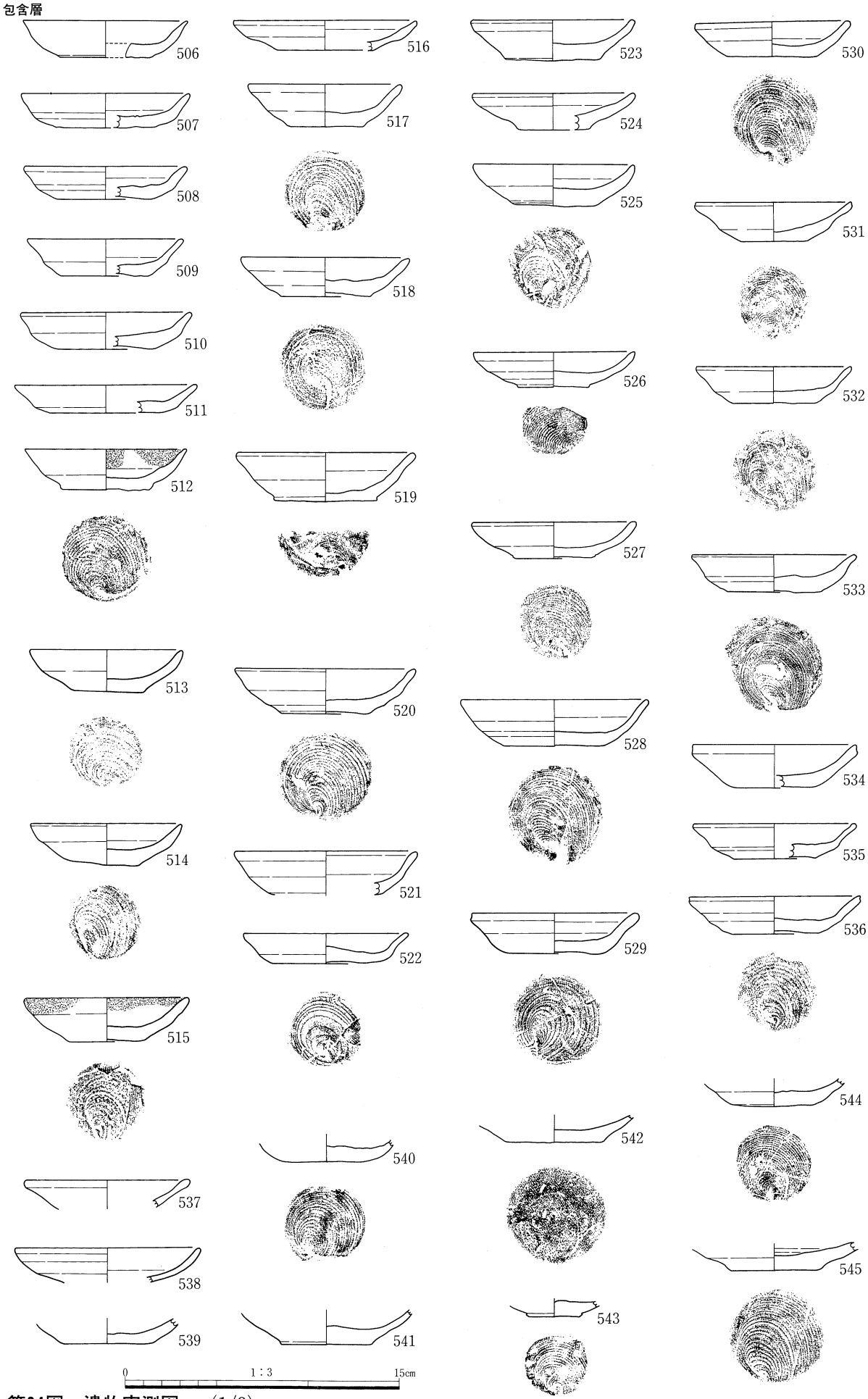
690～692の形態分類は690・691はＩａ類 692はＩｂ類である。端部に面を取るものはない。

ま　と　め

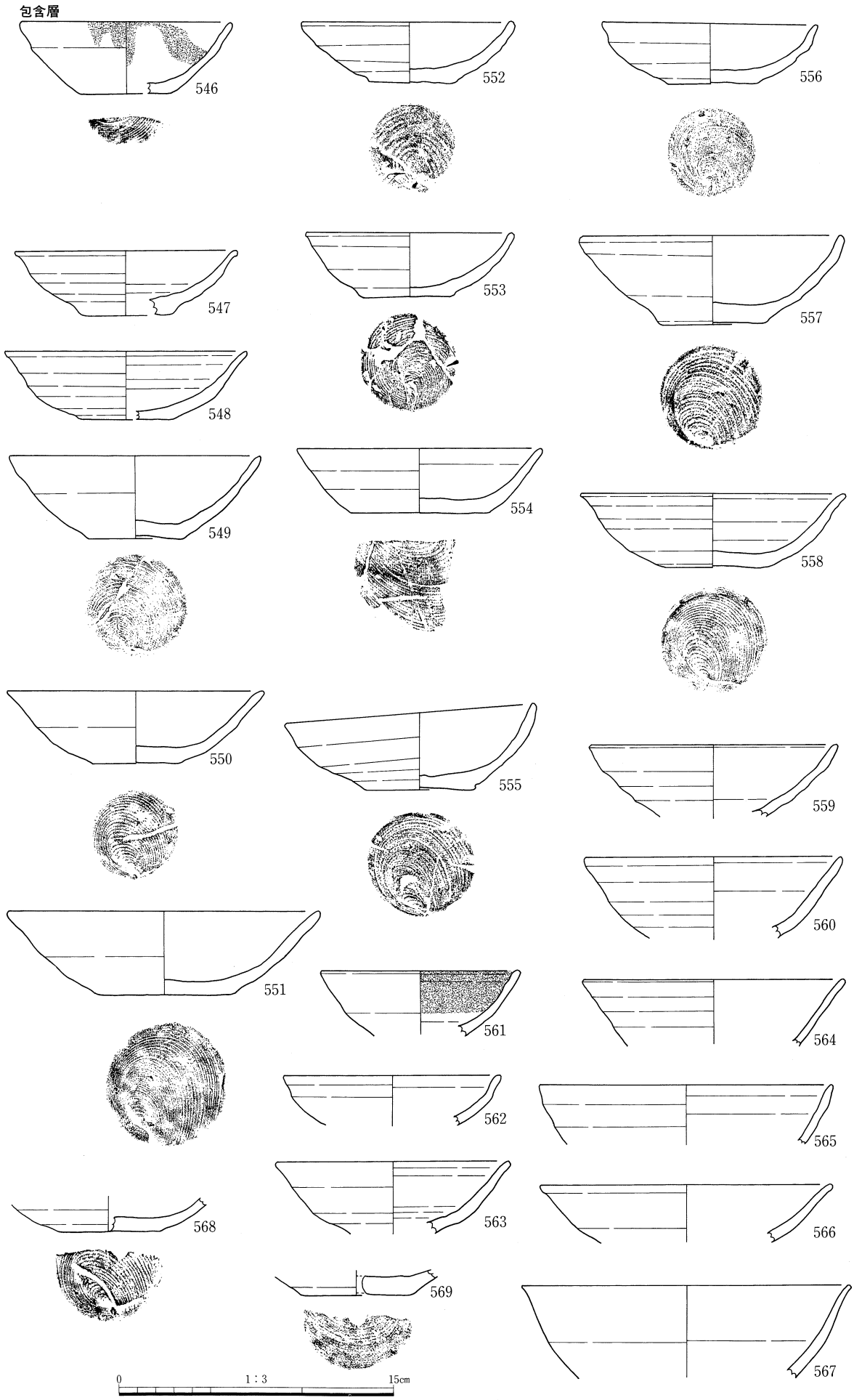
古代後期の遺構分布は溝や自然流路によって区画された，最大７群の掘立柱建物群が散在している。建物群は最大３時期のものが重複しており，それぞれの区画内に独立して存在している。掘立柱建物には総柱と側柱があり，側柱建物が多い。柱穴は小さい円形のもので，中世的様相である。建物に付属して，遺物を埋納した土坑がみられる場合も多く，地鎮を目的としたものと考えられる。建物を区画する溝は新旧関係から大きく２時期に分けられるが，南北に走る溝が南東から北西に走るものより古い。方向を同じくする溝は約50ｍ～60ｍ間隔で平行しており，この区画がほぼ半町単位であることから，古代条里との関連が窺える[注6]。建物群と溝の時期とは合致するものもあり，出土した遺物から10世紀末～11世紀前半，11世紀中頃，11世紀後半の３時期に分れると考えられる。　（中川道子）

注１　池野正男　1995　「越中・射水郡の７世紀後半の社会」『北陸古代土器研究』第５号　北陸古代土器研究会
池野正男　1997　「越中における９世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会
上市町教育委員会　1982　『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』
関　　清　1994　「越中におけるロクロ土師器の焼成」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会
関　　清　1988　「越中における古代前半期の土師器」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題－報告編－』　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
立山町教育委員会　1987　『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
富山県教育委員会　1983　『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第５次緊急発掘調査概要』
富山県教育委員会　1984　『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第６次緊急発掘調査概要』
富山県教育委員会　1993　『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第10・11次緊急発掘調査概要』
注２　施釉陶磁については宇野隆夫氏，前川要氏より御教示いただいた。
森　　隆　1991　「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』第76巻第４号
注３　前川　要氏より御教示いただいた。
注４　中国製白磁については，山本信夫氏より御教示いただいた。
山本信夫　1988　「北宋期貿易陶磁器の編年―大宰府出土例を中心として―」『貿易陶磁研究』No.８　日本貿易陶磁研究会
山本信夫　1990　「11・12世紀の貿易陶磁器―1980年代の編年研究を中心として」『貿易陶磁研究』No.10　日本貿易陶磁研究会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
注５　富山大学考古学研究室・石川考古学研究会　1991　『能登　滝・柴垣製塩遺跡群－古代揚浜式塩田・鉄釜炉・土器製塩炉の調査－』
下村好美　1997　「美麻奈比古神社前遺跡出製塩土器について」『美麻奈比古神社前遺跡　能登・西川島遺跡群における古代集落の調査』　穴水町教育委員会
四柳嘉章　1995　「ヤトン谷内遺跡出土の製塩関係土器について」『ヤトン谷内遺跡』　中島町教育委員会
注６　岡本淳一郎　1995　「五社遺跡古代上層面の集落構造について」『埋蔵文化財年報』(6)　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
河西健二　1993　「五社遺跡」『第６回北陸中世土器研究会　中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』　北陸中世土器研究会

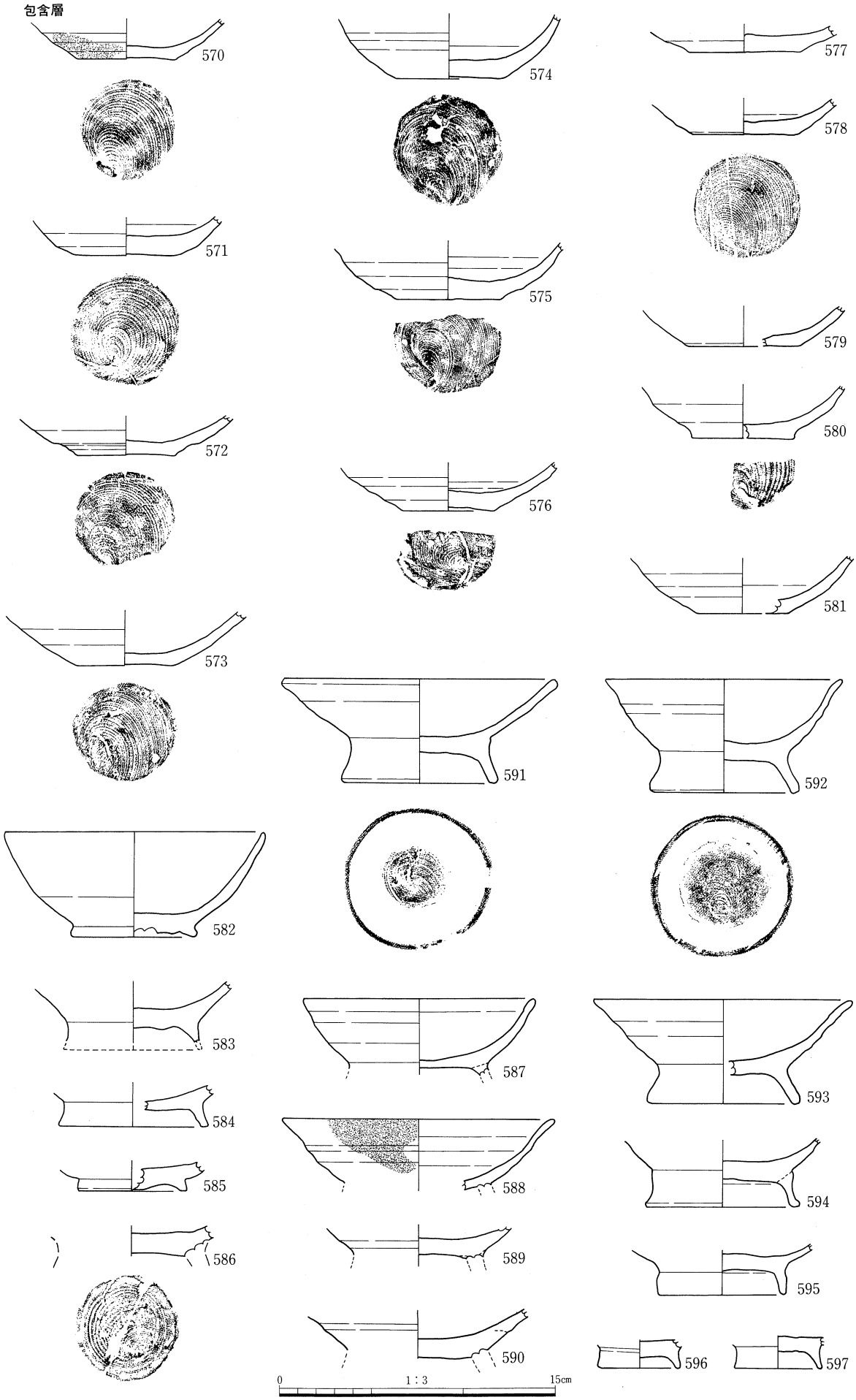
包含層



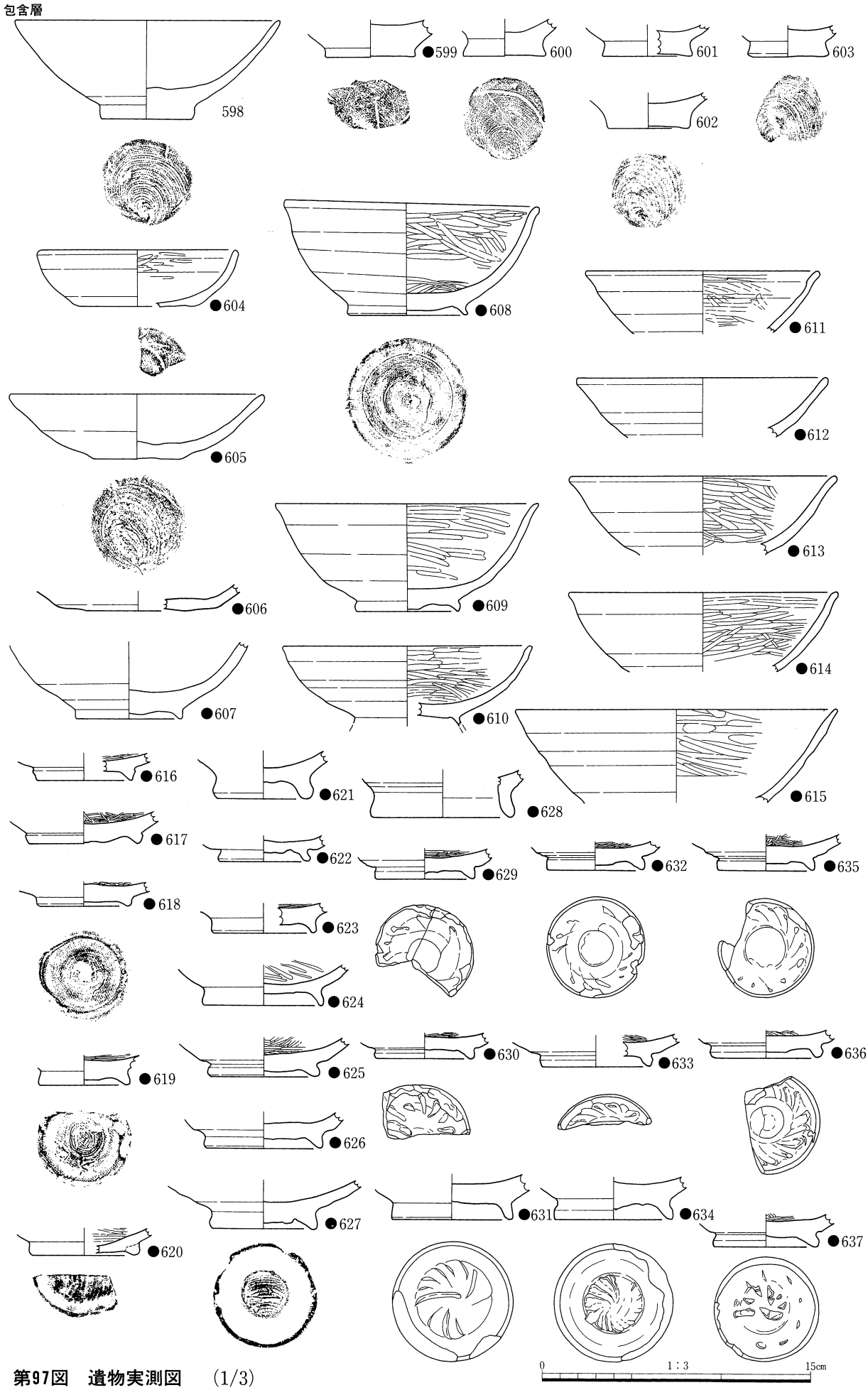
第94図　遺物実測図　(1/3)



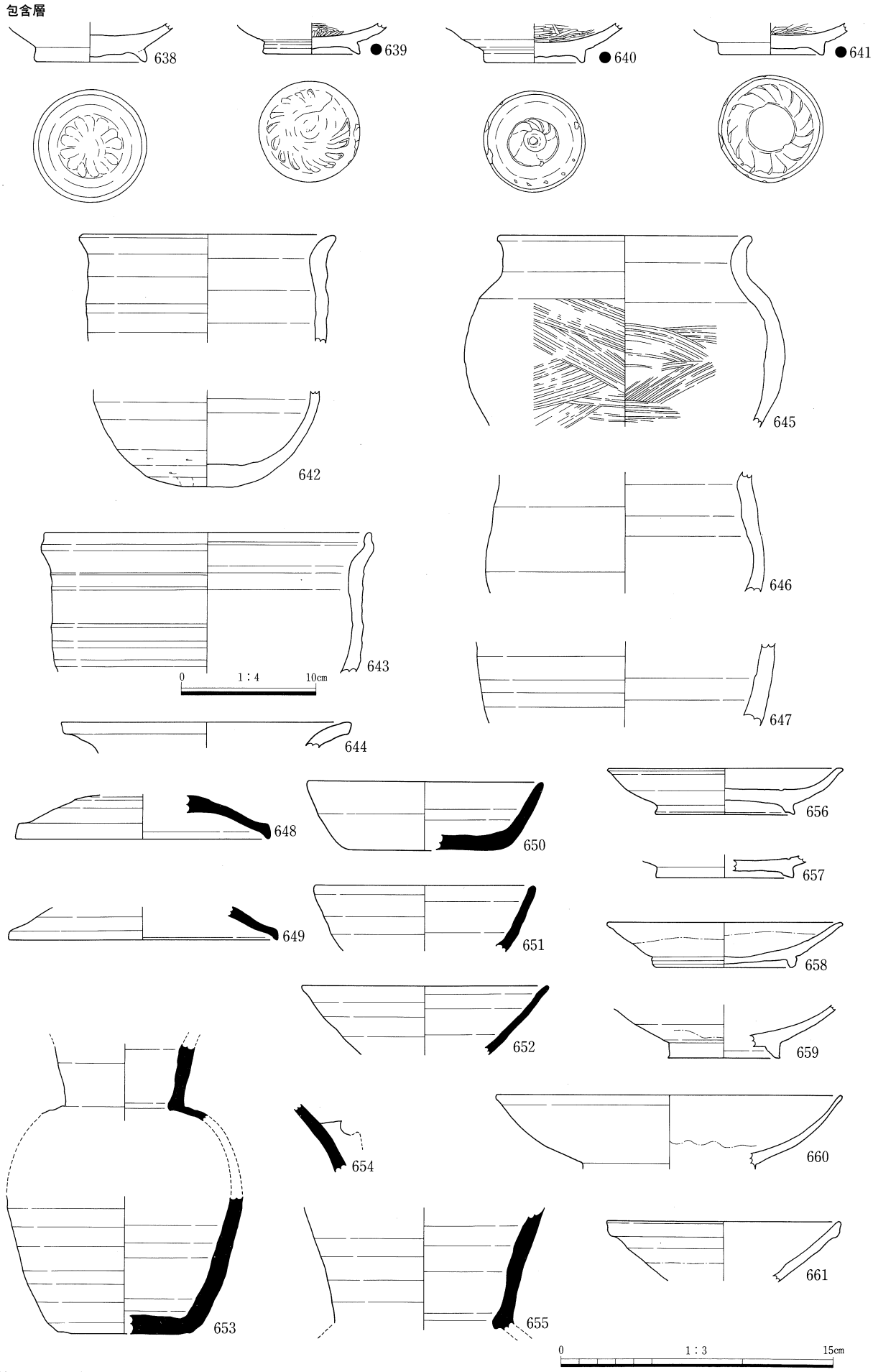
第95図　遺物実測図　(1/3)



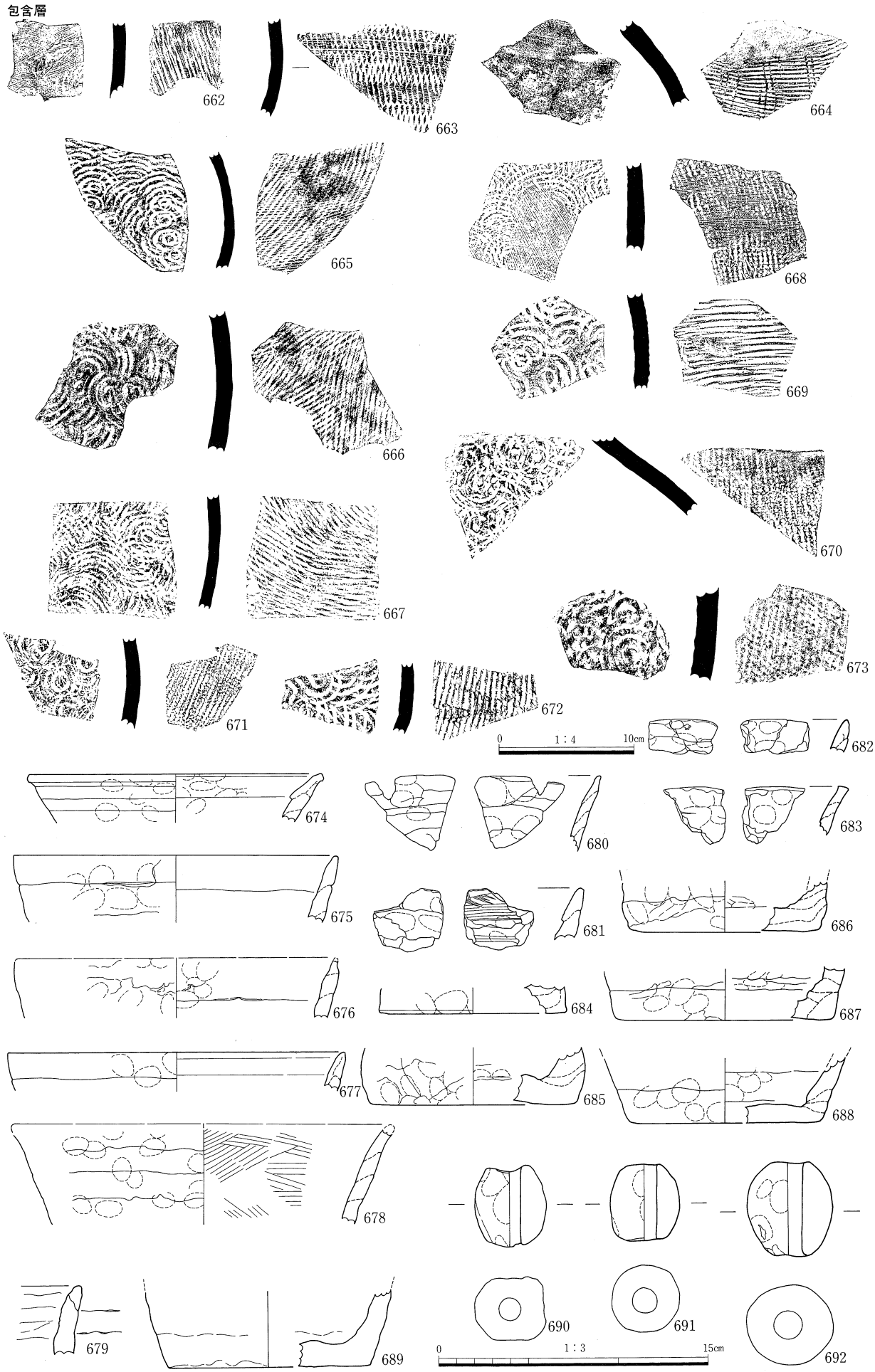
第96図　遺物実測図　(1/3)



第97図　遺物実測図　(1/3)



第98図　遺物実測図　(638～642・644～652・654～661　1/3，643・653　1/4)



第99図　遺物実測図　(674～692　1/3，662～673　1/4)

第13表　掘立柱建物一覧（古代後期）

No.	地区	桁行×梁行	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(m²)	棟方向	方　位	柱形式	時代	備　　考	挿　図	図版番号
13	A	3×2	7.6	5.4	41	東西棟	N-87°-W	側柱	11C前半？		56，57	65
14	A	3×2	7.3	4.7	34.3	東西棟	N-85°-E	側柱	10C末～11C初？		56，57	65
15	A	3×2	4.6	2.5	11.5	東西棟	N-62°-W	側柱	11C中頃？		57，58	65
16	B2E	2×2	5.7	4.6	26.2	南北棟	N-12°-W	総柱	11C後半？		58	65，66
17	B2E	2×1	2.9	2	5.8	東西棟	N-79°-E	側柱	10C末～11C初？		58	65，66
18	B2E	3×2	5.1	3.2	16.3	東西棟	N-2°-W	側柱	10C末～11C初？		59，60	65，66
19	B2E	3×2	4.65	3.55	16.5	南北棟	N-10°-E	総柱	11C中頃		59，60	65，66
20	B2E	2×2	4	3.5	14	東西棟	N-86°-W	側柱	10C末～11C初？		59，60	65，66
21	B3	2×1	1.8～	2		東西棟？	N-87°-W	側柱？	10C末～11C初？	調査区外へのびる。	62	
22	C1	4×2	6.55	4	26.2	南北棟	N-6°-E	総柱？	10C末～11C初？		61，62	
23	C1	2×1	1.1～	1.8		南北棟？	N-14°-W	側柱？	11C中頃	調査区外へのびる。	61，62	
24	C1	3×2	5.1	3.6	18.4	南北棟	N-3°-W	側柱	11C後半？		62，63	67，68
25	C1	2×2	5.8	3.25	18.9	南北棟	N-5°-W	総柱	11C中頃		63，64	67～69
26	C1	2×2	5.3	3.25	17.2	東西棟	N-45°-W	総柱	11C前半		63，64	67，69
27	C1	3×？	5.6			南北棟？	N-5°-W		10C末～11C初？	調査区外へのびる。	63，64	
28	C2	4×4	8.6	7.7	66.2	東西棟	N-6°-W	総柱	11C後半？		66，67	67
29	C2	3×1	9.2	3.4	31.3	南北棟	N-9°-W	側柱	11C後半？		66，68	67
30	C2	2×1	3.8	2.4	9.1	東西棟	N-78°-E	側柱	11C後半？		65～67	67
31	C2	2×？	5			南北棟？	N-9°-W		10C末～11C初？	調査区外へのびる。	66，68	67
32	C2	2×1	3.6～	2.0～		南北棟？	N-1°-W	総柱	11C後半？	調査区外へのびる。	66，67	
33	C2	4×1	5.5	1.7～		南北棟？	N-24°-W	側柱	11C前半？	調査区外へのびる。	65，68	
34	C2	4×3	7.7	5.1	39.3	東西棟	N-82°-E	側柱	10C末～11C初？		68，69	67
35	C2	3×3	7.2	5.6	40.3	東西棟	N-88°-W	側柱	10C末～11C初？		69，70	67
36	C2	3？×2？	7.3	4.2	30.7	南北棟	N-5°-W	側柱	11C後半？		69，70	67
37	C3	3？×2？	3.3～	1.8～		東西棟？	N-76°-E	総柱	11C後半？	調査区外へのびる。	70	67

第14表　柱穴一覧（古代後期）

建物番号	柱　穴　番　号	出　土　遺　物
SB13	SP329, 333, 334, 335, 342, 346, 365, 366, 374, 380, 401, 402, 407	
SB14	SP336, 339, 345, 362, 375, 379, 382, 396, 402	土師器
SB15	SP336, 337, 341, 342, 356, 357, 358, 359, 367, 369, 370, 376, 396, 397, 398, 399, 400	土師器
SB16	SP3216, 3217, 3218, 3219, 3220, 3221, 3222, 3223, 3224	柱
SB17	SP3294, 3295, 3296, 3297, 3298, 3299, 3300, 3301	
SB18	SP3258, 3259, 3260, 3262, 3263, 3264, 3265, 3266, 3267, 3268, 3269, 3270, 3271, 3272	土師器，須恵器，製塩土器
SB19	SP3241, 3242, 3243, 3244, 3245, 3246, 3247, 3248, 3249, 3250, 3251, 3252, 3276	土師器
SB20	SP3253, 3254, 3303, 3304, 3305, 3307, 3312, 3313, 3315, 3316	土師器
SB21	SP4113, 4114, 4115, 4116	
SB22	SP5209, 5210, 5212, 5217, 5224, 5364, 5368	土師器
SB23	SP5205, 5207, 5208	土師器
SB24	SP5237, 5241, 5242, 5259, 5262, 5316, 5317, 5318, 5321, 5331, 5332, 5334, 5363	土師器，須恵器，柱
SB25	SP5235, 5236, 5237, 5238, 5239, 5241, 5243, 5252, 5256, 5258, 5260	土師器，須恵器
SB26	SP5246, 5247, 5248, 5250, 5251, 5252, 5253, 5254, 5359, 5360	土師器，内黒，柱
SB27	SP5348, 5349, 5350, 5362	柱
SB28	SP6299, 6300, 6301, 6302, 6303, 6304, 6305, 6306, 6308, 6311, 6312, 6313, 6314, 6315, 6316, 6317, 6318, 6321, 6322, 6323, 6324, 6346, 6351, 6356, 6366, 6399	土師器，内黒，須恵器，製塩土器
SB29	SP6307, 6309, 6310, 6343, 6347, 6349, 6350, 6353, 6358, 6359, 6371, 6398	土師器，内黒
SB30	SP6325, 6326, 6327, 6328, 6329, 6341	土師器，内黒
SB31	SP6319, 6361, 6363	土師器
SB32	SP6247, 6248, 6249, 6250, 6251	
SB33	SP6404, 6411, 6415, 6423, 6426, 6427	
SB34	SP6120, 6128, 6129, 6132, 6133, 6134, 6135, 6136, 6137, 6138, 6139, 6140, 6141, 6150	土師器，柱
SB35	SP6118, 6119, 6121, 6122, 6123, 6124, 6125, 6126, 6127, 6131, 6170	柱
SB36	SP6110, 6111, 6112, 6113, 6114, 6115, 6117, 6136, 6156, 6159, 6174, 6178	
SB37	SP7310, 7311, 7312, 7313, 7314, 7315, 7316	土師器，内黒，礎板
SA2	SP379, 389, 390	
SA3	SP353, 355, 392	
SA4	SP349, 350, 352, 391	土師器
SA5	SP5211, 5214, 5215	土師器
SA6	SP5249, 5263, 5264, 5265, 5267, 5268, 5278, 5279, 5280, 5281, 5283, 5284, 5287, 5289, 5290, 5291, 5294, 5296, 5297, 5307, 5308, 5310, 5314	土師器，柱
SA7	SP6372, 6373, 6375	土師器

第15表　溝一覧（古代後期）

遺構番号	流　路	規模(幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿　図	図版番号
SD202	S→N	1.94－0.16	漆椀	11C後半		73	70
SD221	SW→NE	0.94－0.1		11C前半			
SD301	SE→NW	2.25－0.12	土師器，須恵器	11C中頃	SD301＞SD324	73	70
SD303	E→W	1.57－0.14			自然流路	73	
SD322	SE→NW	23.6－0.34	土師器，内黒，須恵器，製塩土器，曲物		自然流路	73	70，71
SD323	SE→NW	3.76－0.3	土師器，内黒，須恵器，製塩土器			74	70，71
SD324	NE→SW	0.58－0.1	土師器，内黒	11C前半	SD324＞SD325	74	
SD325	S→N	3.86－0.18	土師器，内黒	10C末～11C初		74	70，71
SD347	NW→SE	0.51－0.13		10C末～11C初	SD301＞SD347	73	
SD1200	NW→SE	1.4－0.26	土師器，製塩土器，羽口	11C前半		74	
SD2020	SE→NW	6.21－1.13	土師器，内黒，須恵器，製塩土器，土錘，杭，コロバシ，曲物，漆器，加工材	10C後半～11C	自然流路	75，76	71，72
SD2021	S→N	1.54－0.24	土師器	10C末～11C初		74	
SD2023	S→N	1.76－0.14	土師器，製塩土器	10C末～11C初		74	
SD3202	SE→NW	1.4－0.14		10C末～11C初		74	
SD3203	NW→SE	2.45－0.12	土師器	11C前半		74	
SD3204	S→N	0.82－0.12		11C後半		74	
SD3211	S→N	0.56－0.14	製塩土器	10C末～11C初	畠	79	
SD3213	N→S	0.6－0.14	土師器，内黒，製塩土器	10C末～11C初	畠	79	
SD3214	N→S	0.47－0.06		10C末～11C初	畠	79	
SD3215		0.92－0.11			自然流路	74	
SD3225	E→W	0.32－0.06		10C末～11C初	畠の区画	79	
SD3226	W→E	0.25－0.06		10C末～11C初	畠の区画	79	
SD3234	W→E	0.26－0.06		11C後半	畠	79	
SD3236	W→E	0.42－0.08		11C後半	畠	74	
SD3237	N→S	0.46－0.1	土師器，製塩土器	11C後半	畠	79	
SD3238	N→S	0.55－0.08	土師器	11C後半	畠	79	
SD3240	S→N	0.68－0.06				74	
SD3277	SW→NE	1.42－0.12	土師器，内黒		自然流路	74	
SD3292		1.58－0.16	土師器		自然流路	74	
SD4102	SW→NE	2.03－0.66	土師器，内黒，須恵器，土錘，柱，下駄，木簡，加工材，炭化材，種子	11C前半		77	72，73
SD4103	NW→SE	1.68－0.13		11C前半		77	72
SD5200	SE→NW	0.62－0.1		11C前半		77	72
SD5201	SE→NW	0.72－0.05		11C前半		77	72
SD5202	SE→NW	1.2－0.13		11C前半		77	72
SD5203		0.28－0.05	土師器	10C末～11C初		62	
SD5204		0.25－0.05	製塩土器	10C末～11C初		62	
SD5233	S→N	1.0－0.08	土師器，内黒，製塩土器	10C末～11C初		77	
SD6101	NW→SE	0.75－0.12		11C前半		77	
SD6103	W→E	0.52－0.11				77	
SD6104	E→W	0.17－0.08					
SD6202	SE→NW	0.42－0.04					
SD6207	SE→NW	2.62－0.16	土師器，内黒	11C前半		77	72
SD6208	NW→SE	2.38－0.24				77	
SD6246		0.52－0.06					
SD6405		0.23－0.02	土師器，内黒				
SD6428		0.76－0.08					
SD6429	SE→NW	0.38－0.02					
SD7300	SW→NE	1.2－0.28				78	
SD7301	SE→NW	2.24－0.15	土師器	10C末～11C初		78	
SD7302	S→N	1.03－0.05			SD7301＞SD7302	78	
SD7303	NE→SW	1.5－0.24	土師器	11C前半	SD7303＞SD7304	78	73
SD7304	SE→NW	1.04－0.06		10C末～11C初		78	
SD7318		0.27－0.04		11C後半		70	
SD8201	N→S	4.23－0.24	土師器，内黒，須恵器		自然流路		73
SD8202	S→N	0.71－0.06					
SD8203		0.23－0.05				78	73
SD8205		0.2－0.07				78	
SD8219		0.18－0.06				78	

第16表　土坑一覧(1)（古代後期）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出土遺物	時期	備考	挿図	図版番号
SK302	不整形	1.65－＊＊－0.26		11C		85	
SK304	不整形	1.64－＊＊－0.14		11C		85	
SK305	楕円	2.24－1.26－0.14		11C後半	SK305＞SD301	85	
SK306	不整形	4.28－3.52－0.26	土師器，内黒，須恵器	11C後半	SK554(古代下層)と同一遺構	85	
SK361	不整形	0.46－0.34－0.22	土師器	11C中頃			
SK1205	不整形	0.6－0.44－0.3					
SK2022	楕円	0.36－0.24－0.1	土師器，製塩土器	11C前半			
SK3205	円	3.0－2.54－0.32	土師器，曲物(側)，加工板	11C後半		86	74
SK3235	方	2.45－1.18－0.1	土師器，内黒，製塩土器，石他	10C後半		87	74
SK3273	円	0.41－0.42－0.28	内黒				
SK3274	楕円	1.48－1.0－0.1					
SK3275	楕円	1.55－1.12－0.08	土師器			86	
SK3278	円	0.34－0.37－0.28	製塩土器				
SK3282	楕円	1.37－0.97－0.04	土師器			86	
SK3284	楕円	1.22－0.75－0.14	内黒			86	
SK3285	楕円	0.7－0.55－0.36	内黒			86	
SK3293	楕円	0.72－0.62－0.16	土師器，内黒	11C前半		86	
SK4105	楕円	0.35－0.26－0.12					
SK4106	楕円	0.32－0.26－0.08					
SK4107	円	0.4－0.4－0.14					
SX5001	不整形	0.86－0.86－0.1	土師器，製塩土器	11C前半		88	75
SX5002	不整形	2.1－1.6－0.26	土師器，内黒，須恵器，製塩土器，土錘	10C後半		88	75
SX5003		＊＊－＊＊－＊＊	土師器	10C後半	集石？	89	
SX5004	不整形	1.7－1.58－0.52		11C後半	SX5004＞SD5202	88	75
SX5005		1.8－0.6－＊＊	土師器，内黒，製塩土器	11C後半	集石		75
SX5006		＊＊－＊＊－＊＊			集石？		
SK5206	不整形	1.06－0.84－0.12	土師器	11C中頃		90	74
SK5213	不整形	0.54－＊＊－0.13					
SK5218	楕円	0.62－0.3－0.2	土師器	11C前半？		90	
SK5219	楕円	0.52－0.38－0.15	内黒	11C前半？		91	
SK5221	不整形	0.2－＊＊－0.05	土師器				
SK5225	円	0.84－0.84－0.12	土師器	11C前半	SP5246の遺物と接合	91	
SK5227	円	0.4－0.4－0.1	土師器				
SK5228	円	0.58－0.56－0.16	土師器，製塩土器			91	
SK5232	円	0.22－0.2－0.07	土師器	11C前半		91	
SK5240	楕円	0.4－0.3－0.18	土師器				
SK5244	楕円	0.94－0.64－0.11	土師器			91	
SK5245	楕円	0.84－0.7－0.13	土師器，内黒，須恵器	11C中頃		90	74
SK5257	円	0.27－0.23－0.17	土師器	11C前半		90	68
SK5272	楕円	0.28－0.2－0.17					
SK5273	円	0.3－0.3－0.16			SP5271・SP5274＞SK5273		
SK5285	楕円	0.2－0.12－0.02	土師器				
SK5330	不整形	0.54－0.5－0.06	土師器，加工板	11C中頃			
SK5333	不整形	0.4－0.3－0.05	土師器				
SP5335	楕円	0.94－0.56－0.12					67
SK5338	不整形	0.46－0.38－0.06	土師器	11C中頃？		91	
SK5340	楕円	0.7－0.5－0.07	土師器，内黒，製塩土器	11C後半		90	
SK5345	円	0.18－0.14－0.05	土師器，内黒				
SK5354	円	0.16－0.14－0.04	土師器				

第16表　土坑一覧(2)（古代後期）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出土遺物	時期	備考	挿図	図版番号
SK5356	楕円	0.5－0.36－0.1					
SK5357	円	0.36－0.3－0.06	土師器			91	
SK5365	円	0.36－0.34－0.06	土師器	10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5366	円	0.2－0.18－0.1	土師器	10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5367	円	0.18－0.16－0.07		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5369	円	0.3－0.26－0.12		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5370	円	0.32－0.26－0.12		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5371	円	0.18－0.18－0.15		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5372	円	0.18－0.14－0.05		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5373	円	0.2－0.2－0.03		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5374	円	0.28－0.22－0.12	土師器	10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5375	円	0.12－0.12－＊＊		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5376	楕円	0.3－0.22－0.11		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK5377	円	0.19－0.18－0.08		10C後半	SX5003の下層から検出		
SK6142	楕円	0.64－0.49－0.04					
SK6165	不整形	0.94－0.86－0.04	土師器	11C前半		91	74
SK6173	楕円	0.95－0.73－0.06					
SK6234	楕円	0.9－0.7－0.1					
SK6263	円	0.22－0.22－0.07	土師器				
SK6320	楕円	0.34－0.28－0.18	土師器				
SK6332	円	0.26－0.22－0.07	土師器				
SK6334	楕円	0.38－0.26－0.09	土師器				
SK6336	円	0.2－0.2－0.05	土師器				
SK6340	不整形	0.28－＊＊－0.24					
SP6342	円	0.43－0.37－0.12	土師器				
SK6365	円	0.28－0.28－0.09	土師器				
SK6368	円	0.27－0.27－0.2	土師器				
SK6374	不整形	0.35－0.26－0.1	土師器				
SK6402	楕円	1.56－0.88－0.06				91	
SX6406	不整形	1.88－1.46－0.34	内黒，木鍬	11C中頃	SX6406＞SD4102		75
SK8204	不整形	2.3－＊＊－0.18					
SK8210	不整形	3.54－1.04－0.22				91	74

第17表　土器一覧(1)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径･器高･底径･高台径cm)	色調		年代	備考
71	325		SP352		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.6－	10YR6/2	灰黄褐色	11C後	
	326	76	SP3266		土師器	椀	＊＊－＊＊－4.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	327	76	SP3266		土師器	椀	12.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	328	76･77	SP3266		土師器	有台椀	14.6－	2.5Y7/3	浅黄色	10C末～11C初	
	329	76･77	SP3266		土師器	椀	11.4－3.0－5.6－	7.5YR8/4	浅黄橙色	10C末～11C初	
	330	76･77	SP3266		土師器	椀	11.6－3.1－5.2－	10YR8/3	浅黄橙色	10C末～11C初	
	331	76･77	SP3266		土師器	椀	11.2－3.3－4.6－	2.5Y6/1	黄灰色	10C末～11C初	
	332	76	SP3266		須恵器	壺	＊＊－11.6－7.0－	N5/0	灰色	10C末～11C初	
	333	76･77	SP3266			製塩土器		5YR6/6	橙色	10C末～11C初	
	334		SP5237		須恵器	甕		N5/0	灰色	10C	
	335		SP5237		土師器	皿	8.2－2.2－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中	
	336		SP5319		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	7.5YR6/3	にぶい褐色	11C前	内黒
	337		SP5246		土師器	皿	10.0－1.3－6.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	338		SP5246		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C前	
	339	78	SP5246		土師器	椀	14.2－3.7－(5.6)－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	340	78	SP5246		黒色土器	有台椀	14.5－5.5－＊＊－5.6	2.5Y6/3	にぶい黄色	11C前	
	341		SP5246	X154Y67　X152Y66	黒色土器	有台椀	15.4－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	343		SP5364		土師器	椀	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	
	344		SP5364		土師器	有台椀		10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	
	345		SP6315		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C後	内黒
	346		SP6322		黒色土器	椀	14.2－	2.5Y4/1	黄灰色	11C後	内面に煤付着
	347		SP6322		須恵器	横瓶		N7/0	灰白色	11C後	
80	351		SD301		土師器	椀	13.0－3.6－5.8－	10YR2/1	灰白色	11C後	
	352	79	SD301		土師器	椀	13.2－3.6－5.6－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C後	
	353	79	SD301		土師器	椀	＊＊－＊＊－4.9－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C後	
	354		SD301		土師器	皿	＊＊－＊＊－6.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C後	
	355	79	SD301		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.3－	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C後	
	356	79	SD301		土師器	椀	＊＊－＊＊－5.2－	10YR5/4	にぶい黄褐色	11C後	
	357		SD301		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR4/1	褐灰色	11C後	
	359	79	SD322	X210Y105	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.7－	10YR5/3	にぶい黄褐色	10C末～11C初	
	360	79	SD322	X210Y105	土師器	有台椀	15.0－	10YR6/2	灰黄褐色	10C末～11C初	
	361		SD322	X205Y106		製塩土器		7.5YR5/3	にぶい褐色	10C末～11C初	
	362		SD324		土師器	皿	9.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C後？	
	363	79	SD325		土師器	椀	13.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C前	
	364	79	SD325		土師器	椀	11.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	365	79	SD325		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	366	79	SD325		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	367	79	SD325		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.5	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	368	79	SD325		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.5	10YR8/2	灰白色	11C前	内黒
	369	80	SD2020	X182Y88　X184Y89	土師器	皿	9.0－2.2－3.2－	2.5Y5/3	黄褐色	11C後	
	370	80	SD2020	X185Y87	土師器	椀	11.0－3.2－4.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	10C末～11C初	
	371	80	SD2020	X185Y87	土師器	椀	11.4－3.2－5.6－	2.5Y7/3	浅黄色	10C末～11C初	
	372	80	SD2020	X185Y88	土師器	皿	11.8－4.0－5.4－	10YR6/3	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	373	80	SD2020		土師器	椀	14.4－4.2－6.0－	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C中	
	374	80	SD2020	X184Y89	土師器	椀	15.6－4.2－6.1－	2.5Y4/3	オリーブ褐色	11C中	
	375	82	SD2020	X183Y89　X184Y89	黒色土器	有台椀	14.0－5.5－＊＊－6.4	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C前	内黒
	376	80	SD2020	X183Y88　X182Y83	黒色土器	有台椀	14.8－5.6－＊＊－7.0	2.5Y5/2	暗灰黄色	11C前	
	377	81	SD2020	X184Y89　X183Y89	黒色土器	有台椀	14.8－5.5－＊＊－6.8	2.5Y4/3	オリーブ褐色	11C前	内黒
	378	81	SD2020	X185Y87	土師器	有台椀	14.8－	10YR6/2	灰黄褐色	11C前	
81	379		SD2020		土師器	椀	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C	
	380	82	SD2020	X183Y89	土師器	椀	＊＊－＊＊－4.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	11C	外面に煤付着

第17表　土器一覧(2)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
	381	82	SD2020	X185Y87	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	内面に煤付着
	382	82	SD2020	X191Y87	土師器	椀	11.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	383	82	SD2020	X185Y87	土師器	皿	12.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	煤付着
	384	82	SD2020	X185Y88	土師器	椀	16.0－	10YR6/2	灰黄褐色	11C	
	385	82	SD2020	X190Y86　X190Y88	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	7.5YR7/6	橙色	11C	
	386	82	SD2020	X185Y88	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	387	82	SD2020	X185Y86	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.0	10YR5/2	灰黄褐色	11C	
	388	82	SD2020		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－8.5	7.5YR7/6	橙色	11C	外面に煤付着
	389	82	SD2020		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.2	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	内黒
	390	82	SD2020	X181Y88	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.8	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C	内黒
	391	82	SD2020		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.2	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	内面に煤付着
	392	82	SD2020	X183Y89	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR6/2	灰黄褐色	11C	内黒
	393	82	SD2020		須恵器	杯B	＊＊－＊＊－＊＊－8.0	2.5Y6/1	黄灰色	9C後～10C前	
	394	82	SD2020	X190Y86	須恵器	壺蓋		2.5Y6/1	黄灰色	9C後～10C前	
	395	81	SD2020		須恵器	双耳瓶	＊＊－＊＊－15.0－	N6/0	灰色	10C前	
	396	82	SD2020	X191Y87	須恵器	甕		2.5Y7/1	灰白色	9C後～10C前	
	397	82	SD2020		須恵器	甕		10YR6/2	灰黄褐色	9C後～10C前	
	398	81	SD2020		土師器	壺	8.8－＊＊－7.0－	2.5Y5/3	黄褐色	11C	
	399	81	SD2020			製塩土器	36.0－	7.5YR7/6	橙色		
	400	82	SD2020	X186Y86		製塩土器		7.5YR6/4	にぶい橙色		
	401	82	SD2020	X186Y88		製塩土器	＊＊－＊＊－14.0－	2.5YR6/6	橙色		
	402	82	SD2020	X194Y88	土製品	土錘	4.2－4.1－1.3－(55.7)	2.5Y7/2	灰黄色		長さ―幅―孔径―重量（cm，g）
	403	82	SD2020		土製品	土錘	＊＊－(7,2)－1,5－(126.3)	2.5Y4/1	黄灰色		長さ―幅―孔径―重量（cm，g）
83	420		SD3213	X201Y97	土師器	有台椀	10.0－	2.5Y6/2	灰黄色	10C末～11C初	内外面に煤付着
	421		SD3213	X199Y97		製塩土器		5YR6/6	橙色		
	422		SD4101	X155Y87	須恵器	杯	＊＊－＊＊－8.0－	2.5Y7/2	灰黄色	9C後	
	423		SD4101	X174Y85	須恵器	甕	20.0－	N6/0	灰色	9C後	
	424		SD4101	X169Y84	須恵器	甕		N6/0	灰色	9C後	
	425		SD5203		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.3	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	426	83	SD4102	X136Y84	土師器	皿	7.6－2.1－4.1－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	427	83	SD4102		土師器	皿	9.0－＊＊－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中	
	428	82	SD4102		土師器	皿	8.8－2.4－4.0－	10YR5/2	灰黄褐色	11C中	
	429	83	SD4102		土師器	皿	10.1－2.4－4.9－	2.5Y7/2	灰黄色	11C前	
	430	83	SD4102		土師器	椀	14.6－4.5－5.0－	7.5YR6/3	にぶい褐色	11C前	
	431	83	SD4102		土師器	椀	＊＊－＊＊－4.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	432	83	SD4102	X136Y84	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	433	83	SD4102		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C前	
	434	83	SD4102		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.4	10YR4/1	褐灰色	11C中	内面に一部煤付着
	435	83	SD4102		土師器	皿？	＊＊－＊＊－8.6－	2.5Y7/2	灰黄色	11C前	
	436	82	SD4102	X130Y76	黒色土器	有台椀	15.2－5.0－12.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	437	83	SD4102		黒色土器	椀	13.3－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	438	83	SD4102		黒色土器	椀	15.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	439	83	SD4102	X130Y76	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.1	2.5Y6/3	にぶい黄色	11C前	内黒
	440	83	SD4102		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	2.5Y5/2	暗灰黄色	11C前	
	441	83	SD4102			製塩土器		5YR6/6	橙色		
	442	83	SD4102		土製品	土錘	6.4－4.5－1.4－105.9	5YR6/3	にぶい橙色		長さ―幅―孔径―重量（cm，g）
	443	83	SD4102		土製品	土錘	6.1－4.8－1.3－(105.0)	10YR6/3	にぶい黄橙色		長さ―幅―孔径―重量（cm，g）
84	447		SD6207		土師器	皿	＊＊－＊＊－6.2－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	外面に煤付着
	448		SD6207	X134Y68	土師器	甕		7.5YR7/4	にぶい橙色	9C後	
	449		SD6207		土師器	甕	17.6－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	内面に一部煤付着
	450		SD7301		土師器	甕	14.0－	10YR6/2	灰黄褐色	9C後	煤付着

第17表　土器一覧(3)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
	451	83	SD8201	X114Y52	土師器	椀	12.5－4.4－4.6－	10YR8/4	浅黄橙色	9C後	赤彩
	452	83	SD8201	X96Y53	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	2.5Y7/3	浅黄色		
	453	83	SD8201		土師器	皿	＊＊－＊＊－7.0－	2.5Y7/4	浅黄色		
	454	83	SD8201	X96Y53	土師器	甕		10YR8/3	浅黄橙色	9C後	
	455	83	SD8201	X94Y54	土師器	甕	＊＊－＊＊－8.0－	7.5YR7/3	にぶい橙色	8C後～9C前	
	456	83	SD8201	X95Y53	土師器	甕		2.5Y6/2	灰黄色	9C後	
	457		SD8201	X96Y53	須恵器	杯蓋	13.7－	N6/0	灰色	9C後	
	458	83	SD8201	X113Y52	須恵器	杯B	＊＊－＊＊－＊＊－6.3	N6/0	灰色	9C後	
	459	83	SD8201	X94Y54	須恵器	皿	12.0－	2.5Y7/3	浅黄色	9C後	
	460	83	SD8201	X96Y52	須恵器	杯A	＊＊－＊＊－5.8－	2.5YR7/1	灰白色	9C後	
	461	83	SD8201	X98Y58　X100Y54	須恵器	壺蓋	11.5－	2.5YR7/1	灰色	9C後	
92	462		SK306	X233Y109	土師器	椀	11.4－	10YR5/2	灰黄褐色	11C後	
	463	84	SK306	X233Y109	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.6	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C後	内面に煤付着
	464	84	SK361		土師器	皿	10.0－2.0－4.5－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中	
	465		SK2022		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.0	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C前	
	466		SK3205		土師器	椀	14.0－	7.5YR8/6	浅黄橙色	11C後	内面に煤付着
	467		SK3293		土師器	皿	12.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	468		SK3235		土師器	椀	13.0－4.3－6.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	10C後	内面に煤付着
	469	84	SK3235	X193Y94		製塩土器	＊＊－＊＊－16.0－	7.5YR7/6	橙色	10C後	
	470	85	SK5206		土師器	皿	8.7－1.8－4.0－	2.5Y7/3	淡赤橙色	11C中	
	471	85	SK5206		土師器	皿	8.9－2.2－3.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	外面に煤付着
	472	86	SK5206		土師器	皿	9.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	
	473	86	SK5206		土師器	皿	8.2－2.2－3.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	
	474	86	SK5206		土師器	皿	10.2－2.7－4.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	内外面に煤付着
	475		SK5218		土師器	椀	＊＊－＊＊－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前？	
	476		SK5219		土師器	椀	＊＊－＊＊－5.2－	10YR5/1	褐灰色	11C前？	内面に煤付着
	477	78	SP5257		土師器	皿	8.9－2.1－4.9－	2.5Y7/3	浅黄色	11C前	
	478	78	SK5330		土師器	皿	9.7－2.3－(4.0)－	2.5Y7/2	灰黄色	11C中	
	480		SK5232		土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.6	5YR6/4	にぶい橙色	11C前	
	481	85	SK5245		土師器	皿	8.9－2.4－3.8－	2.5Y5/4	にぶい赤褐色	11C中	
	482	85	SK5245		土師器	皿	8.6－2.2－3.8－	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C中	
	483	85	SK5245		土師器	椀	13.7－3.8－(5.2)－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	
	484	86	SK5245		黒色土器	椀	16.0－	2.5Y4/1	黄灰色	11C中	内黒
	485	86	SK5245		土師器	椀	＊＊－＊＊－6.4－	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C中	内外面黒変
	486		SK5338		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.4－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中？	
	487		SK5340		土師器	皿	8.2－1.0－4.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C後	
	488	84	SK5340		土師器	皿	8.9－2.2－5.1－	2.5Y7/3	浅黄色	11C後	
	489		SK5340		黒色土器	椀	12.0－	10YR6/2	灰黄褐色	11C後	内黒
	490	87	SK6165		土師器	皿	8.8－2.2－4.6－	10YR6/4	にぶい黄褐色	11C前	
	491	87	SK6165		土師器	皿	9.2－2.5－4.9－	2.5Y6/3	にぶい黄色	11C前	
	492	87	SK6165		土師器	椀	16.0－4.2－(5.3)－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
93	493	86	SX5002		土師器	椀	13.7－	7.5YR7/4	にぶい橙色	10C後	
	494	86	SX5002		土師器	皿	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C後	
	495	86	SX5002		土師器	椀	17.7－	10YR6/2	灰黄褐色	10C後	内部黒変
	496	86	SX5002		土製品	土錘	6.4－4.8－1.6－114.9	7.5YR5/4	にぶい褐色		長さ―幅―孔径―重量（cm，g）
	497	86	SX5002		須恵器	甕？		N4/0	灰色		
	498	86	SX5002		須恵器	双耳瓶		N6/0	灰色		
	499	86	SX5003		土師器	椀	12.0－3.3－6.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	10C後	
	500	86	SX5003		土師器	椀	11.6－3.3－5.2－	5YR7/4	にぶい橙色	10C後	
	501	86	SX5003		土師器	椀	＊＊－＊＊－4.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C後	
	502	86	SX5003		土師器	有台椀	15.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C後	内面黒変

第17表　土器一覧(4)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
	503	86	SX5005		黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	504	86	SX6406		黒色土器	有台椀	15.0－6.0－＊＊－6.7	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
94	506	98	A	X228Y111	土師器	皿	9.0－2.0－5.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中	
	507	98	C2	X139Y74	土師器	皿	9.0－1.9－5.4－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	
	508	98	C2	X131Y74	土師器	皿	8.9－2.3－5.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	11C前	
	509	98	C1	X153Y66　X158Y66	土師器	皿	8.4－2.0－4.9－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C前	
	510	88	B3	X137Y85	土師器	皿	9.2－2.0－4.7－	7.5YR5/3	にぶい褐色	11C前	
	511	98	B2E	X189Y103	土師器	皿	9.8－1.5－6.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	512	88	A	X228Y110	土師器	皿	8.9－2.2－4.9－	10YR3/1	黒褐色	11C中	内=煤・油煙付着，外=煤付着
	513	88	C1	X153Y66	土師器	皿	8.3－2.3－3.7－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C中	
	514	88	C1	X154Y67	土師器	皿	8.3－2.2－3.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中	
	515	89	C2	X137Y78	土師器	皿	9.0－2.4－(4.0)－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	煤付着
	516		A	X234Y107	土師器	皿	10.0－1.6－5.3－	7.5YR6/6	橙色	11C前	
	517	89	C2	X132Y78	土師器	皿	8.4－2.3－(4.1)－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	518	89	C1	X154Y67	土師器	皿	9.2－2.1－(4.9)－	2.5Y6/3	にぶい黄色	11C前	
	519	89	B2E	X187Y103	土師器	皿	9.6－2.7－(5.6)－	2.5Y7/2	灰黄色	11C前	
	520	90	C1	X153Y66	土師器	皿	9.9－2.4－4.8－	2.5Y7/3	淡赤橙色	11C前	
	521		C1	X155Y68	土師器	皿	9.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	522	90	A	X230Y106	土師器	皿	9.0－1.6－6.1－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	
	523	90	B2E	X181Y103	土師器	皿	8.6－2.2－(5.3)－	2.5Y8/2	灰白色	11C中	
	524	98	B2E	X186Y103	土師器	皿	8.8－2.0－3.8－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C中	
	525	90	C1	X154Y66	土師器	皿	8.9－2.3－4.4－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	
	526	98	C1	X163Y62	土師器	皿	8.9－1.9－3.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	内面に煤付着
	527	91	C1	X155Y66	土師器	皿	9.0－2.0－4.2－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C中	
	528	91	C2	X108Y69	土師器	皿	10.0－2.5－5.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	529	91	C1	X154Y67	土師器	皿	9.2－2.1－5.3－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	
	530	92	B3	X137Y85	土師器	皿	8.3－2.0－5.0－	10YR6/2	灰黄褐色	11C中	
	531	98	C3	X75Y65	土師器	皿	8.5－2.1－3.6－	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C中	
	532	91	C1	X153Y66	土師器	皿	8.5－2.0－(4.6)－	2.5Y7/2	灰黄色	11C前～中	
	533	92	B2E	X187Y96	土師器	皿	8.8－2.0－5.2－	10YR5/1	褐灰色	11C前～中	
	534	92	C2	X134Y71	土師器	皿	9.0－2.4－4.1－	10YR6/2	灰黄褐色	11C前～中	
	535	92	C1	X155Y69	土師器	皿	8.8－1.4－4.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前～中	
	536	98	B3	X136Y84	土師器	皿	9.2－2.0－4.6－	10YR6/3	にぶい褐色	11C前～中	
	537		A	X220Y110	土師器	皿	9.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C	
	538		C1	X155Y67	土師器	皿	10.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	539		C2	X125Y71	土師器	皿	＊＊－＊＊－5.1－	2.5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	540		C1	X158Y70	土師器	皿	＊＊－＊＊－4.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	底部内面に一部煤付着
	541	97	B1	X212Y97	土師器	皿	＊＊－＊＊－5.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	542		C1	X162Y70	土師器	皿	＊＊－＊＊－5.3－	7.5YR7/4	にぶい橙色	11C	
	543		C2	X125Y71	土師器	皿	＊＊－＊＊－2.7－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	544		A	X231Y108	土師器	皿	＊＊－＊＊－4.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	545	97	B3	X136Y84	土師器	皿	＊＊－＊＊－5.2－	10YR6/2	灰黄褐色	11C	
95	546		B2E	X177Y97	土師器	椀	11.4－3.9－4.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	547	92	B2E	X193Y93	土師器	椀	12.0－3.5－5.0－	2.5Y6/2	灰黄色	10C末～11C初	
	548	92	B2E	X184Y105	土師器	椀	13.2－3.7－4.6－	10YR6/3	にぶい黄橙色	10C後	
	549	93	C1	X152Y66　X161Y68	土師器	椀	13.7－4.5－(5.2)－	10YR6/2	灰黄褐色	10C後	
	550	94	C2	X137Y78	土師器	椀	14.0－4.0－4.3－	10YR6/4	にぶい黄橙色	11C前	
	551	93	C1	X152Y66	土師器	椀	17.1－4.6－(7.6)－	10YR6/2	灰黄褐色	11C前	
	552	93	B2E	X190Y95	土師器	椀	11.4－3.3－4.4－	5YR7/6	橙色	10C末～11C初	
	553	93	B2E	X191Y94	土師器	椀	11.2－3.5－4.8－	10YR8/3	浅黄橙色	10C末～11C初	
	554	93	B2E	X180Y103	土師器	椀	13.4－3.5－7.6－	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C前	

第17表　土器一覧(5)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
	555	94	B2E	X182Y88　X183Y88	土師器	椀	13.6－4.1－5.9－	10YR4/2	灰黄褐色	11C中	
	556	94	B2E	X191Y95	土師器	椀	11.6－3.3－4.8－	10YR6/4	にぶい黄褐色	10C末～11C初	
	557	94	B2E	X188Y97	土師器	椀	14.2－4.8－5.4－	2.5Y6/4	にぶい黄色	11C中	
	558	94	C2	X109Y71　X108Y67	土師器	椀	14.5－4.0－4.4－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C前	
	559		C1	X162Y69	土師器	椀	13.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	560		C1	X164Y65	土師器	椀	14.0－	2.5Y6/2	灰黄色	11C	
	561		A		土師器	椀	11.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	内外面に一部煤付着
	562	94	C1	X162Y70	土師器	椀	11.8－	5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	563		C2	X110Y66	土師器	椀	12.5－	2.5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	564		B2E	X182Y88	土師器	椀	15.8－	10YR5/2	灰黄褐色	11C	
	565		A		土師器	椀	15.8－	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	566		B2E	X185Y101	土師器	椀	15.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	567		C1	X151Y69	土師器	椀	18.0－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	568	98	B3	X138Y55	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.6－	7.5YR6/4	にぶい橙色	11C	
	569	98	C2	X131Y76	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	7.5YR7/4	にぶい橙色	11C	
96	570	97	B2E	X185Y95	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C	
	571	97	B2E	X181Y96	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C	
	572	98	B2E	X185Y101	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C	外面に煤付着
	573	98	B2E	X184Y101	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	574	97	C2	X130Y75	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.7－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	575	98	C2	X141Y71　X140Y72	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.8－	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C	内外面黒変
	576	98	C1	X153Y66	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.0－	2.5Y6/1	黄灰色	11C	黒変
	577	97	B3	X148Y90	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.1－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	578	97	B3	X166Y83	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.8－	2.5Y6/2	灰黄色	11C	
	579	98	C1	X156Y65	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	5YR6/6	橙色	11C	
	580	98	C1	X117Y66　X115Y66	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.4－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	581		C1	X154Y67	土師器	椀	＊＊－＊＊－4.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C	
	582	95	B1	X208Y102	土師器	有台椀	14.1－5.7－＊＊－6.9	10YR5/2	灰黄褐色	11C中	内面ミガキ処理
	583	98	C1	X162Y70	土師器	有台椀		10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	
	584	98	C1	X155Y67	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－8.0	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	585	98	B3	X141Y83	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.9	10YR6/2	灰黄褐色	11C	
	586	98	C1	X151Y69	土師器	有台椀		10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	587	95	B2E	X191Y95	土師器	有台椀	12.4－	10YR8/3	浅黄橙色	10C末～11C初	
	588	95	B2E	X191Y95	土師器	有台椀	14.8－	5YR6/4	にぶい橙色	10C末～11C初	内外面に煤付着
	589		B2E	X184Y89	土師器	有台椀		7.5YR6/6	橙色	10C末～11C初	
	590	95	C1	X162Y69	土師器	有台椀		10YR5/2	灰黄褐色	10C末～11C初	煤付着
	591	95	B2E	X191Y95	土師器	有台椀	14.6－5.6－＊＊－8.0	10YR6/3	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	592	95	C1	X162Y69	土師器	有台椀	12.9－6.2－＊＊－8.1	7.5YR8/4	浅黄橙色	10C末～11C初	
	593	96	C1	X162Y69　X161Y71	土師器	有台椀	14.1－5.6－＊＊－8.3	7.5YR7/4	にぶい橙色	10C末～11C初	
	594	98	B1	X211Y96　X212Y97	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－8.2	10YR6/4	にぶい黄橙色	10C末～11C初	
	595	98	B1	X212Y97	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.0	10YR7/2	にぶい黄橙色	10C末～11C初	内黒
	596	98	C1	X155Y67	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.5	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C	
	597	98	C1	X153Y66	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.8	10YR6/2	灰黄褐色	11C	
97	598	96	A	X228Y112	土師器	有台椀	14.8－5.5－＊＊－5.0	10YR4/3	にぶい黄褐色	11C後	内面ミガキ処理
	599	98	A	X239Y105	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	10YR5/4	にぶい黄褐色	11C後	内黒
	600	96	B2E	X187Y103	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.5	2.5Y7/2	灰黄色	11C後	
	601	98	C1	X138Y134	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C後	
	602	98	C2	X139Y74	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.5	5YR6/6	橙色	11C後	
	603	98	C2	X142Y75	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.5	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C後	
	604	98	C2	X137Y73	黒色土器	椀	10.7－3.2－7.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C後？	内外面黒変，内面に煤付着
	605	98	C1	X150Y68　X153Y66	黒色土器	椀	14.3－3.6－(5.0)－	10YR7/3	にぶい黄橙色		外面に煤付着

第17表　土器一覧(6)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		年代	備考
	606		C1	X151Y64	黒色土器	皿	＊＊－＊＊－6.0－	2.5Y6/2	灰黄色		内黒
	607		B3	X135Y84	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR6/2	灰黄褐色		内黒
	608	96	B3	X136Y84	黒色土器	有台椀	14.3－6.3－＊＊－6.8	10YR6/2	灰黄褐色	11C中	
	609	97	C1	X154Y67	黒色土器	有台椀	14.7－6.0－＊＊－5.7	10YR5/3	にぶい黄褐色	11C前	内黒，内外面に煤付着
	610	96	B2E	X191Y95	黒色土器	有台椀	13.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中	内黒
	611		C2	X130Y76	黒色土器	椀	13.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	612		C1	X153Y66	黒色土器	椀	14.0－	10YR6/2	灰黄褐色	11C前	内外面に煤付着
	613		C1	X155Y65	黒色土器	椀	14.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒，外面に煤付着
	614		C1	X155Y69	黒色土器	椀	16.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	内黒
	615		B2E	X184Y103	黒色土器	椀	17.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C前	
	616	98	C1	X155Y66	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.2	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	617	98	C2	X133Y74	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.1	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	618	98	C2	X128Y69	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－4.9	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	619	98	C1	X155Y68	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	5YR7/4	にぶい橙色	11C中～後	内黒
	620	98	C1	X151Y64	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR5/1	褐灰色	11C中～後	内黒
	621	98	B1	X213Y105	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.5	10YR7/2	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒，内面に網状痕あり
	622	98	C1	X117Y66	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.0	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	623		B3	X137Y85	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	2.5Y5/2	暗灰黄色	11C中～後	
	624	98	B2	X187Y80	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.7	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	625	98	C2	X128Y76	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	626	98	B1	X208Y100 X208Y101	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.7	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	627	98	B1	X208Y100	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	10YR6/2	灰黄褐色	11C中～後	内黒
	628		C2	X142Y75	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－7.5	5YR7/4	にぶい橙色	11C中～後	
	629	98	C1	X153Y67	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.4	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	630	98	B3	X137Y85	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.4	2.5Y6/3	にぶい黄色	11C中～後	内黒
	631	98	A	X228Y109	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.8	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	632	98	C1	X148Y69	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.2	10YR6/2	灰黄褐色	11C中～後	内黒
	633	98	C1	X153Y67	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	634	97・98	A	X236Y111	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.6	10YR7/1	灰白色	11C中～後	内黒
	635	98	C1	X163Y69	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.3	10YR7/4	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	636	98	C1	X153Y67	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	10YR7/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	637	98	B3	X137Y85	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	10YR6/2	灰黄褐色	11C中～後	
98	638	97・98	A	X230Y115	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.1	10YR8/2	灰白色	11C中～後	
	639	98	B3	X137Y85	土師器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.7	10YR5/2	灰黄褐色	11C中～後	
	640	98	C1	X155Y67	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.5	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	641		C1	X154Y65	黒色土器	有台椀	＊＊－＊＊－＊＊－5.8	10YR6/3	にぶい黄橙色	11C中～後	内黒
	642	102	B1	X208Y102 X207Y103	土師器	甕	14.1－13.9－	10YR6/3	にぶい黄橙色	9C前	煤一部付着
	643	102	C2	X135Y66	土師器	甕	23.7－	5YR7/4	にぶい橙色	9C後	
	644	102	A	X230Y113	土師器	瓶	16.0－	10YR8/3	浅黄橙色	9C後	
	645	101	B2E	X186Y95	土師器	甕	13.8－17.4－	10YR4/2	灰黄褐色	7C後～末	ハケメ2.5cm幅の単位，3mm間隔9本
	646	102	B1	X208Y101	土師器	壺		10YR6/2	灰黄褐色	9C後	
	647	102	C1	X161Y69	土師器	甕		10YR5/2	灰黄褐色	9C後	
	648	99	B1	X211Y96	須恵器	蓋	14.0－	7.5Y6/1	灰色	9C後	
	649	99	B1	X211Y96	須恵器	蓋	15.0－	7.5Y6/1	灰色	9C後	
	650	99	B3	X155Y84	須恵器	杯A	12.8－3.8－8.5－	2.5Y7/1	灰白色	8C末～9C初	
	651		D1	X108Y45	須恵器	杯	12.0－	2.5Y8/3	淡黄色	9C後	
	652		C2	X133Y70	須恵器	杯	13.8－	7.5Y7/1	灰白色	9C後	
	653	99	B2E	X184Y101	須恵器	壺	＊＊－＊＊－10.0－	5Y5/1	灰色	9C後	長頸壺
	654	99	B1	X211Y96	須恵器	双耳瓶		N6/0	灰色	9C後	
	655	99	B1	X211Y96	須恵器	壺		10YR5/2	灰黄褐色	9C後	
	656	100	B2E	X182Y92	緑釉	有台皿	12.8－2.5－＊＊－7.6	5Y7/1	灰白色	10C後～11C初	釉調5Y6/4オリーブ黄色

第17表　土器一覧(7)（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径･器高･底径･高台径cm)	色調		年代	備考
	657	100	C1	X158Y68　X154Y65	緑釉	有台皿	＊＊－＊＊－＊＊－7.6	2.5Y7/3	浅黄色	10C後	釉調7.5Y6/3オリーブ黄色
	658	101	B2	X190Y78	灰釉	有台皿	13.0－2.5－＊＊－7.7	5Y7/1	灰白色	10C後～11C初	釉調10YR8/1灰白色，虎渓山1号窯式
	659	101	B3		中国製白磁	椀	＊＊－＊＊－＊＊－6.0	2.5Y8/1	灰白色	11C後～12C	釉調2.5Y7/2灰黄色，白磁椀II類
	660	101	B1	X211Y96　X213Y98	灰釉	椀	19.0－	5Y8/1	灰白色	10C後～11C初	釉調10YR8/1灰白色，虎渓山１号窯式
	661	99	B2E	X186Y95	中国製白磁	小椀	12.8－	7.5Y8/1	灰白色	11C末～12C前	白磁小椀IV類
	662	99	C1	X166Y66	須恵器	壺		N5/0	灰色	9C後～10C前	
99	663	99	B2E	X181Y101	須恵器	横瓶		2.5Y7/3	浅黄色	9C後～10C前	
	664	99	B1	X213Y113	須恵器	甕		7.5Y6/1	灰色	9C後～10C前	
	665	99	C1	X155Y65	須恵器	横瓶		N6/0	灰色	9C後～10C前	
	666	99	B2E	X193Y87	須恵器	横瓶		2.5Y6/1	黄灰色	9C後～10C前	
	667	99	C1	X152Y65	須恵器	甕		N5/0	灰色	9C後～10C前	
	668	99	B1	X211Y96	須恵器	甕		7.5Y6/1	灰色	9C後～10C前	
	669	99	A	X250Y110	須恵器	甕		7.5Y6/1	灰色	9C後～10C前	
	670	99	C1	X155Y65	須恵器	甕		N4/0	灰色	9C後～10C前	
	671	99	C2	X105Y67　X105Y69	須恵器	甕		N6/0	灰色	9C後～10C前	
	672	99	C2	X138Y76	須恵器	甕		N6/0	灰色	9C後～10C前	
	673	99	C2	X107Y72	須恵器	甕		N6/0	灰色	9C後～10C前	
	674	102	C2	X135Y70		製塩土器		7.5YR7/6	橙色		
	675	102	C1	X153Y66		製塩土器	24.0－	10YR6/3	にぶい黄橙色		
	676	102	C1	X160Y70		製塩土器		5Y6/6	橙色		
	677	102	C1	X157Y68		製塩土器	25.0－	10R6/8	赤橙色		
	678	102	B1	X212Y86　X212Y95		製塩土器		10YR7/4	にぶい黄橙色		
	679	102	B1	X212Y86		製塩土器		5YR6/4	にぶい橙色		
	680	102	B2E	X200Y98		製塩土器		10YR6/4	にぶい黄橙色		
	681	102	C2	X135Y75		製塩土器		10R6/6	赤橙色		
	682	102	C2	X131Y74		製塩土器		2.5YR6/6	橙色		
	683	102	C2	X132Y77		製塩土器		10R6/8	赤橙色		
	684	102	C2	X138Y68		製塩土器	＊＊－＊＊－13.8－	10R6/4	にぶい赤橙色		
	685	102	B1	X211Y96		製塩土器	＊＊－＊＊－15.3－	5YR6/4	にぶい橙色		
	686	102	B2E	X201Y97		製塩土器	＊＊－＊＊－14.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色		
	687	102	B1	X211Y96		製塩土器	＊＊－＊＊－16.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色		
	688	102	B2E	X191Y95		製塩土器	＊＊－＊＊－14.0－	10YR8/4	浅黄橙色		
	689	101	B1	X211Y96		製塩土器	＊＊－＊＊－15.0－	7.5YR7/6	橙色		
	690	102	C1	X153Y67	土製品	土錘	4.4－3.9－1.2－(48.2)	7.5YR7/3	にぶい橙色		長さ－幅－孔径－重量（cm，g）
	691	102	B2E	X188Y105	土製品	土錘	4－3.9－1.3－47.6	10YR7/3	にぶい黄橙色		長さ－幅－孔径－重量（cm，g）
	692	102	B2E	X183Y105	土製品	土錘	5－4.7－1.6－93.1	10YR7/2	にぶい黄橙色		長さ－幅－孔径－重量（cm，g）

第18表　木製品一覧（古代後期）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格(長－幅－厚cm)	樹　種	備　考
71	342	103	SP5250		柱	28.2－13.6－11.4	ヤナギ類	
72	348	103	SP6137		柱	43.3－12.3－8.5	ヒノキ科	
	349	103	SP6137		柱	48.6－14.2－6.6	ヒノキ科	
	350		SP7312		礎板	14.3－8.8－3.2		
80	358		SD202		漆椀	＊＊－＊＊＊－0.8	ケヤキ	内外面に黒色漆
81	404	104	SD2020	X185Y87	コロバシ	103.5－19.5－	クヌギ節	
82	405	104	SD2020	X182Y88	漆椀	＊＊－＊＊＊－0.7	ケヤキ	内外面に黒色漆
	406		SD2020	X187Y86	木皿	＊＊－＊＊＊－0.3	ケヤキ	
	407	104	SD2020	X188Y86	円形板	10.5－10.5－0.8	スギ	底板
	408	104	SD2020	X188Y86	円形板	8.2－8.2－0.9	ヒノキ	底板
	409	105	SD2020		曲物	15.5－＊＊－9.0	スギ	
	410	105	SD2020		曲物	13.0－＊＊－0.8	スギ	側板有り
	411	106	SD2020		円形板	13.8－＊＊－0.7		底板，表全面黒色･裏所々黒色
	412		SD2020	X188Y86	板	52.0－13.5－2.1		
	413	105	SD2020	X186Y87	加工棒	12.6－2.5－1.5		
	414		SD2020		加工板	40.3－6.0－1.7		
	415		SD2020		加工棒	24.5－1.4－1.4	モミ	
	416	105	SD2020		加工棒	25.0－1.3－1.3		
	417		SD2020		加工棒	52.5－2.5－1.2	スギ	
	418		SD2020	X187Y87	加工棒	23.0－0.6－0.6	ヒノキ科	
	419	105	SD2020	X186Y87	加工棒	20.5－0.8－0.8		
83	444	106	SD4102		加工木	(22.8)－(3.8)－0.7	ヒノキ	木簡
	445		SD4102	X136Y84	加工棒	(30.0)－2.0－1.7		
84	446		SD4102		加工板	38.8－8.0－2.9		
92	479		SK5330		加工板	14.5－1.7－1.0		
93	505	106	SX6406		鍬	(39.2)－13.6－3.2	カエデ属 ウリカエデ節	未製品，柄の一部に茶褐色の漆

4　中世及び近世以降

A　掘立柱建物

38号掘立柱建物（ＳＢ38，第100図，図版142）

Ａ地区北端に位置する。当初の調査区のさらに北側に伸びることが確認されたため，Ａ地区北側に拡張区を設けて柱列の確認を行った。確認できたのは４間×４間で，南北棟と考えられる総柱建物である。桁行北側及び梁行東側の限界は明確にはできなかったが，現状では桁行9.60ｍ×梁行8.70ｍ，平面積83.50㎡である。建物主軸の方位はＮ－26°－Ｗである。柱穴掘形は直径約30㎝～45㎝でやや不整形なものが多い[注1]。梁行柱間はほぼ等間隔と考えられるのに対して，桁行柱間は南側から７尺・10尺・８尺・７尺と不揃いである。特に北辺と南辺は中央２間より若干狭く，これを庇部と考えることもできようが，ここでは身舎に含めてとらえておきたい[注2]。

出土遺物は，ＳＰ210から加工板が出土している。

39号掘立柱建物（ＳＢ39，第100図，図版142）

Ａ地区北半部のＳＤ42とＳＤ220に挟まれた場所に位置する。４間×２間の南北棟総柱建物である。桁行10.36ｍ×梁行4.72ｍ，平面積約48.90㎡の規模である。建物主軸の方位はＮ－18°－Ｗで，南側はＳＢ40と一部重なる。桁行柱間は南北両辺１間がやや狭く，中央２間が広い。中央２間×２間の身舎に南北２面の庇付建物に復原することも不可能ではないが，建物の形や，柱穴規模が変わらないことからも，全体を身舎部とみておきたい。柱穴掘形はほぼ円形を呈し，直径30㎝～50㎝の大きさである。

40号掘立柱建物（ＳＢ40，第101図，図版142・143）

これもＡ地区北半部のＳＤ42とＳＤ220に挟まれた場所で，ＳＢ39の南側に位置する。北辺及び東辺柱列の一部が未検出であるが，５間×４間の南北棟総柱建物と考えられ，身舎部５間×３間に西面庇が付く形に復原しておく。桁行13.08ｍ×梁行8.40ｍ，平面積は約115.92㎡である。建物主軸の方位はＮ－11°－Ｗである。北側１間はＳＢ39に重なり，また東側１間の間には南北方向の柱列がある。この柱列は３間分確認されており，梁行方向にほぼのるため，東面庇の可能性もあるが，さらに東側において柱列が認められるのでここまでを身舎部とし，この柱列の性格については今後の課題としておきたい。柱間寸法は桁行方向が南からほぼ7.5尺・9.5尺・9.5尺・9.5尺・7.5尺，梁行方向が西からほぼ４尺・８尺・８尺・８尺となる。柱穴掘形は円形ないしやや不整な楕円形を呈し，大きさも不揃いである。直径は20㎝～60㎝まであるが，40㎝前後が多い。なおＳＢ40の東側に約４ｍ離れてＳＫ203がある。このほかにも掘立柱建物に隣接もしくは少し離れて小土坑の分布する例があり，付属施設等何らかの関連性も指摘されている[注3]。

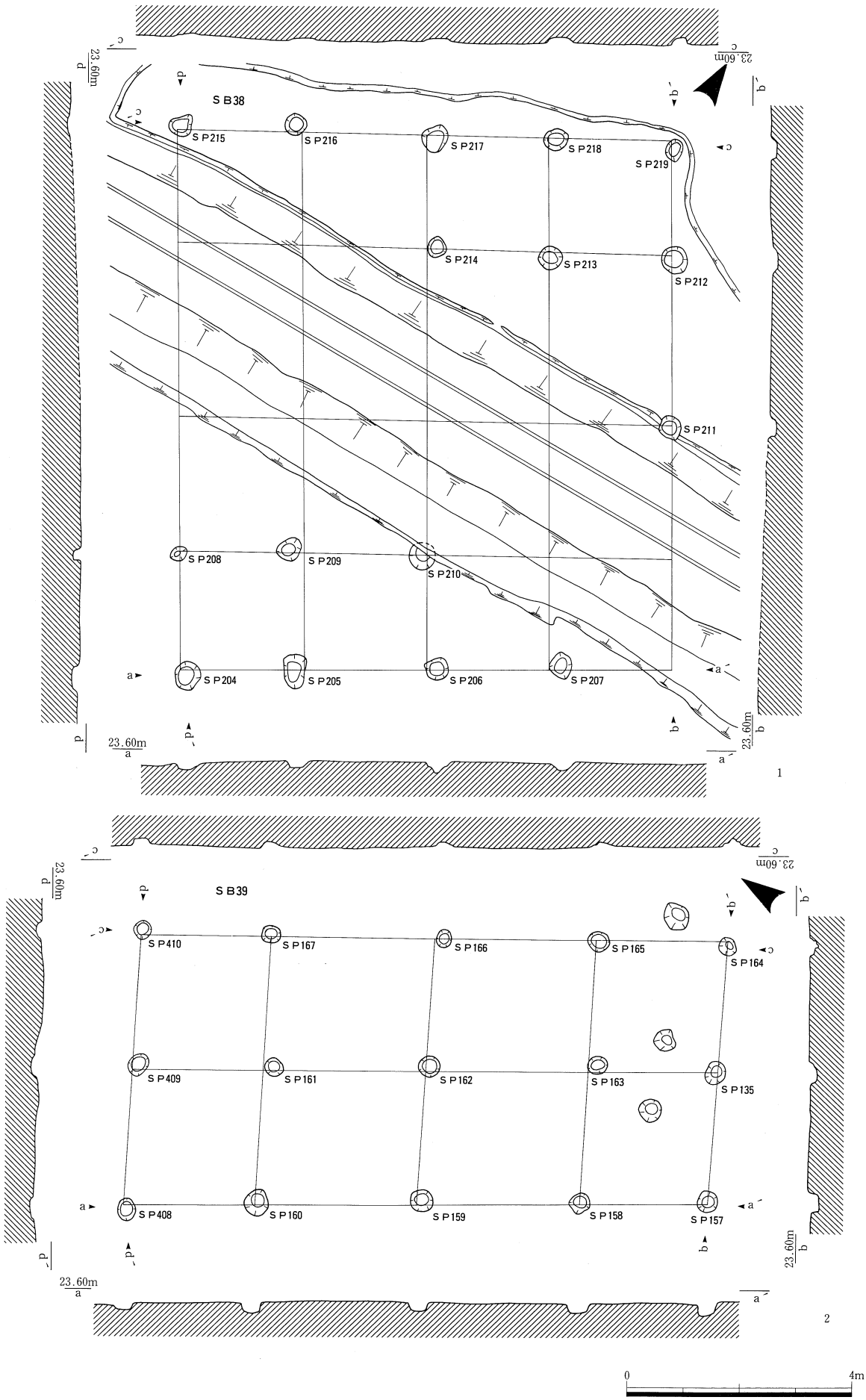
ＳＰ134・ＳＰ144・ＳＰ145・ＳＰ152からは加工材が出土している。

41号掘立柱建物（ＳＢ41，第101図，図版142）

Ａ地区の北側でＳＢ40の西側に位置する１間×１間の南北棟建物である。柱配列がやや台形を呈し，桁行4.12ｍ×梁行3.60ｍ，平面積約14.83㎡である。建物主軸方向はＮ－18°－Ｗである。柱穴掘形は円形ないし楕円形を呈し，直径20㎝～30㎝とやや小さい。

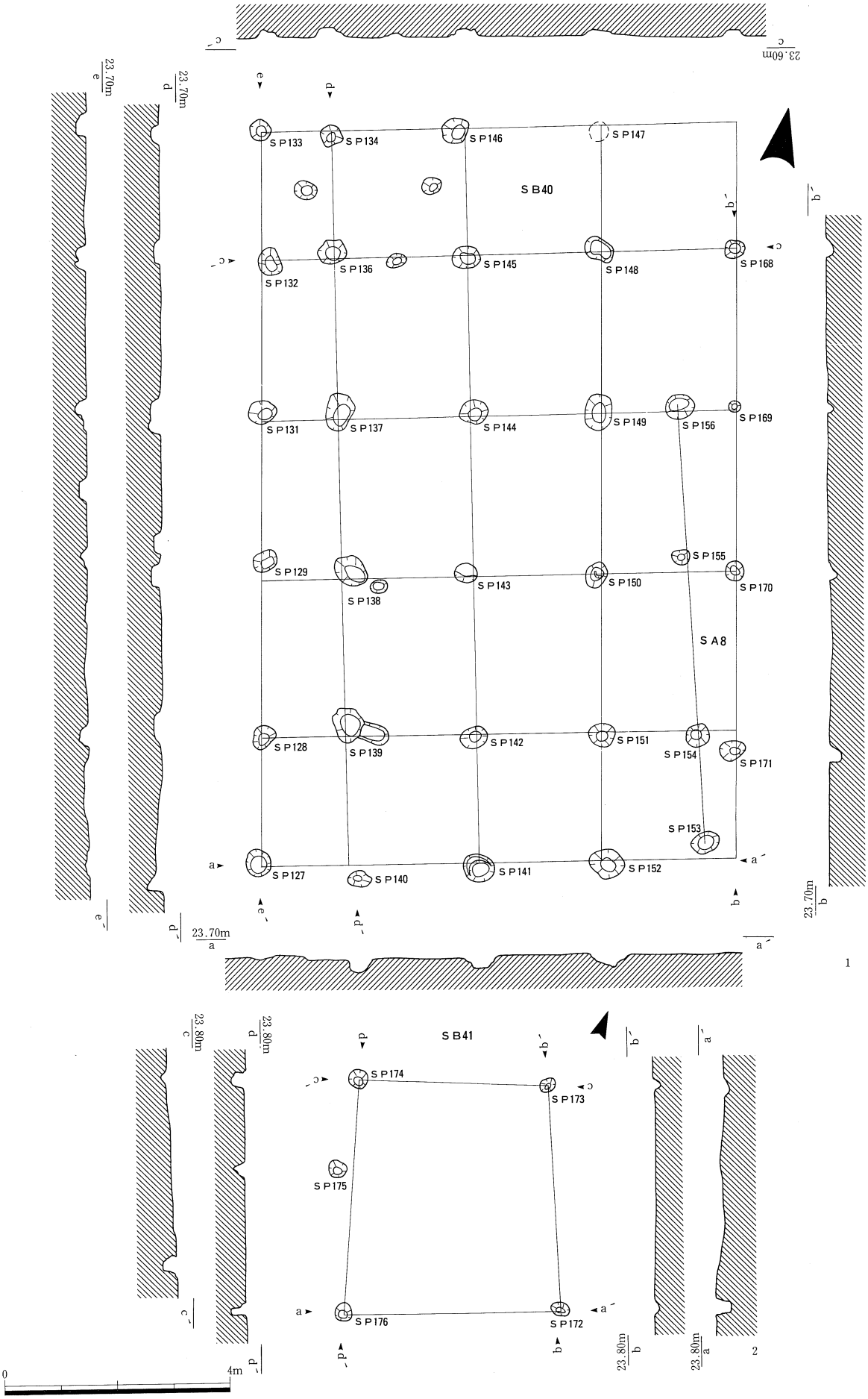
42号掘立柱建物（ＳＢ42，第102図）

Ａ地区北側でＳＢ39の西側約13ｍに位置し，西側をＳＤ42が北流する。３間×２間の東西棟側柱建物のうち，身舎部は２間×１間で，東西両面庇となる。桁行5.64ｍ×梁行3.00ｍ，平面積は約16.92㎡である。建物主軸の方位はＮ－77°－Ｅである。柱間は桁行方向が西から４尺・9.6尺・5.1尺，梁行方



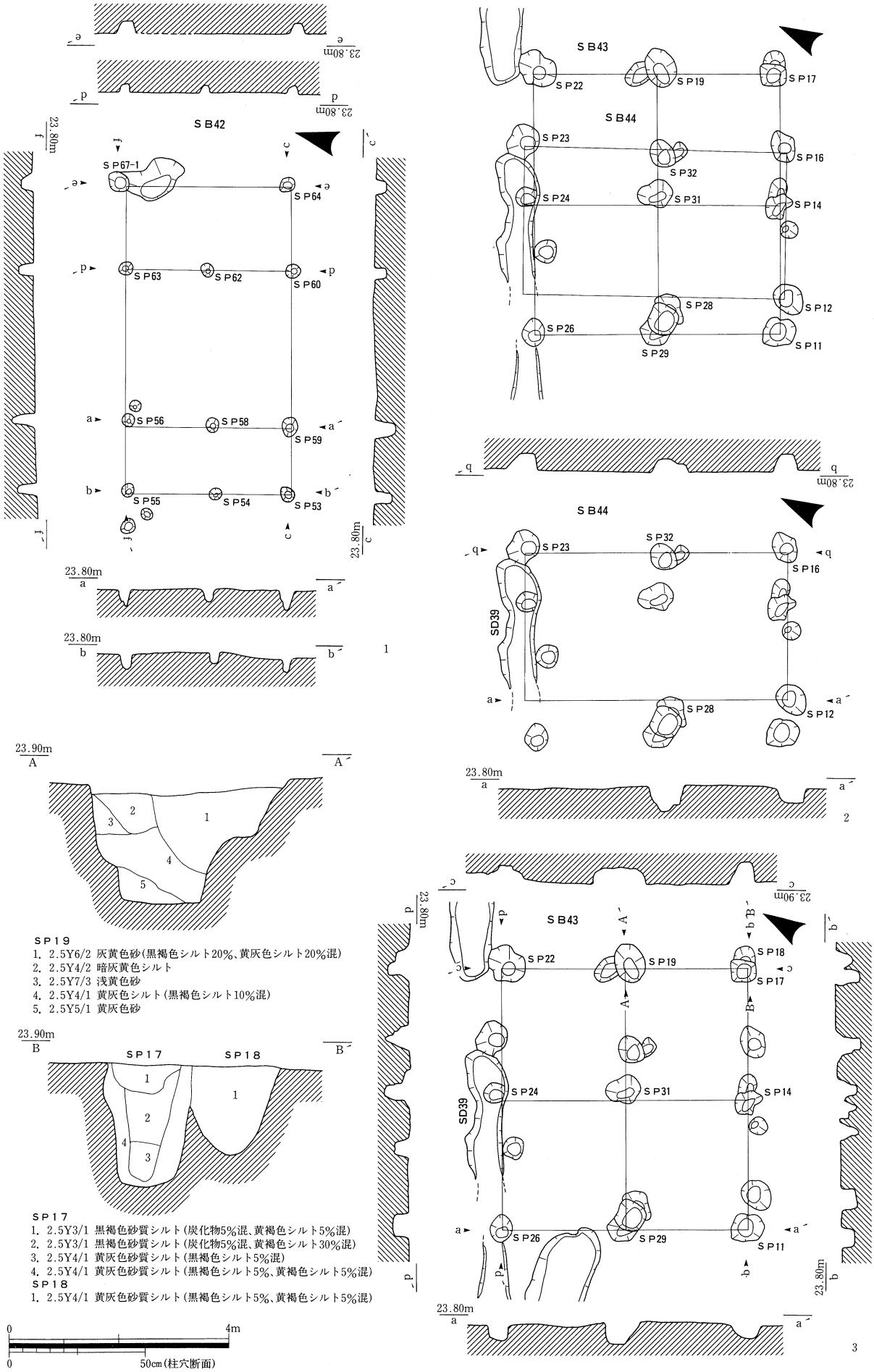
第100図　遺構実測図

1.SB38　2.SB39



第101図　遺構実測図

1.SB40・SA8　2.SB41



第102図　遺構実測図

1.SB42　2.SB44　3.SB43

向が５尺等間となる。柱穴掘形は円形ないしやや不整な楕円形を呈し，直径は20cm～25cmと小さなものが多い。

北東角のＳＰ67-1に接して不整形な土坑ＳＫ67があり，珠洲などが出土している。

43号掘立柱建物（ＳＢ43，第102図，図版143）

Ａ地区の北側でＳＤ42とＳＤ46に挟まれた場所に位置する，２間×２間の総柱東西棟建物である。大きさは桁行4.80ｍ×梁行4.50ｍ，平面積約21.60m²である。建物主軸の方位はＮ－62°－Ｅを測る。桁行柱間はほぼ８尺等間，梁行柱間はほぼ7.5尺等間と考えられる。柱穴掘形は楕円形や不整形なものが多く，大きさも35cm～75cmと不揃いである。柱穴の重なりから，同規模の建物が若干位置をずらしながら建て替えられているとみられる。

ＳＰ17から伊万里が出土しているが後世の混入品と考えられる。

44号掘立柱建物（ＳＢ44，第102図，図版143）

ＳＤ43に重なって建てられている２間×１間の南北棟側柱建物である。大きさは桁行4.80ｍ×2.70ｍ，平面積約12.96m²である。建物主軸の方位はＮ－28°－Ｗを測る。桁行柱間はほぼ８尺等間で，梁行柱間は９尺となる。柱穴掘形は不整楕円形を呈し，直径は40cm～60cmである。

ＳＰ12から加工材の小片が３点出土している。

45号掘立柱建物（ＳＢ45，第103・104・132図，図版143・144・156・170）

Ａ地区中央部で，ＳＤ42とＳＤ46に挟まれた，場所に位置する。４間×４間の南北棟総柱建物である。桁行10.80ｍ×梁行9.00ｍの規模で，東側に確認できる範囲では１間分の張り出しを持つ。平面積は張り出し部を含めて，102.06m²である。建物主軸の方位はＮ－30°－Ｗを測る。柱間距離は，桁行方向は南から８尺・９尺・8.5尺・8.5尺とやや不揃いであるが，棟行方向は中央２間が８尺，外側が７尺，張り出しの出が６尺に復原できる。柱穴掘形は円形もしくは楕円形を呈し，直径は30cm～65cmである。

この掘立柱建物は年報でも報告されているように[注4]，古代後期面にくい込んで掘り込まれている柱穴の下部が，地震による水平方向の地層のずれにより分断されて検出された。古代後期面での平面図は第104図に示すとおりである。柱穴のずれの距離は北東側で120cm～150cm，南西部で80cm程度と一様ではなく，建物南西方向に中心をおいて，逆時計回りに回転するように水平移動している。建物の南側に約2.3ｍ離れて，ＳＫ121がある。直径約120cmのほぼ円形の土坑で，ＳＢ45に関連する付属施設とも考えられる。これも古代後期面に掘り込んだ下部が水平にずれている。

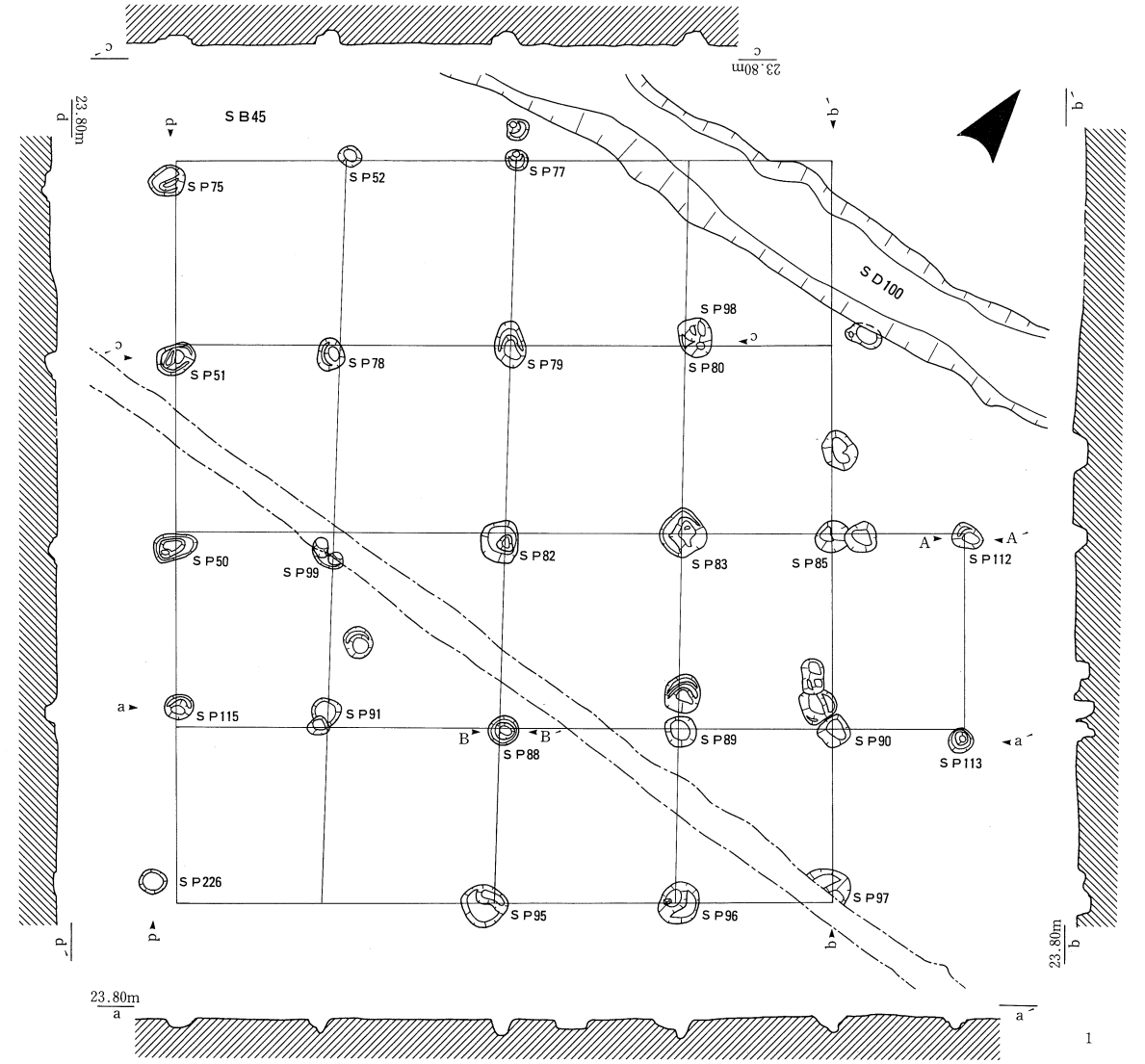
遺物は，ＳＰ71から中国製白磁碗が出土している（第132図693）。太宰府分類の第Ｖ類４になり，おそらく13世紀代の実年代が考えられる。この他，ＳＰ78・79・88・89・95・97・112から板状の加工材が出土している。

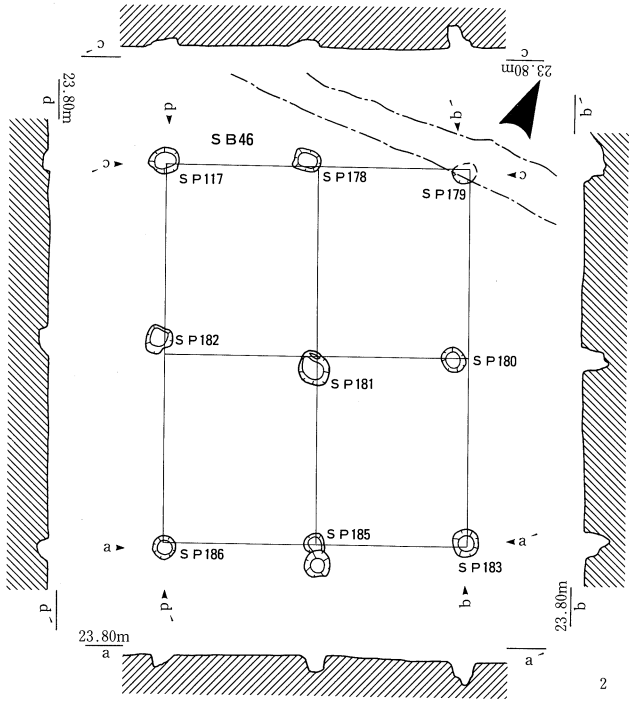
46号掘立柱建物（ＳＢ46，第103図，図版144）

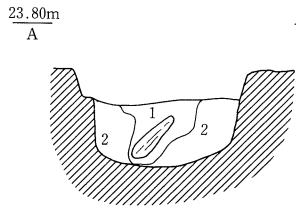
Ａ地区南部中央に位置する。２間×２間の南北棟総柱建物である。桁行5.00ｍ×梁行4.00ｍの大きさで，平面積は約20.00m²である。建物の主軸方位はＮ－18°－Ｗを測る。柱穴掘形は円形ないし不整円形を呈し，直径約30cm～45cmの大きさである。建物の北西側に約２ｍ離れてＳＫ122がある。長径約1.2ｍ，現存する深さ約10cmの楕円形を呈する浅い土坑で，これもＳＢ46に付随する施設と考えられる。

47号掘立柱建物（ＳＢ47，第105図，図版144）

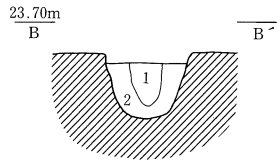
Ａ地区の南東部に位置する。北面庇を持つ，２間×２間の南北棟建物で，総柱建物か側柱建物か不明である。桁行7.50ｍ×梁行5.10ｍの大きさで，平面積は約38.30m²である。建物主軸の方位はＮ－24°－



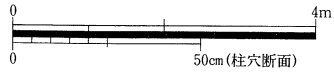




SP112
1. 5Y8/4 淡黄色砂質シルト(黒褐色シルト30%、灰色シルト10%混)
2. 5Y8/4 淡黄色砂質シルト(灰色シルト20%混)

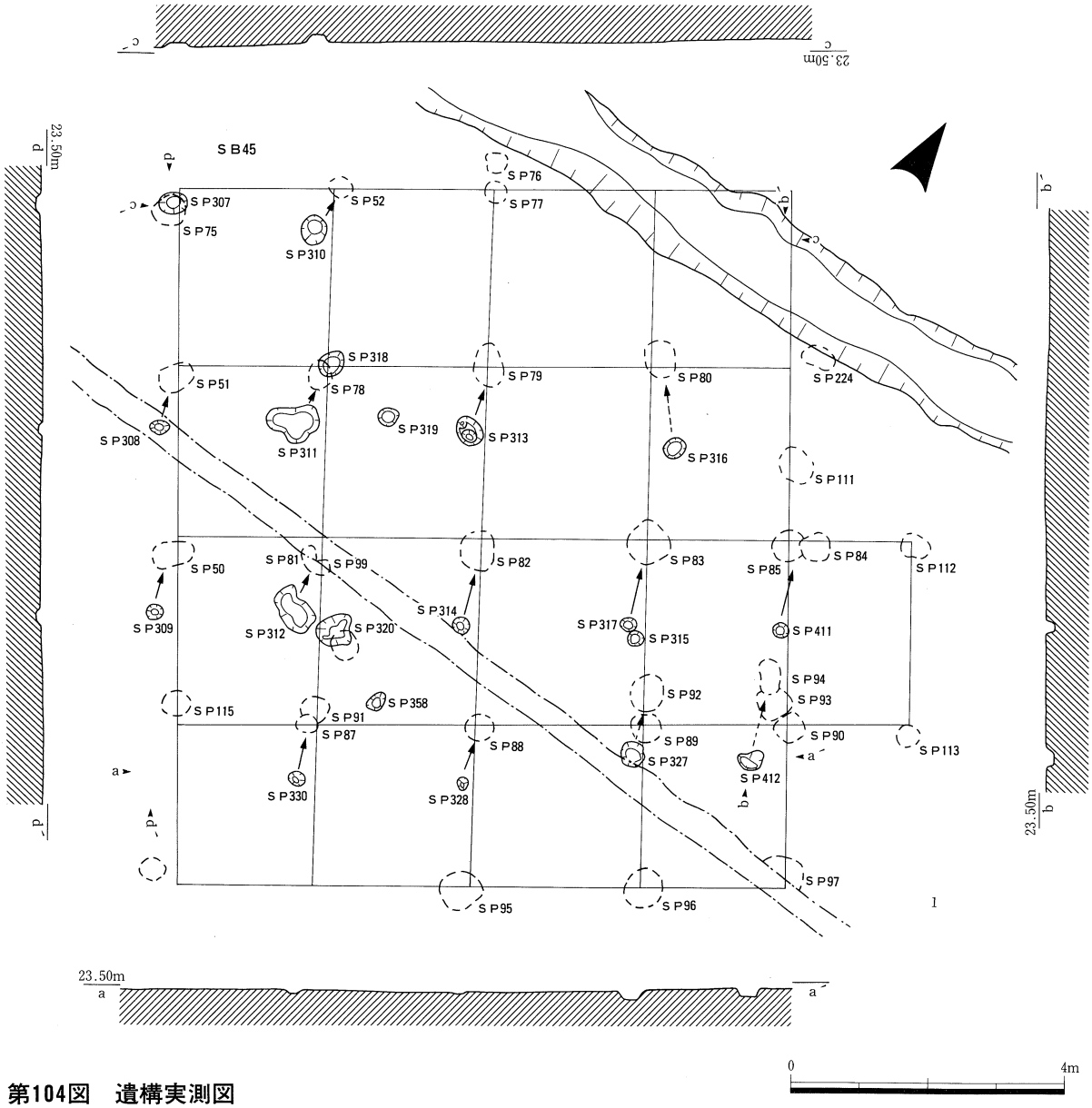


SP88
1. 7.5Y5/1 灰色シルト(黒褐色、明灰色ブロック20%混)
2. 7.5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルト(黒褐色土2%混)



第103図　遺構実測図

1.SB45　2.SB46



第104図　遺構実測図
1.SB45

Wを測る。建物中央部から南西部にかけて大きく撹乱を受けており柱穴配列の不明な部分もあるが，遺存している柱穴から推定復原した。柱穴の掘形は楕円形を呈し，直径25cm～45cmである。身舎の柱穴に比べ，庇部の柱穴はやや小さい。

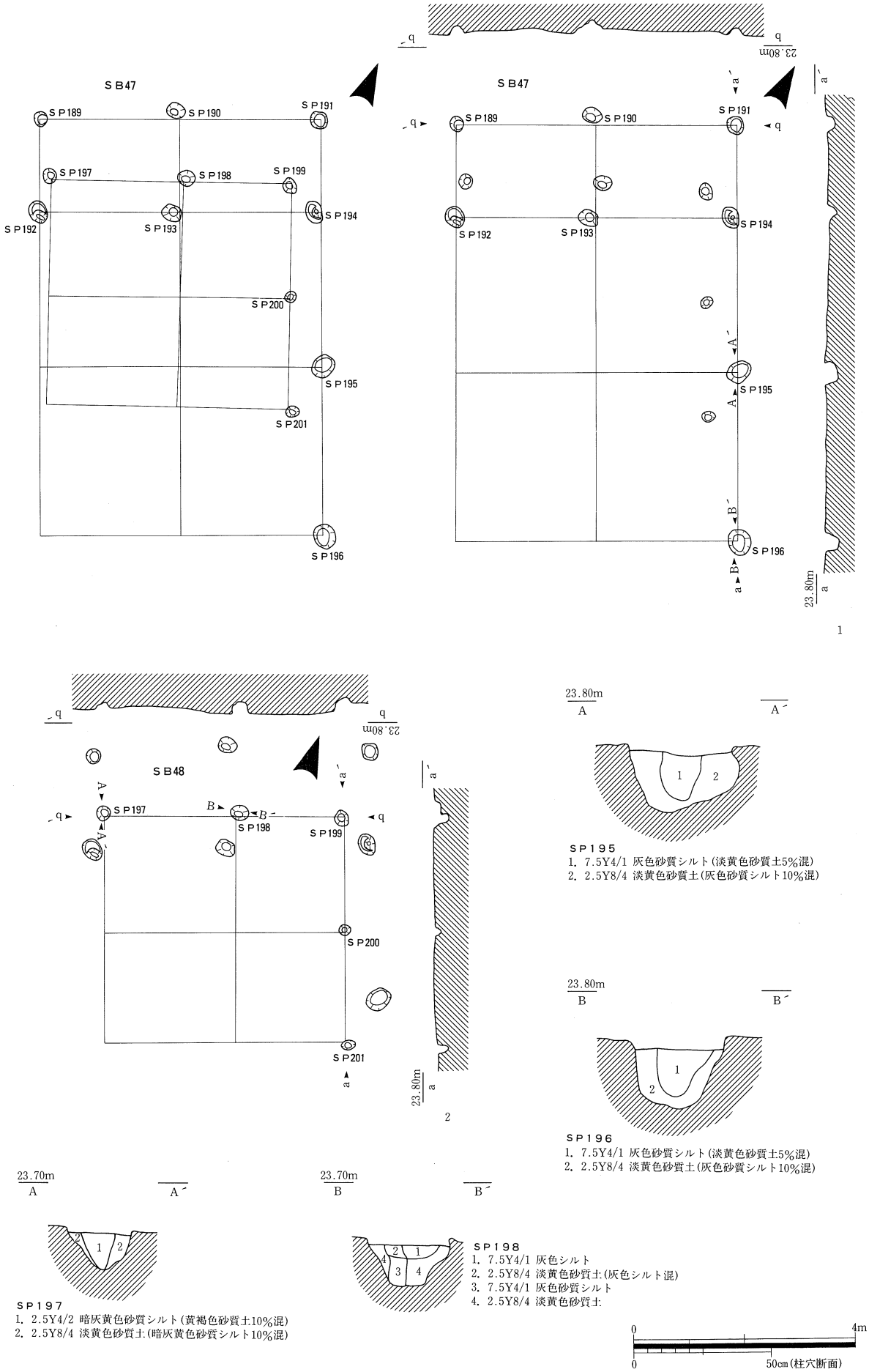
48号掘立柱建物（ＳＢ48，第105図，図版144）

Ａ地区の南東部でＳＢ47にほぼ重なる位置にある。ＳＢ47との前後関係は不明。２間×２間の東西棟建物である。これも建物中央部から南西部にかけて大きく撹乱を受けているため，総柱建物か側柱建物か不明。遺存する柱穴から推定すると，桁行4.35ｍ×梁行4.05ｍの大きさで，平面積は17.60㎡となる。建物主軸の方位はＮ－67°－Ｅを測る。柱穴の掘形はほぼ円形で，直径が20cm～30cmと小さい。

以上Ａ地区の掘立柱建物の時期は，柱穴からの出土遺物がほとんどなく，時期を確定しにくいが，周辺の溝等からの出土遺物から，12世紀後半から13世紀代ととらえておきたい。

49号掘立柱建物（ＳＢ49，第106・107・132図，図版145・156・170・196）

Ｂ１地区の北東隅，ＳＢ48のさらに南側で，ＳＤ223の東岸に位置する。身舎４間×２間の東西棟総



第105図　遺構実測図

1.SB47　2.SB48

柱建物で，一部が発掘区外に伸び，近世溝や試掘溝に切られるため，すべての柱穴配列を確認できたわけではないが，4面庇になるものと考えられる。桁行12.24m×梁行6.92mの大きさで，平面積は84.70m²となる。建物主軸の方位はN－62°－Eを測る。桁行方向の柱間はほぼ8尺等間で，庇の出が約4.5尺，梁行方向の柱間は7.5尺等間で，庇の出がそれぞれ4尺とみられる。庇部の隅柱が確認できないため，身舎の幅だけ庇を設けたものと考えられる。

柱穴の掘形は円形・楕円形・不整円形を呈し，大きさに差もあるが，直径30cm前後のものが多い。身舎の柱穴底部には礎板を敷くものが目立つ。ＳＰ1013・1016・1044・1045・1050・1054に礎板があり，6基のうち，3基が2枚の長方形の板を交差する状態，2基は1枚の長方形の板，1基は不整形な板材を数個重ねるように敷いていた。

遺物は，ＳＰ1020から中世土師器皿（第132図694）が出土している。福光町梅原胡摩堂遺跡における分類でいえばＮＤⅡ類にあたる[註5]。第132図695～699は前述した礎板である。幅8cm～14cm程の板を長さ20cm～25cm程に切断したもので，樹種の同定できたものは696がクリ，697・699がスギである。

50号掘立柱建物（ＳＢ50，第107図，図版145）

Ｂ1地区の北東隅で，ＳＢ49と重なる位置にあるが，切り合いはなく前後関係は不明。2間×2間の南北棟総柱建物である。柱穴配置は全体的にやや菱形にゆがむ。桁行4.92m×梁行4.90mの大きさで平面積は約24.11m²である。建物主軸の方位はN－40°－Eを測る。柱穴の掘形は円形もしくは楕円形を呈し，直径25cm～45cmである。ＳＰ70から棒状の加工材が若干出土している。

Ｂ1地区の建物群については，ＳＢ50を別にすると，Ａ地区と同様12世紀後半から13世紀代の年代が考えられる。

51号掘立柱建物（ＳＢ51，第108図，図版145）

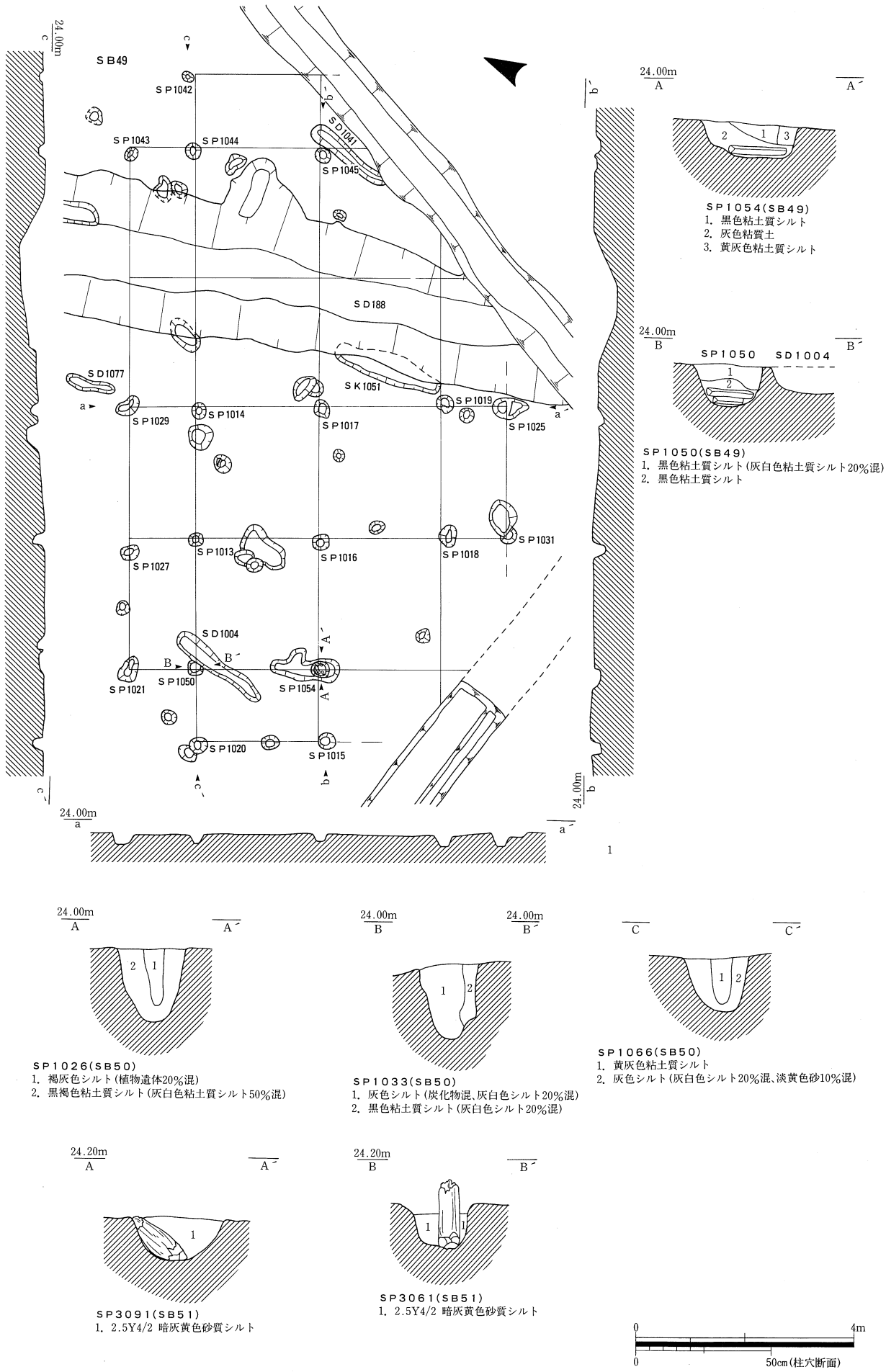
Ｂ2Ｅ地区の北半部やや西よりの，ＳＤ2007の東岸に位置する。西辺柱列の大部分が近世以降の溝ＳＤ2001に削平されてしまっており，さらに中央梁行の東側2間分の柱穴のずれが大きいが，4間×3間の南北棟総柱建物に推定復原しておきたい。桁行7.80m×梁行5.85m，平面積は約45.60m²である。建物主軸の方位はN－11°－Wを測る。桁行方向の柱間寸法は中央2間分が狭く，南北両端の方が広い。梁行方向は約6.5尺等間と考えられる。地山が砂質のため柱穴縁辺の崩壊が大きく，平面測量時には一回り大きくなってしまったものがあるが，柱穴掘形の直径はほぼ30cm前後と考えられる。ＳＰ3061とＳＰ3091には柱根が残っていた（第106図最下段）。

52号掘立柱建物（ＳＢ52，第108図，図版146）

Ｂ2Ｅ地区の北側，ＳＢ51の東側に位置する。3間×2間の南北棟総柱建物である。桁行4.48m×梁行4.28mの大きさで，平面積は約19.17m²である。建物主軸の方位はN－12°－Wを測る。柱穴の掘形は平面測量時にかなり大きくなってしまっているが，もともとは30cm～40cm程度であったと考えられる。ＳＰ3021には柱根が遺存していた。建物の東側には約1.6m離れて，これに付属する塀と考えられる柵列ＳＡ11がある。またＳＡ11のさらに東側には，これに沿って幅約40cmの南北方向の溝がある。

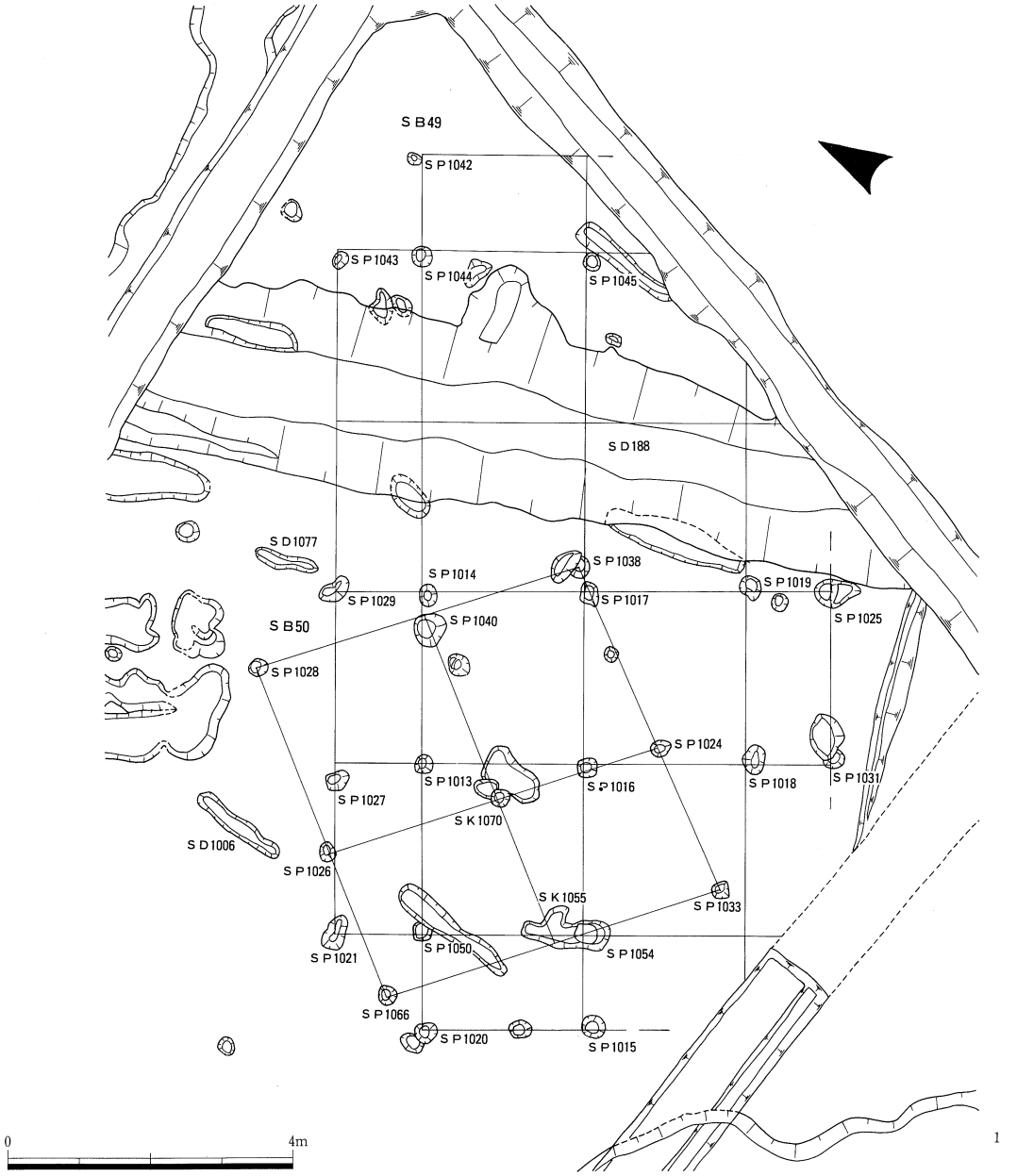
53号掘立柱建物（ＳＢ53，第109図，図版146）

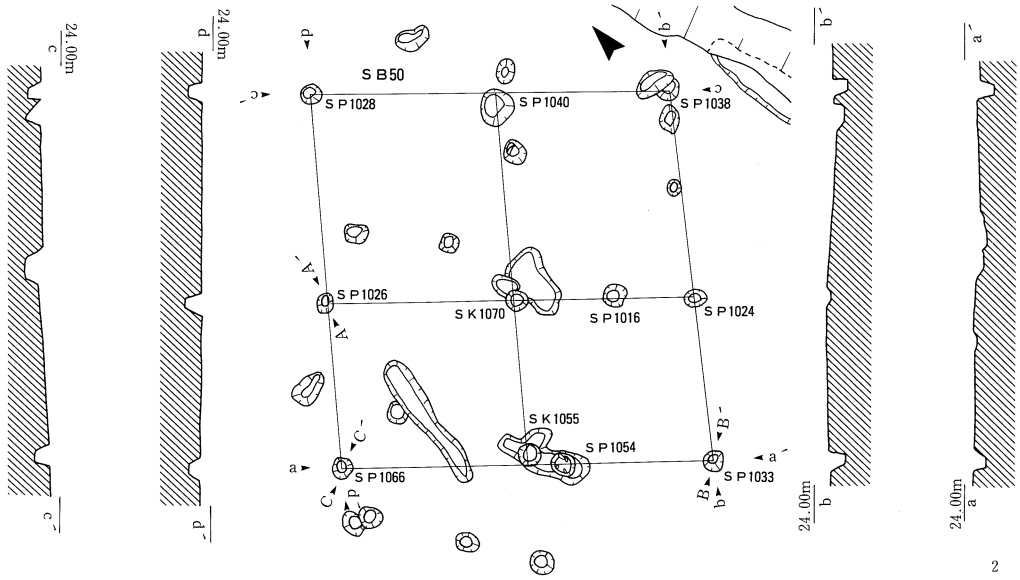
Ｂ2Ｅ地区の北側，ＳＢ52の南側に約2.6m離れて位置する，3間×2間の南北棟総柱建物である。柱穴配列にやや乱れがあり，全体に台形を呈するが，棟方向はほぼＳＢ52と同一軸上にのる。桁行4.12m×梁行4.08mの規模で，平面積は約16.81m²である。建物主軸方位はN－10°－Wを測る。桁行方向の柱間寸法は中央1間分が狭い。柱穴の掘形は円形ないし楕円形を呈し，もともとの直径は30cm～40cmと考えられる。東側桁行柱穴列のうちＳＰ3042・3030・3043には柱根が遺存していた。



第106図　遺構実測図

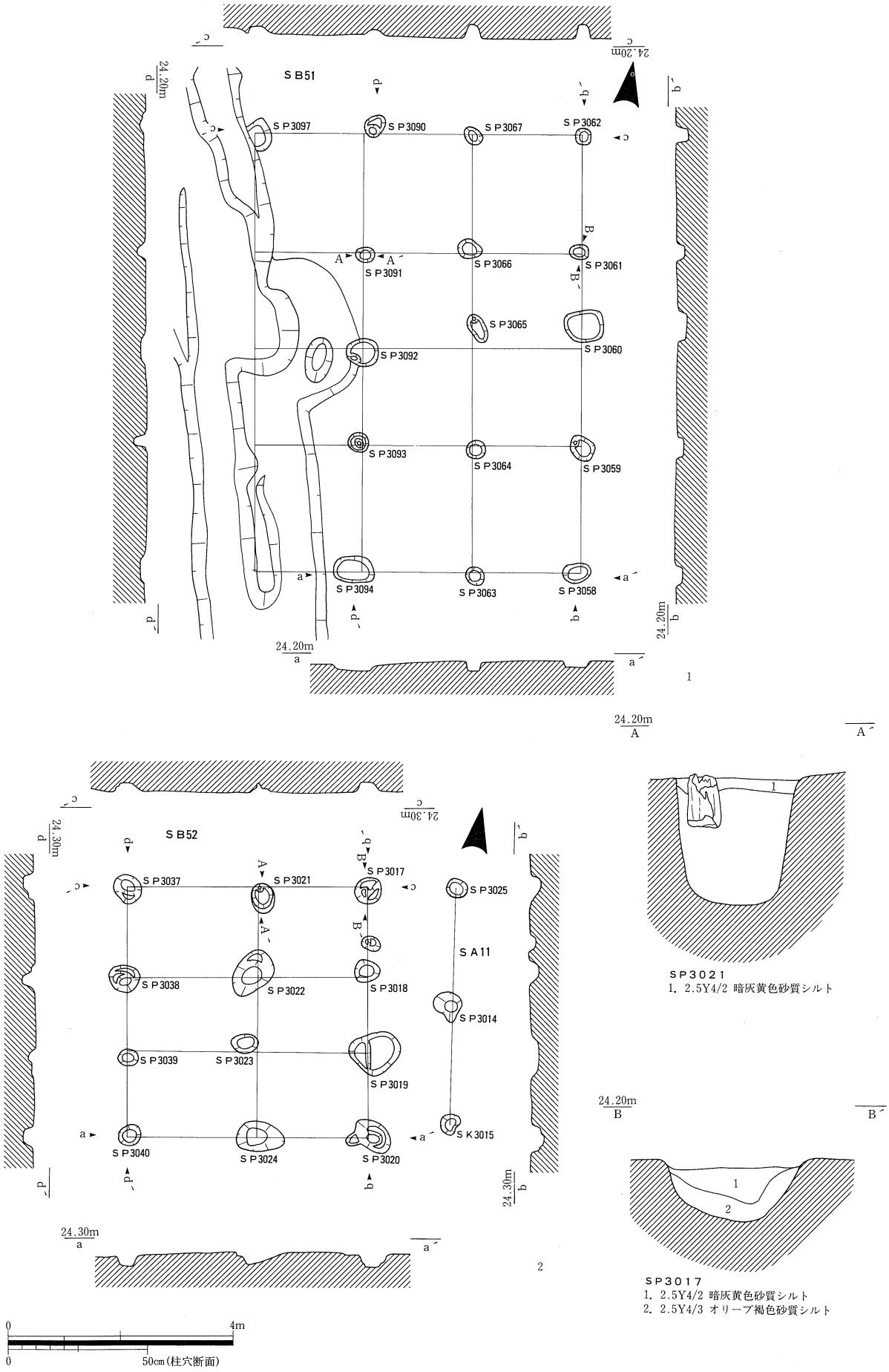
1.SB49





第107図　遺構実測図

1.SB49　SB50　2.SB50



第108図　遺構実測図

1.SB51　2.SB52・SA11

ＳＢ53の南東隅の１間中央には，東西方向に長い楕円形の土坑ＳＫ3013がある。チュウギと考えられる木片が多く出土しており便所遺構とみられるものである。この遺構については土坑の説明の項でも再度触れるが，長軸方向が桁行方向にほぼ一致すること，１間の中央に位置することなどから，この掘立柱建物に付属するものと考えられる。

54号掘立柱建物（ＳＢ54，第109図，図版146）

Ｂ２Ｅ地区の中央東側に位置する。２間×１間の南北棟建物であるが，東側の発掘区外にさらに伸びる可能性がある。確認できた範囲では，桁行3.16ｍ×梁行2.48ｍの規模で，平面積は約7.84㎡である。建物主軸方位はＮ－１°－Ｗを測る。桁行北側柱列のさらに北側に約1.5ｍ離れて，東西方向に伸びる浅い溝ＳＤ3112があるが，この掘立柱建物の北側を区画する溝の可能性がある。柱穴の掘形はほぼ円形を呈し，直径30㎝前後である。

55号掘立柱建物（ＳＢ55，第109・132図，図版223）

Ｂ２Ｅ地区の南側中央，ＳＤ3003の東側に位置する。２間×１間の南北棟側柱建物で，桁行5.80ｍ×梁行3.68ｍ，平面積は約21.34㎡である。建物主軸方位はＮ－８°－Ｗを測る。柱穴の掘形は円形ないしやや楕円形を呈し，直径35㎝～45㎝である。建物の西側に接して柵列ＳＡ12があるが，方向が一致せずまた接近しすぎているので，直接的な関連はないと考えられる。

遺物はＳＰ3083から石鍋が出土している（第132図700）。軟質の滑石製で，体部が丸く内湾し口縁部が立ち上がる形態のもので，器厚は約２㎝ある。外面には削り痕が残るのに対して，内面は平滑に仕上げられている。

56号掘立柱建物（ＳＢ56，第110図，図版146）

Ｂ３地区の北東隅に位置する。大部分が東側の発掘区外に伸びるとみられ，確認できた範囲では，身舎２間×１間で北面庇を有する南北棟建物である。桁行6.00ｍ×梁行2.10ｍの大きさで，庇の出は約3.5尺。建物主軸の方位はＮ－４°－Ｗを測る。柱穴の掘形は円形を呈し，直径は22㎝～35㎝でやや小さい。建物の南西隅から少し離れて楕円形の土坑ＳＫ4018がある。また西側及び南側をＳＤ4001がＬ字状に巡る。

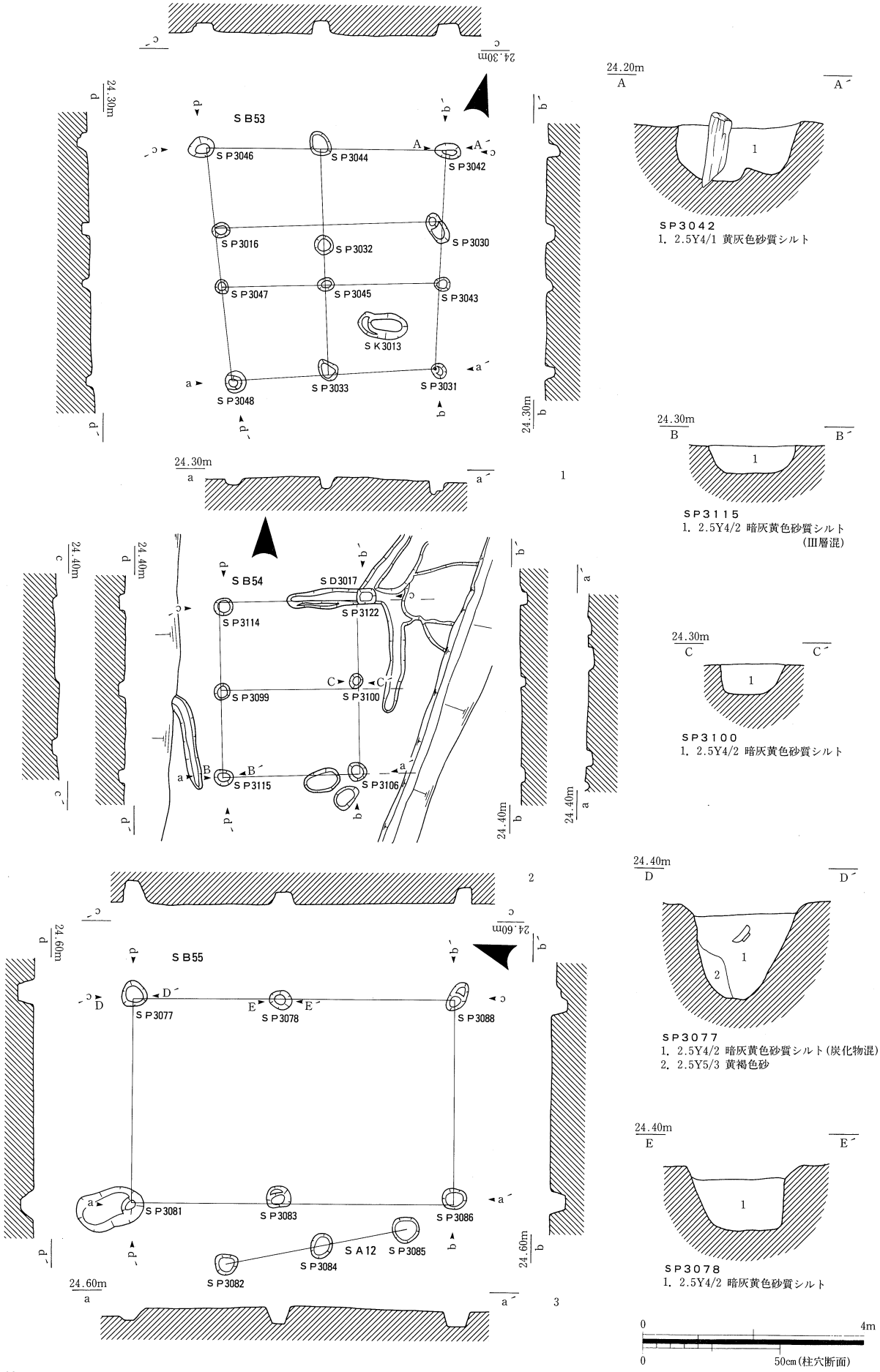
以上Ｂ２Ｅ～Ｂ３地区の掘立柱建物についても，柱穴から時期の決め手になる遺物の出土はほとんどなく，周囲の溝等の出土遺物から推測するしかないが，13世紀代のものとしておきたい。

57号掘立柱建物（ＳＢ57，第110図，図版147）

Ｃ１地区中央部東側に位置する。身舎２間×２間以上の南北棟総柱建物で，北・西・南の３面に庇を持つ。建物はさらに東側の発掘区外に伸びており，ＳＢ49のような４面庇になる可能性もある。確認できた範囲で，桁行8.28ｍ×梁行4.60ｍ，平面積38.09㎡である。建物主軸の方位はＮ－10°－Ｅをはかる。庇の出は北・南面は約5.3尺，西面は2.5尺で，身舎の幅だけ庇となるもので，庇部の隅柱を欠く。建物西側から南西隅にかけて，幅約40㎝の浅い溝が囲うように巡る。柱穴の掘形は円形ないし楕円形を呈し，ＳＰ5107を例外とすれば直径30㎝～40㎝の大きさである。

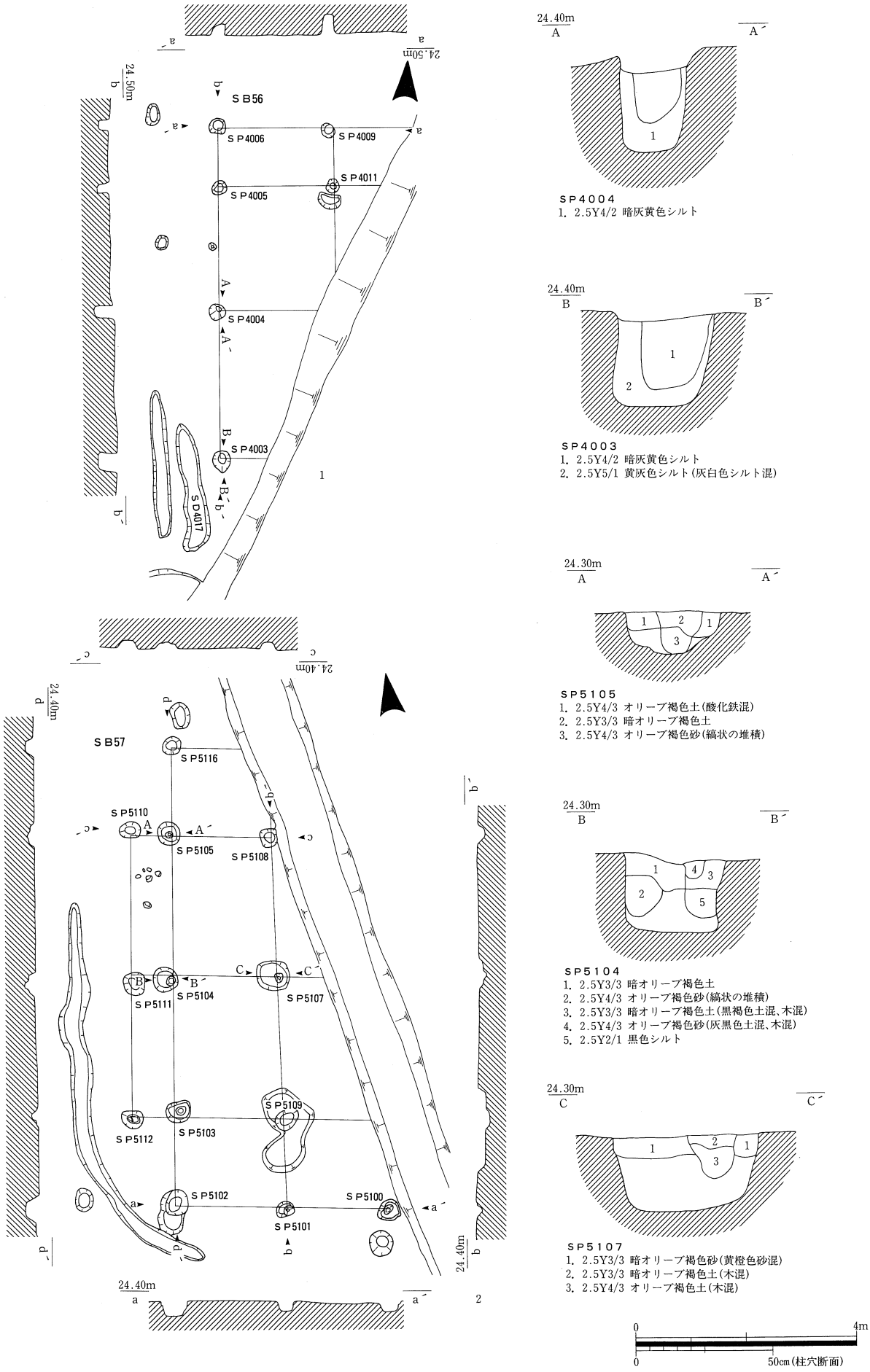
58号掘立柱建物（ＳＢ58，第111・112・132図，図版147・196）

Ｃ１地区の南西側に位置する。ＳＢ59とほぼ重なるが，ＳＰ5010とＳＰ5026の切り合い関係から前後関係はＳＢ58が古く，ＳＢ59が新しいと考えられる。身舎３間×２間の東西棟総柱建物で，北・西の２面庇となる。桁行7.92ｍ×梁行7.80ｍの大きさで，平面積は61.78㎡である。建物主軸の方位はＮ79°－Ｗをはかる。庇の出は北側が約6.8尺，西側が約４尺で，それぞれ身舎の幅だけの庇である。東側約90㎝離れて幅40㎝～100㎝の浅い溝ＳＤ5066があり，北端はＳＢ58を囲むように少し西側に折れる。



第109図　遺構実測図

1.SB53　2.SB54　3.SB55・SA12



第110図　遺構実測図

1.SB56　2.SB57

柱穴の掘形は楕円形ないし不整楕円形を呈し，直径30cm～65cmである。

遺物は土師器・須恵器・珠洲・箸・櫛が出土している。第132図701に示す櫛はＳＰ5030からの出土である。小片で図示はできなかったが，ＳＰ5031・5032からは土師器，ＳＰ5036からは須恵器，ＳＰ5056からは箸が出土している。

59号掘立柱建物（ＳＢ59，第111・113・132図，図版147・196）

Ｃ１地区の南西部に位置する。ＳＢ58とほぼ重なり，こちらの方が新しいと考えられる。身舎３間×３間の南北棟総柱建物で，北・西の２面に庇がつく。桁行9.56ｍ×梁行8.32ｍの大きさで，平面積は約79.54㎡である。建物主軸の方位はＮ－７°－Ｅを測る。庇の出は両面とも約5.3尺で身舎の幅に限られ，隅柱を欠く。ただし北面庇とした柱は直径が10cm～15cmと小さく，打ち込み柱風のもので，あるいは北側を画する目隠し塀とも考えられるが，身舎の桁方向柱筋に合うのでとりあえず庇としておく。柱穴の掘形は円形あるいはやや不整形な楕円形を呈し，直径は25cm～60cmまで幅がある。

第132図702は，ＳＰ5011から出土した木製の椀である。ロクロ目が残るもので，漆椀の未成品の可能性もある。同703は，ＳＰ5006から出土した漆皿で，体部を斜めに削りだし，口縁部はやや尖る。この他にＳＰ5004・5034から棒状の加工材小片が，ＳＰ5015からは土師器もしくは中世土師器小片が，ＳＰ5034から中世土師器底部が出土している。

60号掘立柱建物（ＳＢ60，第111・114・132図，図版147・197）

Ｃ１地区の南西隅，ＳＢ58・59の西側に位置する。３間×２間の南北棟総柱建物で，北面庇を持つと思われる。建物はさらに西側の発掘区外に伸びる可能性がある。確認できた範囲で，桁行7.60ｍ×梁行3.80ｍの大きさで，平面積は28.88㎡である。建物主軸の方位はＮ－７°－Ｗを測る。柱穴掘形は楕円形や不整楕円形を呈し，直径が30cm～55cmである。

第132図704はＳＰ5061から出土したスギ材の箸である。この他にＳＰ5088から土師器もしくは中世土師器の小片が出土している。

61号掘立柱建物（ＳＢ61，第111・114図，図版147）

Ｃ１地区の南西隅，ＳＢ58・59の南側に位置する。北東隅の柱穴が未確認であるが，２間×１間の側柱建物で，さらに南側の発掘区外に伸びると思われる。仮に南北棟建物とすると，桁行2.00ｍ以上×梁行4.00ｍとなる。建物主軸の方位はＮ－８°－Ｗを測る。柱穴はほぼ円形で，直径35cm～40cmである。

62号掘立柱建物（ＳＢ62，第111・114図，図版147）

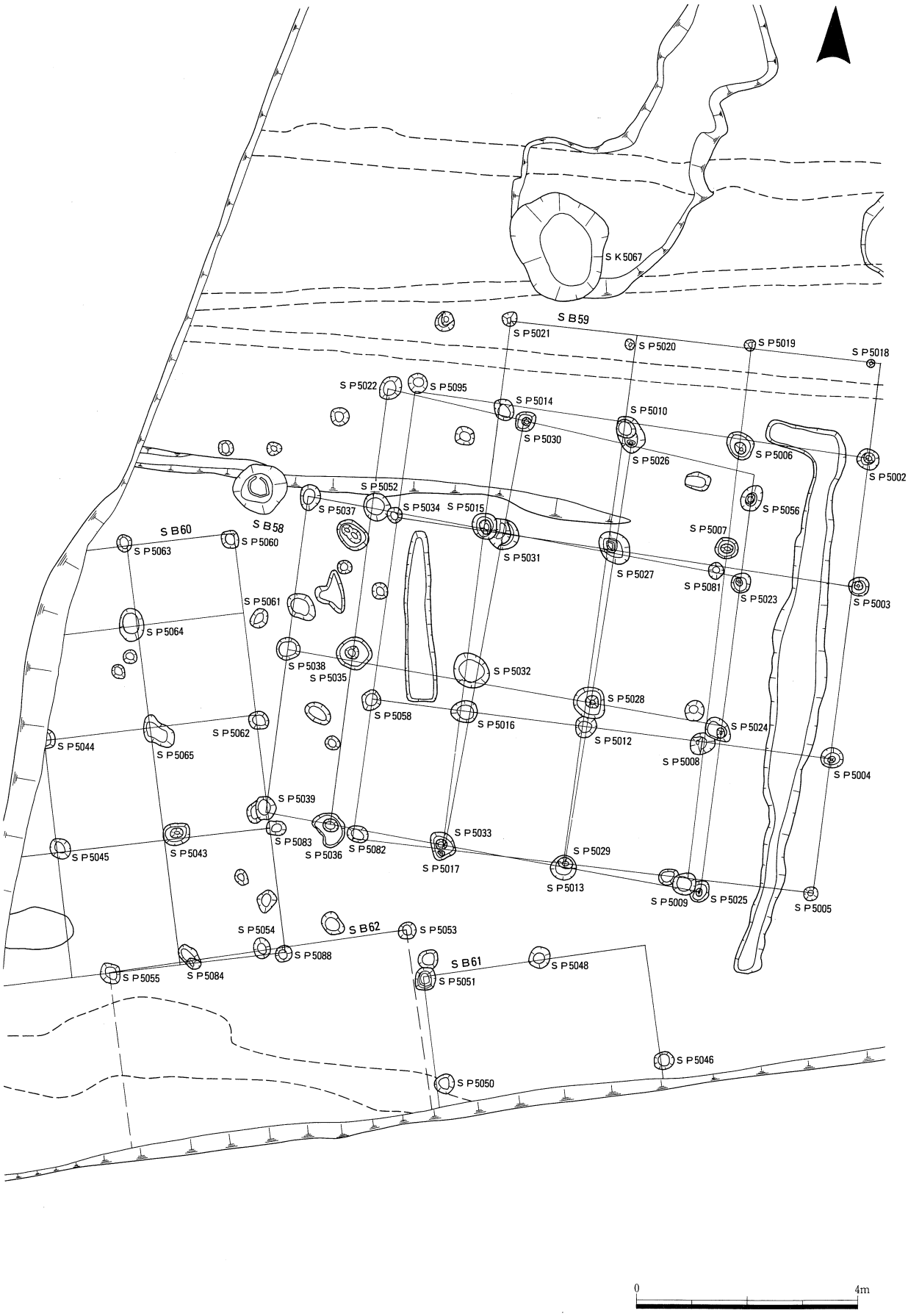
Ｃ１地区の南西隅，ＳＢ61の西側，ＳＢ60の南側に位置する。平面図では北辺柱列しか表現してないが，発掘担当者の調査所見では検出柱列の南側にも柱穴が認められた[注6]とのことなので，建物はさらに南側の発掘区外に伸びるものと思われる。ＳＢ61と同様の形態とすると，２間×１間以上の南北棟側柱建物と推定でき，建物主軸の方位はＮ－８°－Ｗを測る。柱穴の掘形は円形ないし楕円形を呈し，直径30cm～40cmである。

遺物は，ＳＰ5054から曲物側板の一部が出土している。

Ｃ１地区では，柱穴からの遺物の出土が少ないうえ，古代後期の遺物の混入が半数を占めるので，掘立柱建物の年代は不明瞭であるが，周辺の土坑からの出土遺物を手がかりとすると，13～14世紀代と考えられる。

63号掘立柱建物（ＳＢ63，第115図，図版148）

Ｃ２地区の東側に位置し，ＳＢ64と重なるが，前後関係は不明。建物はさらに東側の発掘区外に伸びる可能性がある。確認できた範囲では，身舎２間×２間の南北棟総柱建物で，南面庇と考えられる。



第111図　遺構実測図
SB58～SB62